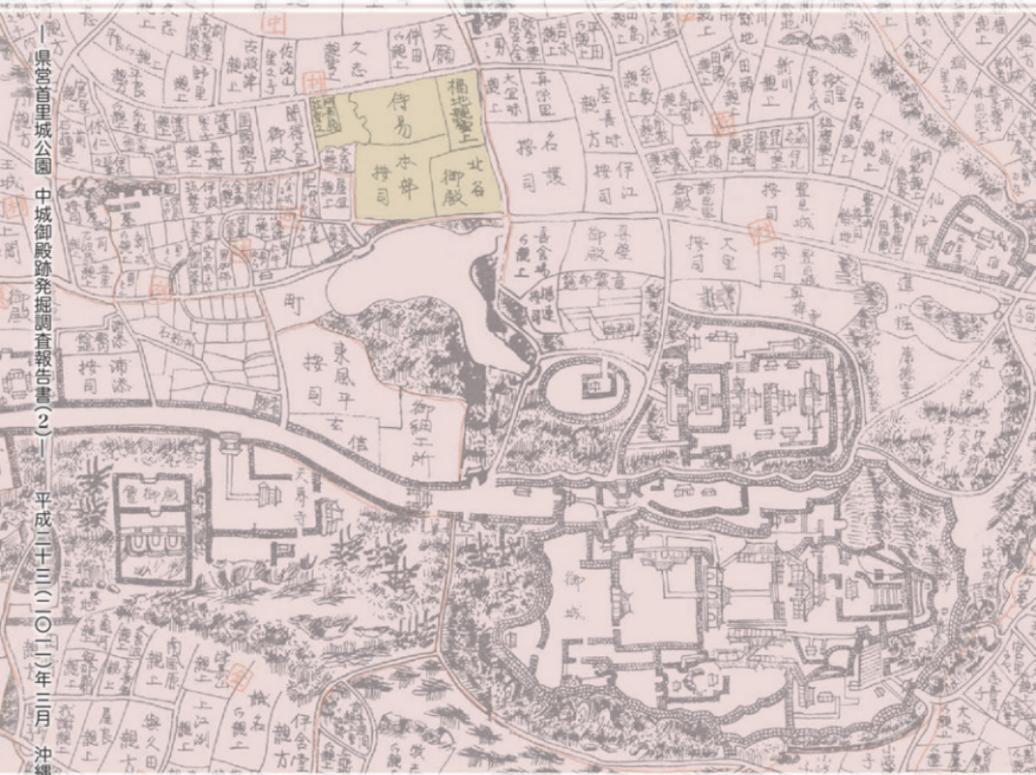


中城御殿跡

— 県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2) —



県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2) 平成二十三年(二〇一一年)三月 沖縄県立埋蔵文化財センター

平成23(2011)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター



中城御殿跡

— 県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2) —

平成23(2011)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、首里城公園整備に伴い、沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課より予算の分任を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成20・21年度に遺構確認調査を実施し、平成22年度にまとめたものです。

中城御殿は琉球国王世子の邸宅として、当初は現在の首里高等学校敷地内に創建されましたが、1870年に今回の調査対象となった大中町に新御殿が建てられ移転します。そして、1879年の王国の崩壊を経て、1945年の沖縄戦により破壊されるまでの間、当地に存在していました。

この中で、調査は敷地内の数ヶ所において、遺構の性格及び範囲を確認する目的で、試掘坑あるいはトレンチを設けて行いました。これにより、遺構の一部は沖縄戦や後世の開発が原因で破壊されていましたが、石畳や石造側溝等の遺構が良好な状態で遺されていることがわかりました。また、これに伴い、中国や日本各地の豪華な陶磁器やヨーロッパの陶磁器、大型青銅製品等の中城御殿ならではの遺物が多数出土しています。その中でも特に、王府の祭祀用具と考えられる青銅製耳盃や、膨大な量にのぼるガラス玉の出土は、廃藩置県後に開得大君とともに祭壇が遷されるという記録ともあわせ、興味深い結果となりました。その他多数の遺物からも、往事の生活を偲ばせるとともに、首里城との関係をうかがわせています。

この成果をまとめた本報告が、沖縄県の歴史・文化を理解する資料として、多くの方々に活用されるとともに、埋蔵文化財の保護・活用について関心を持っていただければ幸いです。

最後に、発掘調査ならびに資料整理作業にあたり、ご指導・ご協力を賜った関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成23(2011)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 守内泰三



1 正門表 (大御門)



2 大広間 (右)、正門 (左)



巻頭図版2 1945年4月2日 米軍撮影 (CV20-103-63) の首里城周辺 (財団法人沖縄県文化振興会 公文書管理部史料編集室所蔵)



巻頭図版 3 旧博物館周辺（1993年撮影の航空写真）



肥前産色絵・染付



西洋陶器

巻頭図版4

例 言

1. 本報告書は、県営首里城公園の整備に伴い、平成20(2008)年度及び平成21(2009)年度に実施した中城御殿跡の埋蔵文化財発掘調査成果をまとめたものである。
2. 発掘調査は、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成20(2008)・21(2009)年度に実施し、資料整理作業は平成22(2010)年度に実施した。両事業とも沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課より予算の分任を受けての実施である。
3. 資料整理作業にあたり、調査体制の項で記した多くの方々に資料の同定・整理指導をいただいた。記して謝意を表したい。
4. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25,000地形図を使用した。
5. 本報告書に掲載した航空写真は、国土地理院の93OKINAWA49-12と、財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室が所蔵する、1944年に米軍により撮影されたCV20-103-63を用いた。
6. 本報告書に掲載した古写真は、沖縄県立技術大学所蔵の鎌倉芳太郎写真資料を用いた。
7. 本書に掲載した緯度、経度、平面直角座標は、すべて日本測地系に基づくものである。
8. 本報告書の編集は、調査体制の項で記した多くの方々の協力のもと仲座久宜が行い、各章の執筆は次のとおり行った。

仲 座 久 宜	第1章、第2章、第5章第15～17節・25節、第6章
大 堀 皓 平	第3章、第4章、第5章第14節・第19・20節・第22・23節
金 城 貴 子	第5章第1・2節・第5～7節
新 垣 力	第5章第3・4節・第8・9節
瀬 戸 哲 也	第5章第10・11・13節
具 志 堅 清 大	第5章第12節
知 念 隆 博	第5章第18節
岸 本 竹 美	第5章第21節
宮 城 明 恵	第5章第24節
伊 藤 由 希	第5章第26節
徳 嶺 里 江、土 肥 直 美	第5章第27節
菅 原 広 史	第5章第28節
9. 本書に掲載した調査時の写真撮影は、平成20・21年度分を上地博が行い、出土遺物の写真撮影は矢舟章浩、伊佐えりなが行い、金属製品や銭貨の軟X線撮影は知念隆博が行った。
10. 各章で参考・引用した文献の一覧は、279～282頁にまとめて掲載した。
11. 発掘調査で得られた出土品、図面、写真等の記録は、すべて沖縄県立埋蔵文化財センターに保管している。

目次

序

巻頭図版

例言

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 間取りと名称	6

第3章 調査の概要

第1節 調査経過	13
第2節 調査区設定	15

第4章 層序と遺構

第1節 層序と堆積	16
第2節 検出遺構	17
第3節 まとめで考察	22

第5章 出土遺物

第1節 中国産青磁	77	第15節 埴 塼	199
第2節 中国産白磁	84	第16節 陶 管	200
第3節 中国産染付	88	第17節 漆製品	202
第4節 中国産色絵	102	第18節 銭 貨	203
第5節 中国・タイ・ミャンマー産褐釉陶器	110	第19節 煙 管	206
第6節 西洋陶器	114	第20節 遊 具(円盤状製品・碁石)	211
第7節 その他の輸入陶磁器	124	第21節 ガラス玉	216
第8節 本土産陶磁器	132	第22節 石製品・石造物	222
第9節 沖縄産施釉陶器	154	第23節 石製容器	226
第10節 沖縄産無釉陶器	170	第24節 瓦・埴	232
第11節 陶質土器	184	第25節 その他の遺物	246
第12節 土器・硬質土器	192	第26節 貝類遺体	247
第13節 瓦質土器	195	第27節 人 骨	258
第14節 土製品	198	第28節 脊椎動物遺体	260

第6章 総括

引用・参考文献

報告書抄録

挿図目次

第 1 図 沖縄県の位置	4	第 37 図 中国産染付 3	98
第 2 図 調査区周辺地図	5	第 38 図 中国産染付 4	100
第 3 図 旧中城御殿概略図 (屋根伏せ・聞き取り調査の成果から)	8	第 39 図 中国産色絵 1	106
第 4 図 旧中城御殿間取り復元図 (屋根伏せ・聞き取り調査の成果から)	9	第 40 図 中国産色絵 2	108
第 5 図 調査区位置図	15	第 41 図 中国・タイ・ミャンマー産褐釉陶器	112
第 6 図 中城御殿跡の堆積模式図	16	第 42 図 西洋陶器 1	118
第 7 図 蓋付溝の構造模式図	22	第 43 図 西洋陶器 2	120
第 8 図 『首里古地図』にみる近世の中城御殿跡の 土地利用 (沖縄風土記刊行会1970)	24	第 44 図 西洋陶器 3	122
第 9 図 中城御殿跡 平成20・21年度発掘状況	25	第 45 図 その他の輸入陶磁器 1	128
第 10 図 主要検出遺構と屋根伏せ位置	31	第 46 図 その他の輸入陶磁器 2	130
第 11 図 J-14 TP1 円形石組遺構、ピット群	32	第 47 図 本土産陶磁器 1 (染付)	138
第 12 図 I-J-14 TP2、J-14 TP3 溝2、石畳3 ①	34	第 48 図 本土産陶磁器 2 (染付)	140
第 13 図 I-J-14 TP2、J-14 TP3 溝2、石畳3 ②	35	第 49 図 本土産陶磁器 3 (色絵)	142
第 14 図 I-15 TP4、J-15 TP5 基壇4	38	第 50 図 本土産陶磁器 4 (色絵)	144
第 15 図 J-15・16 TP7 基壇1・3、石畳1	40	第 51 図 本土産陶磁器 5 (色絵)	146
第 16 図 K-14 溝2、石畳3、基壇2	42	第 52 図 本土産陶磁器 6 (近代)	148
第 17 図 K-15 溝1、基壇1、石畳1	44	第 53 図 本土産陶磁器 7 (陶器)	150
第 18 図 K-L-14 溝2・4、蓋付溝3、石畳2、舗装面2	46	第 54 図 本土産陶磁器 8 (陶器)	152
第 19 図 K-L-14 溝2・4、蓋付溝3、石畳2、舗装面2	47	第 55 図 沖縄産施釉陶器 1	160
第 20 図 L-15 TP6	49	第 56 図 沖縄産施釉陶器 2	162
第 21 図 L-15 溝1・4、蓋付溝1・2、舗装面2	50	第 57 図 沖縄産施釉陶器 3	164
第 22 図 K-15、L-14・15 石畳4、金属製品溜まり	51	第 58 図 沖縄産施釉陶器 4	166
第 23 図 K-14・15 北壁、K-15 東壁	54	第 59 図 沖縄産施釉陶器 5	168
第 24 図 K-14・15 南壁、L-15 東壁	55	第 60 図 沖縄産無釉陶器 1	176
第 25 図 L-16 TP8 石畳1、蓋付溝1、暗渠1	56	第 61 図 沖縄産無釉陶器 2	178
第 26 図 K-16 TP9	58	第 62 図 沖縄産無釉陶器 3	180
第 27 図 L-13 石畳5、ピット群	59	第 63 図 沖縄産無釉陶器 4	182
第 28 図 I-J-13 暗渠2	62	第 64 図 陶質土器 1	188
第 29 図 H-I-13 石畳6	65	第 65 図 陶質土器 2	190
第 30 図 E-F-13 TP12、F-13 TP13、F-G-13 TP14 石畳7、溝3、基壇5	68	第 66 図 土器・硬質土器	194
第 31 図 G-H-19 TP15・16	74	第 67 図 瓦質土器	196
第 32 図 中国産青磁 1	80	第 68 図 土製品	198
第 33 図 中国産青磁 2	82	第 69 図 埴壇	199
第 34 図 中国産白磁	86	第 70 図 陶管	201
第 35 図 中国産染付 1	94	第 71 図 銭貨	204
第 36 図 中国産染付 2	96	第 72 図 煙管の部位名称	206
		第 73 図 煙管	208
		第 74 図 羅字煙管の分類	210
		第 75 図 遊具 (1~10. 円盤状製品 11~14. 碁石)	214
		第 76 図 ガラス玉 1	220

第 77 図	ガラス玉 2	221
第 78 図	石製品・石造物	224
第 79 図	石製容器 1	228
第 80 図	石製容器 2	230
第 81 図	瓦 1 (1.高麗系平瓦 2~7.明朝系軒丸瓦)	238
第 82 図	瓦 2 (8~10.明朝系軒平瓦 11.明朝系丸瓦)	240
第 83 図	瓦 3 (12.明朝系丸瓦 13~15.明朝系平瓦)	242
第 84 図	瓦・埴4 (16.近世大和系平瓦 17.近世大和杖瓦 18~21.埴)	244
第 85 図	陶磁製ボタン	246

第 86 図	種別検出状況	247
第 87 図	層別検出状況	247
第 88 図	グリッド組成表	248
第 89 図	生息場所組成表	248
第 90 図	出土部位	259
第 91 図	脊椎動物遺体の層位別NISP	273
第 92 図	層位別NISP組成比及びMNI組成比	273
第 93 図	魚類組成図	273
第 94 図	鳥類・哺乳類組成図	273

図版目次

図版 1	古写真1	7
図版 2	古写真2	11
図版 3	旧中城御殿関係写真	12
図版 4	作業状況(平成20年度)	13
図版 5	作業状況(平成21年度)	14
図版 6	平成20・21年度 調査区遺構検出状況	30
図版 7	J-14 TP1	33
図版 8	I・J-14 TP2、J-14 TP3 ①	36
図版 9	I・J-14 TP2、J-14 TP3 ②	37
図版 10	I-15 TP4、J-15 TP5	39
図版 11	J-15・16 TP7	41
図版 12	K-14	43
図版 13	K-15	45
図版 14	L-14	48
図版 15	I-15 TP6	49
図版 16	L-15 ①	52
図版 17	L-15 ②	53
図版 18	L-16 TP8	57
図版 19	K-16 TP9	58
図版 20	L-13 石畳5、ピット群 ①	59
図版 21	L-13 石畳5、ピット群 ②	60
図版 22	L-13 石畳5、ピット群 ③	61
図版 23	I・J-13 暗渠 2	62
図版 24	I・J-13 ①	63
図版 25	I・J-13 ②	64
図版 26	H・I-13 石畳6	65
図版 27	H・I-13 ①	66
図版 28	H・I-13 ②	67
図版 29	E-G-13 TP12・13・14 ①	69
図版 30	E-F-13 TP12・13・14 ②	70
図版 31	E-F-13 TP12・13・14 ③	71

図版 32	E-F-13 TP12・13・14 ④	72
図版 33	E-F-13 TP12・13・14 ⑤	73
図版 34	G-H-16 TP15・16	74
図版 35	中国産青磁 1	81
図版 36	中国産青磁 2	83
図版 37	中国産白磁	87
図版 38	中国産染付 1	95
図版 39	中国産染付 2	97
図版 40	中国産染付 3	99
図版 41	中国産染付 4	101
図版 42	中国産色絵 1	107
図版 43	中国産色絵 2	109
図版 44	中国・タイ・ミャンマー産褐軸陶器	113
図版 45	西洋陶器 1	119
図版 46	西洋陶器 2	121
図版 47	西洋陶器 3	123
図版 48	その他の輸入陶磁器 1	129
図版 49	その他の輸入陶磁器 2	131
図版 50	本土産陶磁器 1 (染付)	139
図版 51	本土産陶磁器 2 (染付)	141
図版 52	本土産陶磁器 3 (色絵)	143
図版 53	本土産陶磁器 4 (色絵)	145
図版 54	本土産陶磁器 5 (色絵)	147
図版 55	本土産陶磁器 6 (近代)	149
図版 56	本土産陶磁器 7 (陶器)	151
図版 57	本土産陶磁器 8 (陶器)	153
図版 58	沖縄産施軸陶器 1	161
図版 59	沖縄産施軸陶器 2	163
図版 60	沖縄産施軸陶器 3	165
図版 61	沖縄産施軸陶器 4	167
図版 62	沖縄産施軸陶器 5	169

図版 63	沖繩産無軸陶器 1	177	図版 82	石製容器 1	229
図版 64	沖繩産無軸陶器 2	179	図版 83	石製容器 2	231
図版 65	沖繩産無軸陶器 3	181	図版 84	瓦 1 (1.高麗系平瓦 2~7.明朝系軒丸瓦)	239
図版 66	沖繩産無軸陶器 4	183	図版 85	瓦 2 (8~10.明朝系軒平瓦 11.明朝系丸瓦)	241
図版 67	陶質土器 1	189	図版 86	瓦 3 (12.明朝系丸瓦 13~15.明朝系平瓦)	243
図版 68	陶質土器 2	191	図版 87	瓦・埴 4 (16.近世大和系平瓦 17.近世大和瓦 18~21.埴)	245
図版 69	土器・硬質土器	194	図版 88	その他の遺物 (1.2.陶磁製ボタン 3.校章バッジ 4.箱章)	246
図版 70	瓦質土器	197	図版 89	貝類遺体 1 巻貝	253
図版 71	土製品	198	図版 90	貝類遺体 2 巻貝	254
図版 72	埴塙	199	図版 91	貝類遺体 3 巻貝	255
図版 73	陶管	201	図版 92	貝類遺体 4 二枚貝	256
図版 74	漆製品	202	図版 93	貝類遺体 5 二枚貝	257
図版 75	銭貨	205	図版 94	人骨出土状況	259
図版 76	煙管	209	図版 95	出土人骨 (乳歯)	259
図版 77	遊具 (1~10.円盤状製品 11~14.碁石)	215	図版 96	出土人骨	259
図版 78	分析資料	216	図版 97	脊椎動物遺体 1 魚	274
図版 79	ガラス玉 1	220	図版 98	脊椎動物遺体 2	275
図版 80	ガラス玉 2	221	図版 99	脊椎動物遺体 3	276
図版 81	石製品・石造物	225			

挿表目次

第 1 表	円形石組遺構内埋土出土遺物	27	第 23 表	西洋陶器集計表	117
第 2 表	溝 2 内覆土出土遺物 (K-14)	27	第 24 表	その他の輸入陶磁器集計表	125
第 3 表	溝 2 内覆土出土ガラス玉	27	第 25 表	その他の輸入陶磁器観察一覧 1・2	126・127
第 4 表	溝 2 内覆土出土遺物 (TP2)	28	第 26 表	本土産陶磁器観察一覧 1~3	133~135
第 5 表	溝 2 内覆土出土遺物 (TP3)	28	第 27 表	本土産陶磁器集計表 1・2	136・137
第 6 表	蓋付溝 2 内覆土出土遺物	29	第 28 表	沖繩産施軸陶器観察一覧 1~3	155~157
第 7 表	溝 3 内覆土出土遺物 (TP13)	29	第 29 表	沖繩産施軸陶器集計表 1・2	158・159
第 8 表	瓦溜まり出土遺物	29	第 30 表	沖繩産無軸陶器観察一覧 1~3	171~173
第 9 表	人工遺物集計表 1・2	75・76	第 31 表	沖繩産無軸陶器集計表 1・2	174・175
第 10 表	中国産青磁観察一覧 1・2	77・78	第 32 表	陶質土器集計表	185
第 11 表	中国産青磁集計表	79	第 33 表	陶質土器観察一覧 1・2	186・187
第 12 表	中国産白磁観察一覧	84	第 34 表	土器型式別出土割合	192
第 13 表	中国産白磁集計表	85	第 35 表	土器集計表	192
第 14 表	中国産染付観察一覧 1~3	89~91	第 36 表	土器・硬質土器観察一覧	193
第 15 表	中国産染付集計表 1・2	92・93	第 37 表	瓦質土器集計表	195
第 16 表	中国産色絵集計表	103	第 38 表	瓦質土器観察一覧	195
第 17 表	中国産色絵観察一覧 1・2	104・105	第 39 表	土製品観察一覧	198
第 18 表	中国・タイ・ミャンマー産陶軸陶器観察一覧	110	第 40 表	埴塙集計表	199
第 19 表	中国・タイ・ミャンマー産陶軸陶器集計表	111	第 41 表	陶管計測値	200
第 20 表	折縁タイプ皿 (青色) 口径別数量	115	第 42 表	銭貨集計表	203
第 21 表	折縁タイプ皿 (緑色) 口径別数量	115	第 43 表	銭貨観察一覧	203
第 22 表	西洋陶器観察一覧 1・2	116・117	第 44 表	煙管集計表	207

第 45 表	煙管観察一覧	207	第 60 表	明朝系平瓦遺存状況	234
第 46 表	円盤状製品の最大径	211	第 61 表	明朝系平瓦広端部における桶板留組圧痕状況	234
第 47 表	円盤状製品集計表	212	第 62 表	近世大和瓦遺存状況	234
第 48 表	円盤状製品観察一覧	213	第 63 表	埴集計表	235
第 49 表	碁石観察一覧	213	第 64 表	瓦観察一覧 1・2	236・237
第 50 表	色調別出土状況	216	第 65 表	埴観察一覧	237
第 51 表	形式別出土状況	216	第 66 表	貝類生息場所類型 (habitat) 表	248
第 52 表	ガラス玉集計表	217	第 67 表	貝類遺体集計表 (巻貝) 1・2	249・250
第 53 表	ガラス玉観察一覧 1~3	217~219	第 68 表	貝類遺体集計表 (二枚貝) 1~4	251・252
第 54 表	石製品・石造物集計表	223	第 69 表	脊椎動物遺体種名一覧表	264
第 55 表	石製品・石造物観察一覧	223	第 70 表	同定標本数 (NISF) 及び最小個体数 (MNI) 一覧表	264
第 56 表	石製容器集計表	226	第 71 表	出土魚骨一覧表 1・2	265・266
第 57 表	石製容器観察一覧	227	第 72 表	脊椎動物遺体出土一覧表 1~4	267~270
第 58 表	明朝系軒瓦集計表	233	第 73 表	動物遺体集計表 1・2	271・272
第 59 表	明朝系丸瓦遺存状況	233			

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

かつての首里には、国宝を含む多くの文化財が残されていたが、先の沖縄戦によりその殆どが灰燼に帰すことになる。終戦後発足した琉球政府文化財保護委員会は、戦災により破壊された文化財の復元整備として、昭和31(1956)年に園比屋武御嶽を嚆矢として整備を開始する。その後、同委員会は昭和45(1970)年に首里城跡及び周辺の戦災文化財復元計画を策定し、同年、日本政府は第一次沖縄復帰対策要綱を閣議決定した。その中で戦災文化財の復元修理を推進する旨を明らかにし、翌年にはその調査費が計上されている。

そして沖縄は、昭和47(1972)年に本土復帰を果たす。その一環で同年策定された第一次沖縄振興計画に盛り込まれた要項に基づき、総理府外局沖縄開発庁の予算で、沖縄県教育庁文化課による首里城跡の復元整備を目的とした発掘調査が開始されることになる。その調査成果により、今日まで多くの建造物が復元を見ることができ、一般に公開されている。

今回の報告に係る中城御殿の遺構確認調査は、昭和63(1988)年度に沖縄県土木建築部が策定した、首里城公園基本設計に基づく公園整備を目的とした調査で、平成19(2007)年度から沖縄県土木建築部より予算の分任を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施している。

調査にあたっては、過年度に予算分任元である沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課と調整した上で予算要求を行い、調査開始後には文化財保護法第99条により沖縄県教育庁文化課へ着手報告を行った。また、調査終了後には終了報告を行うとともに、発見された埋蔵文化財(出土品)の内訳・数量の報告を行った。

第2節 調査体制

本報告書に係る発掘調査業務は、平成20(2008)年度及び平成21(2009)年度に実施し、調査報告書作成に係る資料整理業務は、平成22(2010)年度に実施した。その体制は次のとおりである(職名は当時のもの)。

平成20(2008)年度(発掘調査)

事業主体	沖縄県教育委員会 教育長 仲村守和
事業所管	沖縄県教育庁文化課 課長 千木良芳範 記念物班 班長 鳥袋洋、主任 瀬戸哲也
事業総括・実施	沖縄県立埋蔵文化財センター 所長 名嘉政修 総務班 班長 嘉手苺勤、主査 山田恵美子、主事 村吉由美子 調査班 班長 岸本義彦、主幹 金城亀信、主任 上地博
発掘調査作業	文化財調査嘱託員 天願瑞笑、本村麻里衣 発掘調査作業員 嘉味田千枝子、喜瀬彰、呉我フジ子、佐渡山正子、砂辺理恵、玉城初美、中塚末子、中村フサ子、平安名哲子、宮國恵子

平成21(2009)年度(発掘調査)

事業主体	沖縄県教育委員会 教育長 金武正八郎
事業所管	沖縄県教育庁文化課 課長 大城慧 記念物班 班長 鳥袋洋、主任 瀬戸哲也
事業総括・実施	沖縄県立埋蔵文化財センター 所長 玉栄直 総務班 班長 嘉手苺勤、主査 本永恵 調査班 班長 金城亀信、主任 上地博
発掘調査作業	文化財調査嘱託員 大堀皓平、天願瑞実 発掘調査作業員 翁長しのぶ、嘉味田千枝子、川上益子、喜瀬 彰、呉我フジ子、佐渡山正子、 砂辺理恵、玉城初美、富真 哲、中塚末子、中村フサ子、橋本圭司、福地佐枝子、宮國恵子

平成22(2010)年度(資料整理)

事業主体	沖縄県教育委員会 教育長 金武正八郎
事業所管	沖縄県教育庁文化課 課長 大城慧 記念物班 班長 鳥袋洋、主任専門員 上地博、指導主事 久高健
事業総括・実施	沖縄県立埋蔵文化財センター 所長 守内泰三 総務班 班長 嘉手苺勤、主査 本永恵、玉寄秀人、恩河朝子 調査班 班長 金城亀信、主任専門員 仲座久宜
資料整理作業	文化財調査嘱託員 宮城明恵、具志堅清大 資料整理嘱託員 伊藤由希、池原直美、伊佐えりな、上原園子、金城政史、城間千鶴子、 津多 恵、仲宗根三枝子、比嘉登美子、外間 瞳、矢舟章浩、山川由美子 資料整理協力者 上地由紀子、上原美穂子、金城克子、具志良子、崎原美智子、高良三千代、 玉寄智恵子、宮里絵里、 資料整理作業員 謝花恵子、杉山弘美、西山幸子、屋我尚子
資料整理指導・助言	上原 静(沖縄国際大学) 大橋康二(佐賀県立九州陶磁資料館) 神谷厚昭(金城町石畳地質研究所) 久保智康(京都国立博物館) 菅原広史(浦添市教育委員会) 土肥直美(琉球大学医学部) 平尾良光(別府大学) 向井 互(東南アジア考古学会) 森 達也(愛知県陶磁資料館) 矢島律子(町田市立博物館)

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

中城御殿は、次の琉球国王となる世子が暮らした邸宅跡である。名称の由来は、王子が王世子（王位継承者）になると、領地として中城間切及び知行を下賜され、中城王子あるいは中城御殿と称されたことによる。当初その建物は、17世紀前半に現首里高等学校敷地内（現首里真和志町）に創建され、王府の別邸である大美御殿の東面に位置していたことから東宮とも呼ばれた。その後、中城御殿は明治3（1870）年に現在の首里大中町に移転する。ここでは今回の調査対象となる移転後の環境について記すこととする。

中城御殿跡は、沖縄本島南部の那覇市首里、北緯26°13'15"、東経127°43'05"、標高約100mの台地上に位置し、地番は那覇市首里大中町1丁目1番1～3にあたる（第1・2図）。

この基盤を構成するのは、地質時代の第四紀更新世（180～160万年前～1万年前）に区分される琉球石灰岩で、敷地西側の上之御殿が存在した地区においては、拝所及び庭園でその露頭が確認できる。またその下位には、鮮新世（500万年前～160万年前）から中新世（2,300万年前～500万年前）に区分される島尻層群が堆積している。この表層を成す琉球石灰岩層は透水性が高く、そこに浸透した雨水は、不透水層である島尻層のクチャ（泥岩・砂岩）の面でとめられ、両者の境界から泉として湧き出すことになる。この湧水を利用した井泉・樋川は、現在も首里の各地に点在するほか、中城御殿の古写真においても数ヶ所が確認でき、今日も豊富な湧水量を誇っている。

中城御殿の南は、道路を隔てて龍潭に面し、南東側に首里城を望むことができる。地形は首里城に至る南側が高く、対する北側が下る形状を成すが、敷地の大半はテラス状の比較的平坦な場所に位置しており、この北側に面する儀保町や末吉町の町並みを見渡せるほどの景観は有していない。しかし、上之御殿が建つ西側は小高くなっており、西方に広がる那覇の街や港をはじめ、遠くは慶良間・粟国諸島の島影を望むことができる。

この立地に関し、中城御殿の南東側に近接する首里城をもとにみることにする。首里城は、北側に虎頭山及び真嘉比川を配し、東に弁ヶ嶽及びナゲラ川、南に安里川を擁して立地している。蔡温はこの立地に関し、「恭しく玉陵を観るに、国都の高処に発祖し、最も好し」（『球陽』）と遺している。また、この立地を風水地理学の観点から見ると、虎頭山は白虎、弁ヶ嶽は玄武にあてられ、特に河川の源流である弁ヶ嶽は城基発祖の地と考えられている。このように首里城の立地は、軍事・政治・経済的な実利性のみならず、風水思想の上からも藏風得水の地として優れた条件を備えているとされる。

今報告の対象となる中城御殿の造営に際しても、中国に地理師（風水師）を派遣した上で建物等の配置が行われたとされ（真栄平房敬2009）、前記した首里城の例とも調和した思想により、選定立地から設計・施工までが計画的に行われたことが考えられる。

第2節 歴史的環境

中城御殿は、国王の世子殿として、当初は尚豊王代（在位1621～1640年）に綾門大道北側、現在の首里高等学校敷地内に創建された（第4図）。その後、明治1（1868）年に尚泰王の王子である尚典の立太子に伴い、龍潭北側に位置する大村按司、摩文仁按司、川平親方、小禄親雲上らの宅地を合わせた敷地に移転することが取り決められた。工事は明治3（1870）年に着工、明治7（1874）年3月に完成し、尚典は明治8（1875）年に新殿に移転した。世子はこの御殿において生活を送るとともに執務を行った。

そして、明治12（1879）年の廃藩置県により琉球王国は終焉を迎えることになる。首里城は明け渡され、熊本鎮台沖繩分遣隊により占拠される。これにより、それまで正殿や大美御殿等で暮らしていた国王をはじめとする王族は退去を余儀なくされ、一時的に中城御殿に移り住むことになるが、明治18（1885）年には華族令により東京に移転することになる。



第1図 沖縄県の位置

その後、第二次世界大戦が始まると御殿の一部は陸軍少佐の宿舎として使用される。その際に中城御殿が所蔵する多くの宝物を分散させ、敷地内の岩陰に隠すなどの避難措置を執った。しかし、昭和20(1945)年4月、米軍の砲撃により建物は破壊されることになる。避難していた宝物類は残されていなかったことから、建物とともに焼失したか、米軍により戦利品として持ち去られたことが考えられる(その一部は1947年にフィリピンから、1953年にアメリカから返還)。その直後は、陸軍の機関銃陣地として使用されることで尚家職員は退去させられ、終戦を迎えることになる(沖縄県立博物館1996)。それまでの間、御殿は尚家の屋敷(尚侯爵邸)として、王府の伝統的なしきたりが保たれた空間であったとされる。

終戦直後の跡地には、一時引揚者のバラックが建つが、その後、首里市役所、首里バス会社として使用され(図版3-1)、のちに龍潭東側にあった博物館を移転するため、琉球政府により買い上げられる。そして昭和40(1965)年から翌年にかけて、米国民政府の援助により琉球政府立博物館新館が建設され(図版3-2)、昭和47(1972)年の本土復帰に伴い沖縄県立博物館に改称される。

この本土復帰から20年後、これを記念し、首里城正殿を含む周辺一帯が首里城公園として開園するにあたり、その一環として中城御殿の石牆を復元する計画が浮上した。この復元に先立ち、平成3(1991)年度、平成4(1992)年度、平成6(1994)年度の3次にわたり石牆部分の発掘調査が実施され、石積みの根石や石組み遺構、ピット等の遺構を検出し、この成果を元に平成4(1992)年に正面及び東側石牆の復元整備が行われた(沖縄県立博物館1993、1994、1995)。

その後、博物館は開館から40年が過ぎ、施設の老朽化及び資料増による収蔵機能の低下に伴い、新館への移転が計画され、平成18(2006)年3月に休館、平成19(2007)年3月に閉館・移転し、同年11月3日、那覇市おもろまちに沖縄県立博物館・美術館が開館する。そしてこの旧館建物は、平成21(2009)年の解体工事により撤去された。

博物館移転後は、平成19(2007)年度より跡地利用計画策定に先立ち、埋蔵文化財の基礎資料を得るための遺構確認調査が行われ、現在に至る。



第2図 調査区周辺地図

第3節 間取りと名称

中城御殿の敷地は3,408坪(11,246m²)で、そのエリアは東西に大きく二分することができる。東側は主要な建物が群立する約2,400坪の区域で、30棟前後の建造物が密接して軒を連ねていた(巻頭図版2)。これに対し、西側は約1,000坪の区域で、巨木が鬱蒼と茂る中に上之御殿が1棟建ち、周辺は自然の岩盤を利用した庭園や、大岩を取り囲むように石造の螺旋階段を敷設した拝所が存在した。

中城御殿が機能していた当時、その内部は表の一部を除いて一般に公開されておらず、その様子を記した記録も希少であることから全容については判っていないが、ここでは、その様子を見聞きしてまとめた文献や、現存する古写真から判明している範囲で、中城御殿の間取りやその様子について解説してみたい。なお、間取りの復元については、真栄平房敬氏からの聞き取りにより構成した概念図や(沖縄県立博物館1992)、海洋博記念公園管理財団による聞き取り調査を基に、米軍撮影航空写真の屋根伏せから間取りの復元を行った第3図を用いた(財団法人 海洋博記念公園管理財団2010)。

かつて、中城御殿敷地の四方は高く厚い石牆で囲われ、その石牆の一部は現在も敷地の南及び西側、北側の一部に残存している。この石材として、琉球石灰岩が用いられている。この内、西側石牆及び門の周辺部では方形に加工した石灰岩が用いられるが、それ以外では扇形に加工した石灰岩を精緻に積み上げ、主要な角には隅潤石を設けることにより壮麗さを増している。この石牆には複数の門が設置されており、南側中央の正門(大御門・巻頭図版1-1、図版1-1)、東側の副門(御中御門)は赤瓦の切妻屋根を有する門、西側の脇門(御門小)は石造アーチの門に木製の扉が取り付けられていた。また、この石牆の内側には、前と御内原とを仕切るように、下半部が石積み、上半部が漆喰塗り、頂部に瓦が葺かれた瓦塀が設置され、複数の板葺きの中門により出入りする構造になっている。さらに、この西側と北側石牆の内側に沿い、緑石で縁取られ舗装された浮道がL字状に敷設される。この浮道は脇門から入ると、水質の良さから霊泉と謳われた井戸がある左(北)方向へ直に延びており、続いて炭脚蔵付近で右(東)に折れると、敷地最奥のフクギ並木を左(北)に見つ、北東角へ抜けるルートを進んでいた。これらの主要な門には、常時門番が配置され、外部からの出入りは容易でなかったとされる。

ここで、平成22年度調査中に中城御殿跡近隣の住人(男性・80代か)から御教示いただいた戦前の門にまつわる話を紹介したい。話者が幼少の頃、正門は常に開いた状態であったため、敷地内に植樹されていたリュウガンやヤマモモの実ほしさに走って門をくぐり、何度も御殿内部へ入ろうと試みた。しかし、その脇に常駐する門番により、すぐに捕らえられ追い出されたという。だが、時にはこの立ち入り際に例外もあった。その当時、身体にふきでもの(ニーブター)が生ずると、正門から脇門に走り抜けることで治療するという民間療法が信じられており、門番にこの事情を話すと快く通してもらえたという。その他聞き取りにおいても、御内原のエリアまで子どもの立ち入りが許されたというから(財団法人 海洋博記念公園管理財団2010)、そのしきたりは首里城の御内原より嚴重でなく、むしろおおらかな環境であったことが想像できる。

この建物が群がる東側は、首里城内と同様に表と奥の領域に分けられていた。表を指す前(メー)と呼ばれる空間は、世子や役人の執務が行われる男性の空間で、これに対し奥側一帯を指す御内原(ウーチバラ)は、世子及びその親族、そこに仕える女官らが生活する場であった。次にこの状況について、前の空間と御内原の空間とに分けて記す。

前の空間

この中城御殿の中で、前(メー)とされる領域は、世子や前之御役人とと呼ばれる職員をはじめとする男性が執務を行うとともに、公式行事等を執り行う空間であったとされ、明治6(1873)年の「琉球藩雜記」によると、親方や親雲上等の役人46人のほか下代や門番が勤務していたとされる。ここを構成する建物群は表御殿と総称され、それぞれの建物間は渡り廊下により連結している上、いくつもの部屋で構成されていることから一見複雑な構造を連想させる。しかし、その間取りは綿密に計画された機能的なものであったとされる。

この間取りと機能について、現時点で判明している部屋の名称・機能を、正門からの順路を辿りつつ割り出してみる。まず、石牆南側の正門(大御門・巻頭図版1-1、図版1-1)から入ると、正面つきあたりに御番所と呼ばれる6畳ほどの玄関(図版2-1)があり、この裏に「おもしろさうし」等の書物を収めたこととされる書庫や替替之間が接している。



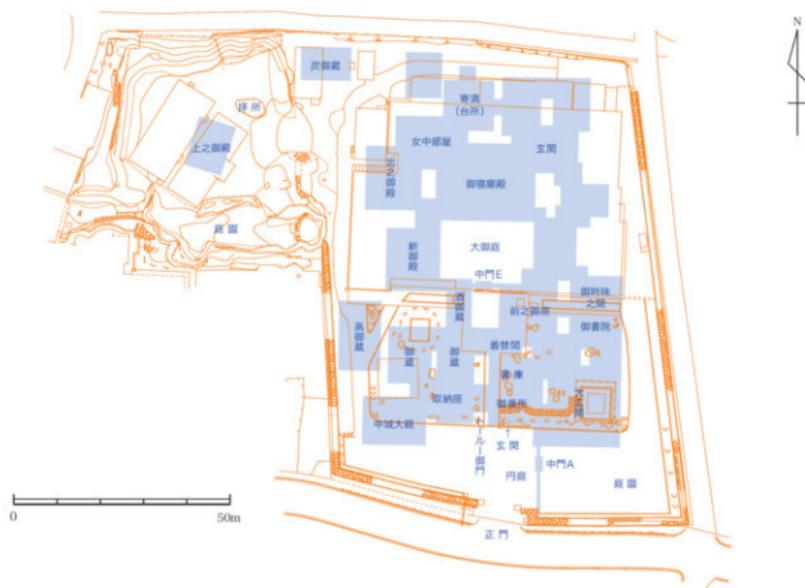
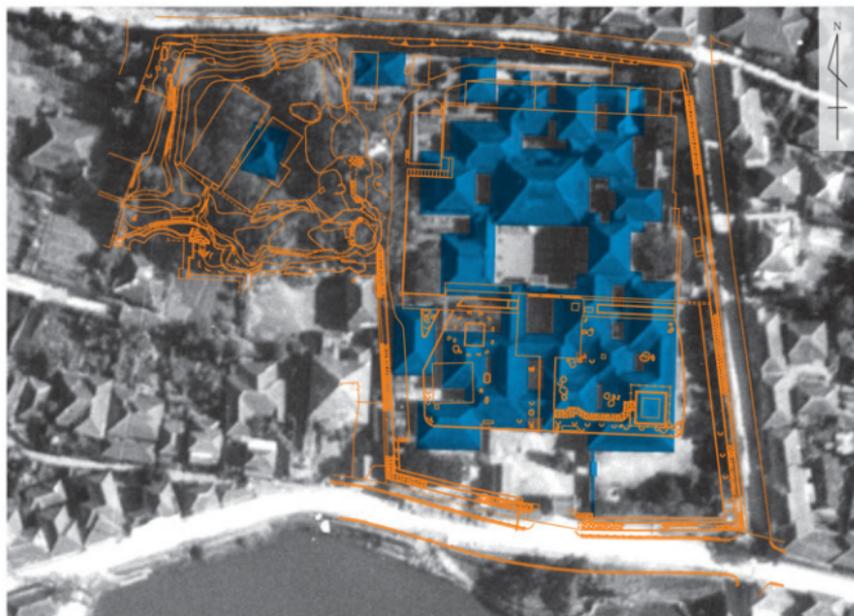
1 正門裏（大御門）



2 望楼（物見の御殿）

図版 1 古写真 1

（沖縄県立芸術大学所蔵）



第3図 旧中城御殿概略図（屋根伏せ・聞き取り調査の成果から）

玄関から幅1間ほどの絨毯敷きの廊下を東へ進むと、右手に御着替之間とトイレが設置されている。このトイレの小窓には透光性のある薄貝が嵌め込まれ、明かり取りとしていた。その右手には廊下を隔て、別棟として御向候之間、大広間、御休憩之間等の部屋が存在する表書院（図版2-2）にあたる。この中で大広間の内部については、昭和初期に刊行された沖繩紹介本に写真が残ることから、これを基に解説してみたい（仲宗根1933）。写真は大広間の南東隅から北側を撮影したとみられる。床には2枚の絨毯が敷かれ、その上にテーブルクロスが掛けられた長テーブルと、座面にクッションが施された背もたれのある椅子（ウインザーチェア）が配置されている。またその奥側上部には、シャンデリアのような照明器具と思われる洋風の調度品が見える。

さらにそのつきあたりの壁面には、上部に引き戸を持つ違い棚と床の間が設けられている。そこには掛軸や螺鈿細工が施された漆器の中央卓が見え、卓の下段には陶磁器が飾られている。また、この部屋をとりまく廊下の中戸や壁面には、極彩色の花鳥画が描かれていたとされ、大広間の内外は様々な様式が混在した装飾がされていたことがわかる。なお、この大広間の内装については、大正1（1921）年に東宮殿下（後の昭和天皇）が御殿を訪問するに先立ち洋間に改装され、障子もガラス戸に取りかえられたという。

この大広間の東及び南側は廊下を隔てて窓及び濡れ縁に面しており、その窓からは庭園を望むことができる。この造園に際しては、庭師を薩摩に派遣し技術を習得させて造ったとされ、そこには手入れが行き届いたリュウキュウマツやソテツをはじめとする樹木のほか、奇岩及び花卉文が陽刻された多層塔様の石灯籠が、芝を張った築山上に効果的に配置されている。またその奥の隅には、首里城を遙拝する目的で造られたとされる物見の御殿（望楼）が見え（図版1-2）、そこへ上る階段は川に例えられていた。また、庭の低位置には白い枝サンゴを敷き詰めることで水辺を表現しており、築山や川とともに美しい山水式庭園を構成している。しかし、この様式も和漢折衷の琉球独特な様式とされる。

この大広間の裏には、御休憩之間があり、御座楽・路次楽に用いる楽器が常備されていたという。そこから廊下を隔て北側の区画西端には、そこで働く御用拝、下代、お掃除人、御水仕達らの控え室である御茶煮詰、下代詰があり、前之御座（職員室）や中庭、御書院、御吟味之間を経て御二階殿へとつながる。ここが前と御内原の境界にあたり、取次の鈴が設置されていた。ここは2階建てで、1階部分は世子や側近の執務室である御御仕御座や御近習座等の部屋が置かれ、御内原に属する2階部分は、当初、世子らの寢室であったが、増築され神殿として使用されたという。

その他、前のエリアには、玄関となる御番所の西に接するトールー御門をはさみ、離れに取納座、御蔵、酒御蔵、御道具蔵、高御蔵（材木蔵）が建ち、そこから距離を置いて北端に炭御蔵が配置されていたとされる。これらの建物の機能については、その名称から類推可能なものも含まれるが、現時点で情報に乏しく判然としないものが多い。

御内原の空間

中城御殿御内原一帯の建物は奥御殿と総称され、世子の親族や女官らが生活していた男子禁制の空間であった。御内原専用の出入口である東側石牆に設けられた副門をくぐると、周辺はさらに瓦塀に仕切られ目隠しにするとともに、表との区画を分けていた。戦前に撮影された航空写真によると、このエリアだけで10棟前後の建物が確認できるが（巻頭図版2）、その中で名称が判明しているのは、御二階御殿、御寮廟殿、新御殿、北之御殿、奇満（台所）の5棟に限られ、その奥となる北側の建物については洗濯場があったとすること以外は、現時点で情報が見あたらない。

この御内原は、大御庭を中心として、その東西及び北側に寝殿造りを思わせる「コ」の字型に建物が配置されており、建物は石階段を数段上るほどの基壇上に建てられていた。大御庭は一面に白い枝サンゴが敷かれる中、東西に3ヶ所ずつ防火用の大甕が埋められるのみで、他に庭園としての装飾は見あたらない。しかし、そこは朝夕に四方の建物が描く影が美しく、静寂で荘厳な影絵の庭であったとされる。

この中で中心となる建造物は御寮廟殿で、中城御殿最大の建物であった。内部は長御道と呼ばれる畳敷きの廊下で囲われ、南北3部屋ずつの計6部屋で構成される。正面となる南側は、左から行事の準備に用いる三番御座、御寮廟、先之御殿の間取りがあり、御寮廟には国王五位の大位牌が祀られた祭壇が設けられていた。この祭壇の前には、壮麗な絹地の布や水引により飾られた、御唐裙（うとうけん）と呼ばれる四つ足の高い台が置かれ、その上には朱塗り高丸盆、金銀盃が置かれていた。また、その後背には御玉貫の瓶が一对置かれ、左右には灯明が一对、前面には金属製の大香炉が置かれ、昼間でもその火は消えることなく、静寂な空間であったとされる。



1 御番所（玄関）



2 大広間と中門・庭園

図版2 古写真2

(沖縄県立芸術大学所蔵)

この右隣にあたる先之御殿の南東角には、鈴引きが設置された御錠口があり、そこで鈴の音を合図に表との取り次ぎが行われていた。次に、この御寝廟殿の裏座として、野嵩御殿居間が二間と安室御殿の部屋計3部屋が配置され、その向かいには、東西に長い方形の区画を有する中庭があった。これらの部屋には、京草葺や箔絵の施された唐長持等の調度品が配置され、そこでは老女たちが清明茶を飲みつつ穏やかな沖繩口で語らう姿や、白装束の女官たちが静かに芭蕉糸を紡ぐ光景が見られたという。

次に御寝廟殿の東側には、御二階御殿と呼ばれる2階建ての建物があった。内部は幾筋にも分岐する廊下により仕切られ、迷路のようであったとされる。1階部分は間口の広い玄関があり、前の空間で記した御側仕御座や御近習座の間取りがある。この2階部分は、当初、北側のみが造られ世子と妃の寝室として使用されていたが、廃藩置県に伴い一時的に国王の寝室となる。その後、首里城から遷した神を祀るため、明治後期に2階南側を増築した。またその際に、寝室としていた北側部分も、汀志良次（現首里汀良町首里中学校内）にあった開得大君御殿から遷した神を祀る神殿として使用されることになり、2階部分全体が「御二階御殿の二階」と称される神聖な場所として立ち入り制限されていた。また、そこに設えられた祭壇は「天地の御側」と呼ばれ、夏至・冬至には国王名大や女性司祭者により「天地御祭」が行われた。なお、この増築の際には、隣接する御寝廟殿からのみ行き来できるように、廊下の改装が行われたという。

このように、これまで世子が寝室として使用していた2階部分に国王や神殿が遷つたため、世子が使用する新たな御殿が必要となった。そこで御寝廟殿の西側、大御庭の西に面して存在した「鈴の下」と呼ばれる女官が詰めた建物を撤去し、新御殿が増築された。その間取りについては不明であるが、内外を写した数点の写真が残る。廊下は畳敷きで、琉球画が描かれた中戸により仕切られており、窓には日除けのカーテンがなびく。この新御殿の周辺は、精緻に組まれた石畳と石造の溝で巡らされている。その北側は、様々な観葉植物が植え込まれた鉢植えが配置された庭園をさき北之御殿が存在するが、この建物についても詳細は不明である。

なお、首里城明け渡しの際には、王城に収められていた多くの宝物も中城御殿に持ち込まれたが、祭祀用具以外の不要品は、数回にわたり売立会を開き処分されたという（鎌倉芳太郎1982）。

以上、現存する写真や聞き取りをまとめた文献から、現時点で判明している範囲で中城御殿の様子を復元してみた。これらの建物は世子の邸宅とはいえ、目立った装飾もない質素な造りであったとされる。しかし、その存在は王国が崩壊しても依然としてその威容を誇り、人々は畏敬の念を抱き続けた。また、鎌倉芳太郎や伊藤忠志、柳宗悦らの文化人は、建物や庭園、調度品に至るまで、質素ながらも多くの様式が混在した琉球式ともいえる御殿をこぞって賞賛し、多くの写真や文章を残している。

そして、この中城御殿において滞在経験のある歌人の井伊文子（高昌の子女）や津軽照子（津軽家の一族）は、その様子を回想し格調高い御殿での暮らしを伝える一方で（井伊1972、津軽1942）、井伊文子は首里城や中城御殿をはじめとする首里の文化財が戦災により破壊されたことを嘆き、詩文として遺している（井伊1978）。



1 商家邸の跡（首里市役所と首里バス）



2 新館開館式直前の風景（1966年11月3日）

図版3 旧中城御殿関係写真

第3章 調査の概要

第1節 調査経過

平成20(2008)年度

前年度から継続して、12月1日(月)から2月27日(金)までの57日間に渡り、約400m²の範囲で調査を行った。平成20(2008)年度調査の目的は、平成19(2007)年度調査区の西側にあたる旧県立博物館敷地内の南西箇所の遺構確認及び、北西に存在したとされる上之御殿付近にあった庭園遺構の残存状況の確認とした。

調査区内の草刈り後、グリッド設定を行い遺構と包蔵深度の確認のため1m×1mの試掘坑を設定し試掘を行った。そのうちL-15に設けた試掘坑より石敷遺構の一部が確認されたため、試掘坑No.2が含まれるL-15グリッド(10m×10m)を対象として掘削を開始した。また同時に庭園の遺構残存状況の確認も行った。庭園は残りがよく、丹念に除草すると良好な状態で庭園の池が検出された。そこで庭園の池上部に1m×1m、池の北側に1m×2mの試掘坑を設けた(H-19 TP16、G-19 TP15)。遺構は確認できなかったが、池北側の試掘坑(G-19 TP15)より被熱した鳩目銭や貝、動物の骨などが得られた。このような遺物の出土と黒色の層を確認した後、記録をとり埋め戻した。

一方、L-15グリッドでは土層の堆積状況を確認するために東西方向に10m×1mのトレンチを設定して掘削を行った。その結果、遺構が良好な状態で検出されたことから、グリッドの境界にベルトを残しながらL-15グリッドの東西トレンチを東側に延長し、さらにK・L-14グリッドの東側に南北トレンチを設定して層序確認と包蔵深度の確認を行った。その結果、コーラル層の下部より旧百里市役所及び百里バスターミナルの時期のものと思われるコンクリート基礎やU字溝、煉瓦などが検出され、K-14グリッド南北トレンチではさらにその下部より赤黒く焼けた焼土面や舗装面、切石のようなものを確認した。これらの遺構も中城御殿に伴う可能性があることから、トレンチの掘削から遺構面を確認する調査に切り替えた。調査区中央においては、表土剥ぎを行っている最中に中城御殿当時のものとみられる石溝遺構が各所より確認された。これら確認された遺構までの調査深度は約30～50cmと浅かったため、人力で掘削を行った。1月末までには調査範囲のほぼ全面に渡って中城御殿の石溝・石敷遺構、戦災による焼土が確認された。その後、石溝・石敷遺構を覆う焼土を掘削すると、ガラス玉や金属製品が多く出土することがわかってきた。特に、K-14グリッドの石溝遺構付近より多量のガラス玉や希少な金属製品が検出された。ガラス玉はあまりに多量で掘削による全点取り上げが不可能な程であったため、埋土をフルイにかけて回収した。またK・L-15グリッドからは層序観察用の畦を掘削した際に、旧百里市役所の遺構の直下から金属製品がまとまって検出されたため、記録して取り上げた。

2月中旬頃には遺構検出が完了して記録作業を行い、遺構をブルーシートと砂で覆い保護して平成20(2008)年度の調査を終了した。



発掘作業状況



遺構図作成状況

図版4 作業状況(平成20年度)

平成21(2009)年度

前年度に継続して6月2日(火)から10月30日(金)までの78日間に渡り、約250㎡の範囲で調査を行った。平成20(2008)年度調査の結果を受け、大規模に遺構が残ることが分かった中城御殿の遺構残存範囲の把握を目的として、K・L-14・15の周辺を対象に調査を開始した。調査面積は合計で約250㎡となった。

まず昨年度調査区の周囲に2m×2mの試掘坑を5箇所設定して遺構の確認を行った結果、平成20(2008)年度に検出された石敷・石溝遺構の続きがほぼ未破壊の状態に残されていることが分かった。また脇門付近L-16の試掘坑からは傾斜した石敷遺構と被熱した舗装面が検出され、中城御殿当時の建物区画が復元可能なほどの遺構残存状況が見込まれるに至った。そこで遺構残存範囲を確認するために昨年度調査区の北側・西側に徐々に離れながら試掘坑を随時設定していき、遺構の確認を行った。最終的には計16箇所の試掘坑を設定した。この試掘の結果、旧県立博物館の南西部のほぼ全域に渡って遺構が包蔵することが確認された。また中城御殿の遺構が検出されなかった2つの試掘坑からは、中城御殿旧表土より下位の地層より近世期と思われる遺構や造成層が検出された。

調査中盤には、旧県立博物館建物の中庭に該当するE・F-13にも3つの試掘坑を設定して人力で掘り下げを行った。その結果、中城御殿当時のものとみられる石溝・基壇や旧表土、中城御殿以前のものともみられる造成層が検出された。

調査後半にはG-13からL-13に旧県立博物館敷地内を南北に貫く60m×2mのトレンチを設定し、重機によって表土を除去して遺構の確認を行った。その結果トレンチのほぼ全面に渡って石敷遺構や暗渠といった遺構や中城御殿当時の旧表土が検出され、旧県立博物館建物の下にも遺構が包蔵されることが確認された。しかし調査期間が限られていたこともあり、検出状況の図化・写真記録に留め、遺構の完掘作業は行わずに現地保存して調査を終了した。

10月30日に発掘調査は終了したが、11月29日には現地説明会を行い平成20(2008)・21(2009)年度の調査成果を報告し、のべ244名の見学者が訪れた。現地説明会終了後、遺構に砂を敷いて保護したのち、3月に重機により埋め戻して調査を終了した。

資料整理作業の経過

調査報告書の刊行に向け、平成21(2009)年度、平成22(2010)年度にかけて資料整理作業を実施した。出土遺物の洗浄は現場の雨天時にほぼ終了していたことから、遺物の整理作業は層序や遺構の関係を確認後、注記作業から開始した。その後、順次分類、接合、集計、図化対象遺物の抜き出しを行い、図化、トレース、図版作成、写真撮影を行った。整理作業中には随時、有識者に陶磁器や金属製品に関する検討・分析を依頼した。

また、これと並行して、遺構図・土層図等のトレース後、発掘現場で撮影した写真と併せてレイアウトを行い、原稿執筆ののち編集後、指名競争入札により落札した印刷業者と契約を行い、調査報告書を刊行した。



発掘作業状況



遺構検出作業状況

図版5 作業状況(平成21年度)

第2節 調査区設定

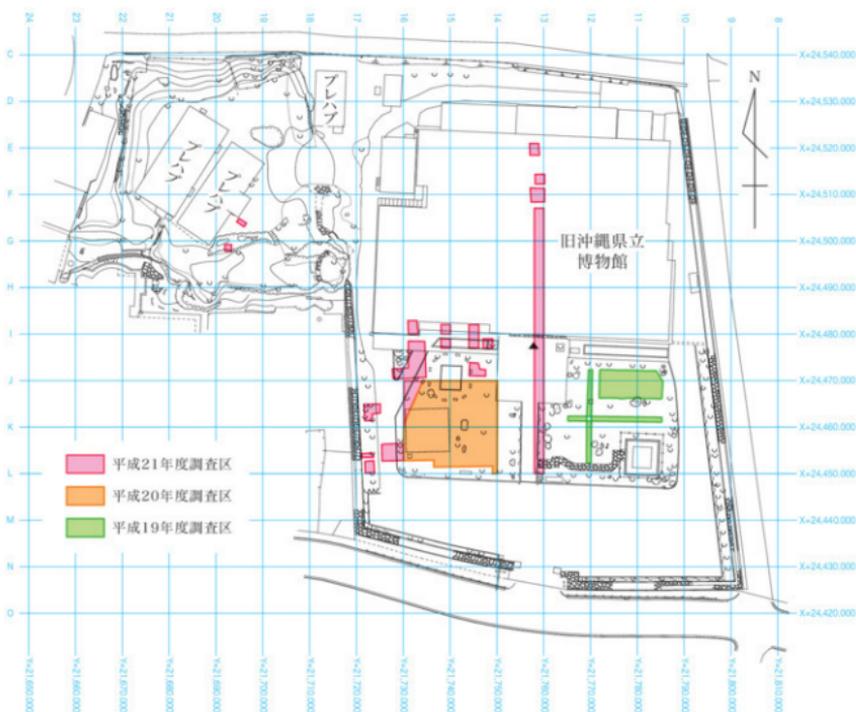
1. グリッド設定

平成18(2006)年度に、沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課が、4級基準点(座標値X=24,435,973、Y=21,719,010)を新設している。調査区はこれを基点として平成19(2007)年度に10m間隔にラインを設定し、南北にアルファベット、東西に算用数字を用いた名称のラインでグリッドを設定している(例えばL-15)。

2. 調査区の設定

平成20(2008)年度 設定したグリッドに沿い、K・L-14・15に調査区を設定した。しかしこの当時は旧県立博物館建物の解体前であったため、K-15北西際は残土置き場として確保せざるを得ず、この場所を避ける形での調査区となった。また庭園付近は遺構が確認される可能性の高い場所を前提として、任意に試掘坑を設定した。

平成21(2009)年度 前年度に残されたK-15北西際とともに、設定したグリッドに従いながら平成20(2008)年度の北側に2m×2mの試掘坑を設定した。試掘坑は調査の進展に伴って繋がるなどしたため、結果的に図のような形となっている。また跡地中央部での遺構残存状況を確認するため、13ラインに沿うようにF～Lまでの南北60m、東西2mのトレンチを設定した。



第5図 調査区位置図

第4章 層序と遺構

第1節 層序と堆積

平成20・21年度調査区は、中城御殿の遺構・旧表土より上の堆積が中心であったため、ほとんどが戦後の堆積であった。戦後の造成は客土が中心であったため、現地記録では多種多様な堆積が記録されるに至った。

ここでは有効とみられる時期区分によって大別し、今次調査範囲の堆積状況について報告する。

I層 戦後から現代までの堆積をまとめてI層とした。I層は大きく2つの堆積に分けられる。上層は平成21年4月の旧県立博物館解体工事において舗装されたアスファルト・コーラル層で、下層は旧沖縄県立博物館や旧首里市役所等に伴う造成層である。造成層はII層と客土とが攪乱した混雑土層で、混ぜられる客土によって場所ごとに大小の土質の違いがみられる。

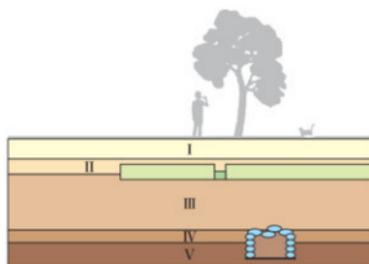
層中には旧首里市役所のレンガ積み遺構やコンクリート溝が残っている。また出土遺物は中城御殿に伴うとみられる瓦や陶磁器をはじめ、戦時中の弾丸、米軍統治下時代のジュース瓶や1セントコインなども出土している。

II層 II層は遺構直上に堆積する焼土・炭層や側溝内を埋める瓦層が該当する。焼土・炭層は層中に溶解した金属製品や炭化木材が含まれることから、戦時中における中城御殿焼失時のものと断定される。次に側溝内を埋める瓦層は、遺構との間に上記の焼土・炭層を挟む。出土遺物には多量の瓦をはじめ、陶磁器や稀少性の高い金属製品、多量のガラス玉の一括出土など、多くの特徴的な遺物がまとめて包含する。また弾丸などの戦時中とみられる遺物は出土するが、米軍統治下時代の遺物はみられないことから、中城御殿焼失の直後に瓦礫を側溝内に片付けたことによって形成された層とみられる。

本来検出時より厚く堆積していたとみられるが、戦後の開発によってI層に攪乱されたことによって、明確な堆積は遺構直上のみに残されたと推定される。以上の状況から、II層の年代観は1945年頃と目される。

III層 中城御殿の遺構やその当時の旧表土、及び中城御殿造営時の造成土層をIII層としてまとめた。旧表土は瓦礫が平面的に散布する状況、あるいは平坦で填圧を受けた赤土にビット群が残るような状況から推測した。年代的には中城御殿の移築造営が着工される1870年から、中城御殿焼失直前の1945年までが考えられる。

IV層 III層より下位で検出される填圧を受けた赤土・コーラル互層や、出土遺物に近代のものが含まれない造成層をIV層とした。TP1・6・12・13・14において確認され、年代的には近世が想定される。遺構にはTP1から円形石組遺構やビット群が検出されている。遺物はタイ産褐釉陶器、明朝系赤瓦・灰瓦などが出土している。



I層：戦後の造成層（戦後～現代）

II層：焼土層、溝内覆土等（戦中・戦後直後）

III層：中城御殿当時の遺構・旧表土、中城御殿造営時の造成土

IV層：中城御殿以前の遺構・旧表土・造成層（近世）

V層：泥岩（クチャ）層・赤土（マージ）層（中世・近世もしくは地山）

第6図 中城御殿跡の堆積模式図

V層 TP1において検出された。無遺物の赤土層と、直上にみられる同じく無遺物層の灰褐色粘土層とのセット関係が認められる。TP1円形石組遺構はこのV層を掘り込まれて造られる。

本層は無遺物層であることを含めて地山の様相をなすが、TP12では赤土の整地面が検出されていることから、結論は岩盤の検出がなされるまで慎重を期したい。

第2節 検出遺構

遺構は、中城御殿当時の遺構と、それ以前の遺構とに大別できる。以下にテストピット(TP)毎にその状況を示す。なお、遺構内出土遺物の集計表は第1～8表に示した。

1. J-14 TP1 (第11図、図版7)

堆積 I・III・IV・V層が認められる。表土から約80cm下までは1層が厚く堆積する。III層最上面の南西際にはTP2・3で検出された石畳3と同一の遺構とみられる石盤状の石が検出されているが、覆土に焼土や炭層は一切認められないことからII層は1層に飛ばされたとみられる。石畳の下には褐色の粘質土層が堆積し、中城御殿の遺構との層位関係や若干の包含遺物からIII層に目される。さらにその下に無遺物層の暗褐色粘質土層が堆積し、層中に遺構を包蔵するためIV層と目される。その下には無包含の明褐色粘質土層が堆積し、この土を掘り込んで遺構が構築されることからV層とした。地山の赤土(マージ)層とみられる。

遺構 TP1は中城御殿当時では酒御蔵であった場所に当たるが、ここからは2つの時期の遺構が検出されている。III層からは上記のように中城御殿の石畳とみられる石が検出されているが、かなり大きいことから礎石の可能性もあり判然としない。

一方でIV層からはピット群と円形石組遺構が検出された。ピット群はTP1東側に検出された計12口のピットである。いずれのピット覆土からも遺物はほとんど出土せず、またピットに規則的な配列もみられないことから、植栽痕と想定される。円形石組遺構はV層を掘り込み、内側に面の作られた琉球石灰岩を円形に4段積んで構築されている。天井部には板状の礫が水平に積まれ、さらに中ほどの深さで再度水平に礫が敷かれている。この状況から、円形石組遺構は一度蓋をされたのち、さらに上に再構築された可能性が挙げられる。底面はV層の赤土を固く充填して床面を形成している。埋土中からは中国産白磁や薩摩焼、沖縄産施釉陶器、明朝系瓦などの遺物が出土したが(第1表)、製品以外には多量の魚骨片が包含されており、この点からゴミ捨て坑(シーリ)の可能性が考えられる。試掘坑の設定上で検出された部分のみを完掘し、残り部分は未検出の状態で現地保存した。また掘削した遺構埋土は全てサンプルとして回収している。

首里古地図によればTP1は本部按司もしくは侍易の屋敷区画内に該当しており(第8図)、近世琉球における高位の家柄の生活像を窺わせる遺構として注目される。

2. I-J-14 TP2、J-14 TP3の層序と遺構 (第12・13図、図版8・9)

層序 TP2・3にはI・II・III層が認められた。現地表面より約40cmは1層が堆積し、層中には現代の製品と共に中城御殿のものとみられる多量の遺物が包含している。石畳・側溝底直上には焼土・炭層が薄く堆積しており、戦時中における中城御殿焼失時のものとみられる。溝内は焼土・炭層の上に瓦層が溝内を埋め、瓦をはじめとした多量の遺物が出土する。III層は遺構以外でTP2北側に認められ、中城御殿造営時の造成土とみられる。

遺構 I-J-14 TP2・3は酒御蔵の西隣で、TP2は新御殿と酒御蔵を結ぶ通路部分に当たるとされる(第10図)。ここからはK-14から繋がる蓋のつかないタイプの溝(溝2)とその東側に石畳(石畳3)が検出されている。中城御殿当時の建物配置から、酒御蔵に隣接する石畳・側溝とみられる。TP2の中間付近から北側ではこの状況と一致するように溝幅が半分になるとともに石畳が一段高くなっている。溝西側の緑石も同じ位置を境に形状が変化する。この箇所は上述のように建物間を結ぶ通路に当たるとされ、検出遺構と一致した状況を呈している。

またTP2南側の溝の緑石には直線的な擦痕が残されており、蓋のようなものが設置されていた痕跡と考えられる。溝2内は、北側のTP2から中国産・本土産の色絵・染付や所謂スンカンマカイが出土する（第4表）。またTP3からはTP2と同様の遺物に加え、イギリス産陶器の鉢や陶質の土管が出土している（第5表）。

3. I-15 TP4、J-5 TP5の層序と遺構（第14図、図版10）

層序 TP4・5はI・III層が認められる。III層はTP5西側に残る基壇4と、造成土とみられるクチャ・赤土層が認められる。残る箇所は戦後の破壊を受け、多量の琉球石灰岩礫やコンクリート塊が含まれるI層のみが堆積する。

遺構 TP4は新御殿の下、TP5は漆喰壁が配置された箇所当たる。検出遺構はTP5の東西際に基壇とみられる切石（基壇4）が認められるのみである。基壇4はTP7基壇3と東西方向で直線的に一致することから同一の遺構とみられる。

4. I-15 TP6（第20図、図版15）

堆積 I層・III層・IV層が認められる。I層はII層の土と客土が混ざり、瓦片などの遺物が多量に包含する。最下面にはコンクリート壁もみられることから、戦後から現代にかけての造成層とみられる。III層はコンクリート壁の下から検出され、出土する遺物も僅かとなることから中城御殿の造成層と評価した。IV層は粘質土層と混土礫層が互層となって1.5m以上堆積しているが、安全のために掘削を途中で中断したためどの程度の深度まで堆積するのか不明である。おそらく岩盤に局地的な落ち込みがあり、それを造成時に埋め立てたことによって深く堆積したものとみられる。遺物は褐釉陶器などが僅かに出土する。

遺構 TP6は新御殿付近の漆喰壁が配置される箇所であるが、上記のように戦後の攪乱の影響により、原位置を留める遺構は検出されなかった。

5. J-15・16 TP7（第15図、図版11）

堆積 I層とIII層が認められる。I層は客土とII層の混土層で現在の地表面から約40cm堆積する。多量の琉球石灰岩片が混入する混雑土層で、土中からは現代の製品とともに中城御殿当時のものとみられる遺物が多量に包含する。III層はTP7西側のJ-16グリッドに当たる箇所において検出される。中城御殿の遺構とほぼ同じ深度に堆積する灰褐色粘質土層（クチャ層）で、中城御殿の造成層とみられる。また同じ程度の大きさの礫が粗い密度で堆積している。この状況はK-16TP9にも認められる。

遺構 TP7は高御蔵の東隣部分に当たり、遺構には石畳1の北側部、基壇1・3が検出されている。石畳1はL-15から南北に伸びる石畳で、中城御殿当時の建物配置からは高御蔵に隣接する石畳とみられる。基壇1はK-15から南北に伸びる石列遺構である。石畳1より大きい方形の切石が使われ、石畳1より10cm程度高くなっている。また北端にはL字状の門みが残り、切石の上に何らかの構造物が設置されていたことを窺わせる。一方で基壇3は幅の狭い切石を列状に並べており、類似するTP5基壇4と同一の遺構とみられる。基壇1は門と井戸を結ぶ漆喰壁、基壇3は新御殿に関わる基壇と考えられる。

6. K-14（第16・23・24図、図版12）

堆積 I層・II層が認められる。I層からは多量の遺物が包含するが、様々な客土が混じる。またその下層には戦後の首里市役所のもを目されるレンガの敷かれる遺構が検出されている。II層は、L-14と同じものである。

遺構 K-14は2つの御蔵の中間部分に当たる。ここからは溝2と基壇2が検出された。溝2はK-14南側でS字状に曲がるが、この箇所は水流が止まらないように底石が斜めに設置され、緑石にも高低差が作られている（C-C'）。今次調査で検出された溝のうち、直角でないカーブはこの箇所のみである。覆土中からは多種多様な遺物が出土した。陶磁器には中国産白磁・色絵・染付・褐釉陶器、本土産色絵・染付・陶器、沖縄産施釉・無釉陶器、西洋陶器が得られた。また陶磁器以外では煙管や陶管、漆製品などが出土している（第2表）。これらの中には

有田焼の色絵や西洋陶器といった上級の製品が含まれているが、その背景には御蔵が隣接していることが考えられる。また基壇2・石畳3と接する箇所が右に分岐するが、破壊を受けており詳細は不明である。

基壇2はK-14北側に東西方向で設置される、幅広い切石を並べた遺構である。K-15基壇1と直線的に一致し、構造上も類似することから同一の遺構とみられる。

7. K-15 (第17・23図、図版13)

堆積 I層とII層が認められる。II層は石畳の抜けた部分に認められる灰褐色粘質土層で、中城御殿の造成層とみられる。その上には戦後の造成層である混雑土層のI層が堆積し、層中にはK-14のものと同様とみられるレンガの敷かれる遺構が検出されている。

遺構 K-15は御蔵と、高御蔵の中間部分に当たる。ここからは溝1、石畳1、基壇1が検出されている。溝1は屈曲部にのみ蓋石が確認され、構造は蓋石3類が用いられる。そのすぐ東側で北方向と東方向へ分岐する。北方向へ分岐した溝は、TP6で確認できないため短い溝とみられる。西側緑石は階段状になっており、東側緑石と高さが一致することから蓋を受けるための構造とみられる(F-F)。一方、東方向の溝は西側に下傾する構造となっているが、戦災で東側が破壊されているため、中城御殿往時の構造かどうか判断としない。L-15と同様、溝1の西側に石畳1が伴うが、K-15南側にかけて西側緑石と石畳がなく底石も傾いている状況になっている。おそらく溝1東側分岐部分と同様に、戦災で破壊されたものとみられる(H-H)。

基壇1はJ-15 TP6から繋がる幅広い切石が並ぶ遺構で、方形に区画されている。構造上の特徴や区画から、K-14基壇2と同一の遺構と目される。

中城御殿の間取りや屋根伏せからは、溝1・石畳1は御蔵西側の通路、基壇1は御蔵北側にあったとされる漆喰壁に関連する遺構と考えられる。

8. L-14 (第18・19・24図、図版14)

堆積 I層とII層が認められる。I層は客土を主体とする混雑土層で、琉球石灰岩片を中心に多量の近代・現代の遺物が包含している。II層は遺構直上に堆積する焼土・炭層である(K-14南壁断面図参照)。

遺構 L-14は中城御殿当時は御蔵・取納座部分に当たる。ここからは溝2・4、蓋付溝2・3、石畳2、舗装面2が検出された。溝2はK-14より続き、西側に曲がるが2m先でさらに南に直角に曲がる。蓋が付かず弧を描く屈曲部と、蓋が付き直角に曲がる屈曲部の2つの屈曲部が認められる。遺物には数千点にも及ぶガラス玉がまとまって出土したほか(第3表)、金属製の耳杯などの特異な遺物が得られている。中城御殿の間取りや屋根伏せからは、溝2・石畳2は2つの御蔵の中間の石畳道と推定される。

一方で溝4はL-14南端に検出され、部分的に底石と南北両緑石が残ることから溝として取り扱った。北隣には舗装面2が検出されている。舗装面2は溝4と石畳2・蓋付溝2の間に位置している。溝4・舗装面2は中城大親の離れ屋敷・取納座と御蔵の間を通る道とその側溝と目される。

蓋付溝3は溝2から東に分岐した溝の途中から出現する。蓋の構造は2類が用いられる(第7図)。戦後のコンクリート壁建設によって一部が破壊されているが、蓋石・側溝ともに保存状態は良好である。注目されるのは蓋付溝が石畳2の範囲外より始まることで、側溝と石畳との構造上の関係性を窺わせる箇所である。蓋付溝3は御蔵と取納座の間に位置しており、蓋が付いて暗渠となるのは両建物の通用の邪魔にならないことを意図したものと思われる。

9. L-15 (第21・22・24図、図版16・17)

堆積 I層とII層が認められる。I層はいずれの場所にもみられる混雑土層で、多量の遺物が含まれる。II層は遺構直上に堆積する焼土・炭層で、L-15の東側に残されていた。

遺構 L-15は御蔵・中城大親の屋敷が位置するが、遺構は溝1・4、蓋付溝1・2、暗渠1、石畳1・4、舗装面2、金属製品溜まりが検出された。溝1は幅の狭い蓋の付かない溝で、西に石畳1が隣接することから石畳道の側溝で

あると判断される。水流は北から南に向かい、暗渠1へと流れる構造となっている。石畳1は脇門から御蔵の西を通り、門Fへと至る石畳道と推定される。溝4はL-14から続く遺構で、蓋付溝2との間に舗装面2が検出されている。そのことから、溝4は舗装面2の側溝とみられる。蓋付溝1はL-15南側にみられ、全長は不明である。水は南から北へ向かい、暗渠1へと流れる構造となっている。西に石畳1が隣接しており、石畳1の側溝であるとみられる。蓋の構造は唯一左右両方の緑石に受けをもつ1類である(第7図)。蓋付溝2は東西方向に約10m通る遺構で、平成20・21年度調査において検出されたうちで最も長い蓋付溝である。水流は東から西へと向かい、暗渠1へと流れる構造となっている。蓋石は一部で失われているものの、残存状況は概ね良好である(第6表)。

暗渠1は溝1、蓋付溝1・2の結節点にあり、石畳1の下を北西方向に向かっている。各溝から流れる水の合流地点となっており、おそらく龍潭に排水する仕組みとなるとみられる。溝3・4を除く溝の水は、最終的にこの暗渠1へと流れる構造になっている。

金属製品溜まりはL-15の北東側にある土坑状の穴に、複数の大形金属製品が折り重なった状態で出土したものである。土坑内覆土は1層のものであることから、戦時中に形成された穴に廃品となった製品を投げ込んだものと考えられる。付近には石畳4が検出されるが、破壊を受けており全容は不明な状態となっている。

10. L-16 TP8 (第25図、図版18)

堆積 I層とII層が認められる。I層は客土に中城御殿の遺物が混ざった戦後の造成層である。II層は舗装面1の直上に薄く堆積する焼土・炭化物層で、炭化物はまだ土壌化が進んでおらず年輪が残る。

遺構 中城御殿当時の石畳1、舗装面1、暗渠1が検出されている。舗装面1は石畳が下傾した先にみられるが、当時の写真から舗装面は中城御殿内壁の外側を通る道と想定される。従ってこの境界線に中城御殿の内壁があった可能性が高い。

11. K-16 TP9 (第26図、図版19)

堆積 I層とIII層が認められる。I層は客土に中城御殿の遺物が混ざった戦後の造成層である。III層はJ-15・16TP7と同じく、大きい礫が雑然と含まれるクチャブロック層が堆積する。

遺構 K-16は高御蔵の南西際部分に当たるが、ここから遺構は検出されなかった。

12. L-16 TP10

堆積 I・III層が認められる。I層は客土に中城御殿の遺物やコンクリートブロックが混ざった戦後の造成層である。その下には中城御殿当時の遺構が検出される。

遺構 東側で舗装面が検出され、検出レベルなどから舗装面1とみられる。なおI層の崩落が激しいため、図化記録は行っていない。

13. L-16 TP11

堆積 I層のみ認められる。I層は客土に中城御殿の遺物やコンクリートブロックが混ざった戦後の造成層である。なおI層の崩落が激しいため、図化記録は行っていない。

遺構 石牆下から石牆の根石が検出されているが、崩落が激しく、詳細な観察は行えなかった。

14. L-13 (第27図、図版20～22)

堆積 I・II・III層が認められる。II層は石畳遺構の周囲に確認され、瓦片と小礫片で成る、戦後まもなく戦災で破壊された瓦礫を整地した瓦礫層とみられる。III層は明褐色で粘質の赤土層で、平坦に整地される。遺構直下のレベルであることから、中城御殿の造成土とみられる。

遺構 石畳5とピット群が検出されている。石畳5は原位置を留めるものの半壊した状態である。なおトレンチ南端にも石畳がみられるが、破損状態が激しく原位置を留めるか不明であったことから遺構としなかった。ピット群はⅢ層を掘り込んだもので、南北方向におよそ直線的であるが、間隔は不規則であることから、植栽痕と判断した。なおピット群は検出のみで、覆土の掘削は行っていない。

15. I-13 (第28図・図版23～25)

堆積 I層・Ⅱ層・Ⅲ層が認められる。南側に設けたサブトレンチの堆積からは、小礫の混ざる粘質土層であるⅢ層の上に、填圧を強く受ける瓦礫層が乗ることが分かる。瓦礫は戦災で破壊された瓦や石造遺構の残骸とみられることから、それぞれⅢ層が中城御殿の造成層、Ⅱ層が戦中・終戦直後の造成層であるとみられる。

遺構 暗渠2が検出された。これは石敷の下に空洞が認められたことによる。内部の掘削は行っていない。

16. H-13 (第29図・図版26～28)

堆積 I層とⅡ層が認められる。Ⅱ層は遺構周囲で確認される瓦小片と礫小片が密に堆積する瓦礫層で、終戦直後の造成層とみられる。

遺構 石畳6が検出された。トレンチ東側は原位置を留めており、北側には石畳の緑石が残される。しかしトレンチ西側と中央南側は破壊され、石畳の切石が数点残るのみである。

17. E・F-13 TP12、F-13 TP13、F・G-13 TP14 (第30図・図版29～33)

堆積 I層からⅣ層が確認された。Ⅱ層はTP12で焼土が検出されているのみである。Ⅲ層は中城御殿の遺構の下に堆積する。TP13・14では下層から多くの遺物が包含し、上層は赤土とコーラル層が平坦に填圧を受けている状況が認められる。またTP12ではⅢ層下より赤土とコーラルが版築状に堆積した層が検出され、TP14Ⅲ層上面と同様の工法であることから、Ⅲ層以前の旧表土とみなしⅣ層とした。TP14からはTP12Ⅳ層とほぼ同じレベルから瓦溜まりが検出され、さらにその下よりコーラル層が検出されたため、これらもⅣ層と評価した。

遺構 2つの時期の遺構が認められる。この場所は中城御殿の御内原に当たるが、Ⅱ層の遺構にはTP12より石畳7、TP13より溝3、TP14より基壇5が検出されている。溝3は底にコンクリートが敷かれており、中城御殿が機能する当時からコンクリートが使われていた可能性を窺わせる(第7表)。またⅣ層の遺構には瓦溜まりが認められる。瓦溜まりはTP14北東際のみで極めて範囲が狭く、瓦が集中的に廃棄された跡とみられる(第8表)。

18. G-19 TP15 (第31図・図版34)

堆積 I層とⅢ層が認められる。I層は約70cmに渡って堆積し、東壁以外ではコンクリート壁が検出されている。Ⅲ層はI層でみられたコンクリートがなくなることから中城御殿の造成層とみなした層である。宮古式土器や中国産染付などの陶磁器をはじめ、16点の無文銭が一括して出土している。

遺構 検出されなかった。

19. H-19 TP16 (第31図・図版34)

堆積 I層・ⅢもしくはⅣ層・Ⅴ層が認められる。I層は森林下に堆積する腐植土層で、戦後のものである。Ⅱ層は検出されていない。I層の下層はⅣ層の傾斜を埋め、整地することを企図した堆積と推察されるが、遺物が包含していないため年代が不明でⅢ層かⅣ層か判然としない。Ⅴ層は他の試掘坑でも確認される粘質の暗褐色土層で無包含層である。

遺構 検出されなかった。

第3節 まとめと考察

1. 遺構の検出状況

以上より、今次調査では中城御殿当時とみられるⅢ層と、それ以前とみられるⅣ層の2つの時期の遺構が認められた。特にⅢ層では広範囲にわたって多岐の遺構が戦中・戦後の破壊を免れ、今日まで土中に残されていた。各層ごとの検出遺構は以下の通りである。

Ⅲ層 溝 …………… 9基	Ⅳ層 円形石組遺構 …… 1基
石畳 …………… 7基	ピット …………… 12口
基壇 …………… 4基	瓦溜まり …………… 1箇所
舗装路 …………… 2基	
ピット …………… 13口	
金属製品溜まり …… 1箇所	

2. Ⅳ層の遺構

遺構の年代的位置付け

前年度報告でも中城御殿以前として検出遺構が報告されたが(沖縄県立埋蔵文化財センター2010)、今次では同一の試掘坑から層位的に確認されたことにより、中城御殿以前の遺構が包蔵することが確実であることが理解された。また円形石組遺構は石造技術においても首里城などでみられるものに近く、方形に切られる中城御殿の切石とは差異がみられる。これらの状況から、おそらく近世に比定される遺構と考えられる。

遺構の評価

首里城跡周辺の近世遺跡は、これまで円覚寺跡などで調査成果があるものの、土族の屋敷跡の調査成果は得られてこなかった。中城御殿跡の地は近世では北谷御殿・本部按司屋敷などがあつたことが首里古地図にあり(第8図)、明確に土族の屋敷跡が残されることが確認されたことになる。今次調査では極めて断片的な調査のみであるが、近世土族の生活像を復元する端緒となり得る遺構であると理解される。

3. Ⅲ層の検出遺構(第7図)

溝

全9基の溝が検出され、全て方形の琉球石灰岩切石が用いられていた。今次調査ではI・J・K・L-14、K・L-15と広い範囲で検出され、石畳や舗装面とセット関係であることに加え、残される古写真から道の側溝であることが分かる(沖縄県立博物館1992)。これら側溝は、その構造から蓋の付かない溝(溝1~4)、蓋の付く溝(蓋付溝1~3)、他に遺構の下に造られるもの(暗渠1・2)に細分される。水流はそれぞれ御寝廟のある北から南に流れ、最後は暗渠1に流れるように設計される。



第7図 蓋付溝の構造模式図

また蓋石の設計構造にも機能によって以下の3種が使分けられている(第7図)。

- 1類:長方形の石盤状で長軸の左右に緑石に乗せる凹みが作られるもの。蓋付溝1に用いられる。
- 2類:1類よりは長軸長と短軸長が近い長方形の石盤で、長軸側に片側のみ緑石に乗せる凹みが作られる。蓋付溝2・3に用いられる。
- 3類:ほぼ正方形の石盤で、左右に緑石に載せる凹みが作られる。また蓋を持ち上げられるように、上下が台形状に切られている。蓋付溝2の直角に曲がる箇所と溝2の直角に曲がる箇所に用いられている。

このように蓋石も側溝の機能や場所に合わせて数種のもが製作されており、中城御殿の石造遺構の多様性のみならず、当時の石造技術を窺える資料でもある。

石畳

全7基が検出され、全て多角形の琉球石灰岩切石が用いられる。遺される古写真から、中城御殿内の石畳道であることが確認される。左右どちらかに蓋の付かない溝が側溝として機能し、石畳とセット関係となることが理解される。

基壇

方形で他の遺構より大きい切石が用いられるもの(基壇1・2)と、幅の狭い切石によるもの(基壇3・4)とに分けられ、基壇1・2と基壇3・4は同一の遺構であるとみられる。古写真より建物・漆喰壁の基壇であることが理解される(沖縄県立博物館1992)。

舗装面

2箇所で見出された。細かく砕いた琉球石灰岩を敷き、填圧して舗装したもので、首里城跡などで同様の舗装面が確認されている。古写真にも記録されており、これによると中城御殿内緑部を一周する道であることが分かる。

ピット群

L-13にのみ認められ、計13口が検出されている。検出のみで覆土掘削は行っていないが、ピット同士の位置関係から植栽痕とみられる。

金属製品溜まり

K-15のグリッド交点付近で見出され、土坑状の穴から銅製の香炉や花瓶などがまとまって出土している。この穴からは他のI層と同様に瓦片なども多く出土していることから、意図的な掘り込みではなく爆弾などによって形成された穴に、周囲に散らばる破損品を一括して廃棄したものと考えられる。なお出土した金属製品については今後の報告において詳述したい。

遺構と建物配置(第10図)

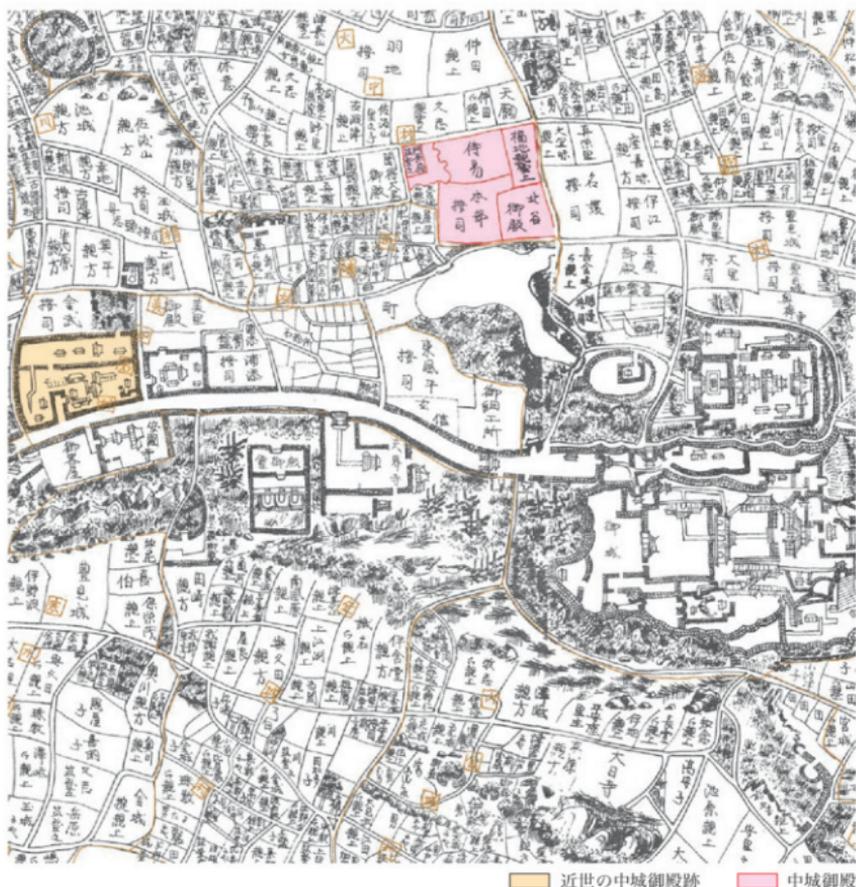
中城御殿の遺構は、写真記録が残されているという近代遺跡ならではの特性により、かなり精度の高い機能復元が可能である。そこで、当時の航空写真と聞き取り調査から作成した旧中城御殿の聞き取り図(以後「聞き取り図」とする)を参考に、今次調査において検出された主要な遺構の機能について考察を加えたい。

石畳は概ね建物間に位置し、古写真からも建物間に石畳道が記録されていることから、検出された石畳が古写真にも写されている石畳道であることが容易に理解される。また「聞き取り図」からは、石畳1が新御殿付近の門から御蔵・高御蔵間、中城大親屋敷を通り、同じく古写真から建物外縁部の道であることが確認される舗装面1を通して脇門へ至る石畳道であることが推定される。また溝1が石畳1の側溝であることも古写真に記録される石畳と側溝の関係性をみる限り明らかである。石畳2・舗装面2は、前者が御蔵と取納座を結ぶ石畳道、後者は全てが残されていないものの石畳2から続き取納座・中城大親屋敷を抜けて石畳1に合流する通路であったことが窺える。蓋付溝1は石畳1と

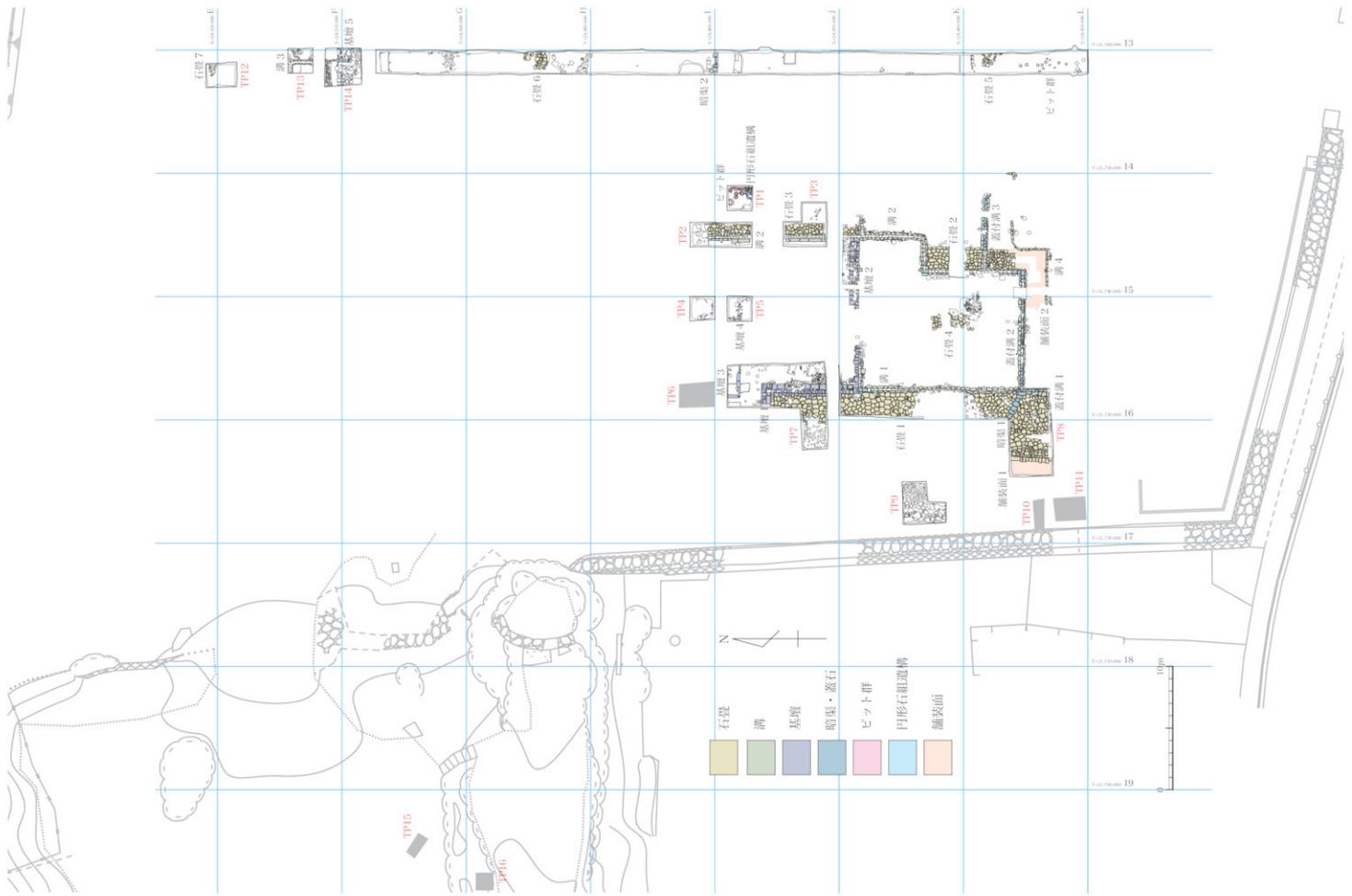
舗装面1の、蓋付溝2は舗装面2と御蔵の通用を阻害しないために蓋付溝となっていたとみるのが妥当であろう。また同様に、蓋付溝3は取納座と御蔵の通用を阻害しないためと考えられる。以上は「間取り図」と検出遺構の位置関係が比較的判然としたことによる解釈であったが、対して石畳4は御蔵の中心部に位置しており「間取り図」との整合性が掴めない。実際は御蔵の中央部に石畳道が敷設されていたのだろうか。

一方で2種類の基壇もそれぞれ「間取り図」との照合によって概ねその機能を把握することができた。基壇1・2は蔵区画と大御庭や御寝剛・新御殿といった住居区画を区切る漆喰壁の基壇であることが推定される。基壇3は「間取り図」との整合性が判然としなかったために機能の推定には至らなかったが、これも門F付近の中庭と住居区画とを仕切る壁の基壇と想定される。

以上のように、今次調査において元位置を留めた礎石や礎石抜け穴、柱穴は全く検出されず、確定的な建物配置を検討する遺構は得られなかった。しかし検出された遺構からは御蔵周辺の建物配置を想定することが可能である。また溝内では他の遺跡ではみられない宝物クラスの遺物が多数出土していることから溝内遺物は御蔵内の取藏品であった可能性が高く、いずれも近代の琉球王家を理解する上で極めて重要な遺構であると考えられる。



第8図 『首里古地図』にみる近世中城御殿跡の土地利用（沖繩風土記刊行会1970）



第9図 中城御殿跡 平成20・21年度発掘状況

第1表 円形石組遺構内埋土出土遺物

神田番号 図版番号	種類	器種	部位	分類	年代	産地	備考	点数	グラッド	TP.No
	中国産白磁	甌	口					1	J-14	TP1
	中国産陶軸陶器	壺	胴					2	J-14	TP1
第5408・図版57・57	本土産陶器	甌	口		18～19c	薩摩		1	J-14	TP1
	沖繩産魚輪陶器	甌	底					1	J-14	TP1
	明朝系平瓦	灰色	扶端部	角1つ				1	J-14	TP1
	明朝系平瓦	灰色	扶端部	角無し				1	J-14	TP1
	明朝系平瓦	灰色	広端部	角無し				1	J-14	TP1
	明朝系平瓦	灰色	玉縁部					1	J-14	TP1
	明朝系平瓦	赤褐色	玉縁部					1	J-14	TP1

第2表 溝2内覆土出土遺物 (K-14)

神田番号 図版番号	種類	器種	部位	分類	年代	産地	備考	点数	グラッド	TP.No
	中国産白磁	甌	口		明初	景徳鎮窯		1	K-14	
	中国産色絵	甌	胴	B-3類				1	K-14	
	中国産色絵	小甌	口					1	K-14	
	中国産色絵	小甌	口					1	K-14	
	中国産色絵	甌	口	B-1類				1	K-14	
	中国産色絵	甌	口	B-3類				1	K-14	
	中国産染付	甌	口	C類				1	K-14	
	中国産染付	甌	口	E類				3	K-14	
第3408・図版39・15	中国産染付	甌	口～底	E類	18c後半～19c			1	K-14	
	中国産染付	甌(胴小・小甌口)	口					9	K-14	
	中国産染付	小甌	口	B-1類				1	K-14	
	中国産染付	小甌	底	不明				1	K-14	
	中国産染付	甌	口	C類				20	K-14	
	中国産染付	甌	口～底	C類				2	K-14	
第3808・図版41・38	中国産染付	甌	口	C類	18c後半～19c			1	K-14	
	中国産染付	甌	底	C類				4	K-14	
	中国産染付	器種不明	底					4	K-14	
	中国産陶軸陶器	壺	胴					2	K-14	
	西洋陶器	甌	西洋	緑		イギリス	折縁	1	K-14	
第4108・図版52・22	本土産色絵	甌	底		18c	有田		1	K-14	
	本土産染付	長皿	口					1	K-14	
	本土産磁器(近代)	小甌	口				印判手	1	K-14	
第5308・図版56・56	本土産陶器	甌	口～底		18～19c	京・信楽		1	K-14	
	本土産陶器	甌	口～底					1	K-14	
	沖繩産魚輪陶器	甌 or 小甌	口					1	K-14	
	沖繩産魚輪陶器	小甌	口					2	K-14	
	沖繩産魚輪陶器	小甌	底					2	K-14	
	沖繩産魚輪陶器	急須	口	A類				1	K-14	
	沖繩産魚輪陶器	器種不明	口					1	K-14	
	沖繩産魚輪陶器	甌	口					1	K-14	
	煙管	不明					沖繩産魚輪陶器製	1	K-14	
	石造物	不明					被熱著しい	1	K-14	
	鉄貨							2	K-14	
	陶管		広端部					12	K-14	
第7408・図版73・1	陶管		扶端部				最大径28.25cm,最大厚1.5cm	1	K-14	
第7008・図版73・2	陶管		扶端部				最大径70cm,最大厚1.9cm	1	K-14	
	明朝系軒平瓦	灰色	不明					1	K-14	
	明朝系軒平瓦	赤色	瓦当					1	K-14	
第8108・図版84・6	明朝系軒平瓦	赤色	瓦当					1	K-14	
	明朝系平瓦	赤色	扶端部	角無し				2	K-14	
	明朝系平瓦	褐色(牛埴色)	扶端部	角無し				1	K-14	
	明朝系平瓦	灰色	扶端部	角1つ				2	K-14	
	明朝系平瓦	赤褐色(陶器質)	広端部	角1つ				1	K-14	
	明朝系平瓦	灰色	広端部	角1つ				1	K-14	
図版74	漆製品							1	K-14	

第3表 溝2内覆土出土ガラス玉

分類	黄色	黒色	青色	赤色	緑色	灰色	金色	茶色	紺色	紫色	白色	半透明	不明	非その他	総計
I	146	40	35	29	40		13	2			22	28	2		357
II	1463	729	121	200	527		162	9	1	1	117	102	13	1	3446
III		2													2
IV	11	7			10									34	63
V	10	53	1		2	3					1		74	144	
V?					1										1
不明	1	1	1												3
総計	1631	832	158	230	580	3	175	11	1	1	130	131	89	35	4016

※その他(溶着、変形などにより元の色調が定かでないもの)

第4表 溝2内覆土出土遺物 (TP2)

調査番号 ISDN番号	種類	器種	部位	分類	年代	産地	備考	点数	グリッド	TP.No
	中国産色絵	碗	底	B-3類	18c後半～19c			2	1・J-14	TP2
	中国産褐釉陶器	壺	胴					2	1・J-14	TP2
	中国産染付	碗E類か小碗D	口					2	1・J-14	TP2
	中国産染付	碗	口	B-1類				1	1・J-14	TP2
	中国産染付	碗	口	C類				1	1・J-14	TP2
第379c-98040-24	中国産染付	小碗	底	D類				1	1・J-14	TP2
	中国産染付	碗	口	E類				1	1・J-14	TP2
	中国産染付	碗	底	D-1類				1	1・J-14	TP2
	本土産色絵	蓋						1	1・J-14	TP2
	本土産染付	碗	底					1	J-14	TP2
第479c-98050-6	本土産染付	碗	口		17c後半～18c前半		八角覆元	1	1・J-14	TP2
	本土産染付	角皿	口					1	1・J-14	TP2
	本土産磁器(近代)	碗	口				印判子	2	1・J-14	TP2
	本土産磁器(近代)	碗	底				印判子	1	1・J-14	TP2
	本土産磁器(近代)	皿	口				印判子	7	1・J-14	TP2
	本土産磁器(近代)	皿	底				印判子	10	1・J-14	TP2
第529c-98055-40	本土産磁器(近代)	皿	底		近代		染付	1	1・J-14	TP2
	明朝系丸瓦	灰色	端部片					1	1・J-14	TP2

第5表 溝2内覆土出土遺物 (TP3)

調査番号 ISDN番号	種類	器種	部位	分類	年代	産地	備考	点数	グリッド	TP.No
	中国産白磁	不明	胴			徳化窯		2	J-14	TP3
	中国産染付	碗	口	A類				1	J-14	TP3
	中国産染付	碗	口	E類				1	J-14	TP3
	中国産染付	碗E類か小碗D	口					13	J-14	TP3
	中国産染付	碗	底	D-1類				2	J-14	TP3
	中国産染付	碗	底	E類				6	J-14	TP3
	中国産染付	小碗	口	B-1類				1	J-14	TP3
	中国産染付	小碗	底	B-1類				1	J-14	TP3
	中国産染付	小碗	底	D類				1	J-14	TP3
第440c-98047-22	西洋陶器	鉢	口	緑		イギリス	肥子付き	1	J-14	TP3
	本土産色絵	長皿	口～底			有田		1	J-14	TP3
	本土産色絵	皿	口					3	J-14	TP3
第479c-98050-8	本土産染付	皿	底		18c後半～19c			1	J-14	TP3
	本土産染付	大皿	口					1	J-14	TP3
	本土産磁器(近代)	碗	口				印判子	4	J-14	TP3
	本土産磁器(近代)	碗	底				印判子	2	J-14	TP3
	本土産磁器(近代)	皿	口				印判子	24	J-14	TP3
	本土産磁器(近代)	皿	底				印判子	18	J-14	TP3
	本土産磁器(近代)	皿	口～底					2	J-14	TP3
第529c-98055-39	本土産磁器(近代)	蓋			近代		染付	1	J-14	TP3
第539c-98056-53	本土産陶器	碗	底		18～19c	関西か?		1	J-14	TP3
	沖繩産施釉陶器	碗	口					2	J-14	TP3
	沖繩産施釉陶器	碗 or 小碗	口					4	J-14	TP3
	沖繩産施釉陶器	小碗	口					2	J-14	TP3
	沖繩産施釉陶器	小碗	底					1	J-14	TP3
	沖繩産施釉陶器	鍋	口					1	J-14	TP3
	沖繩産施釉陶器	鍋	耳					1	J-14	TP3
	沖繩産施釉陶器	急須	口	A類				1	J-14	TP3
	沖繩産施釉陶器	蓋		A類				2	J-14	TP3
	沖繩産無釉陶器	皿	口					1	J-14	TP3
	沖繩産無釉陶器	壺	口					1	J-14	TP3
	沖繩産無釉陶器	壺・甕	底					2	J-14	TP3
	沖繩産無釉陶器	磁鉢	口					1	J-14	TP3
	沖繩産無釉陶器	磁鉢	口					1	J-14	TP3
	沖繩産無釉陶器	深鉢	口					1	J-14	TP3
	陶瓦土器	皿	底					1	J-14	TP3
	陶瓦土器	鍋 or 急須	底					1	J-14	TP3
	陶瓦土器	鍋	肥子					1	J-14	TP3
	陶瓦土器	磁鉢	底					1	J-14	TP3
	陶管		広端部					1	J-14	TP3
	陶管		狭端部					1	J-14	TP3
	円盤状製品						明朝系赤瓦質	1	J-14	TP3
	円盤状製品						明朝系灰瓦質	1	J-14	TP3
	近世大和瓦 棧瓦	灰色	端部、曲面					1	J-14	TP3
	近世大和瓦 棧瓦・平瓦	灰色	筒部、平面					1	J-14	TP3
	明朝系軒平瓦	赤色	瓦当					1	J-14	TP3
	明朝系軒平瓦	赤色	不明					1	J-14	TP3
	明朝系軒瓦	褐色	不明					2	J-14	TP3
第819c-98064-5	明朝系軒瓦	赤色	瓦当					1	J-14	TP3
	明朝系平瓦	赤色	広端部			角無し		1	J-14	TP3
	明朝系平瓦	灰色	広端部			角無し		1	J-14	TP3
	明朝系丸瓦	赤色	玉縁部					1	J-14	TP3
	明朝系丸瓦	灰色	端部片					1	J-14	TP3

第6表 蓋付溝2内覆土出土遺物

検出番号 図説番号	種類	器種	部位	分類	年代	産地	備考	点数	グリッド	TP.No
第340c・10図27-5	中国産白磁	甌	口			徳化窯	蓋受け付甌	1	L-15	
第400c・10図49-21	タイ産青磁	鉢	口					1	L-15	
	本土産磁胎(近代)	小甌	口					1	L-15	
	沖繩産施釉陶器	甌 or 小甌	口					1	L-15	
	沖繩産施釉陶器	小甌	口～底					1	L-15	
	沖繩産施釉陶器	蓋	口	B-2類				1	L-15	
	明朝系平瓦	灰色	広端部	角1つ				1	L-15	
	明朝系平瓦	灰色	狭端部	角1つ				1	L-15	
	明朝系丸瓦	灰色	玉縁部					1	L-15	
	明朝系軒平瓦	赤色	皿A					1	L-15	

第7表 溝3内覆土出土遺物 (TP13)

検出番号 図説番号	種類	器種	部位	分類	年代	産地	備考	点数	グリッド	TP.No
	明朝系平瓦	赤色	広端部	角無し				1	F-13	TP13
	明朝系丸瓦	赤色	玉縁部					2	F-13	TP13

第8表 瓦溜まり出土遺物

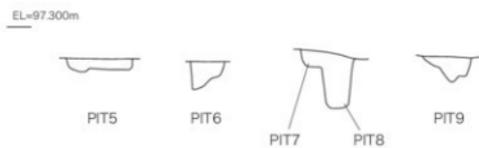
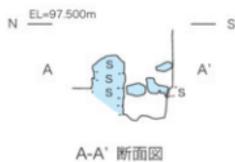
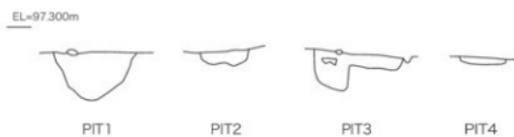
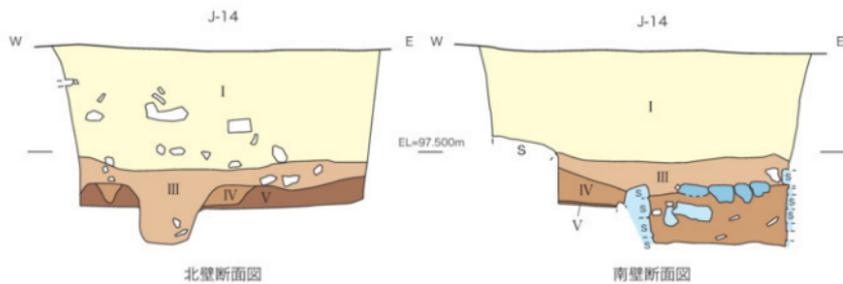
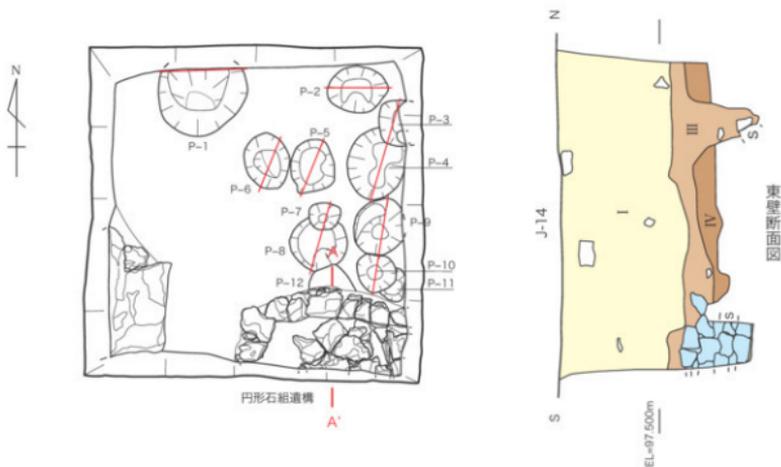
検出番号 図説番号	種類	器種	部位	分類	年代	産地	備考	点数	グリッド	TP.No
	中国産染付	皿	口	B-1類				1	F-G-13	TP14 (ST3)
	中国産染付	皿	底	B-1類				1	F-G-13	TP14 (ST3)
	中国産染付	甌	口	D-1類				1	F-G-13	TP14 (ST3)
	中国産染付	甌	底	D-1類				1	F-G-13	TP14 (ST3)
	中国産染付	小甌	底	B-1類				1	F-G-13	TP14 (ST3)
第380c・10図41-42	中国産染付	蓋	口		16c			1	F-G-13	TP14 (ST3)
第450c・10図48-15	中国産無釉陶器	蓋	口			宜興窯		1	F-G-13	TP14 (ST3)
	沖繩産施釉陶器	甌	口					1	F-G-13	TP14 (ST3)
	沖繩産施釉陶器	甌 or 小甌	口					2	F-G-13	TP14 (ST3)
	沖繩産施釉陶器	甌	底					2	F-G-13	TP14 (ST3)
	沖繩産施釉陶器	小甌	底					2	F-G-13	TP14 (ST3)
	沖繩産施釉陶器	甌	底					1	F-G-13	TP14 (ST3)
	沖繩産施釉陶器	急須	注口	A類				1	F-G-13	TP14 (ST3)
	沖繩産施釉陶器	急須	把手	B類				1	F-G-13	TP14 (ST3)
	沖繩産施釉陶器	火鉢	底					2	F-G-13	TP14 (ST3)
	沖繩産施釉陶器	火入	口					1	F-G-13	TP14 (ST3)
	沖繩産施釉陶器	蓋		A類			つまみ	1	F-G-13	TP14 (ST3)
第570c・10図60-33	沖繩産施釉陶器	甌	底					1	F-G-13	TP14 (ST3)
	沖繩産施釉陶器	器種不明	底					1	F-G-13	TP14 (ST3)
	沖繩産無釉陶器	深鉢	底					2	F-G-13	TP14 (ST3)
	沖繩産無釉陶器	楕鉢	口					1	F-G-13	TP14 (ST3)
	陶質土器	甌	口					1	F-G-13	TP14 (ST3)
第6430c・10図67-7	陶質土器	甌	口					1	F-G-13	TP14 (ST3)
第6550c・10図68-20	陶質土器	急須	口～底					1	F-G-13	TP14 (ST3)
第6500c・10図68-21	陶質土器	急須	口					1	F-G-13	TP14 (ST3)
	門簾状製品						沖繩産施釉陶器製	1	F-G-13	TP14 (ST3)
	門簾状製品						沖繩産無釉陶器製	1	F-G-13	TP14 (ST3)
	門簾状製品						明朝系瓦(褐色)製	1	F-G-13	TP14 (ST3)
	明朝系平瓦	赤色	狭端部					31	F-G-13	TP14 (ST3)
	明朝系平瓦	褐色	狭端部					1	F-G-13	TP14 (ST3)
	明朝系平瓦	赤褐色	狭端部					1	F-G-13	TP14 (ST3)
	明朝系平瓦	灰色	狭端部					14	F-G-13	TP14 (ST3)
	明朝系平瓦	赤色	広端部					66	F-G-13	TP14 (ST3)
	明朝系平瓦	赤褐色	広端部					1	F-G-13	TP14 (ST3)
	明朝系平瓦	褐色	広端部					1	F-G-13	TP14 (ST3)
	明朝系平瓦	灰色	広端部					8	F-G-13	TP14 (ST3)
	明朝系平瓦	灰色	広端部-狭端部					1	F-G-13	TP14 (ST3)
	明朝系平瓦	赤色	広端部-狭端部					4	F-G-13	TP14 (ST3)
	明朝系平瓦	赤色	完形品					2	F-G-13	TP14 (ST3)
第8300c・10図80-14	明朝系平瓦	赤色	広端部-狭端部					1	F-G-13	TP14 (ST3)
第8300c・10図80-15	明朝系平瓦	赤色	広端部-狭端部					1	F-G-13	TP14 (ST3)
	明朝系丸瓦	赤色	玉縁部					12	F-G-13	TP14 (ST3)
	明朝系丸瓦	灰色	玉縁部					5	F-G-13	TP14 (ST3)
	明朝系丸瓦	灰色	玉縁部					3	F-G-13	TP14 (ST3)
	明朝系丸瓦	赤色	玉縁部～端部				印有り	1	F-G-13	TP14 (ST3)
	明朝系丸瓦	赤色	端部						F-G-13	TP14 (ST3)
	明朝系丸瓦	灰色	端部						F-G-13	TP14 (ST3)
第8250c・10図85-11	明朝系丸瓦	赤色	玉縁部				印有り		F-G-13	TP14 (ST3)
第8300c・10図86-12	明朝系丸瓦	赤色	玉縁部				印有り		F-G-13	TP14 (ST3)
	明朝系丸瓦	褐色	端部						F-G-13	TP14 (ST3)
第8410c・10図87-19	埴	灰							F-G-13	TP14 (ST3)



図版6 平成20・21年度 調査区遺構検出状況



第10図 主要検出遺構と屋根伏せ位置



ビット断面図 (Pit cross-section diagram)

第11図 J-14 TP1 円形石組遺構、ビット群



J-14 TP1 遺構検出状況及び北壁断面



円形石組遺構 検出状況



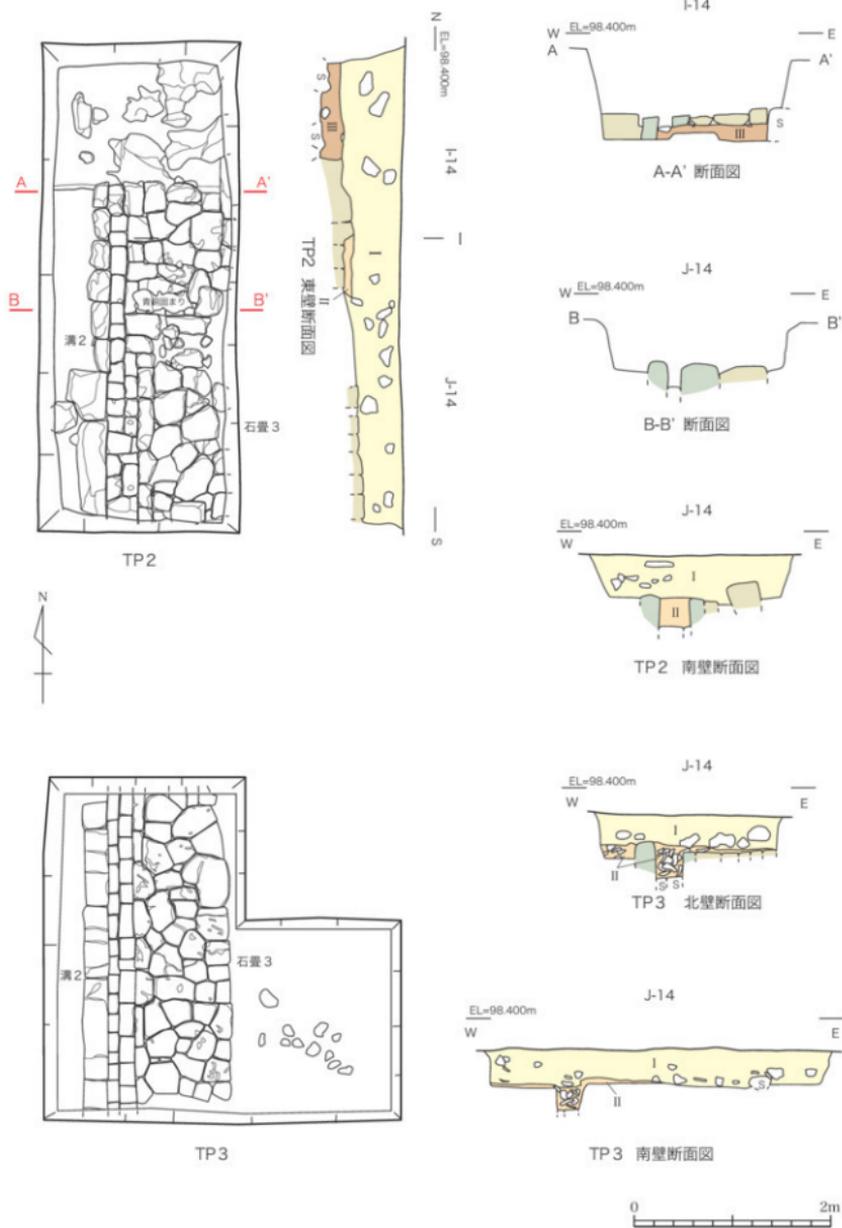
円形石組遺構 半裁断面



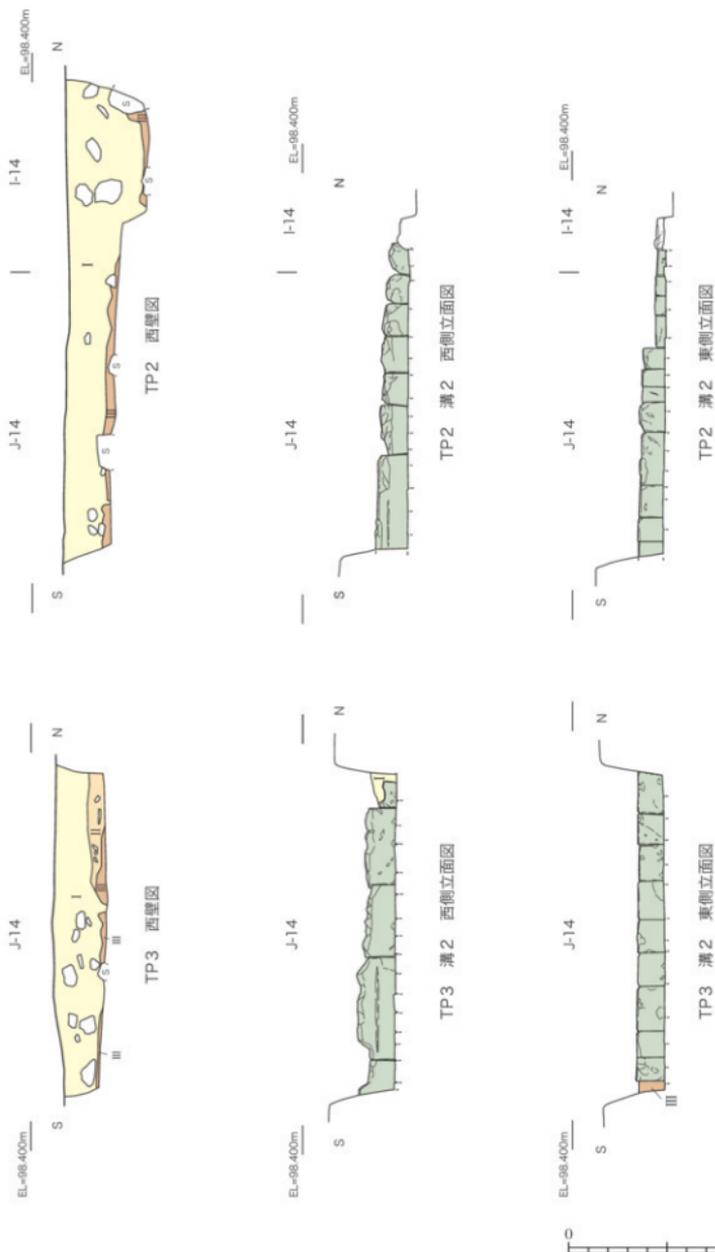
円形石組遺構 完掘状況



ビット群 半裁断面



第12図 I·J-14 TP2、J-14 TP3 溝2、石置3 ①



第13図 I-J-14 TP2、J-14 TP3 溝2、石畳3 ②



I・J-14 TP2 J-14 TP3 遺構検出状況 (北から)



TP2 東壁 (北側)



TP2 東壁 (中央)



TP2 東壁 (南側)



溝2 立面 (北から)



TP 2 北壁



TP 2 南壁



TP 3 南壁



TP 3 西壁 (南側)



TP 3 西壁 (中央)



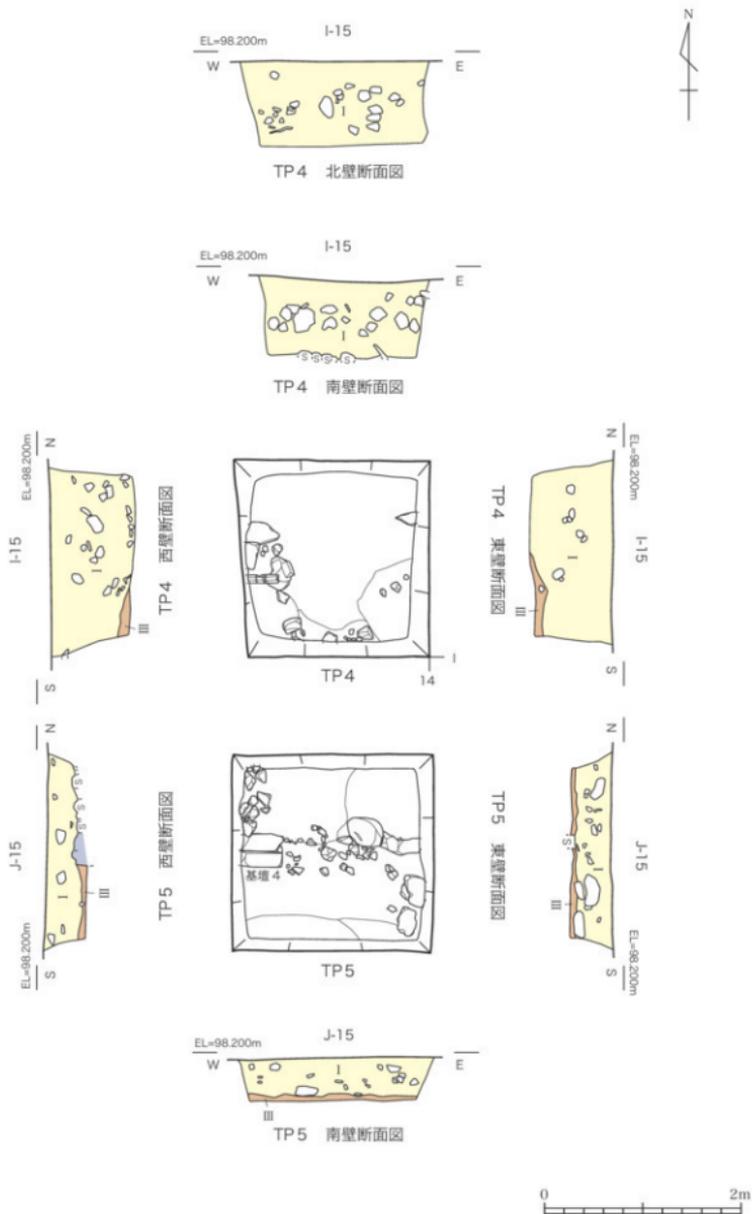
TP 3 西壁 (北側)



TP 3 東壁 (北側)



TP 3 北壁



第14图 I-15 TP4、J-15 TP5 基壇4



I-15 TP4、J-15 TP5 遺構検出状況（北から）



TP4 北壁



TP4 東壁



TP4 西壁



TP5 北壁



TP5 東壁

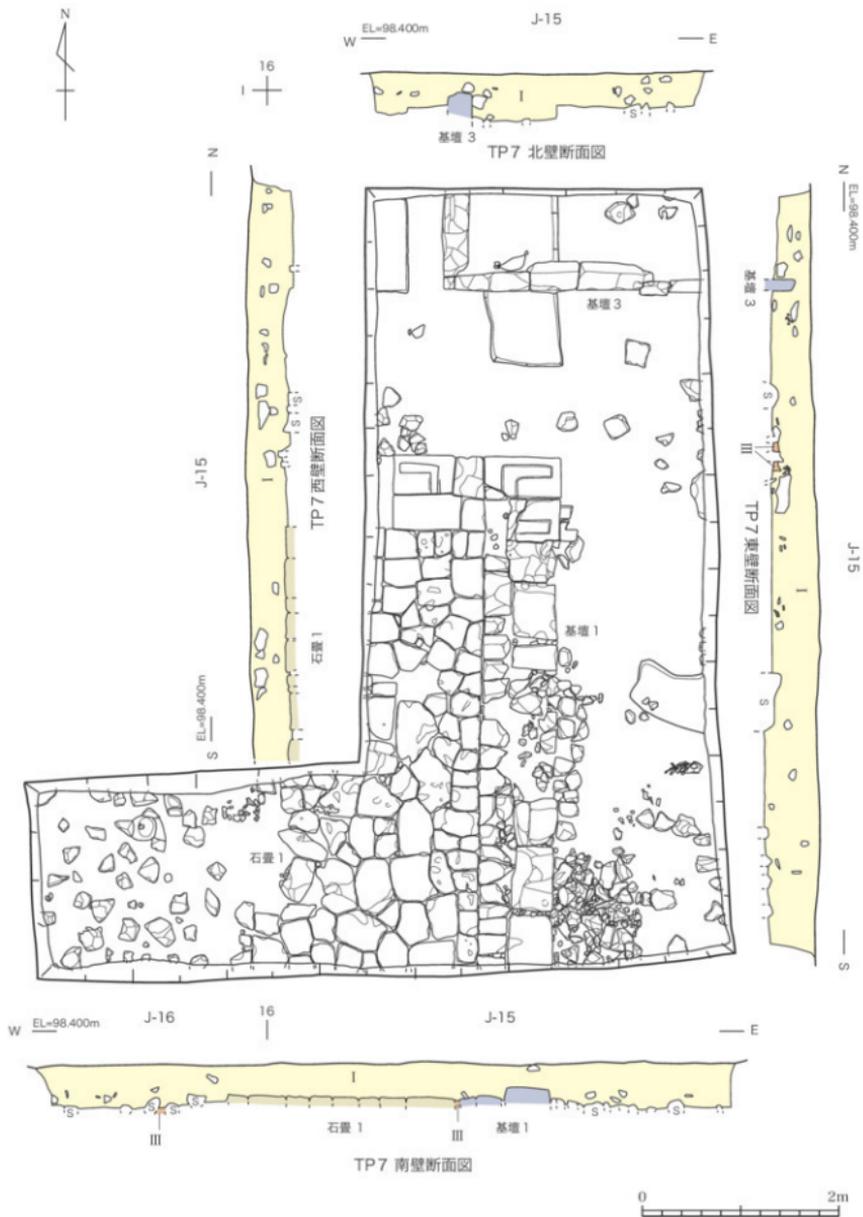


TP5 西壁



TP5 南壁

図版10 I-15 TP4、J-15 TP5



第15图 J-15·16 TP7 基壇1·3、石臺1



J-15・16 TP7 遺構検出状況（北から）



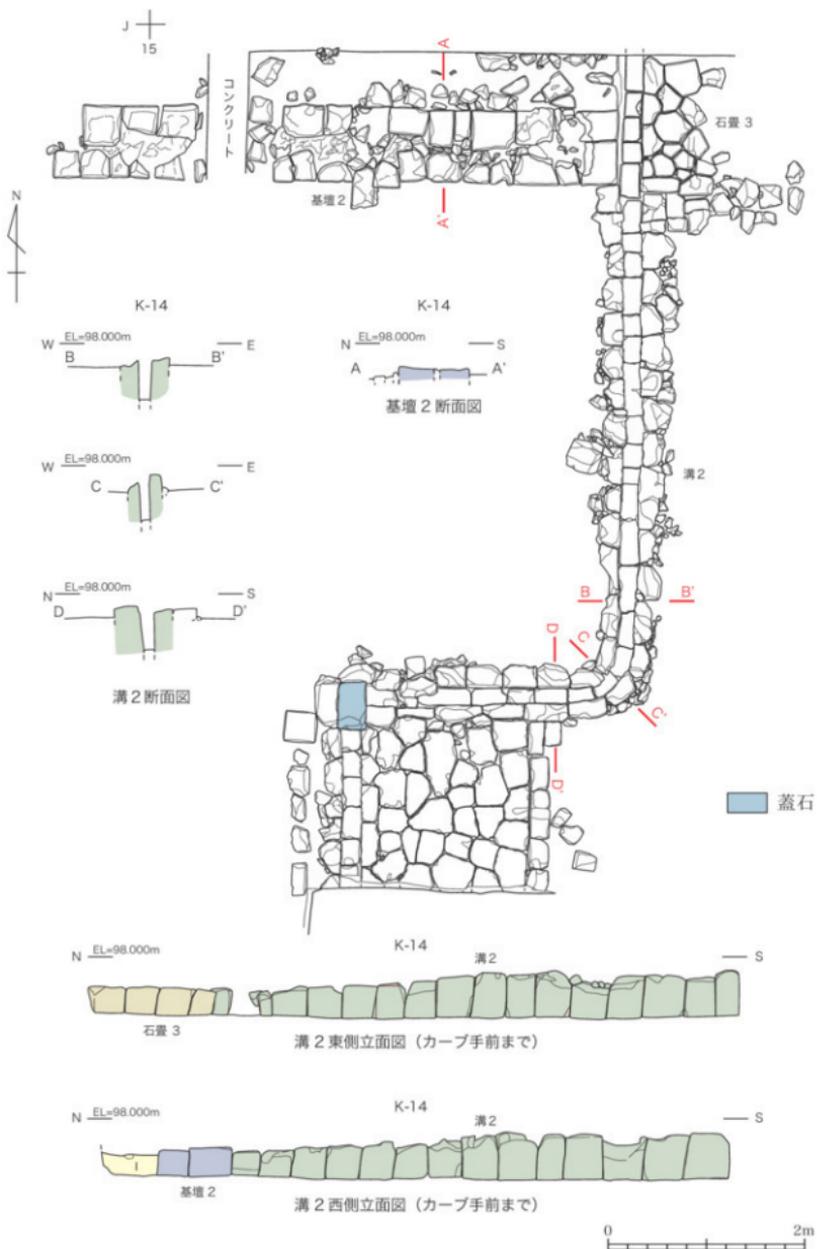
基壇1・3 石畳1（北から）



基壇1（東から）



基壇1直上 肥前産染付皿出土状況



第16図 K-14 溝2、石畳3、基礎2



K-14 遺構検出状況（北から）



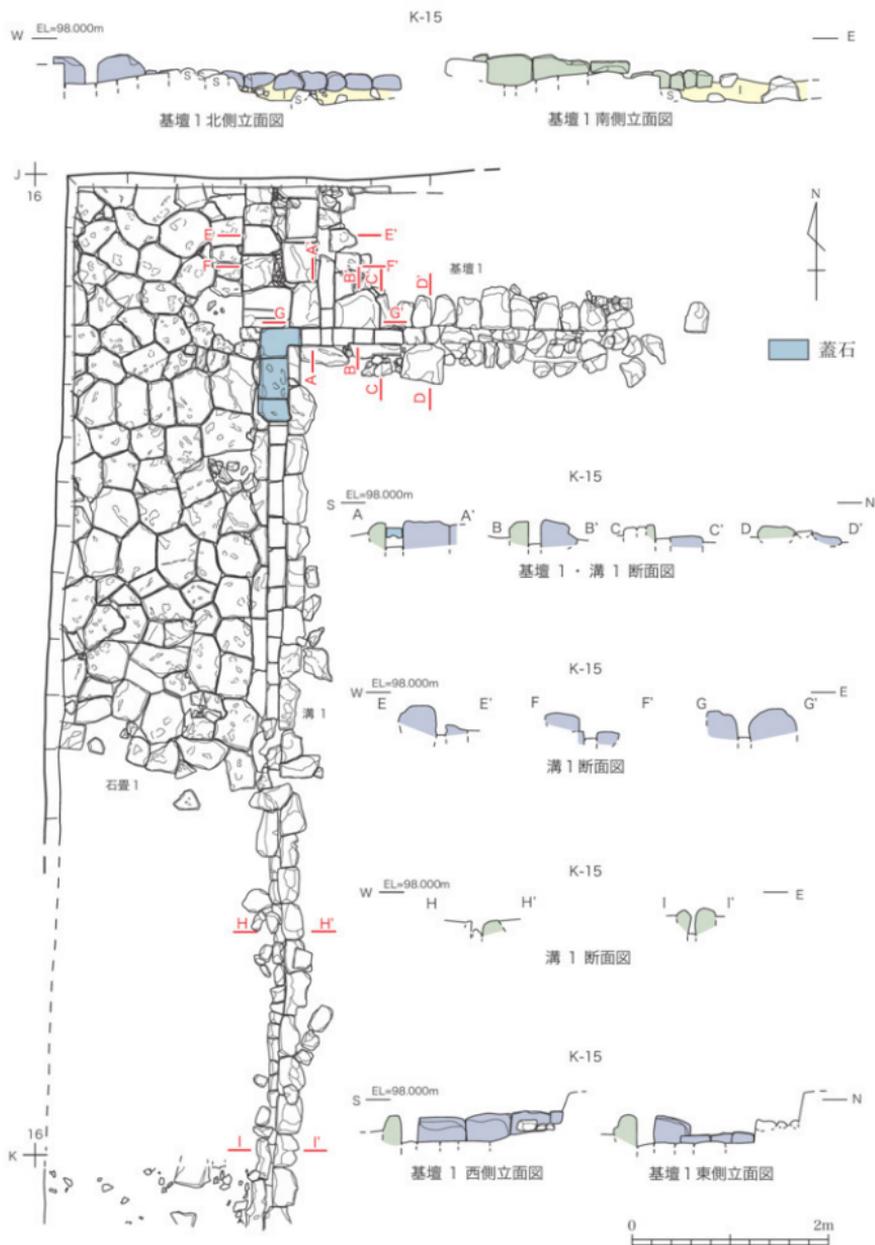
溝2・基壇2断面（南から）



溝2内 ガラス玉一括出土状況



溝2（北から）



第17図 K-15 溝1、基壇1、石疊1



K-15 遺構検出状況(北から)



K-15 東壁



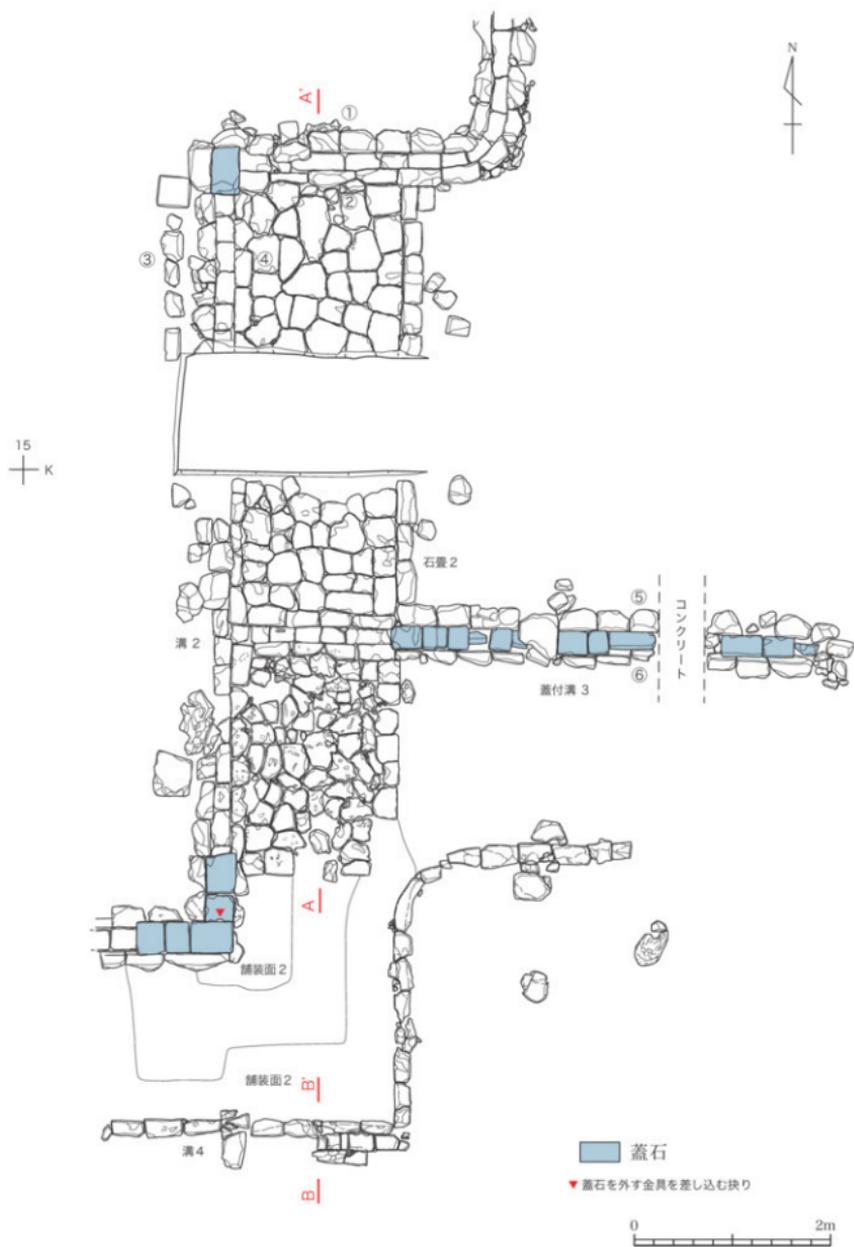
K-15 北壁断面(溝1部分)



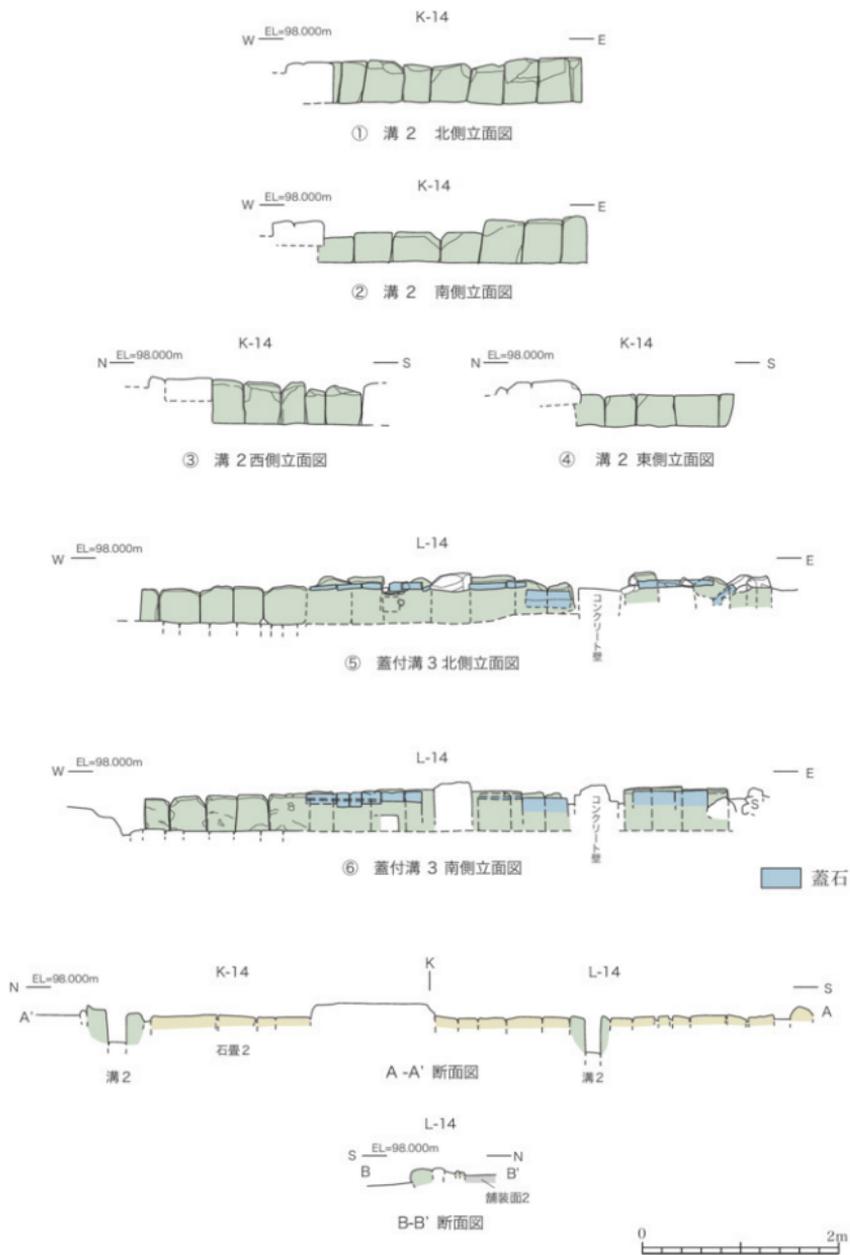
K-15 南壁



K-15 溝1 北壁断面部分



第18図 K・L-14 溝2・4、蓋付溝3、石置2、舗装面2



第19図 K・L-14 溝2・4、蓋付溝3、石畳2、舗装面2



L-14 遺構検出状況(北から)



L-14 北壁



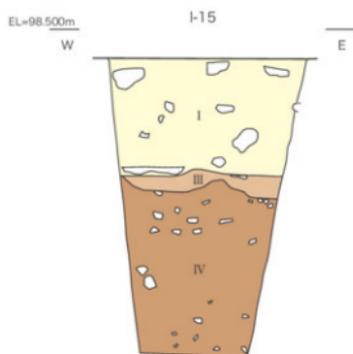
蓋付溝3 (北東から)



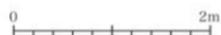
L-14 西壁



蓋付溝3 (西から)



TP6 南壁断面图



第20图 I-15 TP6



TP6 南壁

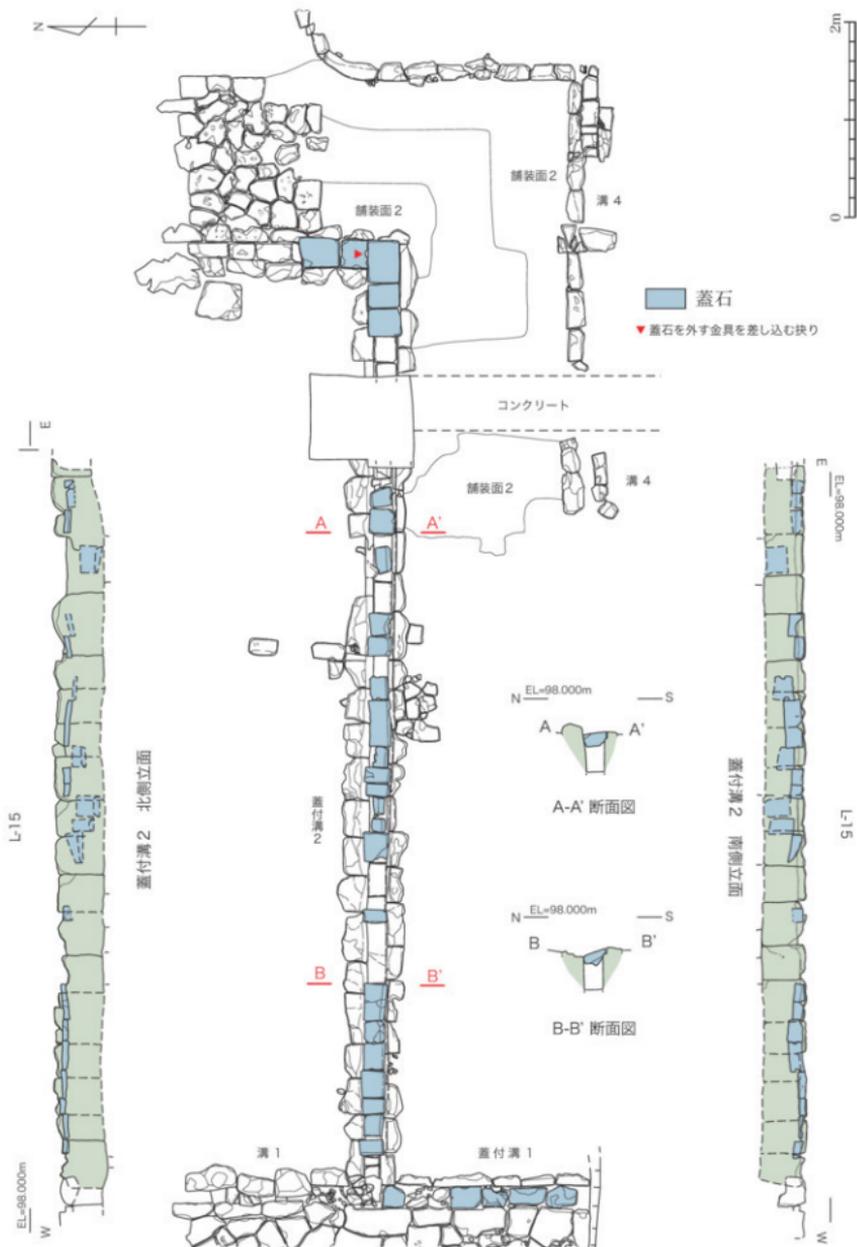


TP6 IV層 中国産褐釉陶器壺出土状況

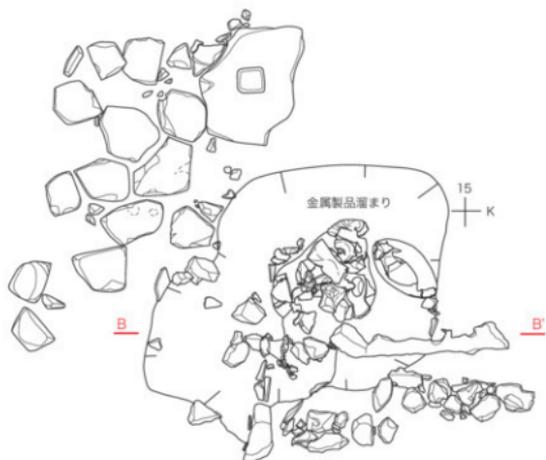
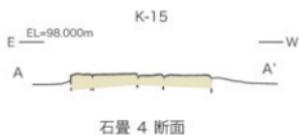


TP6 IV層 中国産褐釉陶器壺出土状況(遠景、東から)

図版15 I-15 TP6



第21図 L-15 溝1・4、蓋付溝1・2、舗装面2



第22図 K-15、L-14・15 石畳4、金属製品溜まり



L-15 遺構検出状況(北から)



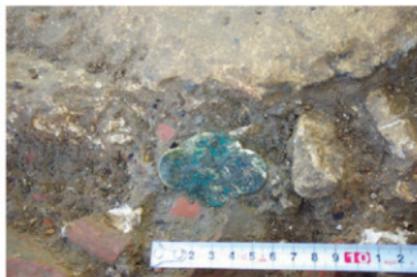
L-15 北壁



溝1 石畳1(北から)



L-15 東壁



石畳1 金属製品出土状況



L-15 蓋付き溝2 (東から)



蓋付溝2 断面① (東から)



金属製品溜まり 検出作業状況



金属製品溜まり検出状況

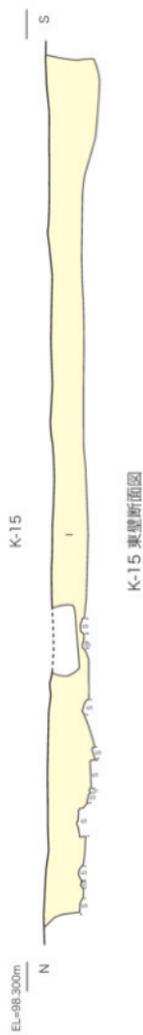
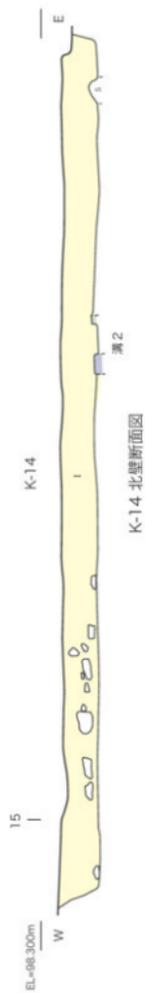


蓋付溝2 断面② (西から)

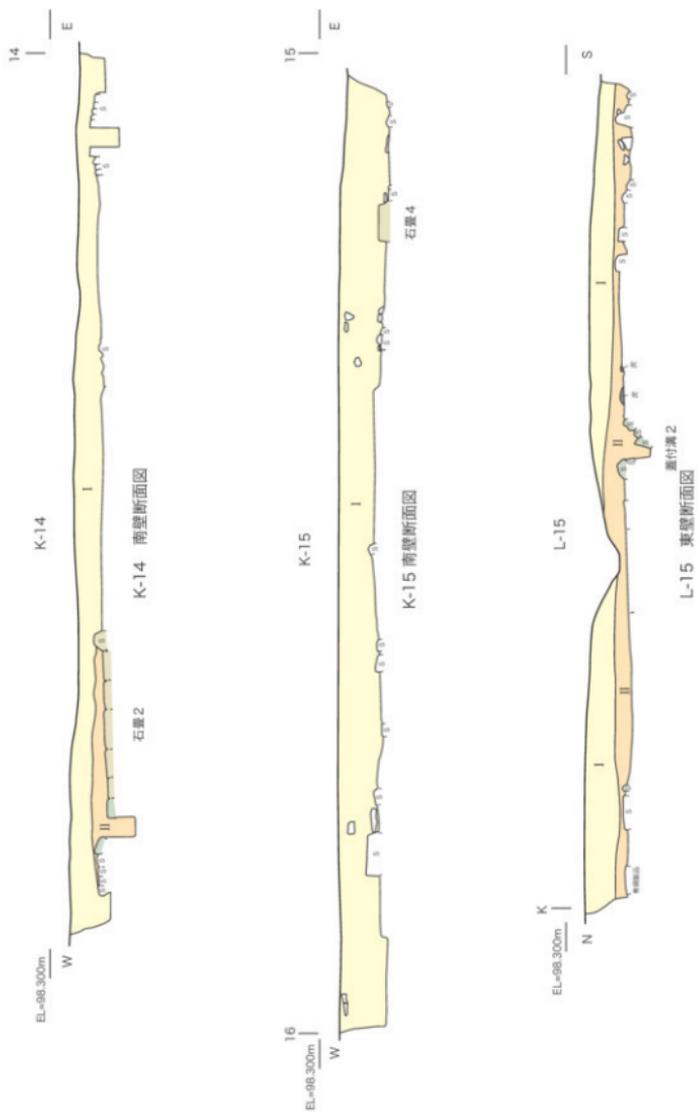


L-15 遺物出土状況

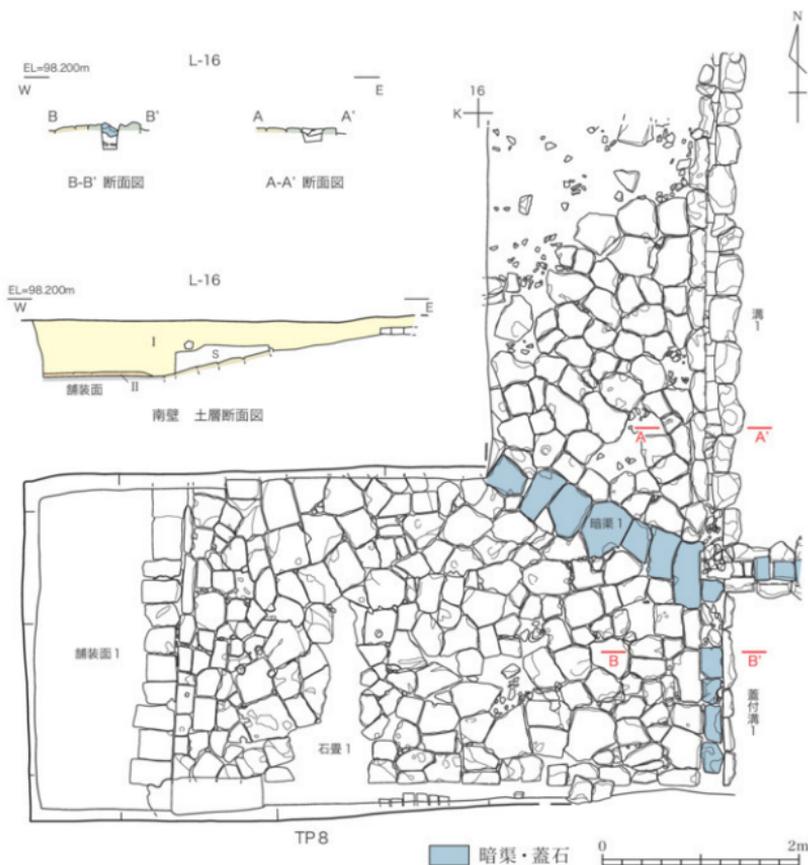
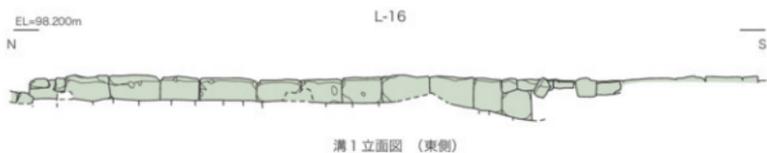
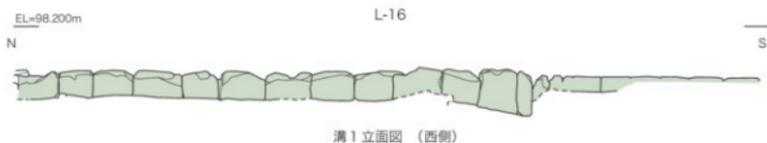
図版17 L-15 ②



第23図 K-14・15 北壁、K-15 東壁



第24図 K-14・15 南壁、L-15 東壁



第25図 L-16 TP8 石畳1、蓋付溝1、暗渠1



L-16 TP8 遺構検出状況(西から)



L-16 石畳1傾斜部・舗装面1検出状況(北から)



L-16 ベルト断面(西から)



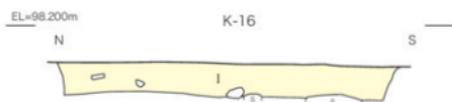
L-16 炭化物出土状況(東から)



L-16 暗渠1(東から)



TP9 北壁



TP9 西壁



第26図 K-16 TP9



TP9 遠景 (西から)



TP9 北壁

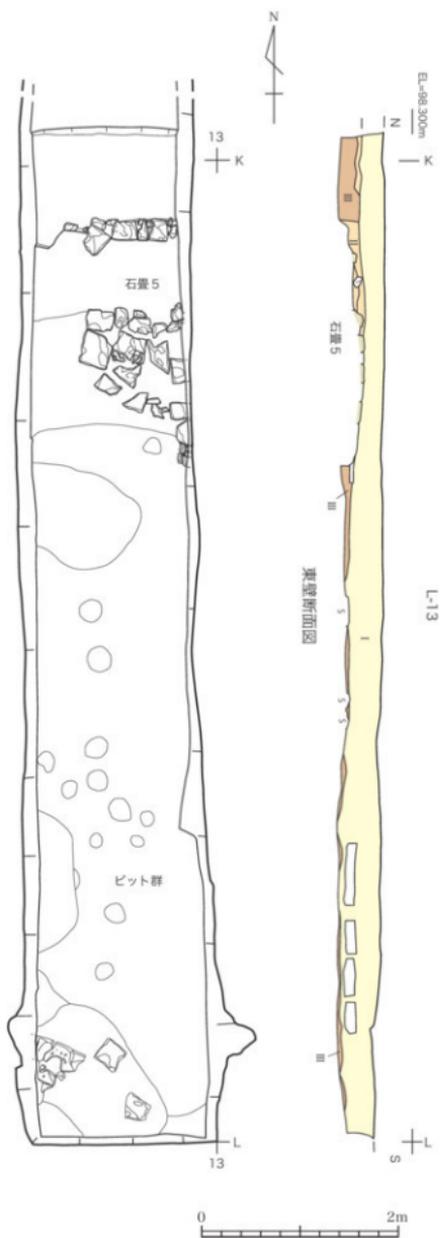


TP9 完掘状況 (南から)



TP9 西壁

図版19 K-16 TP9



第27図・図版20 L-13 石置5、ピット群 ①



L-13 ビット群南側



L-13 ビット群北側

図版21 L-13 石畳5、ビット群 ②



L-13 石壘5南側



L-13 石壘5北側

図版22 L-13 石壘5、ピット群 ③



第28図・図版23 I・J-13 暗渠2



J-13 サブトレ付近



J-13 サブトレ東壁



I-13 暗渠付近



I-13 暗渠付近(北側)

図版25 I・J-13 ②



第29図・図版26 H-I-13 石畳6



I-13 北側



H-13 石壘6

圖版27 H·I-13 ①

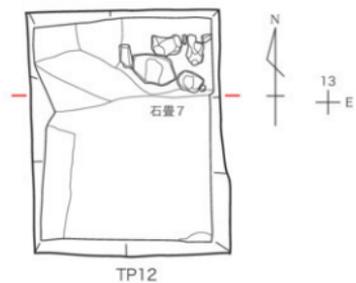


H-13 石畳(南側)

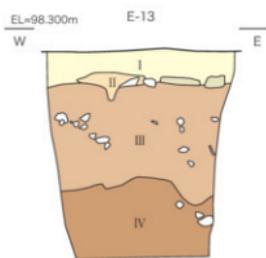


遺構検出作業風景

図版28 H・I-13 ②



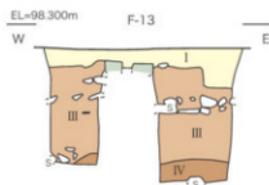
TP12



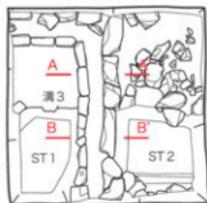
TP12 北壁断面図



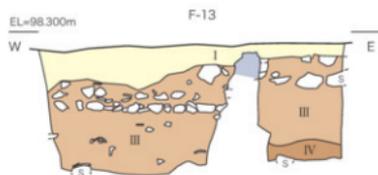
溝3断面



TP13 南壁断面図

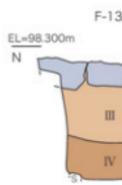


TP13

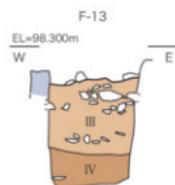


TP14 北壁断面図

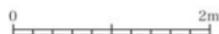
TP14



ST3 西壁断面図



ST3 南壁断面図



第30図 E・F-13 TP12、F-13 TP13、F・G-13 TP14 石壘7、溝3、基壇5



F・G-13 TP13・14 遺構検出状況(北から)



TP14 ST2 北壁



TP14 III層 簪(ジーファー)出土状況



TP14 ST2 II層 遺物出土状況



TP14 ST2 III層 遺物出土状況



TP14 IV層 瓦溜まり検出時(東から)



TP14 IV層 瓦溜まり完掘時(東から)

図版30 E-F-13 TP12・13・14 ②



TP14 サブトレ2 Ⅲ層 遺物出土状況



TP12 IV層 遺物出土状況 (北西から)

図版31 E・F-13 TP12・13・14 ③



TP12 北壁



TP12 東壁

圖版32 E-F-13 TP12·13·14 ④



TP13 溝4完掘状況(南から)

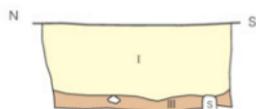


TP13 溝4断面

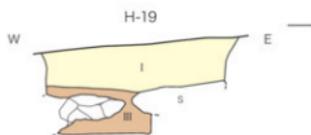
図版33 E・F-13 TP12・13・14 ⑤

EL=101.500m

G-19



TP15 東壁断面図



TP16 北壁断面図



第31図 G・H-19 TP15・16



TP15 遺物出土状況(東から)



TP15・16 遠景(北東から)



TP16 完堀状況(東から)

図版34 G・H-16 TP15・16

第5章 出土遺物

本報告の対象となった平成20(2008)年度及び、平成21(2009)年度に出土した人工・自然遺物は、19,789点、遺物収納コンテナで91箱におよぶ。その種別は瓦が最も多く、次いで陶磁器類、自然遺物などが多い遺物としてあげられる。この出土量は、今報告分の調査範囲が約650㎡とする面積及び、当地に中城御殿が存続した75年間という期間からすると少なくない。また、その種別や壮麗さに関しても、時期的に下るもの为首里城と双壁をなす状況が見て取れる。この状況は、中城御殿が首里城と密接な関係にあったことの証しであり、琉球王朝の中で特別な施設として位置づけられていたことに起因しているものと思われる。

出土傾向としては、目立つ遺物として陶磁器では肥前産の複数枚が組みになるとと思われる色絵磁器や、大型の青銅製製品がL-15グリッド第II層に集中している状況が見て取れる。そのほか、側溝2内からは多量のガラス玉が出土している。この地点には、かつて数棟の蔵が建てられていたとされることから、これらの施設と何らかの関わりがある可能性がある。

次に、遺物ごとの概要を記し、基本的に集計表、観察表、実測図、写真の順に報告を行うが、鉄製・青銅製などの金属製品に関しては、遺物収納コンテナ12箱という数量及び大型製品が多いことから、今後「金属製品編」としてまとめて報告する。また、人工遺物全体の集計表は、第9表に掲載し、遺構出土人工遺物の集計表は、その性格を把握する目的で、第4章の第1表～第8表(27～29頁)に示した。なお、遺物の写真は、その特性をより詳細に見せる目的から、実測図の傾きと異なる場合がある。また、その縮尺も基本的に50%としたが、大型・小型の遺物に関しては適宜縮小・拡大し、展開を追加した遺物もある。

第9表 人工遺物集計表 1

グリッド・層	遺物種別	中国産青磁	中国産白磁	中国産染付	中国産色絵	中国タイル・磁器	西洋陶器	その他の輸入陶磁器	本土産陶磁器	沖縄産陶磁器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	土器	瓦質土器	土製品	埴埴	漆製品	銭貨	煙管	遊戯用彫刻品類(おもちゃ)	ガラス玉	石製容器	石製遺物	瓦・埴	合計			
		E-F-13	I層 TP12	4	15	23	1	17	4	9	222	47	48	5	1					4	3	24	2	1		29	459	
	II層 TP12	1	2	1	1	4	1	1	11	3	1	2		1							1				5	35		
	I層 TP13	4	3	2		7	1	1	18	4	7	1								5	1				12	66		
	II層 TP13 (ST1)				1					3	1	3							1							3	11	
	III層 TP13 (ST1)		1	6	2	2		1	5	54	9	20	3			1										3	3	
	III層 TP13 (ST2)	1	5	15	1	10		2	6	71	8	15	1			1					3					34	173	
	IV層 TP13 (ST1)	1			4					1		1														2	9	
	I層 TP4	3	5	18	1	15		1	5	40	8	9	5	1					1	4	4	1				24	141	
	I層 TP4 (ST1)		8	1	1			1	1	17	3	4				1					1					11	49	
	I層 TP4 (ST2)	1	2		3			1	1	32	7	13		2												6	68	
	I層 TP4 (ST4)	1	2						2	26																1	31	
	II層 TP4	3	3	2	5	4	2	18	3	2	2	2								1						12	57	
	II層 TP4 (ST2)		1	4	1		2	2	12	4	3	1														5	33	
	II層 TP4 (ST4)	1	4	9	1	5	1	4	99	17	71	1							1	6						33	253	
	III層 TP4	1	1	6	4			1	16	3	4									1		2				16	55	
	III層 TP4 (ST1)								2	1	2															5	5	
	III層 TP4 (ST2)	3	1	12	1	5		1	9	86	13	22	2						2	2						35	194	
	III層 TP4 (ST3)																										1	3
	III層 TP4 (ST4)	2	3	10	1	9		2	1	80	20	32	6	2					1	8						42	219	
	IV層 TP4									2	5															2	7	
	IV層 TP4 (ST2)	7	8	42	6	24		8	30	310	36	91	7		1			2	17							122	711	
	IV層 TP4 (ST3)		1		3				2	1	1	2	2													18	30	
	IV層 瓦ダマリ		6					1	16	3	5									3						168	202	
	清掃 TP4									3	2	3	1													1	11	
	清掃 TP4 (ST2)	1	1	2						10	1															1	16	
	清掃 TP4 (ST3)									3	1															1	5	
	表積	2	2	7	2	8		1	4	38	3	13		1						7						3	91	
G-13	I層 LT	1	4	23	1	9		3	7	59	7	8							1	1	2					8	134	
	清掃 LT	1	1	5	1		1	1	12	2	2										1					6	33	
	I層 LT	3	4	8	1	4	1	4	7	2											2	1	2			21	53	
H-13	清掃 LT	2	2	5	7		1	1	13	2	2										2					8	45	
	I層 LT			4					1	1																3	9	
I-13	清掃 LT	4	4	20	2	9		8	36	6	3	1									1	2	1			19	116	
	I層 LT	1	5	3					4	14	1	5									3					7	43	
I-J-13	I層	5	2	2		1		1	5	8	2															3	29	

第9表 人工遺物集計表2

グリッド・層	遺物種類	中国産															海外産		合計											
		中国産青磁	中国産白磁	中国産染付	中国産色絵	中国産イミダシ陶器	西洋陶器	その他の輸入陶磁器	本土産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	土器	瓦質土器	土製品	埴埴	漆製品	銭貨		煙管	遊民製銅製品以外の他	ガラス玉	石製品・石造物	石製容器	瓦・磚					
J-13	I層	LT	4	4		2	1	1	2	11										2	1			1	29					
		LT(ST)	2	1	12	1	6	2		12	8	3								2	1			4	53					
K-13	I層	LT	6	1	1		6	2	2	1	1									1	1			1	11					
		LT					1	1		1															3					
		LT	1	1		2			1																10	15				
L-13	I層	LT																							1	1				
		清掃	LT								1															2	3			
G~L-13	I層	LT	9	3	8	2	9		7	49	9	2				2				2					35	137				
		清掃	LT									1														1	1			
I-14	I層	TP2北	3	2	14	2	5	1		9	5	4	1	1	1					1	1	1	1	2	32	84				
		TP2	5	4	7		5		1	5	10	1	1	1				1		1	1	1	1		22	66				
I-J-14	II層	清掃				1			2	2										1	2	2			4	16				
		溝2内				7	1	2		24																1	35			
J-14	I層	TP2	2			1				1	1	1	1					1							1	8				
		TP1	3	6	1	7		1	2	3	3							1	1	3	1	1	1		56	89				
		TP2南	4	1		7	1		3	2											2	1				13	34			
		TP3	6	2	44	20		2	36	49	15	4	1								4	2	3	1		48	237			
	II層	TP2南	3	1	5	1		2	6	2												2	1			2	2			
		溝2内				1		1																			2	2		
	III層	TP3	2	26				1		58	14	7	4								2					11	125			
		TP1	1	1	1	1				58	14	7	4														1	5		
	IV層	清掃	TP3				1			1																	1	2		
			TP1	1	1		2			1	1																5	10		
TP3			1	5	4				1	25	10	8	2														7	64		
K-14	I層	TP5	1	4					1	1	2										9					5	23			
		清掃	TP1	22	16	252	44	76	64	7	148	125	43	10	9					1	2	12	456	5	10	24	335			
		溝2内	6	2	42	6	9	2	1	10	27	8	2	1								4	422	1		6	549			
		清掃	溝2内	6	1	47	5	2	1	6	7	1											1016	1		10	102	1		
L-14	I層	清掃	溝2内				3	2	1																	1	18			
		表採				1	1																				3	3		
		清掃	溝2内	44	12	189	16	83	20	15	66	66	25	10	11					7	9	156	2	2	189	922	1			
		表採	溝2内	11	2	69	17	11	4	1	14	22	1	1	5	3							102	1	6	5	276	4	17	
K-14-15	I層	清掃				1																				1	4			
		I層	2	3	11	2	15	1		5	13	5	3								3	9				7	2			
L-14-15	I層	清掃				1																				3	5			
		I層	1	7	2	1	12		17	1	1															1	43			
I-15	I層	TP4	3	1	11	10			5	13	5	1									4	1				27	81			
		TP6	5	4	14				9	62	10	16	1								1	14					83	219		
		TP6	1							10	1	4										1						1	18	
	II層	TP6								3																		2	5	
		TP6	8	8		27			4	22	7	6	2	1							2	5						71	164	
		TP4			2	2				1												1	2					3	14	
		TP5	3	6	5	6			4	21	11											5	4					38	103	
J-15	I層	TP7	6	6	30	20		2	18	55	18	9	6	1							1	8	7	1			126	314		
		溝2内	1	1		2																					5	9		
		表採	溝2内	1	1					2	1																	12	16	
K-15	I層	TP5				1																					6	10		
		TP5	1	1		1																					3	3		
		清掃	溝2内	1	1				3	1	3	2																2	14	
		表採	溝2内	48	22	180	69	76	210	22	331	292	44	52	7	1					5	4	18	79	2	1	68	351		
K-15	II層	溝1内	2	4		2	2		6	4	1										2	1					1	25		
		清掃	溝1内				2	1		1																		6	9	
		表採	溝1内				2	1		1	3																		10	17
K-L-15	I層	表採				1			1	1																		4	4	
		清掃	溝1内	26	12	225	60	55	255	14	245	231	39	26	6	1					8	4	13	123	2	6	59	1410		
L-15	II層	溝1内				15																					1	2		
		溝2内				1				1	1	3																4	10	
J-15-16	I層	TP7	5	3	20	4	33	3	3	9	36	14	6	3							1	7	24	3			80	234		
		TP7	1	3	3				2	1												2						4	17	
		TP9	2	3	3			1	2	31	16	8	3	1								1	3					18	91	
K-16	I層	TP8	5	4	17	2	13	3	1	53	63	11	2	1	1						1	3	14	1			92	287		
		TP10	1						2	9	4																	3	21	
		TP11			6	1			7	8	3	1																13	39	
		TP8										1																	1	1
		TP11	1																										1	4
G-19	I層	TP15	5	3	6	1	10		3	1	18	1	1	14							5	2					4	74		
		TP15	2			2		2	1	1												16						2	22	
		表採	溝1内	1	2	1	4			1	17	5	6	1														4	43	
G-H-19	I層	TP16																										6	1	9
		表採	溝1内	1	3	1			1	1	5	1																	13	13
H-19	I層	TP16	1	29	6	2	2	2	4	3											2						2	2	63	
		表採	溝1内	18	4	30	11	25	52	2	25	54	12	4	2	1						2	1	4	11	1		73	322	
合計			328	191	1634	267	769	640	125	1289	279	576	597	125	16	2	7	1	69	25	234	547	44	29	2048	6783				

第1節 中国産青磁 (第10・11表、第32・33図、図版35・36)

中国産の青磁は、総計328点が出土している。器種は碗、皿、盤、瓶、香炉などが確認され、碗が主体である。古くは14世紀代後半に遡る製品もみられるが、線描蓮弁文碗など、15世紀後半～16世紀代と考えられる製品が多数を占める。以下に器種別に分類を提示する。個別の遺物についての詳細は、観察表に記載する。

1. 碗 (1～20)

口縁部形態より、I～IV類に大別し、さらに文様により細分を行った。

I類：外反碗 (1・2)

II類：玉縁口縁碗 (3)

III類：直口碗 1. 蓮弁文 (4)

2. 雷文 (5)

3. 線描蓮弁文 (6～11)

4. 線描蓮弁文の崩れが大きいもの (12・13)

5. 外面口縁部下に圈線が廻るもの (14～16)

IV類：口唇部内部に稜を持つもの (17～20)

2. 碗底部 (4・11・20)

口縁部は欠損しているが、底部形態や文様などより、III-1類 (4)・III-3類 (11)・IV類 (20) と考えられる。

3. 皿 (21～26)

口縁部形態より、I・II類に大別した。

I類：口折皿 (21～23)

II類：稜花皿 (24)

4. 皿底部 (25・26)

2点について図化した。小破片のため、詳細については不明だが、25は内底を軸剥ぎする。26は内底に双魚文がみられる。

5. 瓶 (27・28)

2点について図化した。小破片のため、詳細については不明だが、27は胴部外面に2本の圈線と蓮弁文を描く。28は高台脇から豊付にかけて露胎である。

第10表 中国産青磁観察一覧1

挿図番号 図版番号	番号	器種	器形	部位	単位:cm			文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見	グリッド層
					口径	器高	底径					
第32図 図版35	1	碗	I	口縁部	-	-	-	無文	灰オリブ色を呈する。細かい気泡を含む。	灰色でやや粗い。黒色粒を含む。	龍泉窯。	L-14 1層
	2	碗	I	口縁部	-	-	-	無文	淡オリブ色を呈し、透明感がある。細かい気泡を含む。光沢が有る。	灰色で細かい。白色粒、黒色粒を含む。	龍泉窯。	L-14 1層
	3	碗	II	口縁部	-	-	-	無文	灰オリブ色を呈する。光沢が有る。	灰白色でやや細かい。微細な茶色粒を含む。	龍泉窯。	F-G-13 TP14 II層
	4	碗	III-1	底部	-	-	-	外面に片切彫りによる蓮弁文	明青緑色を呈する。	灰白色で細かい。黒色粒、白色粒を併りに含む。	龍泉窯。	L-15 1層
	5	碗	III-2	口縁部	13.0	-	-	外面口縁部にへう形による雷文、胴部に十字式蓮弁文?	明灰黄緑色を呈する。細かい気泡を含む。内外面ともに貫入がみられる。	灰白色でやや粗い。黒色粒を含む。	龍泉窯。	L-14 1層

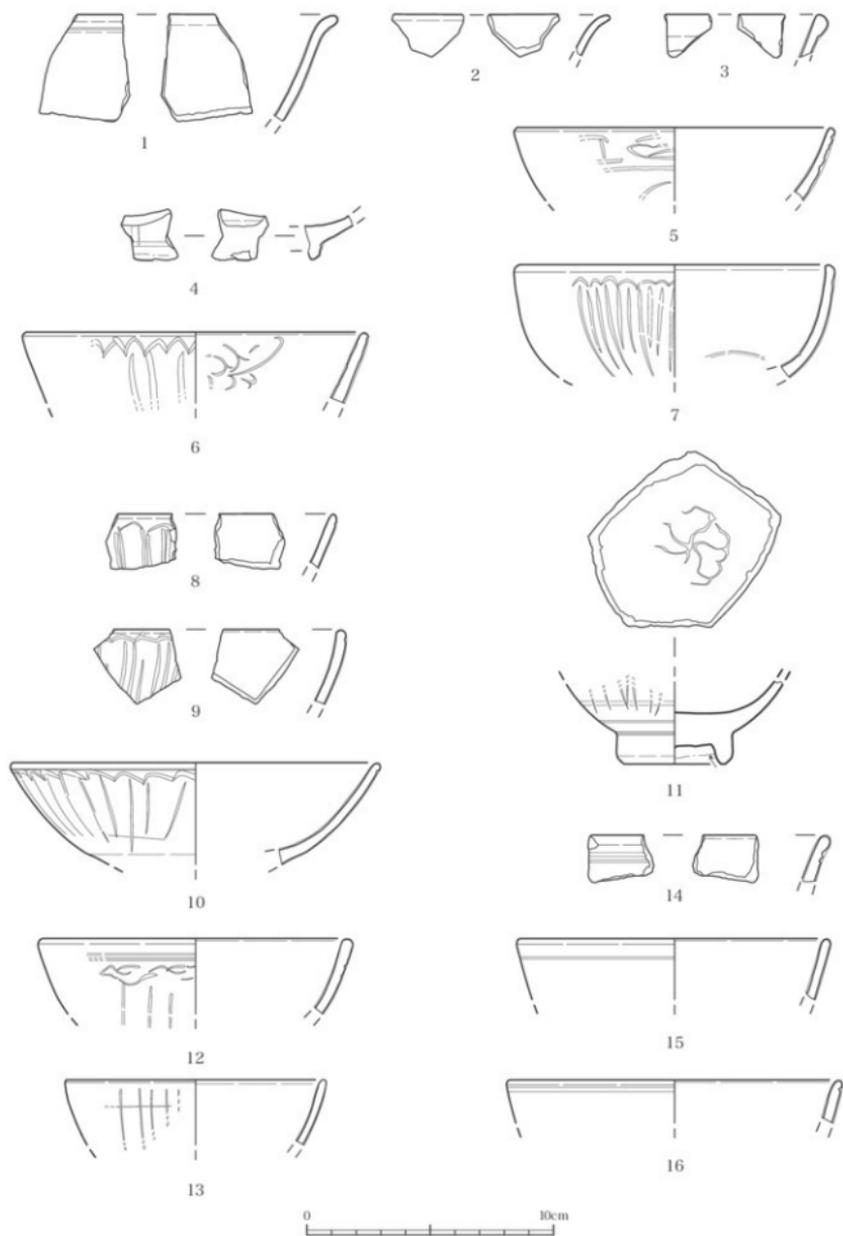
第10表 中国産青磁観察一覽2

押図番号 図版番号	番号	器形	部位	単位:cm			文様構成	軸 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見	グリッド層	
				口径	器高	底径						
第32図 図版35	6	碗	III-3 口縁部	14.0	-	-	外面へうねりによる縦連弁文、内面に唐草文	灰オリーブ色を呈する。細かい気泡を多く含む。	灰白色で緻密。	龍泉窯。	L-15 1層	
	7	碗	III-3 口縁部	13.0	-	-	外面へうねりによる縦連弁文、内面に唐草文	暗オリーブ色を呈する。細かい気泡を含む。内外面ともに細かい貫入がみられる。	灰白色で緻密。黒色粒、茶色粒を含む。	龍泉窯。	H-13 LT清緑	
	8	碗	III-3 口縁部	-	-	-	外面に線彫りによる縦連弁文	暗オリーブ色を呈する。内外面ともに細かい貫入がみられる。	灰白色でやや細かい。黒色粒を含む。	龍泉窯。	K-15 ベルト1層	
	9	碗	III-3 口縁部	-	-	-	外面に線彫りによる縦連弁文	明灰黄緑色を呈する。細かい気泡を含む。	灰白色で緻密。茶色粒を含む。	龍泉窯。	K-16 TP9 1層	
	10	碗	III-3 口縁部	15.0	-	-	外面に線彫りによる縦連弁文	明緑灰色を呈する。細かい気泡を含む。内外面に細かい貫入がみられる。	灰白色でやや細かい。黒色粒を多く含む。	龍泉窯。	L-14 2層	
	11	碗	III-3 底部	-	-	4.0	外面に線彫りによる縦連弁文、内底に印花文	暗灰黄緑色を呈し、高台内途中まで施釉。内外面に細かい貫入がみられる。	灰白色でやや細かい。黒色粒、白色粒を多く含む。	龍泉窯。	J-14 TP29 1層	
	12	碗	III-4 口縁部	12.8	-	-	外面に口縁部に2本の線彫、その下に附けた雷文と縦連弁文	暗灰黄緑色を呈する。細かい気泡を含む。内外面ともに細かい貫入がみられる。	灰白色でやや細かい。黒色粒を多く含む。	龍泉窯。	I-J-13 1層	
	13	碗	III-4 口縁部	10.6	-	-	外面に線彫りによる縦連弁文	明灰黄緑色を呈する。細かい気泡を多く含む。内外面ともに細かい貫入がみられる。	灰白色で緻密。黒色粒を多く含む。	口唇部は舌状に突る。龍泉窯。	L-14 2層	
	14	碗	III-5 口縁部	-	-	-	外面に口縁部下に2本の線彫	灰黄緑色を呈する。細かい気泡を多く含む。	灰白色で緻密。光沢がある。	全体部に施釉を受けていると考えられる。龍泉窯。	表採	
	15	碗	III-5 口縁部	12.8	-	-	外面に口縁部下に1本の線彫	明灰黄緑色を呈する。細かい気泡を多く含む。	灰白色でやや細かい。黒色粒を含む。	龍泉窯。	K-15 1層	
	16	碗	III-5 口縁部	13.6	-	-	外面に口縁部下に1本の線彫	明黄緑色を呈する。細かい気泡を含む。	灰白色で緻密。黒色粒を含む。	龍泉窯。	E-F-13 TP12 1層	
	第33図 図版36	17	碗	IV 口縁部	15.6	-	-	無文	明緑灰色を呈する。	灰白色でやや細かい。黒色粒を含む。	轆轤痕が明瞭。福建・広東系。	L-15 1層
		18	碗	IV 口縁部	18.0	-	-	無文	明灰青緑色を呈する。細かい気泡を含む。内外面ともに貫入がみられる。	灰白色でやや細かい。黒色粒を多く含む。	轆轤痕が明瞭。福建・広東系。	F-G-13 TP14 ST4 3層
		19	碗	IV 口縁部	-	-	-	無文	明灰青緑色を呈する。内外面ともに貫入がみられる。	灰白色でやや細かい。黒色粒を多く含む。	福建・広東系。	K-15 1層
		20	碗	IV 底部	-	-	6.4	無文	明緑灰色を呈する。外面は高台幅まで施釉し、内底は蛇ノ目状に釉剥ぎする。	灰白色で粗い。黒色粒を含む。	高台の削りは粗い。福建・広東系。	F-G-13 TP14 ST2 IV層
		21	皿	I 口縁部	13.4	-	-	外面に蓮弁文	灰黄緑色を呈する。細かい気泡を多く含む。	灰白色で緻密。黒色粒、白色粒を含む。	龍泉窯。	K-14 1層
22		皿	I 口縁部	-	-	-	無文	暗灰緑色を呈する。細かい気泡を多く含む。	灰白色でやや緻密。	23と同一個体と考えられる。龍泉窯。	L-14 1層	
23		皿	I 割部	-	-	-	無文	暗灰緑色を呈する。細かい気泡を多く含む。	灰白色でやや緻密。黒色粒を多く含む。	22と同一個体と考えられる。龍泉窯。	K-15 1層	
24		皿	II 口縁部	11.2	-	-	内面に口縁部に蓮弁文か	暗緑灰色を呈する。内外面ともに細かい貫入がみられる。	暗灰色で粗い。白色粒、黄色粒、黒色粒を含む。	龍泉窯。	I-J-14 TP2 清緑	
25		皿	- 底部	-	-	5.2	-	暗オリーブ色を呈する。外面は畳付まで施釉し、内底は円状に釉剥ぎする。	暗灰色で粗い。白色粒、黒色粒を含む。	龍泉窯。	K-15 ベルト1層	
26		皿	- 底部	-	-	6.5	内底に双魚文	明黄緑色を呈する。高台内まで施釉。細かい気泡を多く含む。内外面ともに貫入がみられる。	灰白色でやや細かい。黒色粒を多く含む。	龍泉窯。	L-16 TP10 1層	
27		瓶	- 割部	-	-	-	外面に2本の線彫と蓮弁文	暗灰黄緑色を呈する。内面は割部途中まで施釉。細かい気泡を多く含む。内外面ともに貫入がみられる。	灰白色でやや細かい。黒色粒を含む。	内面は轆轤痕が明瞭。龍泉窯。	H-13 LT 1層	
28		瓶	- 底部	-	-	6.3	-	暗灰黄緑色を呈する。高台幅から畳付にかけては露胎。内面に僅かに貫入がみられる。	灰白色でやや緻密。黒色粒を含む。	内面は轆轤痕が明瞭。龍泉窯。	F-G-13 TP14 ST4 1層	

第11表 中国産青磁集計表

品名	P-F13				P-G13				G13				P13				K13				L13				計
	TP12	TP13	TP14	TP15	TP12	TP13	TP14	TP15	LT	LT	LT	LT	LT	LT	LT	LT	LT	LT	LT	LT	LT	LT	TP1	TP2	
銅																									
銀																									
小豆																									
銅																									
銀																									
銅																									
銀																									
銅																									
銀																									
銅																									
銀																									
計	3	1	4	1	1	1	1	1	1	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	2	2	1	4	5	1
計	4	1	4	1	1	3	1	1	3	2	7	1	2	1	2	1	3	2	4	1	5	4	2	6	1

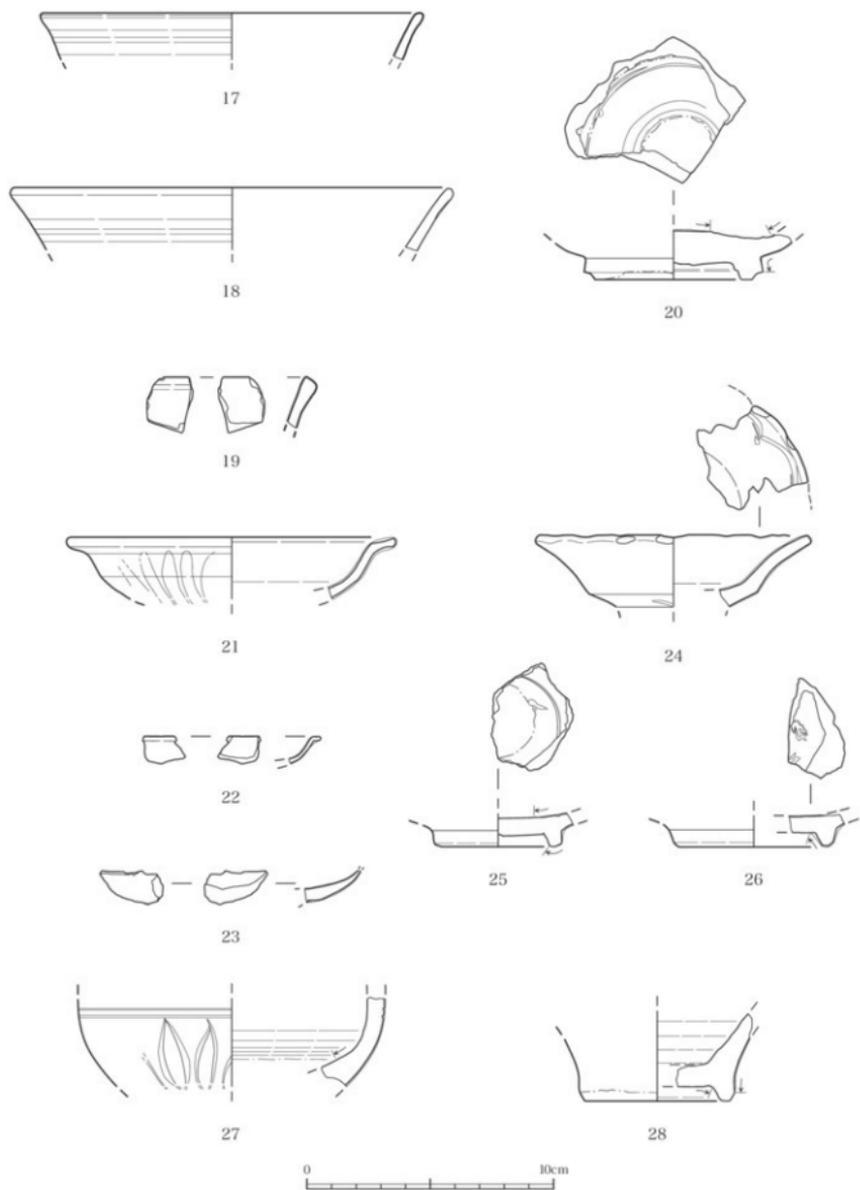
品名	P-F15				P-G15				G15				P15				K15				L15				計
	TP1	TP2	TP3	TP4	TP1	TP2	TP3	TP4	LT	LT	LT	LT	LT	LT	LT	LT	LT	LT	LT	LT	LT	TP15	TP16	TP17	
銅																									
銀																									
小豆																									
銅																									
銀																									
銅																									
銀																									
銅																									
銀																									
銅																									
銀																									
計	14	2	21	8	1	2	4	1	2	4	5	2	5	1	2	4	2	16	4	1	5	2	1	10	18
計	22	0	44	11	2	3	5	6	3	6	8	3	6	1	48	2	26	5	2	1	5	5	3	5	3



第32图 中国産青磁 1



图版35 中国産青磁 1



第33图 中国産青磁2



图版36 中国産青磁2

第2節 中国産白磁 (第12・13表、第34図、図版37)

中国産の白磁は、総計191点が出土している。器種は碗、小碗、皿、小皿、壺、瓶が確認され、碗や皿が多い。年代的には15世紀～19世紀代までの資料がみられる。最も多いのは徳化窯製品で、その他に景徳鎮窯系の製品がみられる。個別の遺物についての詳細は、観察表に記載する。

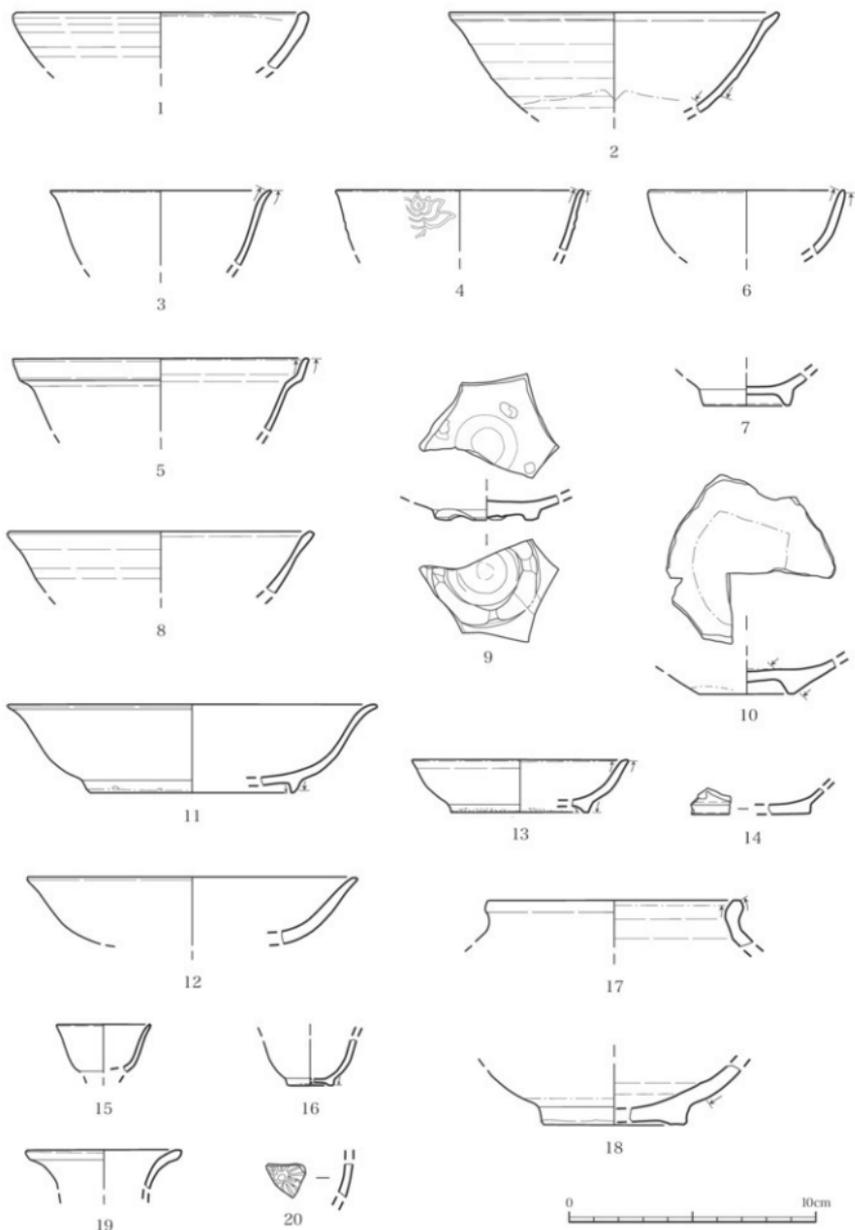
第12表 中国産白磁観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	器種	器形	部位	単位: cm			文様構成	軸 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・面材)	所見	グリッド層
					口径	器高	底径					
第34図 図版37	1	碗	内湾	口縁部	12.0	-	-	無文	灰色を帯びた淡い黄色の軸を施軸。内面口唇部で軸だまりしている。内面に細かい貫入がみられる。	やや赤みを帯びた黄色で粗い。黒色粒を含む。	轆轤痕が明瞭。福建産。	K-14 I層
	2	碗	外反	口縁部	13.4	-	-	無文	淡い赤みを帯びた黄白色の軸を施軸。内面胴部途中から外面腰部まで施軸。	淡黄白色でやや細かい。黒色粒を含む。	轆轤痕が明瞭。福建産。	I-J-14 TP2 I層
	3	小碗	外反	口縁部	9.0	-	-	無文	透明軸を施軸。口唇部を軸剥ぎする。	白色で緻密。	型成形。徳化窯。	F-13 TP13 ST2 III層
	4	小碗	外反	口縁部	10.1	-	-	外面に型押?による花文	白色の軸を施軸。口唇部を軸剥ぎする。	白色で緻密。	型成形。徳化窯。	K-15 I層
	5	碗	蓋受け付	口縁部	12.0	-	-	無文	灰白色の軸を施軸。口唇部を軸剥ぎする。	白色で緻密。	型成形。徳化窯。	L-15 II層 蓋剥2内
	6	小碗	直口	口縁部	8.0	-	-	無文	透明軸を施軸。口唇部を軸剥ぎする。	白色で緻密。	型成形。徳化窯。	L-14 I層
	7	小碗	-	底部	-	-	3.5	無文	透明軸を施軸。	白色で緻密。	型成形。徳化窯。	F-G-13 TP14 ST2 III層
	8	皿	外反	口縁部	12.4	-	-	無文	透明軸を施軸。	灰白色で緻密。黒色粒を含む。	福建産。	J-15 TP5 I層
	9	皿	-	底部	-	-	4.2	無文	淡い黄白色の軸を高台胎まで施軸。	黄白色で粗い。	挟り入り高台。内底に目跡あり。	L-14 I層
	10	皿	-	底部	-	-	3.9	無文	灰色を帯びた白色の軸を外面胴部途中まで施軸。内底は露胎。内外面ともに細かい貫入が見られる。	灰白色で緻密。黒色粒を含む。	碁笥底。福建産。	L-14 I層
	11	皿	外反	口~底部	15.0	3.6	8.3	無文	淡い黄白色の軸を全面に施軸。畳付のみ軸剥ぎ。	灰白色で緻密。黒色粒を含む。	景徳鎮。明初。	K-15 I層
	12	皿	外反	口縁部	13.4	-	-	無文	灰色を帯びた白色の軸を施軸。	白色で緻密。	清朝?	I-14 TP2北 I層
	13	小皿	外反	口~底部	8.8	2.15	5.6	無文	透明軸を施軸。口唇部と畳付を軸剥ぎする。畳付に初殻?が付着する。	白色で緻密。	型成形。徳化窯。	K-14 I層
	14	小杯?	-	底部	-	-	-	無文	淡い黄白色の軸を施軸。内面に細かい貫入がみられる。	白色で緻密。	型成形。徳化窯。	K-14 I層
	15	小杯	外反	口縁部	3.8	-	-	無文	透明軸を施軸。	白色で緻密。	型成形。徳化窯。	K-15 I層
	16	小杯	-	底部	-	-	1.9	無文	透明軸を施軸。畳付は露胎で、初殻が付着する。	白色で緻密。	型成形。徳化窯。	K-15 I層
	17	壺	-	口縁部	10.3	-	-	無文	灰色がかかった白色軸を施軸。口唇部は露胎。内外面ともに細かい貫入がみられる。	灰白色でやや緻密。黒色粒を含む。	轆轤痕が明瞭。	L-15 I層
	18	壺	-	底部	-	-	5.9	無文	透明軸を胴部途中まで施軸。	白色で緻密。	内面は轆轤痕が明瞭。	L-14 I層
	19	瓶	-	口縁部	6.4	-	-	無文	やや灰色を帯びた白色の軸を施軸。	白色でやや緻密。	景徳鎮。明代。	F-G-13 TP14 I層
	20	瓶	-	胴部	-	-	-	外面に型押?による花文	やや灰色を帯びた白色の軸を施軸。	白色でやや緻密。	徳化窯。	J-15 TP5 I層

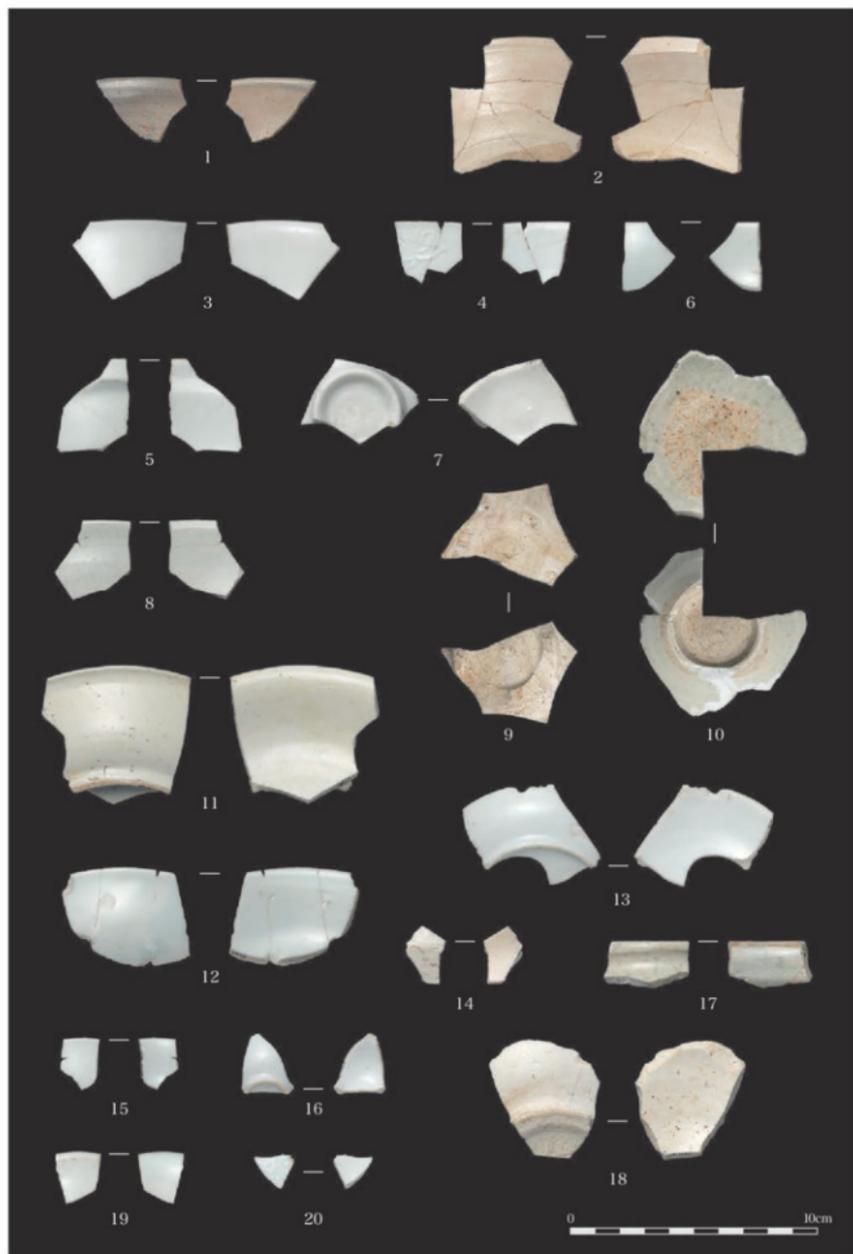
第13表 中国産白磁集計表

タワット・層 器種・部位	E・F-13		F-13		F・G-13						G-13		H-13	I-13	J-13	K-13	G-L-EI	I-14							
	1層	皿層	1層	皿層	1層	TP14 (ST1)	TP14 (ST2)	TP14 (ST1)	TP14 (ST2)	TP14 (ST1)	TP14 (ST2)	TP14 (ST1)	TP14 (ST2)	1層	1層	1層	1層	1層	1層						
碗	3	1	1	3	2	1	2	1	1	5	1	2	1	1	2	1	1	1	2	1					
口		1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2			1					
皿																									
口~底																									
皿																									
口~底																									
小皿																									
口																									
小杯																									
口																									
壺																									
口																									
瓶																									
口																									
胴部分																									
胴部分	10	2	1	1	2	1	2	3	1	2	1	2	1	2	1	2				2	1				
総計	15	2	3	1	5	3	4	1	1	3	1	8	1	2	4	1	1	2	1	1	3	2	4	1	2

タワット・層 器種・部位	J-14		K-14		L-14		K-15		L-15	J-15-16	L-16	G-19	H-19	合計		
	1層	皿層	1層	皿層	1層	皿層	1層	皿層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	不明	
碗	1	1	1	4	2	3	2	2	4	4	1	1	2	1	1	59
口																2
皿																24
口~底																20
皿																2
口~底																2
小皿																15
口																2
小杯																2
口																3
壺																1
口																1
瓶																1
口																1
胴部分																58
胴部分	1	2	1	16	2	1	12	2	3	1	6	6	22	1	4	101
総計	2	2	1	1	16	2	1	12	2	3	1	6	22	1	4	191



第34图 中国産白磁



图版37 中国産白磁

第3節 中国産染付 (第14・15表、第35～38図、図版38～41)

中国産の染付は総数1,634点出土している。時期的には明代と清代に大別できるが後者が圧倒的に多い。器種は碗・小碗・小杯・皿・盤・瓶・鉢・合子・水注・散蓮華が確認されているが、特に19世紀代の製品(碗D-2及びE類、小碗D類、皿C類)が多く、しかもこれらには被熱資料が集中し、かつ細片化が進んでいるという共通の特徴がみられる。以下に器種別の分類概念を記し、個々の詳細は観察表に提示する。

1. 碗 (1～16)

- A類：明代の景德鎮窯産を一括した。器形は端反口縁、直口口縁などがある(1～5)。
- B類：粗製で直口口縁を呈するもの。明末清初期で漳州窯系と考えられる(6～8)。
- C類：器形はB類に似るが腰部の張りが弱い粗製のもの。清代で福建・広東系(9・10)。
- D類：清代の徳化窯産と考えられるもの。器形の差異などから2種に細分される。
 - 1) 器壁が厚く、口縁形態が端反と直口がある(11～13)。
 - 2) 1に比して器肉が薄い。器形は端反口縁となる(14)。
- E類：外反口縁を呈するもの。清代の景德鎮窯産と考えられる(15・16)。

2. 小碗 (17～24)

- A類：明代で景德鎮窯産のもの。器形は端反口縁を呈する(17)。
- B類：清代で徳化窯産のもの。成形方法の差異から2種に細分される。
 - 1) 轆轤成形で端反口縁のもの。碗C-1類に対応する(18)。
 - 2) 型成形で端反または直口口縁となるもの(19・20)。
- C類：直口口縁を呈するもので、清代の景德鎮窯産と考えられる(21～23)。
- D類：清代の景德鎮窯産と考えられる外反口縁のもの。碗E類に対応する(24)。

3. 小杯 (25～28)

- A類：明末清初期で景德鎮窯産。器形は端反口縁を呈すると考えられる(25)。
- B類：清代の徳化窯産。型成形の端反口縁。小碗B-2類に対応する(26～28)。

4. 皿 (29～35・38～40)

- A類：明代の景德鎮窯産を一括した。器形は端反口縁、萼筒底の直口口縁皿、高台付の直口口縁皿などがある(29～32)。
- B類：清代で徳化窯産のもの。器形及び成形方法の差異から2種に細分される。
 - 1) 轆轤成形で端反口縁または直口口縁を呈するもの(33・34)。
 - 2) 型成形で端反口縁となる小型のもの。小碗B-2類や小杯B類に対応する(35)。
- C類：清代の景德鎮窯産と考えられる端反口縁のもの。碗E類や小碗D類に対応する(38～40)。

5. 盤 (36)

清代の景德鎮窯産と考えられるもので、器形は皿C類に類似する。碗E類・小碗D類・皿C類に対応する。

6. 瓶 (37)

いわゆる玉壺春瓶の底部である。明代の景德鎮窯産。

7. 鉢 (41)

器形は端反口縁を呈する。清代の福建・広東系で、碗C類に対応すると思われる。

8. 合子 (42)

平面観が八角形に成形された合子の蓋である。明代の景德鎮窯産と考えられる。

9. 水注 (43)

いわゆる仙蓋瓶形の水柱に対応する注口部分である。明代の景德鎮窯産。

10. 散蓮華 (44・45)

皿部と柄部を図化した。清代の徳化窯産。

第14表 中国産染付観察一覧1

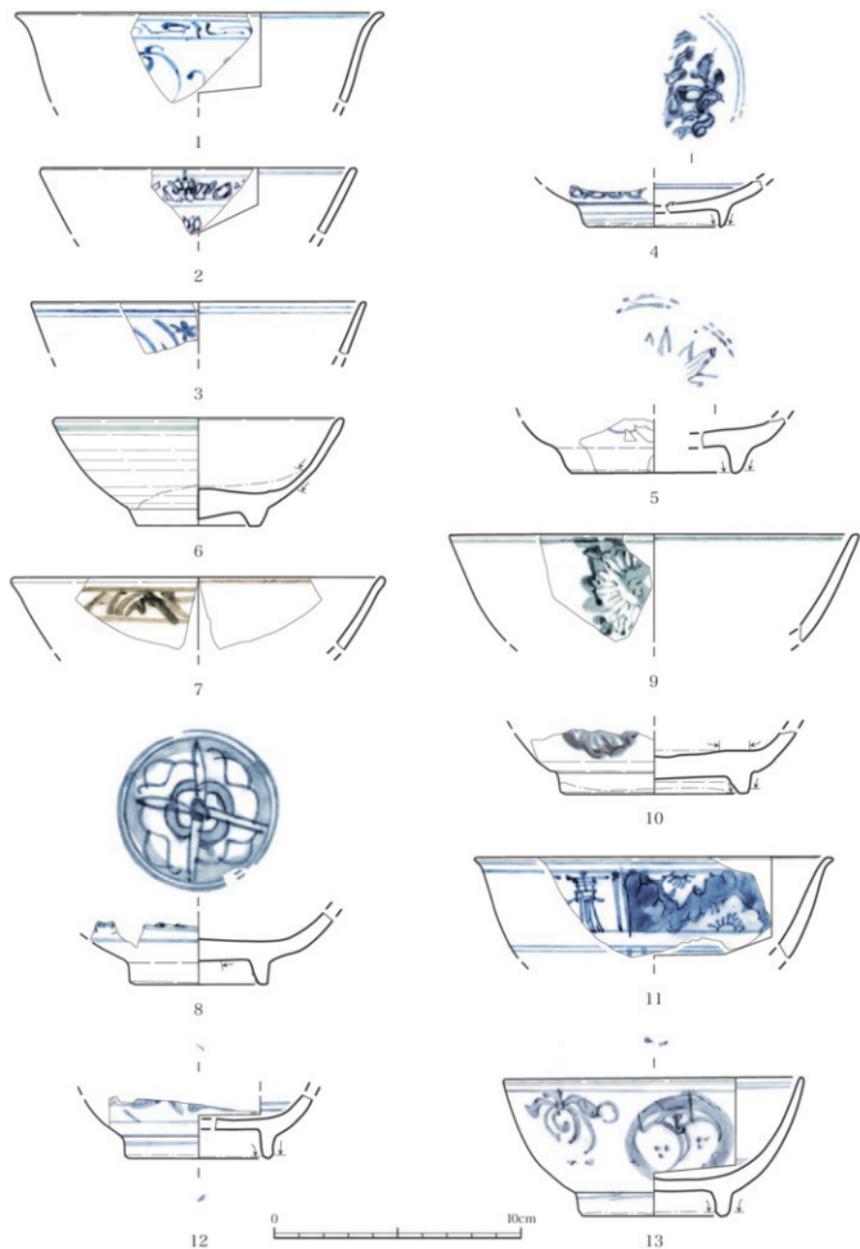
器図番号 図版番号	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項			グリッド・層
						軸 (色・範囲)	素地	文様等	
第35図 図版38	1	碗	A	口縁部	14.9 — —	明緑灰色。両面。	灰白色で細かい。	外面に雷文+唐草文、内面に圈線。両面に細かい貫入。14c末~15c。	表採
	2	碗	A	口縁部	12.8 — —	明緑灰色。両面。	灰白色で細かい。	外面に波譜文+アラベスク文、内面に圈線。15c後半~16c前半。	K-14 I層
	3	碗	A	口縁部	13.6 — —	灰白色。両面。	灰白色で緻密。	外面に蓮池文か、内面に圈線。15c。	L-14 I層
	4	碗	A	底部	— 5.4	明緑灰色。両面、 皿付軸剥ぎ。	灰白色で緻密。	外面に如意頭繁文、内底に草花文。15c。	L-14 II層
	5	碗	A	底部	— 6.7	明黄緑色。両面、 皿付軸剥ぎ。	浅黄色で粗い。	外面にアラベスク文、内底に十字花文、外面に細かい貫入。15c後半~16c前半。	E・F-13 TP12 I層
	6	碗	B	口 底	11.8 4.4 5.0	灰白色。内面胴部 ~外面胴部	淡黄色で細かい。	外面に圈線。両面に細かい貫入。16c末~17c前半。	L-14 II層
	7	碗	B	口縁部	15.2 — —	明黄緑灰色。 両面。	灰白色で細かい。	外面に花唐草文、内面に圈線。呉須の発色は不良。17c前半~中葉。	K-14 I層
	8	碗	B	底部	— 5.6	灰白色。両面、 皿付軸剥ぎ。	浅黄色で粗い。	外面に圈線、内底に十字花文。両面に細かい貫入。16c末~17c前半。	L-14 I層
	9	碗	C	口縁部	16.6 — —	灰白色。両面。	灰白色で細かい。	外面に菊花文、内面に圈線。呉須の発色は不良。17c末~18c前半。	J-13 LT ST II層
	10	碗	C	底部	— 7.6	灰白色。両面、 皿付と内底軸剥ぎ。	灰白色で細かい。	外面に菊花文、内底に重ね焼き時の目跡が残る。17c末~18c前半。	K-16 TP9 I層
	11	碗	D1	口縁部	14.5 — —	明緑灰色。両面。	灰白色で細かい。	外面に寿字文+梅花文+蓮弁文。18c後半~19c。	J-14 TP1 清楚
	12	碗	D1	底部	— 6.0	灰白色。両面、 皿付軸剥ぎ。	灰白色で細かい。	外面に草花文、外底に不明文。18c後半~19c。	J-15・16 TP7 ベルト I層
	13	碗	D1	口 底	12.2 5.7 6.1	灰白色。全面、 皿付軸剥ぎ。	灰白色で細かい。	外面に丸文+蝙蝠文か、内底に三羅文。18c後半~19c。	I-15 TP6 IV層

第14表 中国産染付観察一覧2

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 器重 (cm)	観察事項			グリッド・層
					軸 (色・範囲)	素地	文様等	
第36図 図版39	14	碗	D2 口 底	14.1 7.6 5.8	明緑灰色。全面、 畳付軸調ぎ。	灰白色で緻密。	外面に白抜き菊唐草文+蓮弁文、外底に双 魚文、内面に葡萄文、内底に菊花文。 18c後半～19c。	K-15・L-14 ベルト I層
	15	碗	E 口 底	17.6 7.6 7.4	明緑灰色。全面、 畳付軸調ぎ。	灰白色で細かい。	外面に牡丹唐草文+ラマ式蓮弁文、外底に 「大清嘉慶年製」の銘か、内面に花唐草文、 内底に花唐草文。全体に被熱。18c後半～19c。	K-14 II層 満2内
	16	碗	E 口 底	17.2 6.4 6.6	明緑灰色。両面、 畳付軸調ぎ。	灰白色で緻密。	外面に牡丹唐草文、外底に銘款。 全体に被熱。18c後半～19c。	K-14 II層
	17	小 碗	A 口 縁 部	10.9 - -	灰白色。両面。	白色で緻密。	外面に草花文か。15c。	L-14 II層
	18	小 碗	B1 底 部	- - 4.3	明緑灰色。両面、 畳付軸調ぎ。	灰白色で緻密。	外面に仙芝祝寿文、外底に銘款。 18c後半～19c。	E・F-13 TP12 I層
	19	小 碗	B2 口 縁 部	10.0 - -	灰白色。両面。	灰白色で細かい。	外面に草文か。18c後半～19c。	F-13 TP13 ST2 III層
	20	小 碗	B2 底 部	- - 4.4	灰白色。両面。	灰白色で細かい。	外面に芭蕉文、内底に三羅文。外面に型跡 が残る。18c後半～19c。	G~L-13 LT I層
	21	小 碗	C 底 部	- - 4.1	明緑灰色。両面、 畳付軸調ぎ。	灰白色で緻密。	外面に山水文、外底に宝文、内底に山水文。 18c後半～19c。	L-14 I層
	22	小 碗	C 口 縁 部	7.0 - -	灰白色。両面。	白色で緻密。	外面に菊唐草文、内面に團縁。 18c後半～19c。	K-14 I層
	23	小 碗	C 底 部	- - 3.4	明緑灰色。両面、 畳付軸調ぎ。	灰白色で緻密。	外面に菊唐草文+蓮弁文、外底に團縁。 内底に菊唐草文。18c後半～19c。	L-14 I層
第37図 図版40	24	小 碗	D 底 部	- - 5.0	明緑灰色。両面、 畳付軸調ぎ。	白色で緻密。	外面に牡丹唐草文、外底に「乾隆年製」の 銘か、内底に草花文。全体に被熱。 18c後半～19c。	I・J-14 TP2 II層 満2内
	25	小 杯	A 底 部	- - 2.5	明緑灰色。高台 外面、畳付軸調 ぎ。	灰白色で緻密。	外面に草花文か、外底に墨書で「夫」か、 内底に花卉文。17c前半。	L-14 I層
	26	小 杯	B 口 底	4.8 2.9 2.6	灰白色。全面、 口唇部と畳付軸 調ぎ。	白色で緻密。	外面に梵字文。外面に型跡が残る。 18c後半～19c。	F・G-13 TP14 ST1 I層
	27	小 杯	B 口 縁 部	4.8 - -	灰白色。両面。	灰白色で緻密。	外面に牡丹唐草文、内面に矢羽文。 18c後半～19c。	L-14 I層
	28	小 杯	B 底 部	- - 2.0	灰白色。両面、 畳付軸調ぎ。	灰白色で緻密。	外面に唐草文。18c後半～19c。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
	29	皿	A 口 底	12.0 2.9 6.5	明緑灰色。両面、 畳付軸調ぎ。	灰白色で細かい。	内面に團縁、内底に折枝文。畳付に砂が付 着。両面に粗い貫入。15c中葉～16c前半。	G-19 TP15 III層

第14表 中国産染付観察一覧3

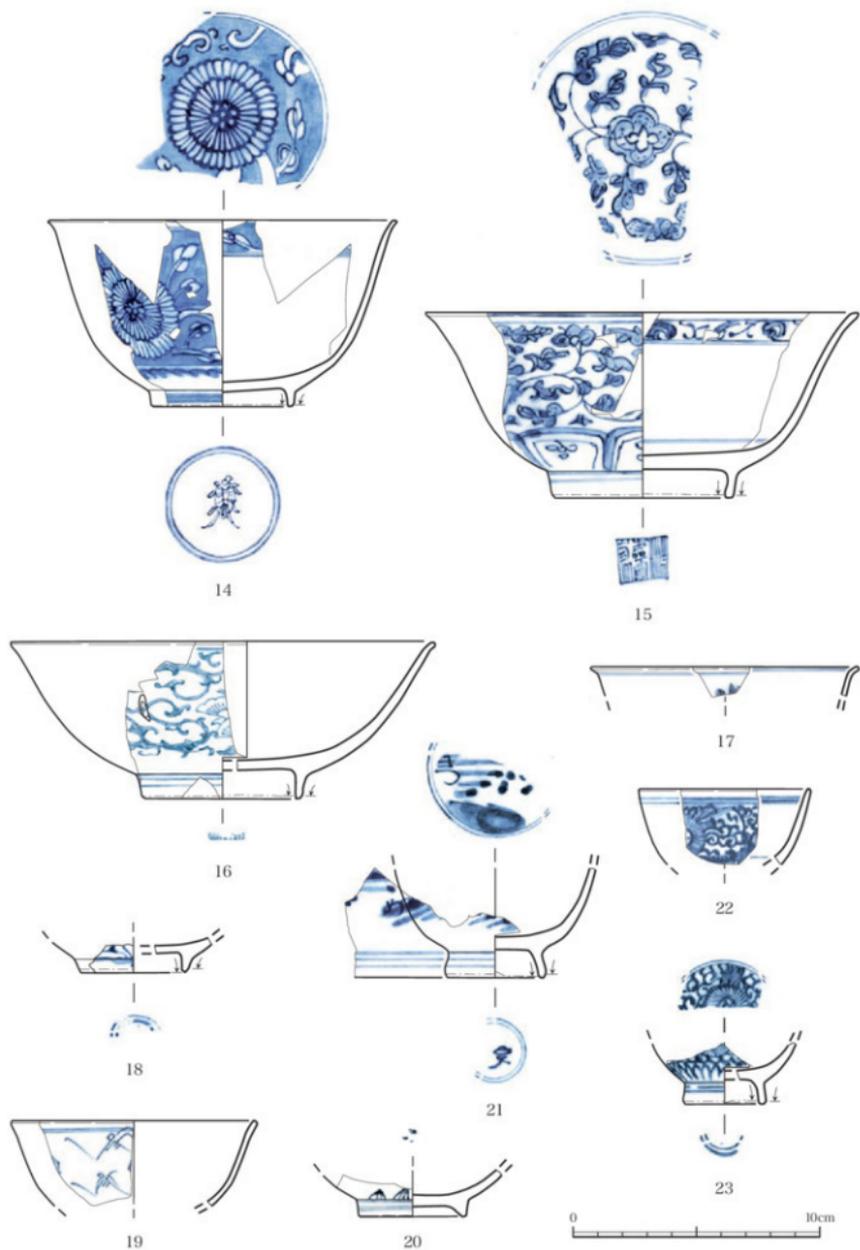
挿図番号 図版番号	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項			グリッド・層
						釉 (色・範囲)	素地	文様等	
第37図 図版40	30	皿	A	口縁部	10.4 — —	明緑灰色、両面。	灰白色で細かい。	外面に波濤文+芭蕉文、内面に草文か。 15c後半～16c前半。	K-14 1層
	31	皿	A	底部	— — 3.0	明緑灰色、両面、 畳付軸刺ぎ。	灰白色で細かい。	外面に圏線、内底に寿字文。 15c後半～16c前半。	L-14 1層
	32	皿	A	口縁底	10.2 2.1 6.0	灰白色、両面、 畳付軸刺ぎ。	灰白色で緻密。	内面に圏線、内底に樹島図(梅に鶯か)。 畳付に砂が付着。16c末～17c前半。	L-14 1層
	33	皿	B1	口縁部	18.4 — —	灰白色、両面。	灰白色で細かい。	外面に圏線、内面に龍講文。18c後半～19c。	F-13 TP13 ST1 皿層
	34	皿	B1	底部	— — 8.4	灰白色、両面、 畳付軸刺ぎ。	灰白色で緻密。	外面及び外底に圏線、内底に草文か。 18c後半～19c。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
	35	皿	B2	底部	— — 6.3	灰白色、内底～ 高台内面。	灰白色で緻密。	外底に型押しで「石」の字、内底に折枝文。 18c後半～19c。	F・G-13 TP14 ST2 皿層
	36	盤	—	口縁部	— — —	灰白色、両面。	灰白色で細かい。	内面に牡丹唐草文。18c後半～19c。	K-15 1層
	37	瓶	—	底部	— — 6.7	灰白色、両面、 畳付軸刺ぎ。	灰白色で細かい。	外面に唐草文、外底に圏線。 15c後半～16c前半。	1-15 TP6 1層
第38図 図版41	38	皿	C	口縁底	15.0 2.2 8.2	明緑灰色、全面、 畳付軸刺ぎ。	灰白色で緻密。	外面に草花文、内面に花唐草文、内底に花唐草文。18c後半～19c。	K-14 II層 溝2内
	39	皿	C	口縁底	14.5 1.9 7.9	明緑灰色、全面、 畳付軸刺ぎ。	白色で緻密。	外面に草花文、外底に「大清嘉慶年製」の銘か、 内面に花唐草文、内底に花唐草文。 全体に被熱し、内面にガラスの溶解物や磁器片 が付着。18c後半～19c。	L-14 ベルト 1層
	40	皿	C	口縁底	19.8 2.8 10.6	明緑灰色、全面、 畳付軸刺ぎ。	灰白色で緻密。	外面に草花文、内面に牡丹唐草文、内底に牡丹文。全体に被熱。18c後半～19c。	K-14 1層
	41	鉢	—	底部	— — 14.1	明黄緑灰色、両 面、内底と畳付 軸刺ぎ。	灰白色で細かい。	外面に圏線、内底に圏線とスタンプ字款。 外底に石灰?が付着。内底に重ね焼き時の 目跡?が付着。17c末～18c前半。	L-15 1層
	42	蓋	—	底 縁 袴	底9.1 — 袴8.0	灰白色、両面、 底端部軸刺ぎ。	灰白色で細かい。	外面に草花文か。16c。	F・G-13 TP14 ST3 IV層 瓦ダマリ
	43	水注	—	注口	— — —	灰白色、両面。	灰白色で細かい。	外面に雲文。15c後半～16c前半。	1-15 TP6 IV層
	44	散 蓮 華	—	皿	— — —	明緑灰色、全面、 畳付軸刺ぎ。	灰白色で緻密。	外面に草文か、内面に牡丹唐草文。 18c後半～19c。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
	45	散 蓮 華	—	柄	— — —	明緑灰色、全面、 外底軸刺ぎ。	灰白色で緻密。	内面に牡丹唐草文。18c後半～19c。	F・G-13 TP14 皿層 磯群



第35图 中国産染付1



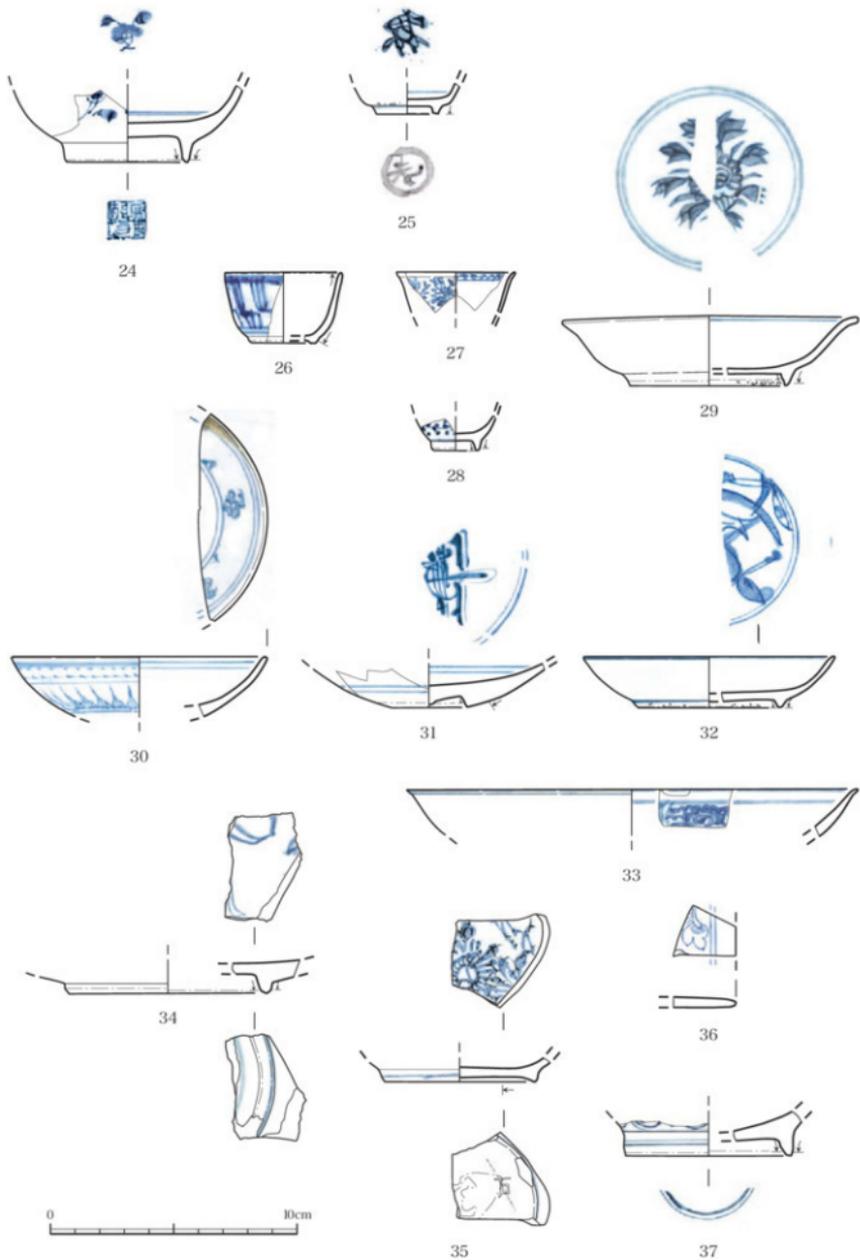
图版38 中国産染付1



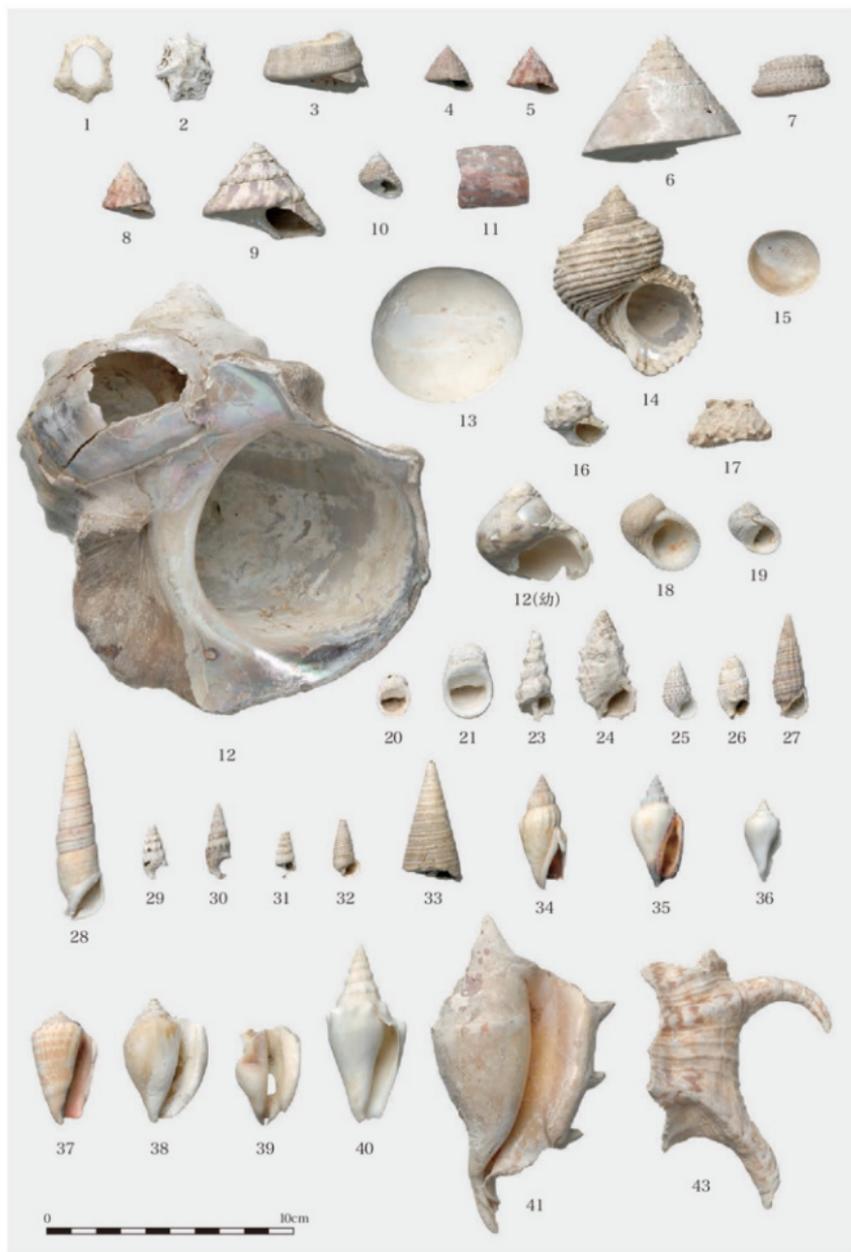
第36图 中国産染付2



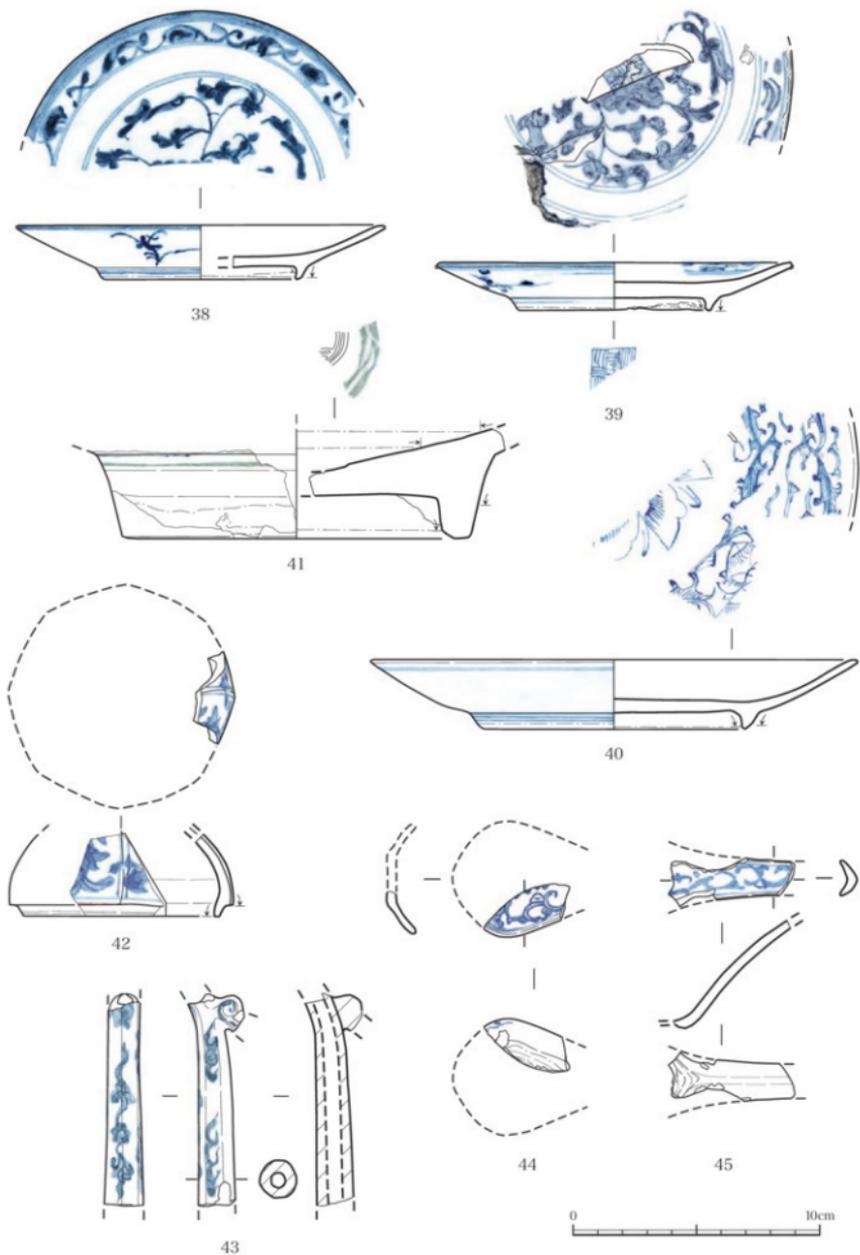
图版39 中国産染付2



第37图 中国産染付3



図版89 貝類遺体 1 巻貝 (番号は第67表と一致)



第38图 中国産染付4



図版41 中国産染付4

第4節 中国産色絵 (第16・17表、第39・40図、図版42・43)

中国産の色絵磁器は総数267点出土しており、時期的には明代と清代に大別できるがやはり後者が多い。前者は施釉後に上絵付を施す五彩に限られ、後者には五彩の他に粉彩や豆彩が含まれる。器種は碗・小碗・小杯・皿・大皿・蓋が確認されているが、清代では皿類が増加する傾向にある。また、主に19世紀代の製品に被熱資料が集中し、かつ細片化が進んでいるという点は染付と同様の特徴を持つ。以下に器類別の概要を記し、個々の観察所見は第17表に譲る。

1. 碗 (1~9)

A類：明代の資料で、器形は端反口縁を呈する。景德鎮窯産 (1)。

B類：清代で景德鎮窯産のもの。器形及び製品の特徴から3種に細分される。

1) 底部から逆「ハ」の字形に開くもので、蓋付碗と考えられる (2~4)。

2) 粉彩。器形は端反口縁を呈する (5、6)。

3) 器形は2と同様だが五彩と考えられるもの (7)。

C類：清代で徳化窯産と考えられるもの。端反口縁で腰部を強く張る (8、9)。

2. 小碗 (10~12)

型成形で端反口縁を呈するもの。清代の徳化窯産。

3. 小杯 (13)

小碗と同じく型成形で端反口縁のもの。清代の徳化窯産。

4. 皿 (14~16)

A類：清代の景德鎮窯産のもの。器形は直口口縁を呈する (14)。

B類：清代の徳化窯産と考えられる資料。器形及び成形技法で2種に細分される。

1) 轆轤成形で器形は直口口縁が想定される (15)。

2) 型成形で器形は端反口縁を呈する (16)。

5. 盤 (17)

豆彩の底部資料である。清代の景德鎮窯産で、いわゆる御器廠の製品と考えられる。

6. 蓋 (18)

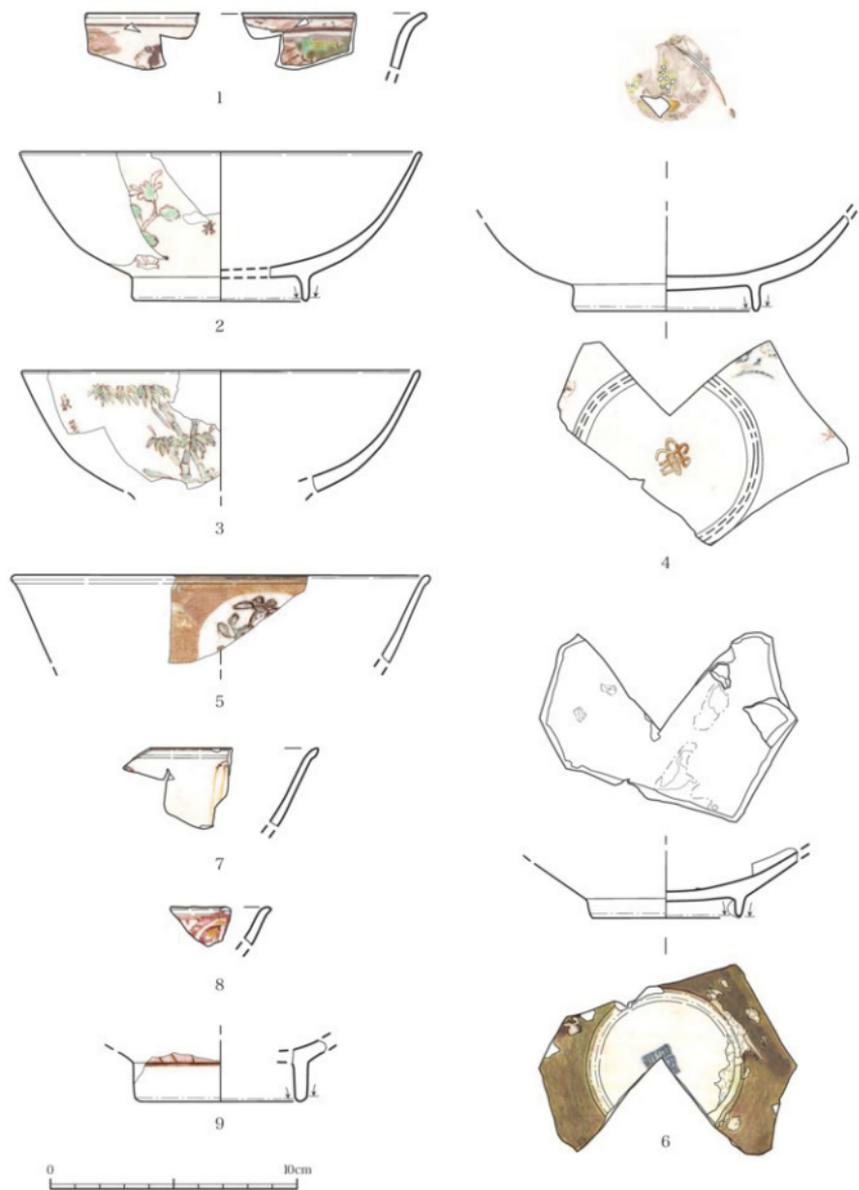
高台形の撮を持つ蓋で、碗B-I類に対応する。清代の景德鎮窯産。

第17表 中国産色絵観察一覧1

挿図番号 図版番号	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項			グリッド 層
						軸 (色・幾何)	素地	文様等	
第39図 図版42	1	碗	A	口 縁部	- - -	灰白色。両面。	灰白色で細かい。	外面に染付・赤・緑で人物文、 両面に染付・赤・緑・黄で四方禪文+花文。 15c中葉～16c前半。	K-15 I層
	2	碗	B1	口 底	16.3 6.1 7.2	灰白色。内面、 畳付軸剥ぎ。	白色で緻密。	外面に緑・黒で草花文+詩句文。 全体に被熱。 18～19cか。	K-15 I層
	3	碗	B1	口 縁部	16.2 - -	灰白色。両面。	白色で緻密。	外面に黒・緑で竹文+詩句文。 全体に被熱。 18～19cか。	L-15 I層
	4	碗	B1	底部	- - 7.6	灰白色。内面、 畳付軸剥ぎ。	白色で緻密。	外面に緑で梅文か、外底に黄で宝文。 内底に緑・黄・青で桃文。全体に被熱。 18～19cか。	K-15 I層
	5	碗	B2	口 縁部	17.0 - -	外面に鈍黄緑、 内面に灰白色。	灰白色で緻密。	外面に緑・青?で草花文か。 全体に被熱。 18～19cか。	K-14 I層
	6	碗	B2	底部	- - 6.1	外面に灰黄緑色、外底と内 面に明緑灰色。 内面に、畳付 軸剥ぎ。	灰白色で緻密。	外底に染付で銘款。 外底に石灰、内底に器物片が付着。 全体に被熱。 18～19cか。	L-14 II層
	7	碗	B3	口 縁部	- - -	明緑灰色。 両面。	灰白色で緻密。	口筋。外面に黄で文様を描くが詳細不明。 全体に被熱。18～19cか。	L-14 II層
	8	碗	C	口 縁部	- - -	明黄緑灰色。 両面。	灰白色で細かい。	外面に赤・黄で波譜文+寿字文。 18c後半～19c。	J-14 TP1 I層
	9	碗	C	底部	- - 7.0	明黄緑灰色。 両面。 畳付軸剥ぎ。	灰白色で細かい。	外面に赤でラマ式蓮弁文。 18c後半～19c。	G～L-13 LT I層

第17表 中国産色絵観察一覧2

挿図番号 図版番号	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項			グリッド 層
						軸 (色・範囲)	素地	文様等	
第40図 図版43	10	小碗	-	口縁部	7.6 - -	灰白色、両面、 口唇軸刺ぎ。	灰白色で緻密。	外面に赤・緑で草花文。 18c後半～19c。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
	11	小碗	-	口縁部	8.7 - -	灰白色、両面、 口唇軸刺ぎ。	白色で緻密。	外面に青で草花文。 18c後半～19c。	E・F-13 TP12 III層
	12	小碗	-	底部	- - 3.4	白色、内底～ 高台外面。	白色で緻密。	外面に緑で草花文か。 外底に一部砂が付着。 18c後半～19c。	I-13 LT I層
	13	小杯	-	底部	- - 3.0	灰白色、両面。	灰白色で緻密。	外面に赤で草花文か。 外底に砂が付着。 18c後半～19c。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
	14	皿	A	底部	(17.0) (3.5) 10.2	灰白色、両面、 景付軸刺ぎ。	白色で緻密。	外底に橙で「成豊年製」の銘、内面に 青・黄・橙・緑・赤で人物文。 19c後半。	K-15 I層
	15	皿	B1	底部	- - 7.8	明緑灰色。 両面、景付と 内底軸刺ぎ。	灰白色で緻密。	内底に黄・赤で圓線か。18c後半～19c。	F・G-13 TP14 ST1 I層
	16	皿	B2	口 底	7.4 1.8 5.5	灰白色。 内底～景付、 口唇部軸刺ぎ。	灰白色で緻密。	内底に赤で花卉文。18c後半～19c。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
	17	盤	-	底部	- - -	灰白色、両面。	白色で緻密。	外底に染付で「大清雍正年製」の銘。 内底に染付・緑・朱で蓮池文。18c前半。	J-14 TP2 南 II層
	18	蓋	-	撮	4.2 - -	灰白色、両面、 景付軸刺ぎ。	灰白色で細かい。	外底に朱で銘款、外面に緑・黄?で蓮文。 18c～19cか。	K-14 II層



第39図 中国産色絵 1



図版42 中国産色絵 1



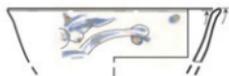
10



11



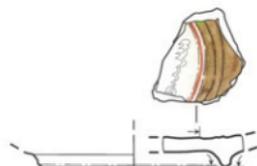
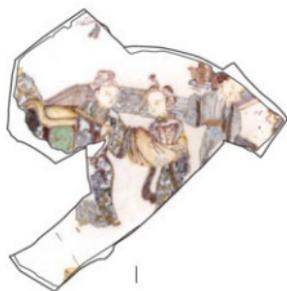
12



13



14



15



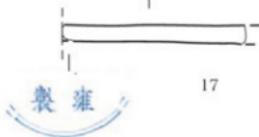
16



17



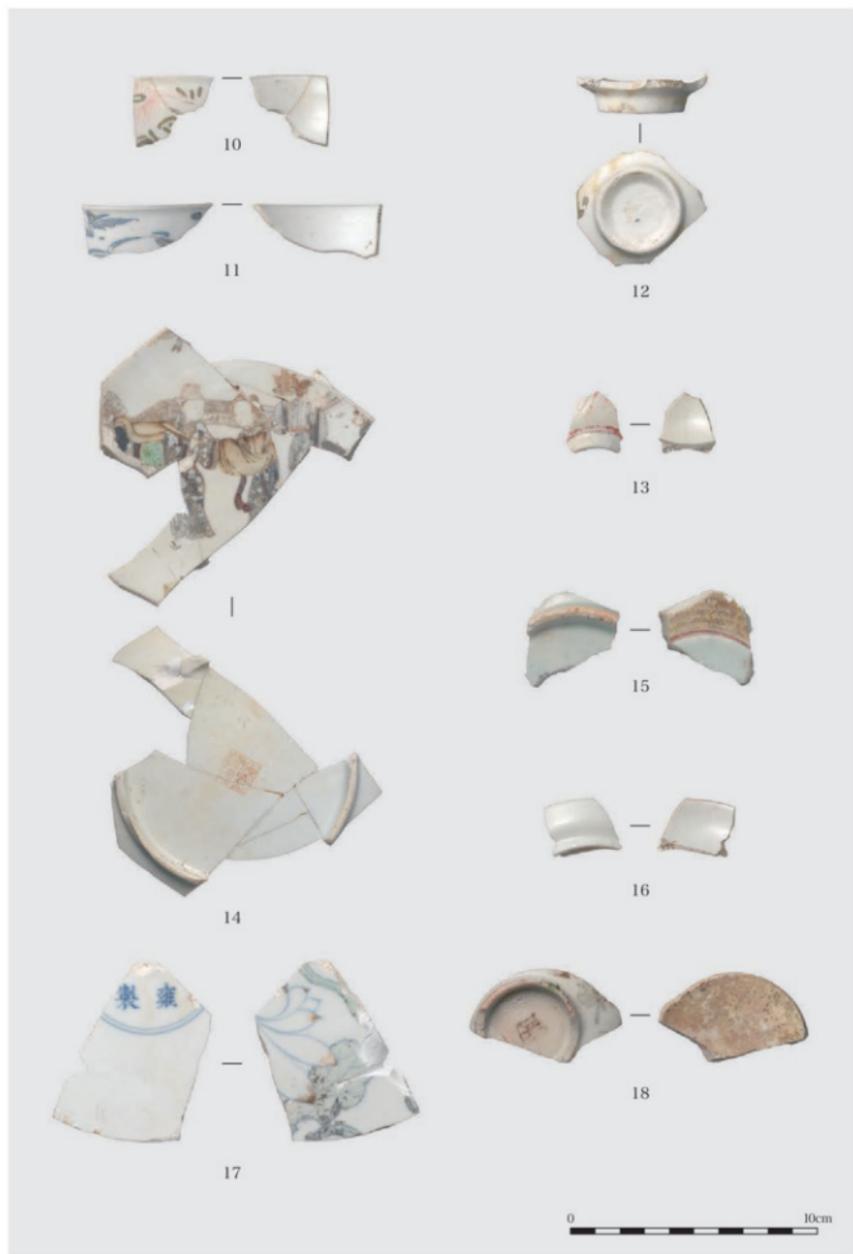
18



19



第40図 中国産色絵2



図版43 中国産色絵2

第5節 中国・タイ・ミャンマー産褐釉陶器 (第18・19表、第41図、図版44)

褐釉陶器は、中国、タイ、ミャンマー産の製品が出土した。最も多いのは中国産で、次にタイ、ミャンマーと続く。年代的には、15～16世紀代のものと考えられる。以下に、中国産から概観する。なお、個別の遺物についての詳細は、観察表に記載する。

1. 中国産褐釉陶器

中国産褐釉陶器は、総計639点が出土している。器種は壺、碗及び急須と思われる資料が確認され、その多くは壺である。代表的な5点を図化した。

壺(1～4) 口縁部の断面形態が方形状を呈するもの(1)と半円形状を呈するもの(4)がみられる。後者は小型の壺と考えられる。
碗(5) 器形より碗とした。壺付を外側から内側に向かってやや斜めに成形している。

2. タイ産褐釉陶器

タイ産褐釉陶器は、総計110点が出土している。器種は壺、瓶が確認され、中国産同様に壺が最も多い。代表的な2点を図化した。

壺(6) 小破片のため詳細は不明であるが、素地の特徴より、メノムナイ窯の製品と考えられる。
瓶(7) 双耳瓶の口縁部である。耳は欠損している。素地の特徴より、シーサッチャナライ窯の製品と考えられる。

3. ミャンマー産褐釉陶器

ミャンマー産褐釉陶器は、総計20点が出土している。器種は壺と考えられる。代表的な1点を図化した。

壺(8) 口縁部は丸く肥厚し、内側は一段凹む。首里城跡出土資(沖繩県教育委員会2001)に類似するものがみられる。

第18表 中国・タイ・ミャンマー産褐釉陶器観察一覧

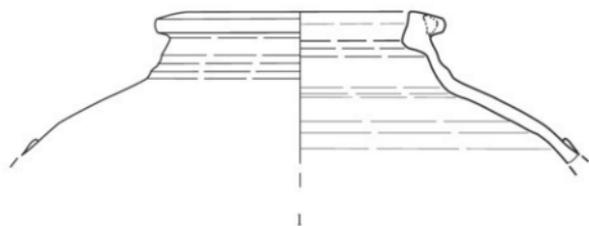
邦国番号 図版番号	番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	観察事項			グリッド・層	
				文様構成	釉 (色・範囲・覆入)	素地 (色・質・混入材)		所見
第41図 図版44	1	壺 口縁部	17.8 — —	無文	暗褐色の釉を両面に施釉。	灰白色でやや緻密。 白色粒、黒色粒、褐色粒 を多く含む。	内外ともに轆轤痕が明瞭。 外面肩部に目跡有り。 口縁部は方形状を呈する。	I-15 TP6 IV層
	2	壺 底部	— — 13.2	無文	暗オリーブ褐色の釉を 外底際まで施釉。	淡灰白色でやや緻密。 白色粒、黒色粒、褐色粒 を多く含む。	内外ともに轆轤痕が明瞭。 外底に目跡有り。	L-14 I層
	3	壺 底部	— — 16.6	無文	外面に暗赤褐色の釉を 外底際まで施釉。	外面は赤褐色、内側は濃い 灰色を呈し、粗い。大小の 白色粒、黒色粒を多く含む。	内外ともに轆轤痕が明瞭。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
	4	壺 口縁部	— — —	無文	内外面に灰色を帯びた 黄褐色の釉を施釉。 口唇部は釉過ぎする。	赤みを帯びた淡灰白色で 粗い。大小の褐色粒を 多く含む。	内外ともに轆轤痕が明瞭。 口縁部は半円形状に肥厚する。 小型の製品か。	K-15 I層
	5	碗 底部	— — 3.6	無文	暗茶褐色の釉を外面腰部 まで施釉。一部釉だれが みられる。	灰白色で粗い。 黒色粒を含む。	外面は轆轤痕が明瞭。	K-14 I層
	6	壺 底部	— — —	無文	内面に僅かに残る釉より、 オリーブ褐色の釉と考え られる。	暗灰黄褐色でやや粗い。 大小の黒色粒、褐色粒、 白色粒を多く含む。	外底に釉がかかっている。 素地の特徴より、メノムナイ 窯製品の可能性がある。	L-15 I層
	7	双耳瓶 口縁部	4.4 — —	頸部に 数本の 図線。	暗オリーブ褐色の釉を 外底際まで施釉。	灰白色で緻密。微細な 白色粒、黒色粒を含む。	内面は轆轤痕が明瞭。表面は 被熱を受けていると思われる。 シーサッチャナライ窯製品。	K-15 ベルト I層
	8	壺 口縁部	23.2 — —	無文	黒褐色の釉を内外面に 施釉。	暗灰色粗い。粒の粗い 赤色粒や微細な白色粒、 黒色粒を多く含む。	口縁部を丸く肥厚する。 内面口縁部は凹む。	J-14 TP3 I層

第19表 中国・タイ・ミャンマー産棉織物集計表

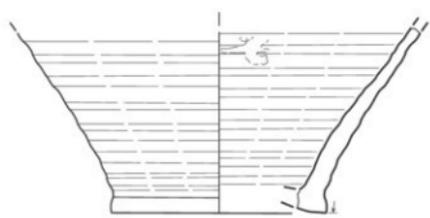
アフリカ・地域・品名	E-C-E13		E-13		F-G-13		F-G-13		G-13		H-13		I-13		J-13		K-13		L-13												
	1層	2層	1層	2層	1層	2層	1層	2層	1層	2層	1層	2層	1層	2層	1層	2層	1層	2層	1層	2層											
口	TP12	TP22	TP13	TP23	TP14	TP24	TP14	TP24	TP14	TP24	TP14	TP24	TP14	TP24	TP14	TP24	TP14	TP24	TP14	TP24											
口	TP12	TP22	TP13	TP23	TP14	TP24	TP14	TP24	TP14	TP24	TP14	TP24	TP14	TP24	TP14	TP24	TP14	TP24	TP14	TP24											
中国	15	4	6	2	10	3	12	3	1	5	4	5	7	19	3	1	7	1	6	6	3	1	2	6	1	5	2	8			
タイ	2	1	1	2	1	2	1	2	3	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1				
ミャンマー																															
合計	17	4	7	2	10	4	15	3	1	5	4	5	9	24	3	1	8	9	1	8	7	9	3	1	2	6	1	6	1	2	9

アフリカ・地域・品名	E-14		F-14		G-14		H-14		I-14		J-14		K-14		L-14		M-14		N-14		O-14		P-14		Q-14		R-14		S-14		T-14		U-14		V-14		W-14		X-14		Y-14		Z-14								
	1層	2層																																																	
口	TP1	TP2	TP1	TP2																																															
中国	1	3	1	2	6	7	18	5	1	1	2	4	52	7	2	1	69	8	2	12	1	8	13	22	6	16	1	58	2	1																					
タイ	1	2	1	1	1	1	1	2	2	10	2	1	9	3	1	2	3	2	1	4	1	13	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
ミャンマー	2																																																		
合計	5	5	1	2	7	7	20	5	1	1	2	4	76	9	2	3	83	11	2	15	1	10	14	27	2	6	20	2	76	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

アフリカ・地域・品名	E-15		F-15		G-15		H-15		I-15		J-15		K-15		L-15		M-15		N-15		O-15		P-15		Q-15		R-15		S-15		T-15		U-15		V-15		W-15		X-15		Y-15		Z-15							
	1層	2層																																																
口	TP1	TP2	TP1	TP2																																														
中国	48	26	2	11	1	7	1	3	1	2	18	62	10	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
タイ	1	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
ミャンマー	1																																																	
合計	55	33	3	13	1	10	2	4	1	2	25	76	10	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		



1



2



3



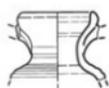
4



5



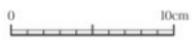
6



7



8



第41図 中国・タイ・ミャンマー産褐釉陶器



図版44 中国・タイ・ミャンマー産褐釉陶器

第6節 西洋陶器 (第20～23表、第42～44図、図版45～47)

中城御殿からは、ヨーロッパ産の製品も多数確認され、総計640点が出土している。器種は皿、鉢、瓶などがみられる。最も多いのは、皿である。皿の外底には刻印・マークがついているものがあり、これらを参考にすると、イギリスで生産された製品であると考えられる。以下に器種別に概観し、代表的なものを図化した。個別の遺物に関する詳細は、観察表に記載する。

1. 皿 (1～5・8～17)

最も多く出土したのは皿で、614点が出土している。皿は器形により大きく二つに分類できる。口縁部が大きく屈曲する折れ縁のタイプ(1・2)と、口縁部は屈曲せず、体部が曲線を描く内湾するタイプ(3・4)である。まず折れ縁タイプから概観すると、折縁が直線的なもの(1)と、緩やかに湾曲するもの(2)がある。両者とも高台をもつ。装飾は銅版転写技法によるもので、文様は内面口縁部に2本の圓線、屈曲部に1本の圓線を廻らせる。青色の製品と緑色の製品の2種類が確認される。次に内湾するタイプについては、底部まで残る資料はないものの、東京都沙留遺跡出土資料(東京都埋蔵文化財センター 2003b)を参考にすると、高台をもつものと考えられる。装飾は銅版転写技法によるもので、文様は外面に圓線を廻らせるもの(3)と、内面に圓線を廻らせるもの(4)がある。3の外面に文様があるものについては、蓋の可能性も否定できない。5の高台のない平底タイプについては、沙留遺跡出土資料(東京都埋蔵文化財センター 2003a)を参考にすると、折れ縁タイプの皿である可能性も考えられる。

8～17は皿の底部と考えられる資料で、外底に刻印やマークがあるものを取り上げた。特に注目されるのが、8の外底にプリントされたマークである。上部に「ROYAL IRONSTONE CHINA」という文字がある。その下には、中央に楯、左側にライオン、右側にユニコーンが描かれている。この図柄はイギリス王家の紋章(大平雅巳 2008)を表す。さらに下部には「JOHNSON BROS ENGLAND」とある。このマークについて調べると、イギリスのジョンソンブラザーズ社製のもので、1883年～1913年のものであることが判明した(GEOFFREY A.GODDEN 1964)。図版47-19も同社製品とみられる。10～16にみられる数字やアルファベットの刻印は、登録商標と考えられる。また、17の刻印と類似する資料が長崎県の旧朝永病院跡から出土しており(長崎県教育委員会 2002)、同じ資料ならばイギリスのストーク窯で生産された製品となる。年代については、1873年頃とされる。

2. 瓶 (6・7)

6は口縁部が大きく外反する。外面は口縁部から頸部にかけて段をもつ。装飾は銅版転写技法によるもので、文様は外面に1本の圓線を廻らす。7は瓶の頸部と考えられ、断面三角形を呈する。被熱の影響で、表面がかなり変色しているため、装飾・文様ともに不明瞭である。瓶は7点と少ない。施文は緑色の製品のみ確認できる。

3. 鉢 (22～25)

蓋受け付き鉢(22～24)と、蓋受けがないタイプ(25)の2種類が確認された。22は口縁部が外反し、内面口縁部下に凸部を廻らしている。蓋受けと考えられる。22はリボンのような装飾が施された把手が付いている。装飾は銅版転写技法によるもので、文様は外面に圓線を廻らす。把手部分には羽状に文様を施す。25の口縁部は直口で、底部から直線的に立ち上がる。底部は萐苳底を呈する。装飾は銅版転写技法によるもので、文様は外面口縁部に2本の圓線、胴部に1本の圓線を廻らす。鉢の出土量は9点と少なく、施文は緑色の製品のみ確認できる。

4. 把手 (26)

器種不明の把手が4点出土している。被熱の影響で表面がかなり変色しているため、装飾・文様ともに不明瞭である。

5. 小結

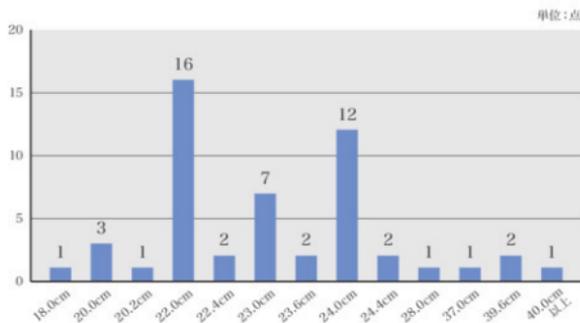
中城御殿から出土した西洋陶器で最も多いのは皿であると先に述べたが、皿は大小様々なサイズがみられた。そこで、

皿の中でも特に多かった折縁タイプの皿について可能な限り口径復元を試み、大きさのバリエーションがあるのかを検討した。その結果については、第20・21表を参照されたい。

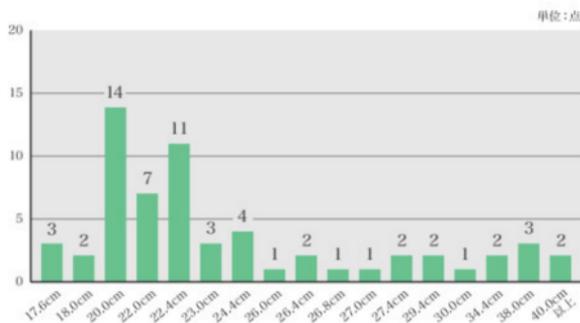
岡氏によれば、同一のパターンで蓋物や大皿、プラター（ミートデッシュ）、鉢、取り皿の破片が出土すれば、ディナーセットが使われていたと見てよいとする（岡 泰正 2002）。そこで、大皿は口径33～40cm、ディナー（ミート）プレートは口径23～27cm、取り皿にもなるデザートプレートは口径17～20cm（成美堂出版 1997）を参考に、中城御殿出土の西洋陶器の折縁タイプの皿をみていくと、17.0～22.9cmのグループ、23.0～29.9cmのグループ、30.0cm以上の3タイプに便宜的に分けることが可能である。17.0～22.9cmのグループがデザートプレート、23.0～29.9cmのグループがディナープレート、30.0cm以上のグループが大皿の範疇として捉えることができる。また、鉢も出土していることを踏まえると、中城御殿においては、西洋陶器をディナーセットとして揃えていたことが考えられる。さらにディナーセットの施文は青色の製品と緑色の製品の2パターンが揃っていたことがわかる。

また、折縁タイプの皿を詳細に観察すると、内底に細かい直線的な傷がいくつも確認される。これは使用痕と考えられ、ナイフなどの道具を使っていたことが推定される。しかし、ナイフやフォークは出土しておらず、実際に西洋風の食事を取り入れていたかについては、可能性を述べるに留めておく。

沖縄県内における西洋陶器の出土事例を調べると、首里城跡よりオランダ産の皿が1点出土している（沖縄県教育委員会 1988）。外底に「WILLOW」のマークと、「MAASTRICHT」という刻印が確認されることより、ウィロウパターンと呼ばれる種類で、1855年～1870年にオランダのマーストリヒトで生産されたものと判断される。中城御殿跡のように、西洋陶器がかなりの数を伴って出土した事例はこれまでなく、貴重な資料と言える。



第20表 折縁タイプ皿（青色）口径別数量



第21表 折縁タイプ皿（緑色）口径別数量

第22表 西洋陶器観察一覧1

柄図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項			グリッド 層		
					装飾	文様構成	素地 (色・質・痕跡)		所見	
第42図 図版45	1	皿	折縁 口縁部	24.0 2.5 14.6	銅版転写	内面に3本の圓線。青色。	白色で緻密。	被熱を受けている。内底に使用痕有り。	K-15 1層	
	2	皿	折縁 口縁部	18.0 1.3 10.6	銅版転写	内面に3本の圓線。緑色。	白色で緻密。	被熱を受けている。	L-15 1層	
	3	皿	内湾 口縁部	18.0 -	銅版転写	外面に3本の圓線。緑色。	白色で緻密。	被熱を受けている。外面に文様があることより、蓋の可能性も考えられる。	L-15 1層	
	4	皿	内湾 口縁部	- -	銅版転写	内面に3本の圓線。緑色。	白色で緻密。	被熱を受けている。	L-15 1層	
	5	皿	平底 底部	- 15.0	-	-	白色で緻密。	被熱を受けている。大型の皿か。	L-15 1層	
	6	瓶	瓶反 口縁部	11.4 -	銅版転写	外面に1本の圓線。緑色。	白色で緻密。	被熱を受けている。外面口縁部から頸部にかけて段を有する。	L-15 1層	
	7	瓶?	-	頸部	- -	-	-	白色で緻密。	被熱を受けて大きく変色しているため、装飾・文様ともに不明瞭。	K-15 1層
第43図 図版46	8	皿	高台 底部	- 14.0	-	-	白色で緻密。	被熱を受けている。外底にプリントされたイギリス王家の紋章と、「ROYAL IRONSTONE CHINA」、「JOHNSON BROS ENGLAND」の文字。イギリスのジョンソンブラザーズ社製で1883年～1913年のもの、内底に使用痕有り。20と同じマーク。	K-15 1層	
	9	皿	高台 底部	- 13.7	-	-	白色で緻密。	被熱を受けている。外底にプリントされたイギリス王家の紋章と、「ONE CHINA」、「Co」の文字。生産地はイギリスと考えられる。内底に使用痕有り。21と同じマーク。	K-15 1層	
	10	皿	高台 底部	- 13.6	-	-	白色で緻密。	被熱を受けている。外底に「C」の刻印。内底に使用痕有り。	L-15 1層	
	11	皿	高台 底部	- 14.6	-	-	白色で緻密。	被熱を受けている。外底に「9」か「6」の刻印。	L-15 1層	
	12	皿	高台 底部	- 9.8	-	-	白色で緻密。	被熱を受けている。外底に「G」と、「9」か「6」の刻印。内底に使用痕有り。薄手のつくりである。	L-15 1層	
	13	皿	高台 底部	- 11.8	-	-	白色で緻密。	外底に「5」の刻印。内底に使用痕有り。	K-15 1層	
	14	皿	-	底部	- -	-	-	白色で緻密。	被熱を受けている。外底に「9」か「6」の刻印。	K-14 1層
	15	皿	-	底部	- -	-	-	白色で緻密。	被熱を受けている。外底に「G」の刻印。	L-15 1層
	16	皿	-	底部	- -	-	-	白色で緻密。	被熱を受けている。外底に「INA」の刻印。	L-15 1層
	17	皿	-	底部	- -	-	-	白色で緻密。	被熱を受けている。外底に刻印。イギリスのストック窯製品の可能性有り。年代は1873年頃。	L-15 1層

第22表 西洋陶器観察一覧2

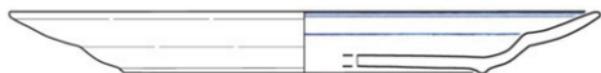
図版番号 挿入番号	番号	器種	器形	部位	口径 高さ 底径 (cm)	観察事項		グリッド 層		
						装飾	文様構成		素地 (色・質・痕跡)	所見
図版47	18	皿	-	底部	- - -	-	-	白色で緻密。	被熱を受けている。外底にプリントされた「□ CHINA」、「□ Co」の文字。生産地はイギリスと考えられる。19と同じマーク。	L-15 I層
	19	皿	-	底部	- - -	-	-	白色で緻密。	外底にプリントされたイギリス王家の紋章と、「□ TONE CHINA」と「□ A's C□」の文字。生産地はイギリスと考えられる。18と同じマーク。	L-15 I層
	20	皿	-	底部	- - -	-	-	白色で緻密。	被熱を受けている。外底にプリントされたイギリス王家の紋章と、「□ SON BROS □ GLAND」の文字。イギリスのジョンソンブラザーズ社製で1883年～1913年のもの、8と同じマーク。	L-15 I層
	21	皿	-	底部	- - -	-	-	白色で緻密。	外底にプリントされたイギリス王家の紋章。生産地はイギリスと考えられる。9と同じマーク。	L-14 I層
第44図 図版47	22	鉢	-	口縁部	10.2 - -	銅版転写	外面口縁部に2本、胴部に1本の圓線と、把手に羽状の文様。内面口縁部に1本の圓線。緑色。	白色で緻密。	被熱を受けている。	J-14 TP3 II層 溝2内
	23	鉢	-	口縁部	- - -	銅版転写	外面口縁部に2本、内面口縁部に1本の圓線。緑色。	白色で緻密。	被熱を受けている。	K-14 I層
	24	鉢	-	口縁部	20.6 - -	銅版転写	外面口縁部に2本、胴部に1本の圓線。内面口縁部に1本の圓線。緑色。	白色で緻密。	被熱を受けている。	K-14 I層
	25	鉢	直口	口 底 部	14.2 5.2 12.0	銅版転写	外面に3本、内面に1本の圓線。緑色。	白色で緻密。	被熱を受けている。基底部	K-15 I層
	26	-	-	把手	- - -	-	-	-	白色で緻密。	被熱を受けて大きく変色しているため、装飾・文様ともに不明瞭。

第23表 西洋陶器集計表

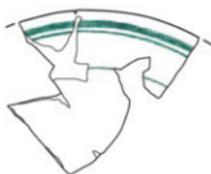
器種・器形・部位・色	グリッド層		J-13		K-13		J-14		K-14		L-14		K-15		L-15		L-16		不明	合計										
	I層	II層	LT	ST	I層	II層																								
																					TP1	TP2	TP3	TP4	TP5	TP6	TP7	TP8		
皿	口	青			1				3							31			2	8	79									
		緑							6		1	2	1	1	1	28					8	88								
	口底	青														1						1								
		緑														2		11				13								
	底	高台片				1				6	1					4	28	29	1			2	73							
		平底片																1				1								
	内口	青														2		4	1			8								
		緑							3							1		5				9								
	胴部片	青							3							11		14				3	32							
		緑					1		11							1	17	1	22			6	60							
底部片	青	1	2					22		10	1		4	58	1	65		1		20	185									
	緑							3		2	1		1	24	27	1				4	63									
鉢	口						1	1							1		3				8									
	口底														1						1									
瓶	口														1		2				6									
	胴部片																1				1									
器種不明	口																				2									
	口縁部片											1									1									
不明	胴部片								1	1											3									
	把手															2					4									
総計			1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	64	2	1	20	4	1	12	210	2	1	255	3	3	2	52	640



1



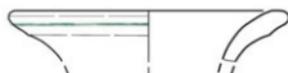
1



2



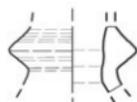
3



6



4



7



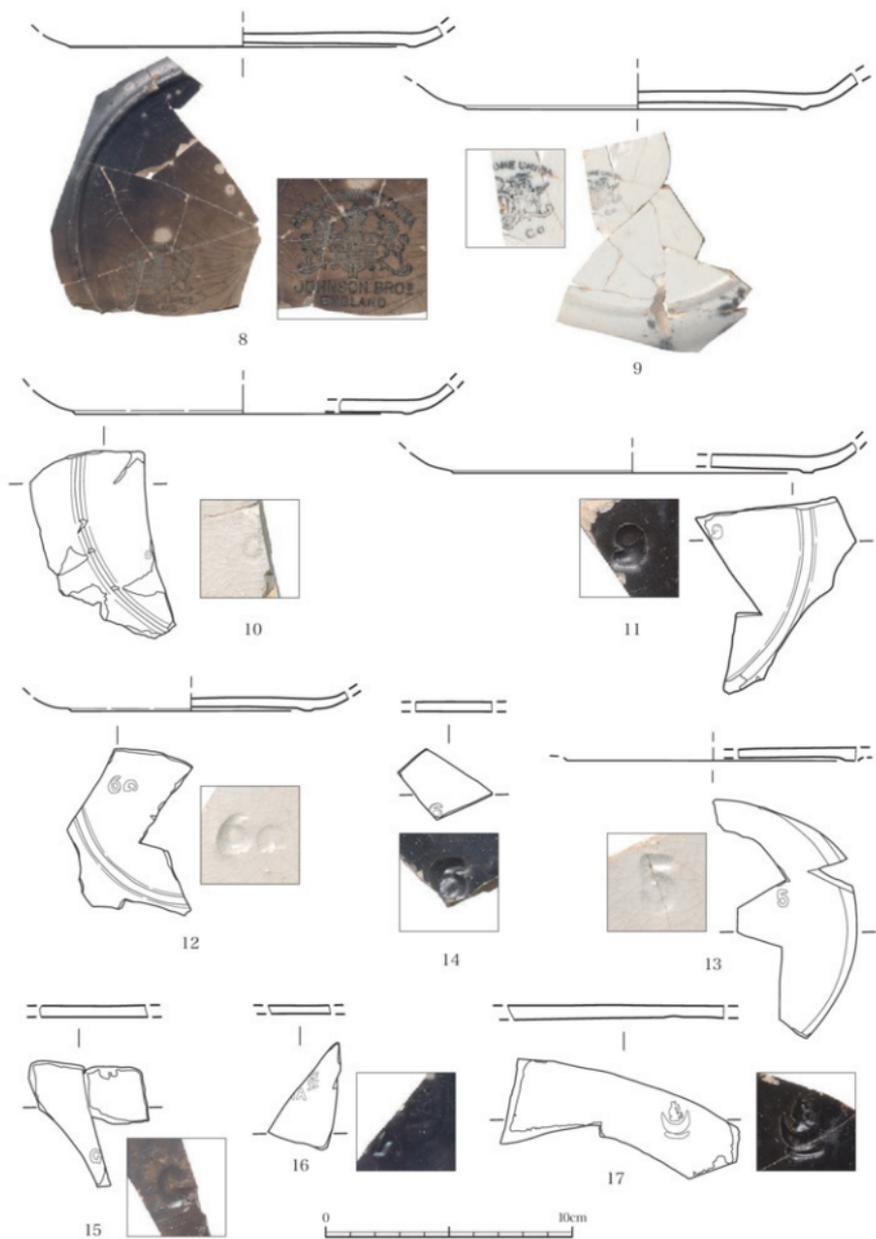
5



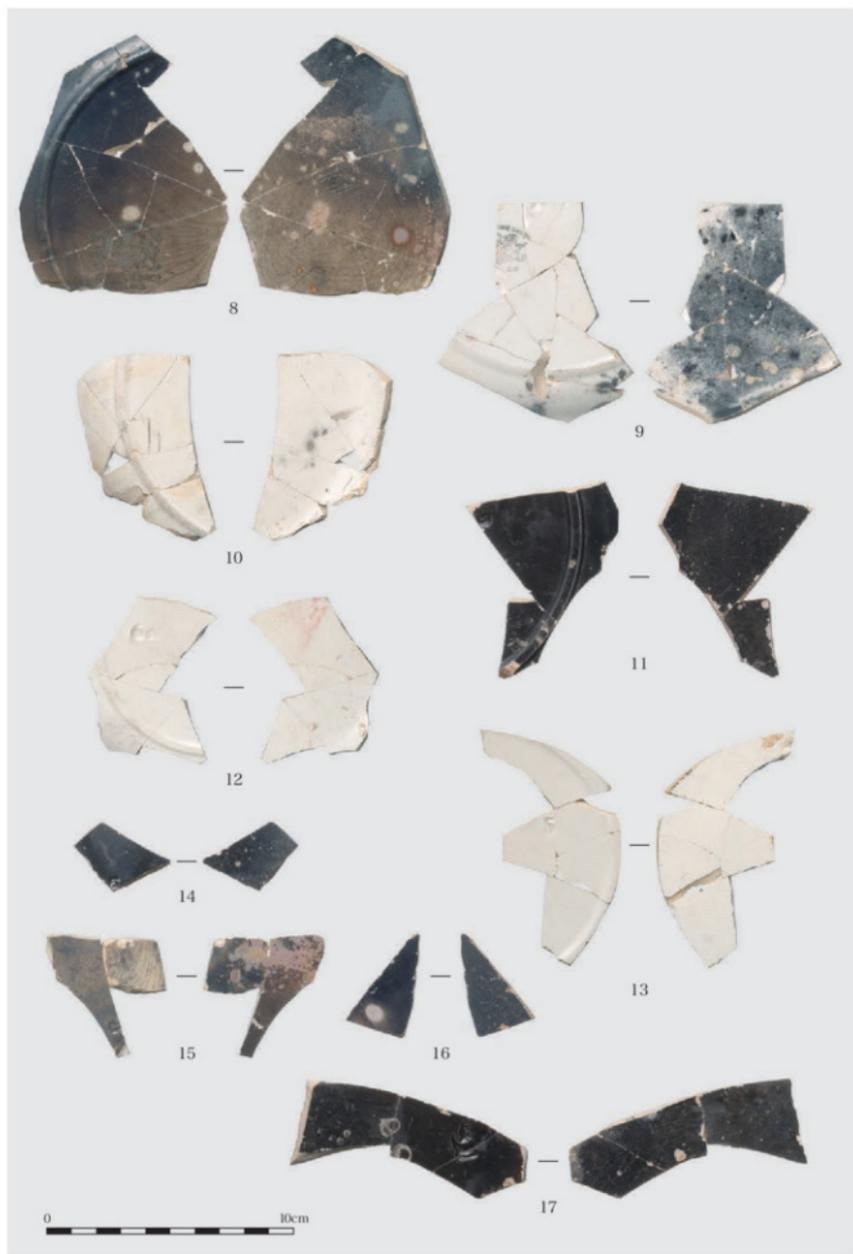
第42図 西洋陶器 1



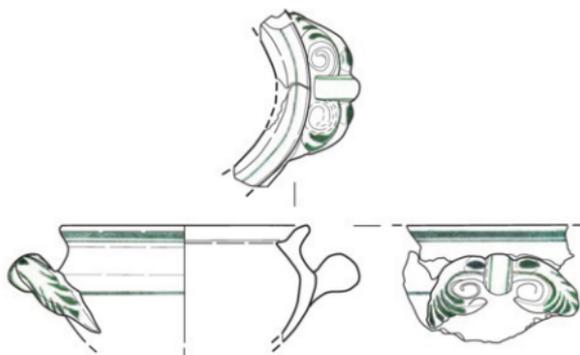
图版45 西洋瓷器 1



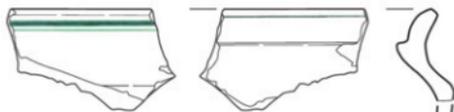
第43图 西洋陶器2



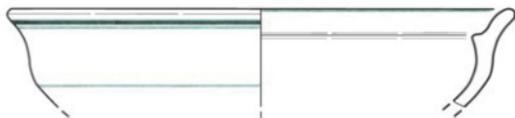
图版46 西洋瓷器2



22



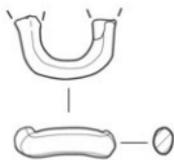
23



24



25



26





图版47 西洋陶器 3

第7節 その他の輸入陶磁器 (第24・25表、第45・46図、図版48・49)

中国産の瑠璃釉、鉄軸磁器、翡翠釉、三彩、銅緑釉、無軸陶器、青磁染付、褐釉染付、褐釉磁器、タイ産の半練土器、青磁、黒釉双耳瓶、産地不明の染付、青磁、褐釉陶器をその他の輸入陶磁器としてまとめた。以下に種類別に概観する。なお、個別の遺物についての詳細は、観察表に記載する。

1. 中国産

- 瑠璃釉 (1・2) 瑠璃釉は総計38点が出土している。器種は碗、小碗、小杯、蓋などである。代表的な2点を図化した。型成形によるもので、徳化窯産と考えられる。
- 鉄軸磁器 (3) 小碗の底部が1点のみ出土している。型成形によるもので、徳化窯産と考えられる。
- 翡翠釉 (4・5) 翡翠釉は総計5点が出土している。器種は皿と瓶がみられる。代表的な2点を図化した。
- 三彩 (6～9) 三彩は総計4点が出土している。器種は水注、瓶、盤がみられる。明代のものである。
- 銅緑釉 (10) 銅緑釉は総計2点が出土している。すべて鉢である。
- 無軸陶器(11～19) 無軸陶器は総計47点が出土している。器種は、急須、壺、蓋などがみられ、急須が最も多い。そのほとんどは宜興窯製品である。代表的な9点を図化した。

その他に青磁染付の小碗が1点、褐釉染付の小碗が5点、褐釉磁器の皿が1点出土しているが、今回は紹介のみに留める。

2. タイ産

- 半練土器 (20) 半練土器は2点出土している。すべて蓋である。代表的な1点を図化した。
- 青磁 (21) 器種は鉢である。口縁部は外反し、内面口縁部下部に3本の圈線を廻らす。
- 黒釉双耳瓶 (22) 胴部が1点出土している。外面肩部に数本の圈線を廻らせて、文様としている。シーサッチャナライ窯の製品と考えられる。

3. 産地不明

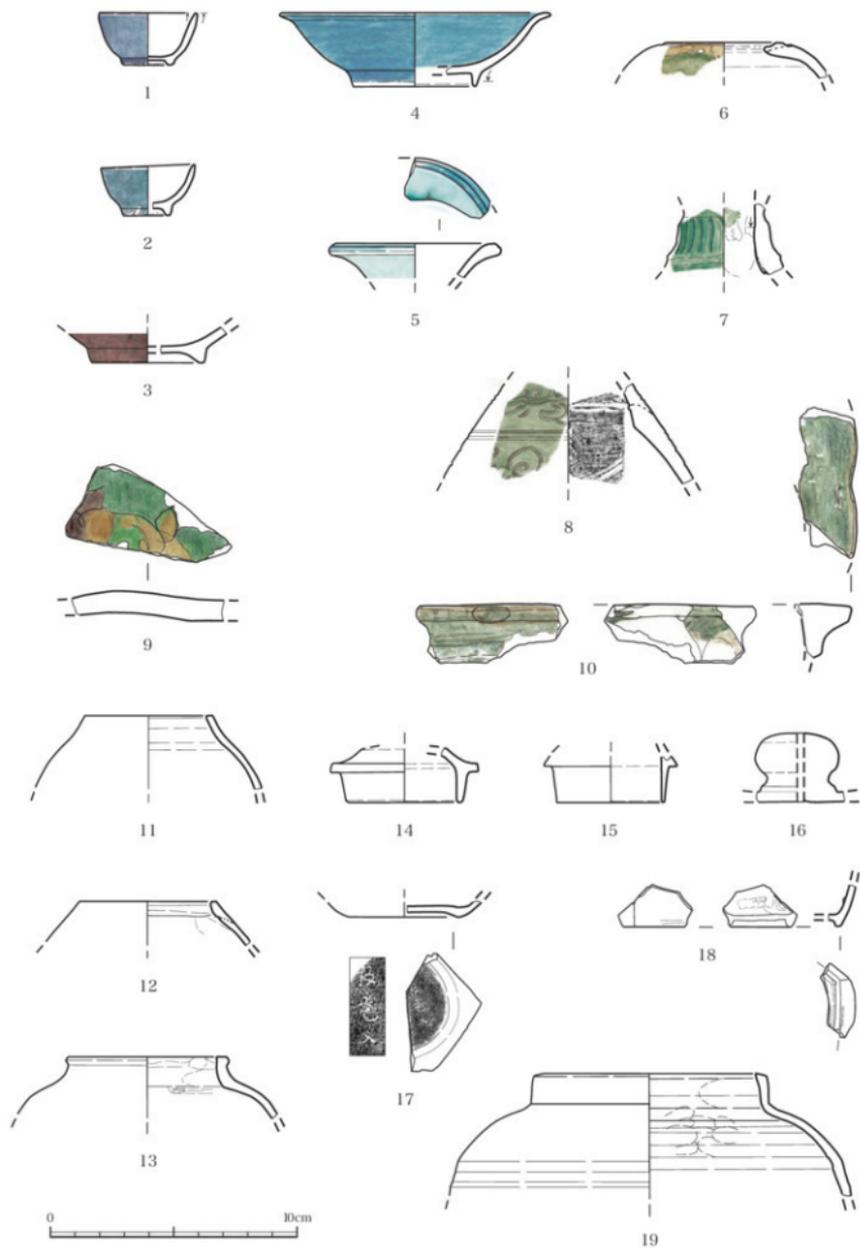
- 青磁 (23) 碗の口縁部で、内湾を呈する。素地の特徴より東南アジア産の可能性が考えられる。
- 染付壺または甕 (24・25) 染付の壺または甕が数点出土した。外面に文様が施されるが、24は小破片のため、不明瞭である。25は胴部片で、下部に植物の葉の文様がみられる。
- 褐釉陶器 (26) 26は壺の口縁部で、素地や釉薬よりタイ産の可能性はあるが、器形には類例がない。

第25表 その他の輸入陶磁器観察一覧1

挿図番号 図版番号	番号	器種	器形	部位	口徑 器高 底径 (cm)	観察事項			グリッド 層	
						文様構成	軸 (色・陶質・貫入)	素地 (色・質・混和材)		所見
第45図 図版48	1	小杯	外反	口 底 部	4.0 2.15 2.0	無文	外面に瑠璃釉、内面に透明釉を掛け分ける。口唇部を釉剥ぎする。	白色で緻密。黒色粒を含む。	型成形。徳化窯。髹付に砂目?がある。	L-14 I層
	2	小杯	外反	口 底 部	3.8 2.1 1.9	無文	外面に瑠璃釉、内面に透明釉を掛け分ける。口唇部を釉剥ぎする。	白色で緻密。黒色粒を含む。	型成形。徳化窯。髹付に砂目がある。	E-F-13 TP12 I層
	3	小碗	-	底 部	- - 4.6	無文	外面に鉄釉、内面に透明釉を掛け分ける。	白色で緻密。	型成形。徳化窯。	K-15 I層
	4	皿	外反	口 底 部	11.0 3.0 5.0	無文	両面に白化粧の上から翡翠釉を施釉。髹付～外底は露胎。	赤みを帯びた淡黄白色で粗い。		L-14 I層
	5	瓶	外反	口 縁 部	7.0 - -	口唇部に2本の沈線を超らす。	両面に白化粧の上から翡翠釉を施釉。	灰色で粗い。	被熱により、翡翠釉の大部分が剥落している。	L-14 I層
	6	水注	-	口 縁 部	4.9 - -	外面口縁部に線彫りによる文様。	外面に緑釉、黄釉を施釉。内面は露胎。	淡黄灰色で粗い。黒色粒を含む。	明代。	K-16 TP9 I層
	7	水注	-	頸 部	- - -	外面に波状文。	外面に白化粧の上から緑釉を施釉。内面は頸部途中から露胎。	黄灰色で粗い。黒色粒を含む。	明代。鶴形水注か。	L-14 I層
	8	瓶	-	胴 部	- - -	外面胴部に花唐草文?	外面に白化粧の上から緑釉を施釉。内面は露胎。	黄褐色でやや粗い。黒色粒を含む。	明代。	I-J-14 TP2 I層
	9	盤	-	底 部	- - -	内面に花文	内底は白化粧の上から緑釉、黄釉、茶色の釉を施釉。外底は白化粧を施し、一部緑釉がみられる。	黄褐色を呈するが、芯部が灰色とサンドイッチ状になっており、粗い。黒色粒、白色粒と、僅かに赤色粒も含む。	明代。上げ底。	H-19 表採
	10	鉢	-	口 縁 部	- - -	無文	内面口縁部下まで銅緑釉を施釉。	黄白色で粗い。黒色粒を多く含む。	明代。口縁部は絞花になっている。	F-G-13 TP14 II層
	11	急須	-	口 縁 部	5.2 - -	無文	無軸	暗茶紫色でやや緻密。微細な白色粒を僅かに含む。	口唇部は平坦に成形。外面は磨かれる。宜興窯。	L-15 I層
	12	急須	-	口 縁 部	5.6 - -	無文	無軸	茶褐色で緻密。微細な白色粒を僅かに含む。	口唇部は平坦に成形。外面は磨かれる。内面に指圧痕が残る。宜興窯。	L-15 I層
	13	小壺	-	口 縁 部	6.6 - -	無文	無軸	暗茶紫色でやや緻密。微細な白色粒を含む。	口唇部は平坦に成形。口縁部は玉縁状を呈する。外面は磨かれる。内面に指圧痕が残る。宜興窯。	L-14 I層
	14	蓋	-	口 底 部	6.0 - 4.6	無文	無軸	暗茶紫色でやや緻密。微細な白色粒を僅かに含む。	端部を平坦に成形。外面は磨かれる。宜興窯。	K-15 I層

第25表 その他の輸入陶磁器観察一覧2

挿図番号 図版番号	番号	器種	器形	部位	口径 高さ 底径 (cm)	観察事項			グリッド 層	
						文様構成	軸 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)		所見
第45図 図版48	15	蓋	-	口 底 部	5.4 - 4.4	無文	無軸	赤褐色で緻密。	端部を三角形に成形。 外面は磨かれる。宜興窯。	F・G-13 TP14 ST3 IV層 瓦ダマリ下
	16	蓋	-	根 み	- 2.8 -	無文	無軸	赤褐色でやや緻密。 白色粒、黒色粒、 赤色粒を含む。	最上部から下へ1.6mmのところ でくびれる。くびれから下に 1段の段がある。中央部に6mm 幅の孔を内面側から穿って いる。外面は磨かれる。	F・G-13 TP14 II層
	17	急須	-	底 部	- - 4.4	無文	無軸	暗赤褐色でやや緻密。 白色粒を含む。	碁笥底。外面は磨かれる。 外底に銘あり。宜興窯。	F・G-13 TP14 ST4 III層
	18	急須?	-	底 部	- - -	無文	無軸	暗茶紫色でやや緻密。 微細な白色粒 を含む。	畳付を平坦に成形。胴部に角 を持つ。外面は磨かれる。 宜興窯。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
	19	壺	-	口 縁 部	9.6 - -	無文	暗灰茶色の軸を 外面に施軸。	暗灰黄褐色で粗い。 大小の白色粒、褐色粒、 黒色粒を多く含む。	内外面ともに轆轤痕が明瞭。	G-19 TP15 I層
第46図 図版49	20	蓋	-	端 部	- - -	無文	無軸	明橙白色を呈するが、 芯部が灰色とサンドイ ッチ状になっており、 やや緻密。赤色粒や 茶色粒を多く含む。	端部の突起は貼り付けによる。	L-14 I層
	21	鉢	外 反	口 縁 部	- - -	内面口縁部 下部に3本の 圓線。	透明感のある淡灰緑 色の軸を施軸。 内外面ともに細かい 貫入がみられる	灰白色で粗い。 黒色粒を多く含み、 僅かに白色粒も含む。	外面口縁部下部を削り出して 成形している。	L-15 II層 蓋溝2内
	22	双耳 瓶	-	胴 部	- - -	肩部に数本の 圓線。	黒軸を内面途中まで 施軸する。	白灰色でやや粗い。 黒色粒、茶色粒を多く 含む。	内面は轆轤痕が明瞭。シーサ ップチャナライ窯。	G-19 TP15 III層
	23	碗	内 凹	口 縁 部	- - -	無文	暗オリーブ色の軸を 施軸。	灰白色でやや粗い。 黒色粒、白色粒を多く 含む。	東南アジアの可能性が考えら れる。	L-15 I層
	24	壺か 甕	-	頸 部	- - -	外面に文様 が施される が不明瞭	淡い白灰色の軸を 内外面に施軸。	白灰色で緻密。 黒色粒を含む。	被熱を受けている。25と同一 固体と考えられる。	I層
	25	壺か 甕	-	底 部	- - -	胴部下部に 植物の葉の 文様	淡い白灰色の軸を 内外面に施軸。 内外面ともに貫入が みられる。	白灰色で緻密。 黒色粒を含む。	被熱を受けている。24と同一 固体と考えられる。	K-15 I層
26	壺	-	口 縁 部	17.2 - -	無文	褐軸を内外面に 施軸し、口唇部は雑 に軸刺ぎする。	暗い灰色で粗い。 黒色粒、白色粒、 赤色粒、透明粒を多く 含む。	口唇部上面を平坦に仕上げる。 口唇部下部は舌状を呈する。 タイ産か?	F・G-13 TP14 II層	



第45図 その他の輸入陶磁器 1



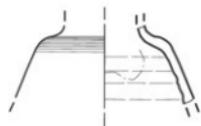
図版48 その他の輸入陶磁器 1



20



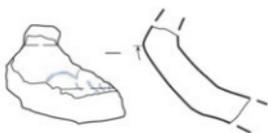
21



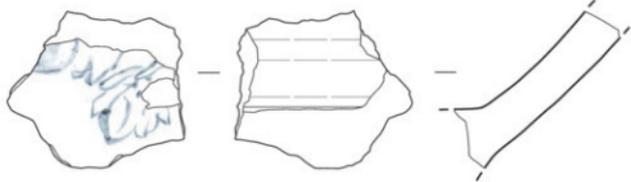
22



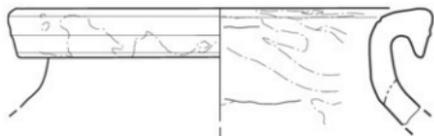
23



24



25



26



第46図 その他の輸入陶磁器2



図版49 その他の輸入陶磁器 2

第8節 本土産陶磁器 (第26・27表、第47～54図、図版50～57)

本土産陶磁器は青磁・染付・色絵・近代磁器・陶器が出土しており、産地は肥前・砥部・瀬戸及び美濃・京や信楽を含む関西系・丹波・薩摩・備前などが確認されている。当該資料も中国産の染付や色絵と同様に19世紀代の製品(具体的には染付や色絵の皿類)が多く、そのほとんどが被熱し細片化しているといった特徴を持つ。以下に種類別に概観し、詳細は観察表に記す。

1. 青磁 (1)

鈔緑口縁を呈する皿が出土している。

2. 染付 (2～10・11～18)

2は直口口縁の碗で、3は腰部に稜を持ち筒状に立ち上がる猪口である。4は蓋で碗に対応する可能性が高い。5～14は皿類で、形態別に長皿(5)、角皿(6)、蛇の目凹形高台を有する直口口縁皿(7・8)、口縁部が端反または鈔緑を呈する大皿(9～14)などに細分される。15は端反口縁の鉢で、平面観を八角形に成形する。16～18は瓶で、小型の徳利や大型の花瓶がある。

3. 色絵 (19～36)

19は端反口縁の鉢で、平面観を八角形に成形する。20は筒状の猪口である。21は碗類に対応する蓋で、高台付の皿を伏せた器形を呈する。22は徳利形の瓶で、底部は削り出しのみで高台を持たない。23～36は皿類で、形態別に長皿(23～26)、蛇の目凹形高台を有する直口口縁皿(27～29)、端反口縁皿(30・31)、口縁部が直口または端反で口唇部を波状に成形する大皿(32～36)などに細分される。

4. 近代磁器 (37～43)

37～41は印判染付で、器種は碗・蓋・皿・タイルがある。42と43は西洋陶器を模倣した洋食器の皿である。

5. 陶器 (44～61)

器種は碗・小碗・小杯・皿・香炉・搦鉢・瓶・甕・壺などが確認されている。碗は天目に似た器形が想定されるもの(44)と直口口縁のもの(53)がある。小碗(47)は体部が丸みを帯びる直口口縁のもの。小杯(52)は高台際削りを入れ体部が開く。皿は粗製の小型品(45・51)と精製の菊花皿(50)がある。香炉(55)はいわゆる三足香炉と考えられる。搦鉢は口縁部の両面を肥厚させ口唇部をくぼませるもの(46)と、口縁部を屈曲して直立させるもの(62)がある。瓶(54・60)は筒状に立ち上がるもので、底部形態に差異がみられる。甕は口縁部を外側に折り曲げるもの(56)と、口縁部の断面形態を「T」字状に成形するもの(57・58)がある。壺は玉縁状に肥厚した口縁部(59)と、同種の器形が想定される底部(61)を図化した。他に胴部に透かし彫りを施す蓋付の袋物(48・49)が出土している。

第26表 本土産陶磁器観察一覧1

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 高さ (cm)	観察事項			グリッド 層
				釉 (色・範囲)	素地	文様等	
第47図 図版50	1	皿 青磁 口縁部	24.1 — —	黄緑灰色。両面。	灰白色で細かい。	無文。肥前産で17c後半か。	表探
	2	碗 染付 底部	— — 5.2	明黄緑灰色。両面、畳付軸測ぎ。	灰色で細かい。	外面に圈線、内底に草花文。呉須の発色は不良。肥前産で17c後半。	G・F-13 TP14 ST2 Ⅲ層
	3	壺口 染付 底部	— — 4.0	灰白色。両面、畳付軸測ぎ。	白色で緻密。	外面に微塵唐草文+蓮弁文。、内面に四方禪文。肥前産で17c後半。	L-15 1層
	4	蓋 底 底 底 底 底 底	— — — — — — —	灰白色。両面、底端部と袴軸測ぎ。	灰白色で細かい。	外面に草花文。両面に細かい貫入。肥前産で18c前半。	K-14 1層
	5	長皿 染付 口 底	— — (4.2) —	灰白色。両面、畳付軸測ぎ。	灰白色で緻密。	外面に唐草文、外底に「大明成化年製」の銘、内面に微塵唐草文、内底に剣先連続文+三友文。肥前産で19c。	J-15 TP7 1層
	6	皿 染付 口縁部	15.1 — —	灰白色。両面。	白色で緻密。	口縁。両面に草花文。肥前産で17c後半～18c前半。	I-J-14 TP2 Ⅱ層 溝2内
	7	皿 染付 底部	— — 8.2	明緑灰色。両面、畳付軸測ぎ。	白色で緻密。	外面に唐草文。内面に円形連続意輪(中に草花文)、内底に雲文か。肥前産で19c。	L-15 1層
	8	皿 染付 底部	— — 9.3	灰白色。両面、外底軸測ぎ。	灰白色で細かい。	外面に唐草文、内面に微塵唐草文、内底に楡垣文+三友文。外面に細かい貫入。肥前産で18c後半～19c。	J-14 TP3 Ⅱ層 溝2内 ベルト
	9	大皿 染付 口 底	26.0 3.1 16.2	灰白色。全面、畳付軸測ぎ。	白色で緻密。	外面に折枝梅文、内面に雷文、内底に草文か。全体に被熱。肥前産で19c。	K-15 1層
	10	大皿 染付 口縁部	30.8 — —	灰白色。両面。	灰白色で細かい。	外面に山水文、内面に白抜き蔓草文+山水文。肥前産で19c。	K-15 1層
第48図 図版51	11	大皿 染付 底部	— — 18.0	灰白色。両面。	灰白色で細かい。	両面に山水文。肥前産で19c。	K-15 ベルト 1層
	12	大皿 染付 口縁部	— — —	明緑灰色。両面。	灰白色で細かい。	外面に花唐草文、内面に白抜き牡丹唐草文+三友文か。全体に被熱。肥前産で19c。	K-15 1層
	13	大皿 染付 底部	— — 19.8	明緑灰色。両面、畳付軸測ぎ。	灰白色で緻密。	外面に蓮弁文+○×連続文、内底に三友文?+花唐草文。肥前産で19c。	L-15 1層
	14	大皿 染付 底部	— — 23.2	灰白色。内底～畳付、畳付軸測ぎ。	灰白色で緻密。	外面に芙蓉手文、高台外面に波瀆文、内面に芙蓉手文、内底に白抜き雷文。肥前産で19c。	K-15 1層
	15	鉢 染付 口縁部	— — —	灰白色。両面。	灰白色で緻密。	外面に白抜き梅花文、内面に青海波文+白抜き四方禪文。肥前産で19c前半。	L-15 1層
	16	瓶 刷部	— — —	明黄緑灰色。内面頸部～外面。	灰白色で細かい。	外面に山水文か。肥前産で17c後半。	表探
	17	瓶 染付 底部	— — 5.2	灰白色。外面、畳付軸測ぎ。	灰白色で細かい。	外面に圈線。外面に細かい貫入。肥前産で17c後半。	L-15 1層
	18	大瓶 染付 底部	— — —	明緑灰色。両面。	灰白色で緻密。	外面に蓮池文?+雷文。肥前産で19c。	K-14 1層

第26表 本土産陶磁器観察一覽2

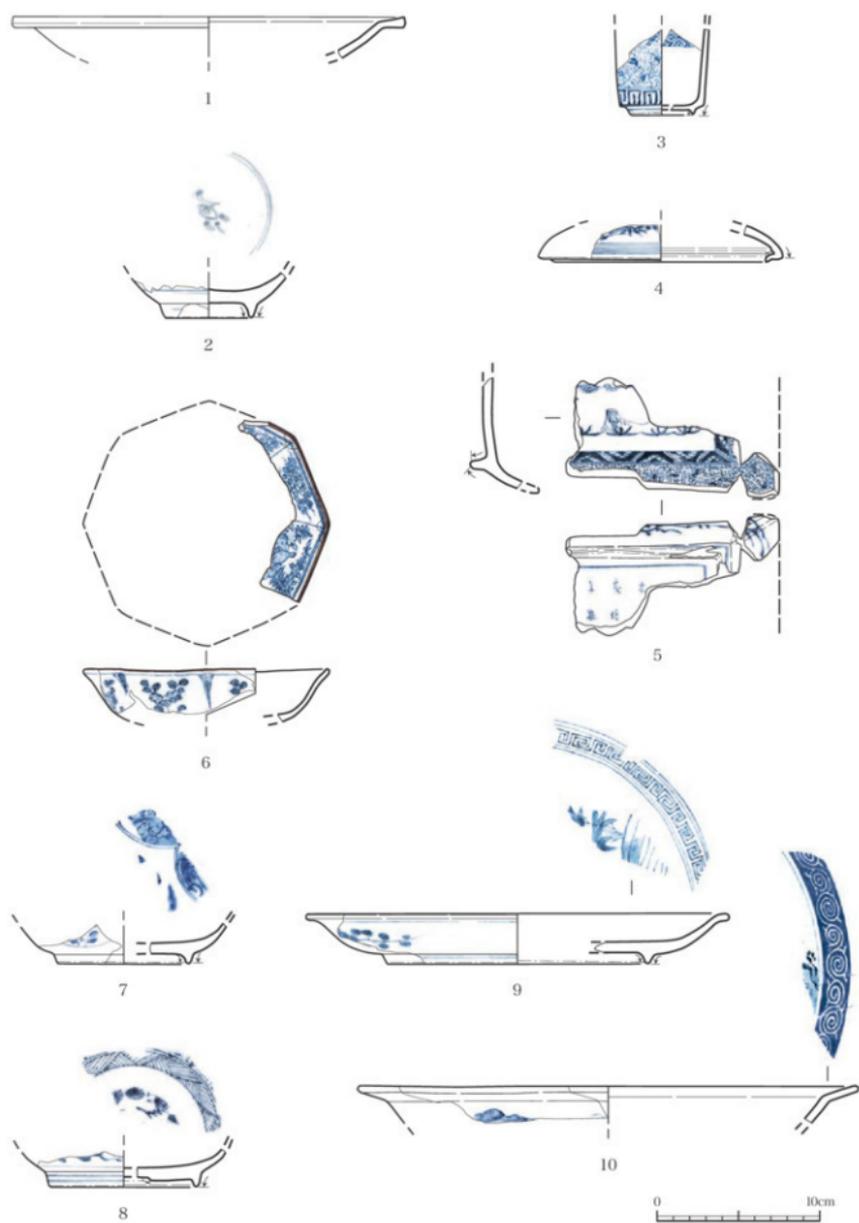
柄図番号 図版番号	番号	器類	部位	口径 高さ 底径 (cm)	観察事項			グリッド 層
					軸 (色・曜潤)	素地	文様等	
第49図 図版52	19	鉢	色絵 口 底	13.4 7.0 6.6	灰白色、両面 畳付軸割ぎ。	灰白色で 細かい。	外面に赤・黒・青で柳文か、内面に染付・赤・金?で人 子菱文+鎖文か、内底に染付で不明文。両面に細かい 貫入。全体に被熱か。肥前産で19c。	K-15 1層
	20	箸口	色絵 口 底	5.0 5.7 3.4	灰白色、両面、 畳付軸割ぎ。	灰白色で 細かい。	外面に染付・金・緑で魚藻文か、内面に染付で四方禪文。 全体に被熱。肥前産で19cか。	K-15・L-14 ベルト 1層
	21	蓋	色絵 撮り 疵	4.2 2.6 10.0	灰白色、両面、 畳付軸割ぎ。	灰白色で 緻密。	外面に染付・赤・金・黒で草花文、内面及び内底に染付で 雷文+花文。肥前産で19c。	F-13 TP13 ST2 皿層
	22	瓶	色絵 底 部	- - 7.8	明緑灰色。外面、 畳付軸割ぎ。	灰白色で 細かい。	外面に染付・金で三友文?+蓮弁文。外面に細かい貫入。 全体に被熱。肥前産で18cか。	K-14 II層 満2内
	23	長皿	色絵 口 底	11.6, 20.6 3.9 6.6, 4.5	灰白色、両面、 畳付軸割ぎ。	灰白色で 緻密。	口筋か、染付で外面に花唐草文+雷文、外底に「富貴長 春」の銘、内面に染付・赤・金・緑で唐草文+雲芝文 か、内底に染付・金で菊花文か。外底にハリササエ跡? が1ヶ所残る。肥前産で19c。	K-15・L-14 ベルト 1層
	24	長皿	色絵 口 底	11.5 3.6 7.1, 3.5	明緑灰色。両面、 畳付軸割ぎ。	灰白色で 緻密。	口筋か、染付で外面に花唐草文+雷文、外底に「富貴 長春」の銘、内面に染付・赤・金・緑・黒?で牡丹唐草文 +草花文か、内底に染付で三友文。肥前産で19c。	K-15 1層
	25	長皿	色絵 口 底	(10.7) (3.5) 6.1	灰白色、全面、 畳付軸割ぎ。	灰白色で 緻密。	外面に染付で花唐草文+雷文、内面に染付・赤・金・黒? で牡丹+四方禪文、内底に染付で唐草文。	L-15 1層
第50図 図版53	26	長皿	色絵 口 底	11.6 3.4 6.5	明緑灰色。両面、 畳付軸割ぎ。	灰白色で 緻密。	口筋か、染付で外面に花唐草文+雷文、外底に「富貴長 春」の銘、内面に染付・黄・緑・赤?で白抜き草文+菊 花文か、内底に染付で牡丹唐草文。肥前産で19c。	K-14 1層
	27	皿	色絵 口 底	15.0 4.9 9.2	灰白色、全面、 外底軸割ぎ。	灰白色で 細かい。	外面に染付で唐草文、内面に染付・赤・青・金・紺?で 四方禪文+唐草文、内面に被熱か。肥前産で19c。	L-14 1層
	28	皿	色絵 口 縁部	14.4 - -	灰白色、両面。	灰白色で 緻密。	外面に染付で唐草文+○×連続文、内面に染付・赤で 唐草文+四方禪文。肥前産で19c。	L-15 1層
	29	皿	色絵 底 部	- - 9.0	灰白色、両面、 外底軸割ぎ。	灰白色で 細かい。	外面に染付で○×連続文、内面に赤・橙・金で四方禪文 +唐草文、内底に花文+三友文。肥前産で19c。	L-15 1層
	30	皿	色絵 口 縁部	15.8 - -	灰白色、両面。	白色で緻密。	外面に染付で唐草文+蓮弁文、内面に染付・赤・橙・金で 牡丹文+四方禪文。肥前産で19c。	L-15 1層
	31	皿	色絵 底 部	- - 8.6	明緑灰色。両面、 畳付軸割ぎ。	白色で緻密。	外面に染付で唐草文+蓮弁文、内面に染付・赤・橙・金で 牡丹文+四方禪文。肥前産で19c。	K-15 ベルト 1層
第51図 図版54	32	大皿	色絵 口 底	24.8 3.8 16.6	灰白色、両面、 畳付軸割ぎ。	灰白色で 緻密。	口筋か、外面に染付で蝶文、内面に染付・緑・橙・青・黒? で四方禪文+松文+青海波文、内底に染付・橙で花唐草文 +雲龍文、外底にハリササエ跡が2ヶ所残る。全体に被熱。 肥前産で19c。	K-14 1層
	33	大皿	色絵 口 底	21.0 2.7 13.8	明緑灰色。全面、 畳付軸割ぎ。	灰白色で 細かい。	外面に染付で唐草文+○×連続文、内面に染付・赤・金で 山水樓閣文か。全体に被熱。肥前産で19c。	K-15 1層
	34	大皿	色絵 口 底	21.0 3.0 14.2	明緑灰色。全面、 畳付軸割ぎ。	灰白色で 緻密。	口筋か、外面に染付で宝文、外底に「成化年製」の銘、 内面及び内底に染付・橙・金・赤で捻花文地(中に草花文・ 竹垣文)+花鳥文。外底にハリササエ跡が1ヶ所残る。 肥前産で19c。	K-14 1層
	35	大皿	色絵 口 底	22.0 3.4 13.8	灰白色、全面、 畳付軸割ぎ。	灰白色で 緻密。	口筋か、染付で外面に唐草文、外底に「大明成化年製」 の銘か。内面に染付・赤・金で雲芝文?+草花文+毘沙門 亀甲文、内底に染付で波瀾文+三友文。外底にハリササエ 跡が3ヶ所残る。肥前産で19c。	K-14 1層
	36	大皿	色絵 口 底	29.2 6.2 15.3	灰白色、全面、 畳付軸割ぎ。	灰白色で 細かい。	外面に染付で圓線、内面に染付・金・藍?で唐草文+芭蕉 文か、内底に染付・赤・金で刺先連続文+不明文。 肥前産で19c~近代か。	K-15 ベルト 1層

第26表 本土産陶磁器観察一覧3

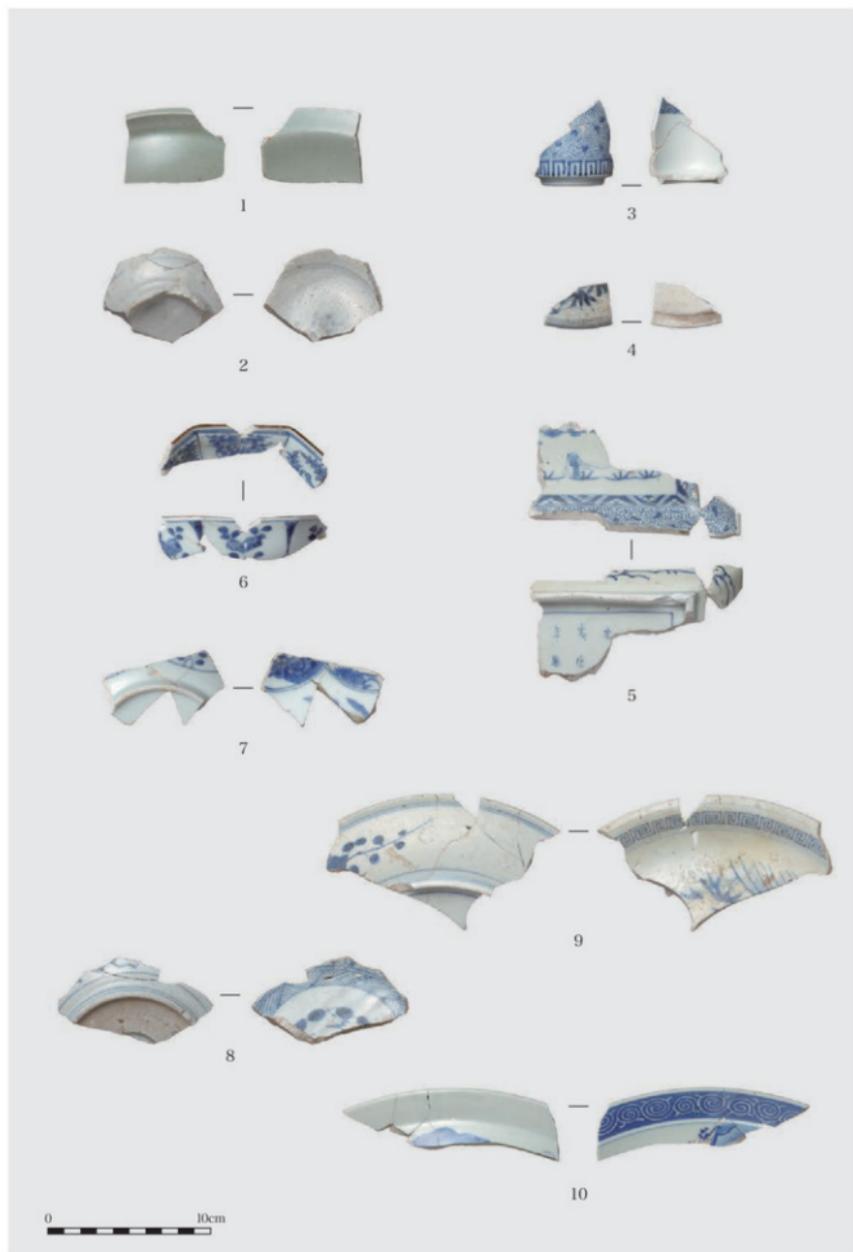
標図番号 図版番号	番号	器種	分期	部位	口径 高さ (cm)	軸 (色・輪)	素地	観察事項		グリッド 層
								文様等		
第52図 図版55	37	碗	近代	口底	13.5 6.7 4.7	灰白色。全面、 畳付軸割ぎ。	灰白色で 緻密。	外面に点描文地に菱形連続意匠(中に菊花文+三角文)、 内面に花文、内底に三友文。内底に重ね焼き時の目跡 が5ヶ所残る。砥部産。	L-16 TP8 I層	
	38	碗	近代	口底	12.0 4.8 3.9	灰白色。両面、 畳付軸割ぎ。	灰白色で 緻密。	外面に松文、外底に「古瀬戸製」の銘。瀬戸・美濃産。	表採	
	39	蓋	近代	握み	5.5 -	灰白色。両面、 畳付軸割ぎ。	灰白色で 緻密。	外面に唐草文、外底に銘款、内底に草花文。砥部産。	J-14 TP3 II層 溝2内	
	40	皿	近代	底部	- 9.3	灰白色。両面、 外底軸割ぎ。	灰白色で 緻密。	外面に花唐草文、内面に散塵唐草文、内底に楡垣文 +三友文。肥前産か。	I-J-14 TP2 II層 溝2内	
	41	タイル	近代	-	-	-	灰白色。全面。	浅黄色で 粗い。	外面に草花文か。側面・裏面に漆喰?が付着。 全面に細かい貫入。瀬戸・美濃産か。	表採
	42	皿	近代	口底	22.2 4.4 12.1	灰白色。両面、 畳付軸割ぎ。	灰白色で 緻密。	内面に青・緑で圏線。瀬戸・美濃産。	K-1 I層	
第53図 図版56	43	皿	近代	底部	- 7.4	透明軸。両面、 畳付軸割ぎ。	白色で緻密。	外底に朱で「名陶硬質磁器/Nagoya Seitoshu」の銘。 瀬戸産。	L-14 I層	
	44	碗	陶器	底部	- 4.6	黒褐色。内底～ 外面割ぎ。	鈍黄褐色で 粗い。	無文。器形は天目形か。肥前産で17c前半。	F・G-13 TP14 ST2 III層	
	45	碗	陶器	底部	- 5.0	灰黄緑色。 内底～高台際、 内底軸割ぎ。	灰白色で 粗い。	無文。肥前産で17c後半。	表採	
	46	摺鉢	陶器	口縁部	- -	黒褐色。両面口 縁部。	灰褐色で 粗い。	外面口縁部に沈線。内面の脚目は7本確認。 肥前産で17c前半。	I-15 TP4 I層	
	47	小碗	陶器	底部	- 4.0	淡黄色。内底～ 外面割ぎ。	浅黄色で 細かい。	外面に青・緑で文様を描くか詳細不明。 両面に細かい貫入。全体に被熱か。京焼で18～19cか。	K-15 II層	
	48	袋物	陶器	口縁部	10.0 -	灰白色。両面、 口唇部軸割ぎ。	灰白色で 細かい。	外面に金・黒で文様を描くか詳細不明。割部に雲形? の透かし彫り。両面に細かい貫入。京焼で18～19cか。	K-14 II層	
	49	袋物	陶器	底部	- 10.6	灰白色。両面、 畳付軸割ぎ。	灰白色で 細かい。	外面に金・黒で蓮弁文か。両面に細かい貫入。 京焼で18～19cか。	L-14 I層	
	50	陶器	口底	18.8 3.1 13.2	灰黄色。全面、 畳付軸割ぎ。	灰白色で 細かい。	内面に緑・青・紫?で草花文。両面に細かい貫入。 全体に被熱。京焼で18～19cか。	K-14 II層 溝2内		
	51	陶器	底部	- 4.4	灰黄緑色。 内底～外面割ぎ。	鈍黄褐色で 細かい。	無文。外底と内底に重ね焼き時の痕跡が2ヶ所ずつ 残る。外面に一部被熱。関西系で18～19cか。	E・F-13 TP12 I層		
	52	小杯	陶器	底部	- 3.0	灰白色。 内底～外面割ぎ。	灰白色で 細かい。	無文。関西系で18～19cか。	E・F-13 TP12 I層	
	53	碗	陶器	底部	- 5.5	灰白色。両面、 畳付軸割ぎ。	灰白色で 細かい。	外底に沈線。両面に細かい貫入。全体の黒ずみは 被熱か。関西系で18～19cか。	J-14 TP3 II層 溝2内 ベルト	
	54	瓶	陶器	底部	- 9.6	灰褐色。外面。	鈍赤褐色で 細かい。	無文。朱泥か。関西系で18～19cか。	F・G-13 TP14 ST2 III層	
	55	香炉	陶器	底部	- 6.4	灰白色。外面、 畳付軸割ぎか。	灰白色で 細かい。	無文。内底に重ね焼き時の痕跡が3ヶ所?残る。 外面に細かい貫入。外面の黒ずみは被熱か。 関西系で18～19cか。	L-15 I層	
	第54図 図版57	56	鉢	陶器	口縁部	33.8 -	暗黄赤色。両面。	浅黄色で 粗い。	無文。口縁端部は外側折り返し。丹波産で18cか。	L-16 TP11 I層
57		鉢	陶器	口縁部	32.0 -	浅黄色。両面、 口唇部軸割ぎ。	灰褐色で 粗い。	外面口縁端部に沈線2条。薩摩産で18～19cか。	J-14 TP1 IV層 円石	
58		鉢	陶器	口縁部	33.0 -	黄緑黒色。両面、 口唇部軸割ぎか。	鈍褐色で 粗い。	無文。両面に細かい貫入か。薩摩産で18～19cか。	I-13 LT I層	
59		壺	陶器	口縁部	18.0 -	黄緑黒色。両面。	鈍褐色で 粗い。	無文。薩摩産で18～19cか。	F・G-13 TP14 ST2 IV層	
60		瓶	陶器	底部	- 10.3	暗灰黄色。両面、 外底軸割ぎ。	黄灰色で 細かい。	外面の軸は股肌状。無文。薩摩産で近代。	F・G-13 TP14 ST2 III層	
61		壺	陶器	底部	- 19.0	無軸。	灰色で粗い。	無文。両面に成形時の痕跡(轆轤跡か)が残る。 強く焼き締まる。薩摩産?で18～19cか。	I-14 TP2 北 I層	
62	摺鉢	陶器	口縁部	20.0 -	無軸。	暗褐色で 細かい。	外面口縁部に沈線2条。内面に9本単位の脚目。 強く焼き締まる。備前産で16c。	L-14 I層		

第27表 本土産磁器集計表2

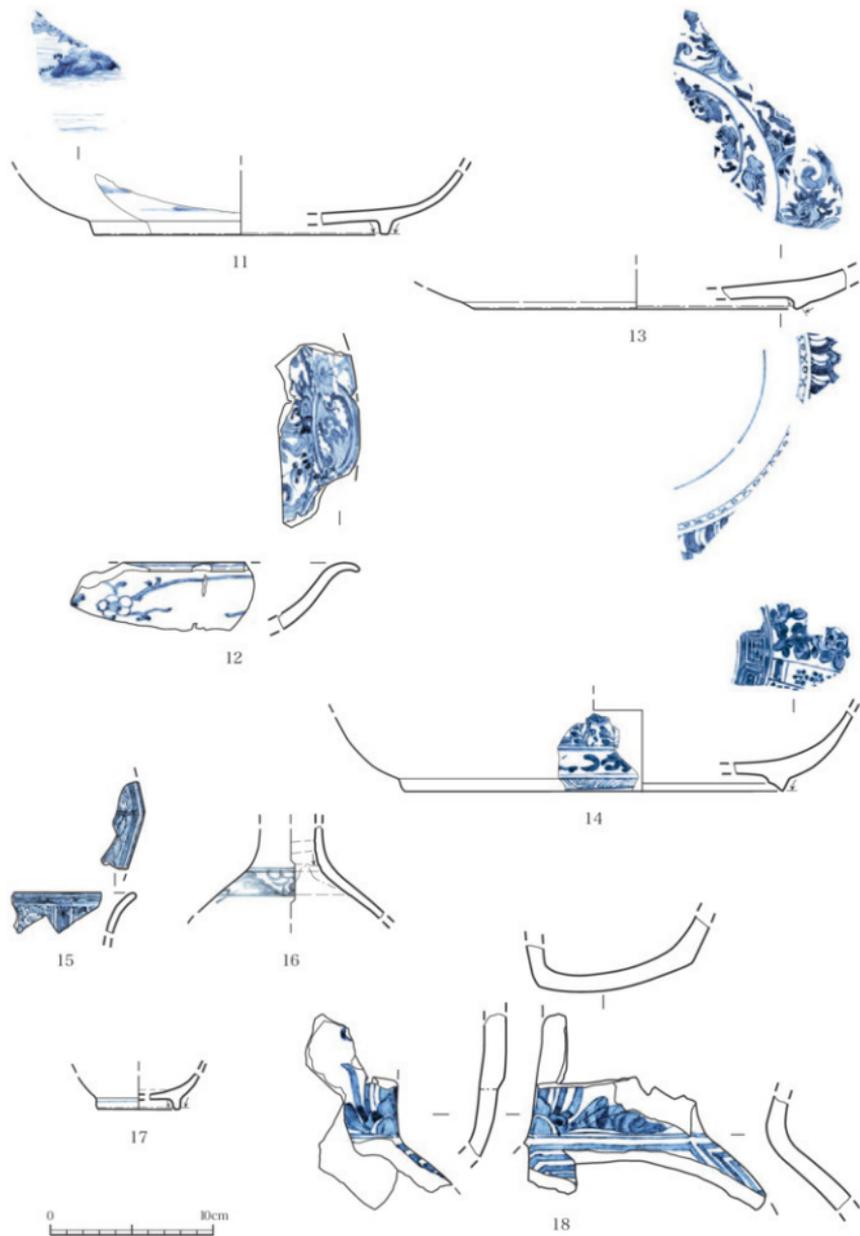
産地・産品名	13年			14年			15年			16年			17年			18年			19年			合計
	数量 (千口)	金額 (百万円)	平均 単価																			
小瀬	3			2			2			2			2			2			2			2
小瀬	1			1			1			1			1			1			1			1
小瀬	6			2			2			2			2			2			2			2
小瀬	5			2			1			2			2			2			2			2
大田	6			2			1			3			1			3			1			3
大田	1			2			1			1			1			1			1			1
大田	1			2			1			2			2			2			2			2
大田	1			2			1			2			2			2			2			2
大田	1			3			1			12			10			1			1			1
大田	1			1			1			2			2			2			2			2
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1			1			1			1			1
大田	1			1			1			1												



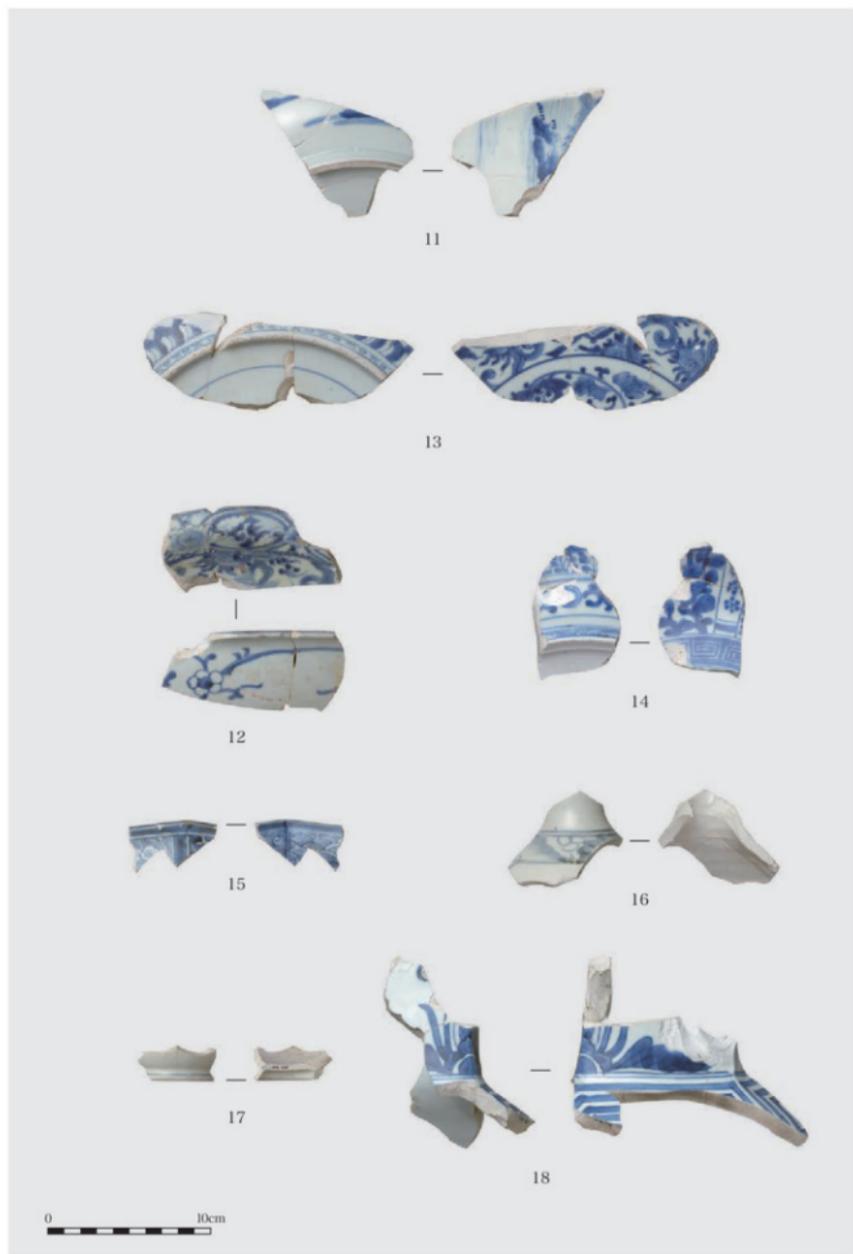
第47図 本土産陶磁器1 (染付)



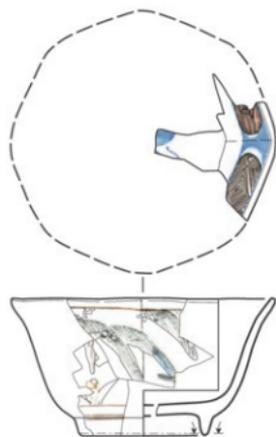
図版50 本土産陶磁器1 (染付)



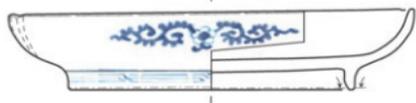
第48図 本土産陶磁器2 (染付)



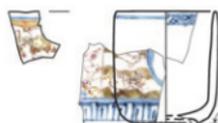
図版51 本土産陶磁器2（染付）



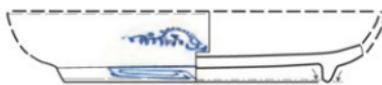
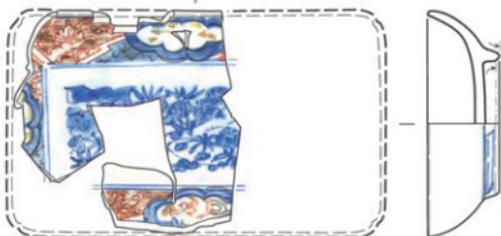
19



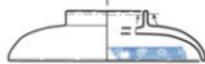
23



20



24



21



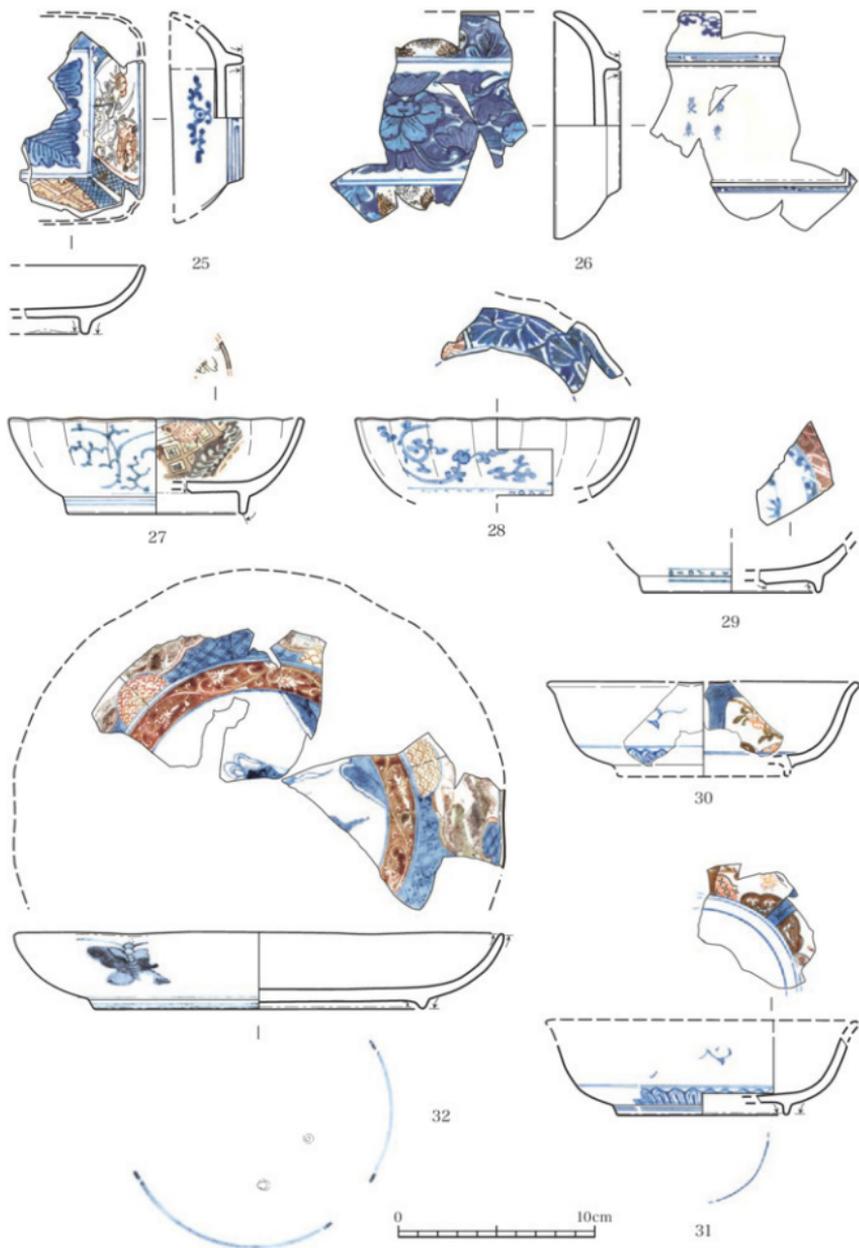
22



第49図 本土産陶磁器3 (色絵)



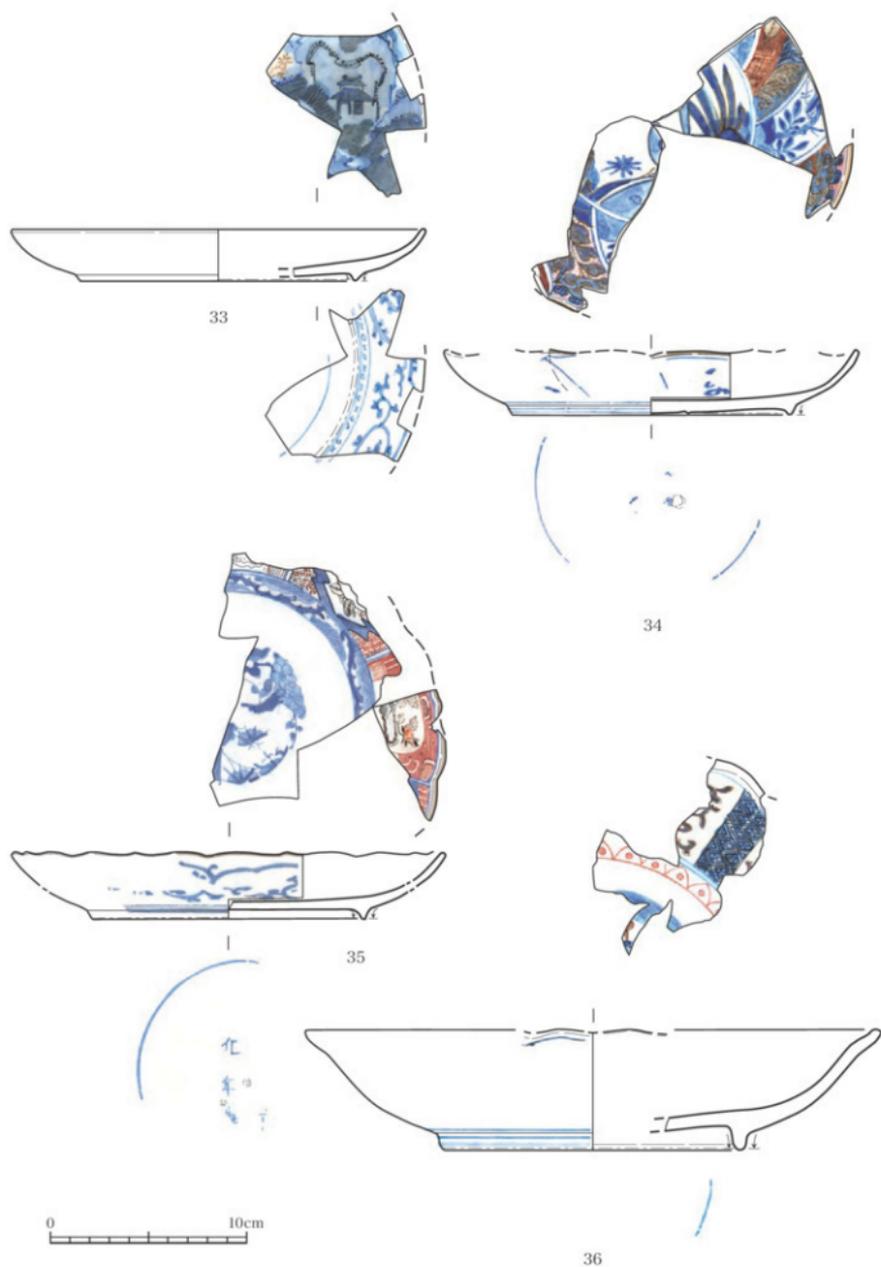
図版52 本土産陶磁器3（色絵）



第50図 本土産陶磁器4（色絵）



図版53 本土産陶磁器4 (色絵)



第51図 本土産陶磁器5 (色絵)



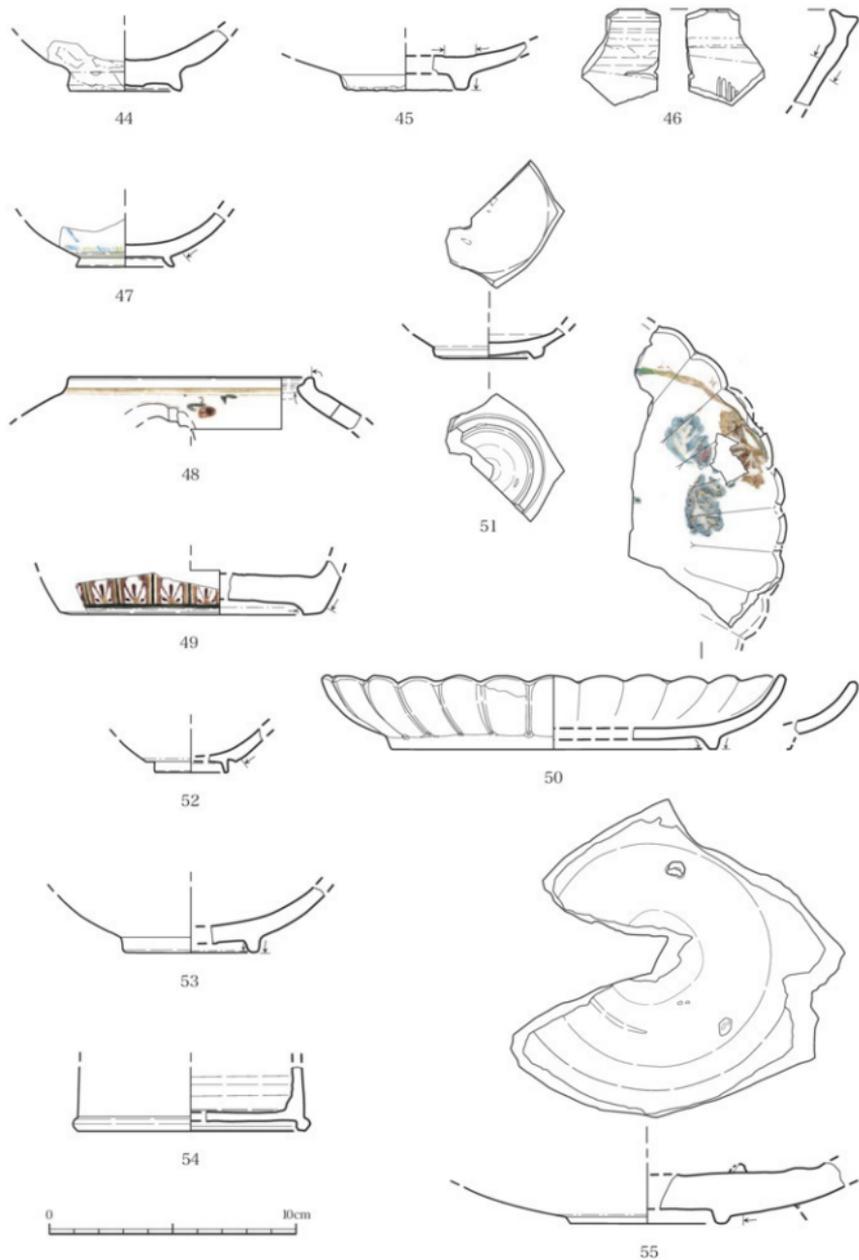
図版54 本土産陶磁器5 (色絵)



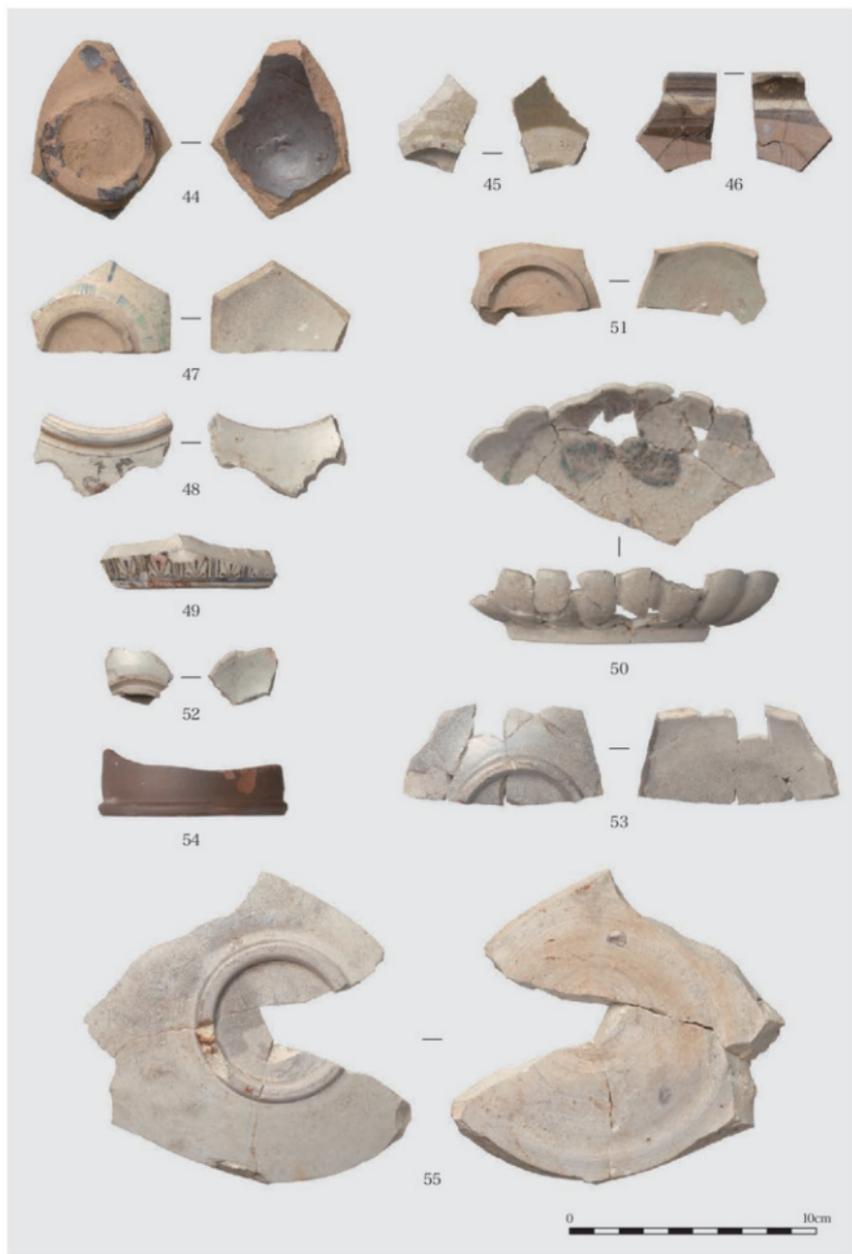
第52図 本土産陶磁器6 (近代)



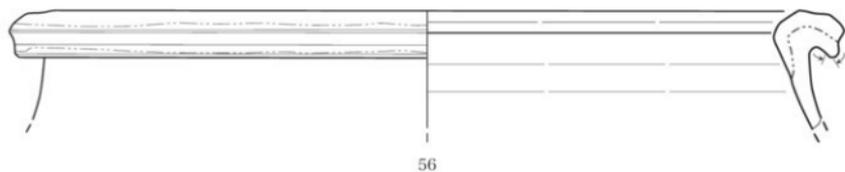
図版55 本土産陶磁器6（近代）



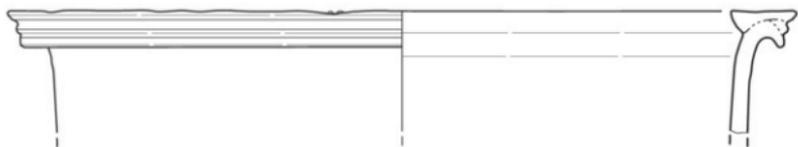
第53図 本土産陶磁器7 (陶器)



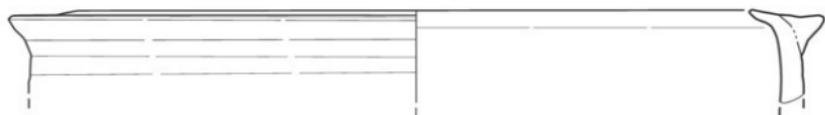
図版56 本土産陶磁器7（陶器）



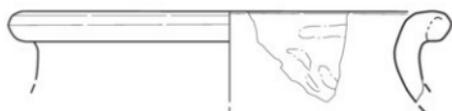
56



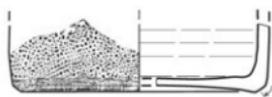
57



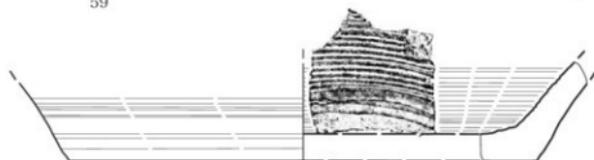
58



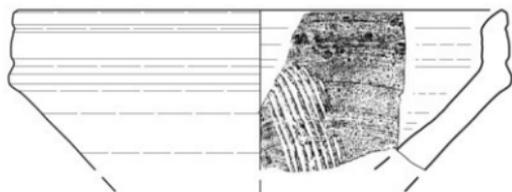
59



60



61



62



第54図 本土産陶磁器8 (陶器)



図版57 本土産陶磁器8 (陶器)

第9節 沖縄産施釉陶器 (第28・29表、第55～59図、図版58～62)

方言で「上焼(ジョウヤチ)」と称される一群で、器の表面に釉薬を塗布する製品を指す。釉薬には灰軸・鉄軸(黒軸や褐軸を含む)・透明軸(素地に白化粧を施すものを含む)などがあり、それに呉須や緑釉で文様を描く例もある。器種は碗・小碗・小杯・灯明具・鍋・皿・大皿・瓶・壺・鉢・急須・火炉・火入・香炉などがみられるが、小碗や皿類に精巧な製品が含まれる。以下に器種別の分類概念を記し、詳細は観察表に記す。

1. 碗 (1～10)

1～3は高台から逆「ハ」の字状に立ち上がるもの。施軸は灰軸単掛けと鉄軸単掛けがある。4、6、7は腰部が丸みを帯びる端反口縁のもので、施軸は鉄軸と灰軸または白化粧+透明軸を掛け分ける。8と9は直口口縁で、施軸は灰軸単掛けと鉄軸単掛け。5と10は外反口縁で、施軸は透明軸単掛けで素地に白化粧を施すものもある。

2. 小碗 (11～22)

11～13は腰部が丸みを帯びる端反口縁のもので、施軸は鉄軸と灰軸または白化粧+透明軸を掛け分けるものと、透明軸単掛けがある。14～16は外面胴部を亀甲状に面取りする端反口縁のもので、施軸は透明軸単掛け(白化粧を施す例あり)及び鉄軸と白化粧+透明軸を掛け分ける。17～19は直口口縁のもので、施軸は鉄軸単掛けと透明軸単掛けがある。20～22は口縁部が内湾するもので、施軸は透明軸単掛けである。

3. 小杯 (23)

端反口縁を呈するもの。施軸は透明軸単掛け。

4. 灯明具 (24)

燭台の脚部と考えられる。施軸は鉄軸単掛け。

5. 鍋 (25・26)

口縁部を外側に折り曲げるもので、外面に紐状の把手を貼付する。施軸は鉄軸単掛け。

6. 皿 (27～31)

27は高台から逆「ハ」の字状に立ち上がり、外面胴部中に稜を持つ。施軸は灰軸単掛け。28と29は直口口縁で口唇部を波状に成形する。施軸は鉄軸と灰軸を掛け分けるものと、透明軸単掛けがある。

7. 大皿 (32)

直口口縁で口唇部を波状に成形する。施軸は透明軸単掛け。

8. 瓶 (33～35)

仏化器や肩の張る小型品などがみられる。施軸は鉄軸単掛けと白化粧+透明軸単掛け。

9. 壺 (36・39)

方言で「アンダガーム」と称される中型の壺である。施軸は鉄軸単掛け。

10. 鉢 (37・38・40)

鈔口口縁と内湾口縁がある。施軸は鉄軸単掛け及び鉄軸と灰軸の掛け分け。

11. 急須 (41～45)

A類：一般的な急須を包括した。胴部は概ね球形で、把手は板状と紐状がある。施軸は透明軸単掛け（白化粧含む）と黒軸単掛け。

B類：方言で「アンピン」と称される高台付の大型急須。施軸は鉄軸単掛け。

12. 蓋 (46～51)

A類：鍋の蓋。高台付の皿を伏せた器形を呈する。施軸は鉄軸と白化粧+透明軸を掛け分けるものと鉄軸単掛け。

B類：急須A類の蓋。施軸は鉄軸単掛けと透明軸単掛け（白化粧含む）で、紫泥の製品もある。

C類：壺の蓋。細片のため今回は図化を見送った。

13. 火炉 (52・53)

腰部に稜を持ち筒状に立ち上がるもので、口縁部は鈔緑で内面に受部を貼付する。施軸は灰軸単掛けと鉄軸単掛け。

14. 火入 (54・55)

腰部に稜を持ち筒状に立ち上がるもの。施軸は鉄軸単掛けと白化粧+透明軸単掛け。

15. 香炉 (56)

三足香炉の獣足部と考えられる。外面に鉄軸を流し掛ける。

第28表 沖縄産施釉陶器観察一覧1

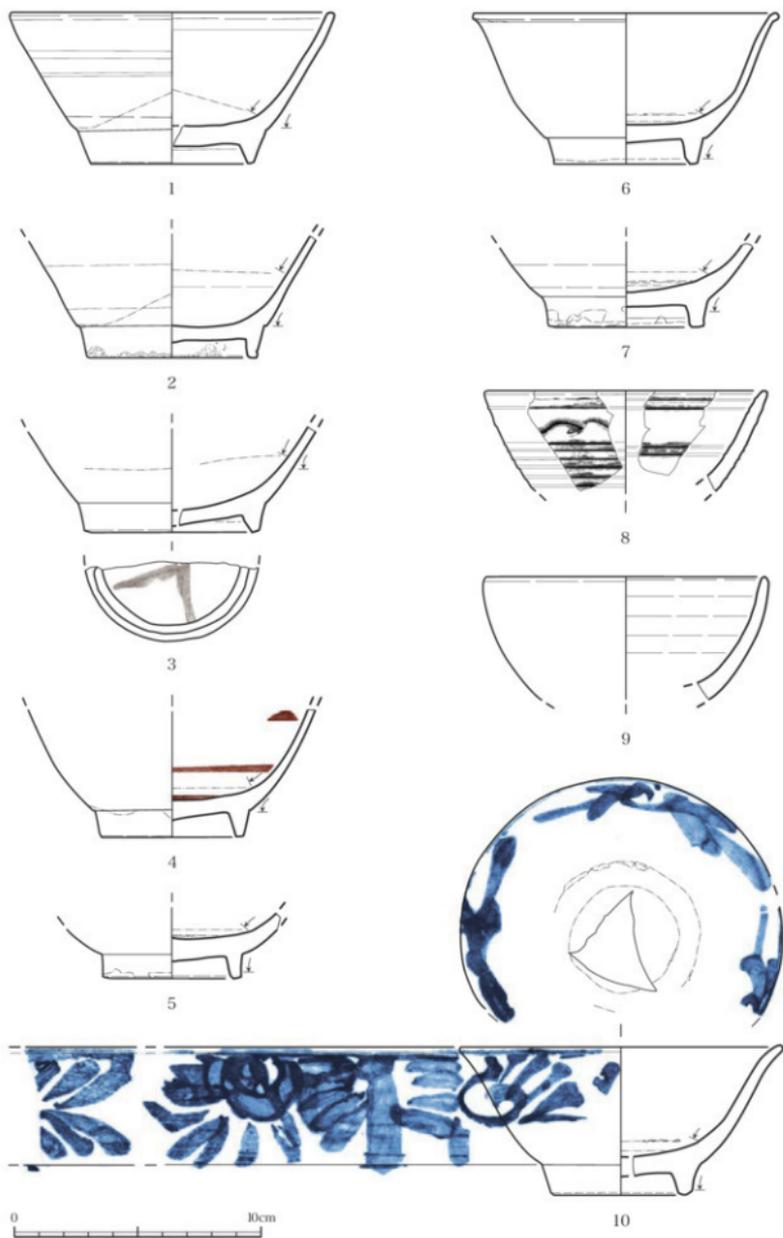
標図番号 図版番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項			グリッド・層
					軸（色・範囲）	素地	文様等	
第55図 図版58	1	碗	直口	13.2	灰黄緑色。 内面胴部～外面 胴部。	淡黄色で 細かい。	無文。	F・G-13 TP14 ST4 Ⅲ層
			口 底	6.2 6.6				
	2	碗	直口	-	暗褐色。 内面胴部～外面 胴部。	灰黄緑色で 細かい。	無文。畳付に一部砂が付着。	E・F-13 TP12 I層
			底 部	6.9				
	3	碗	直口	-	明黄緑灰色。 内面胴部～外面 腰部。	浅黄色で 細かい。	外底にL字状（十字か）の墨書。	K-15 ベルト I層
			底 部	7.1				
	4	碗	端反	-	外面に暗褐色、内面 に暗黄緑色。 内底～高台際、内底 軸割ぎ。	灰色で粗い。	内面に鉄軸で図線、内底に鉄軸で丸文。	E・F-13 TP12 I層
			底 部	5.8				
	5	碗	端反	-	内底～高台際、 内底軸割ぎ。	灰白色で 緻密。	無文。	K-14 I層
			底 部	5.6				
6	碗	端反	12.4	外面に鈍黄褐色、内 面に灰白色。 全面、裡付と内底軸 割ぎ。	灰白色で 細かい。	無文。畳付にアルミナを塗布。 内底にアルミナが付着。内面に細かい貫入。	F・G-13 TP14 ST2 IV層	
		口 底	6.2 5.8					
7	碗	端反	-	黒褐色。 内面胴部～高台 際、内底軸割ぎ。	浅黄色で 細かい。	内底に鉄軸で丸文。畳付にアルミナを塗布。 内底にアルミナが付着。	K-14 I層	
		底 部	6.3					
8	碗	内擲	11.5	暗黄緑色。両面。	灰色で 細かい。	線彫りと白土象嵌で外面に図線+波状文、 内面に図線。全体に白土が流れる。	I・J-13 I層	
		口 縁部	-					
9	碗	内擲	11.6	鈍黄色。両面。	鈍黄褐色で 細かい。	無文。	F・G-13 TP14 ST2 IV層	
		口 縁部	-					
10	碗	外反	13.2	透明軸。 全面、畳付と内底 軸割ぎ。	灰黄色で 細かい。	呉須で両面に菊花文。畳付にアルミナを塗布。 内底にアルミナが付着。両面に細かい貫入。	L-16 TP10 I層	
		口 底	6.1 5.8					
第56図 図版59	11	小碗	端反	9.6	外面に鈍黄褐色、内 面に鈍黄色。 内底～外面腰部、内 底軸割ぎ。	浅黄色で 細かい。	無文。外底に一部鉄軸が付着。内底に砂が付着。	F・G-13 TP14 ST4 Ⅱ層
			口 底	4.9 4.3				
	12	小碗	端反	9.0	外面に黒褐色、内面 に透明軸。 内底～高台外面、内 底軸割ぎ。	灰黄色で 細かい。	無文。畳付にアルミナを塗布。 内底にアルミナが付着。	F・G-13 TP14 ST4 Ⅱ層

第28表 沖縄産施釉陶器観察一覧2

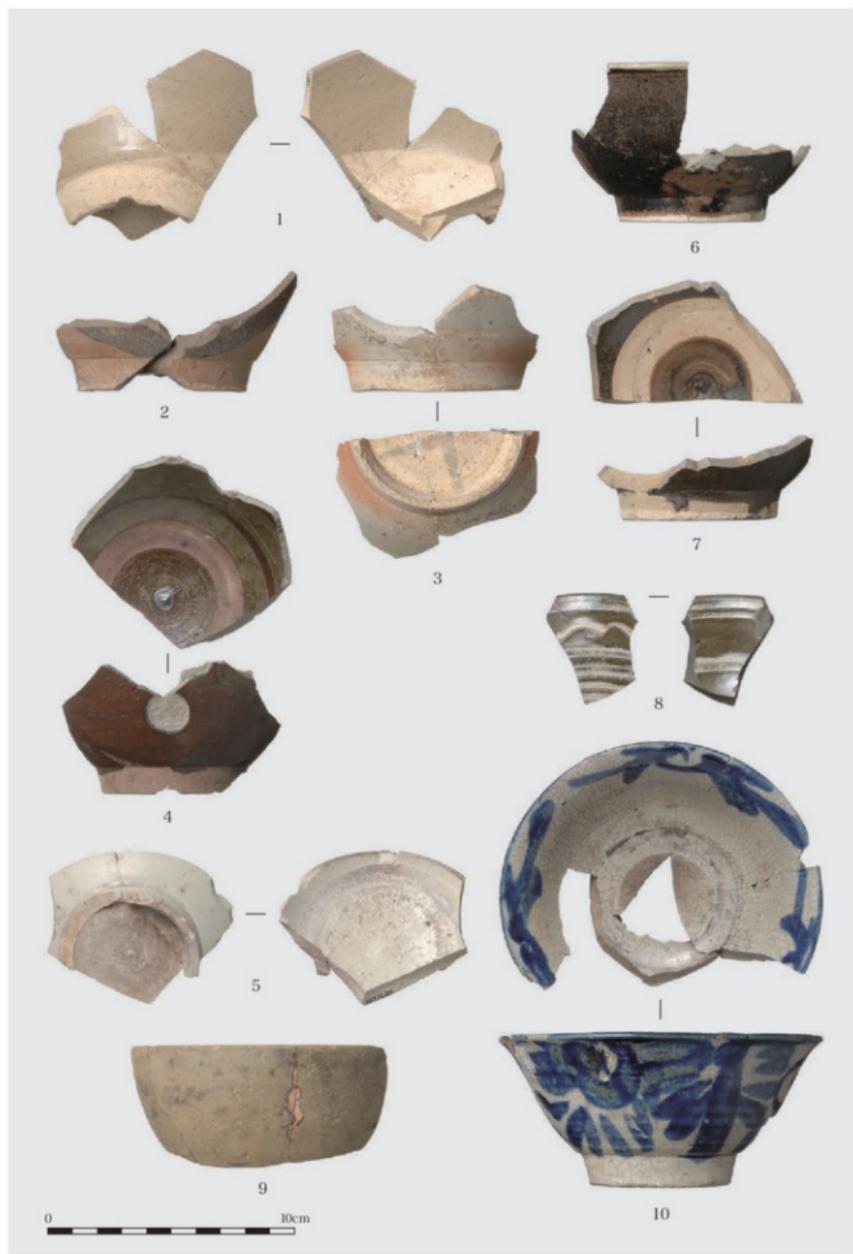
挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 高さ 底径 (cm)	観察事項			グリッド・層	
					釉(色・範囲)	素地	文様等		
第56図 図版59	13	小碗	端反 底部	- - 3.7	灰白色。 全面、畳付と 内底釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	無文。畳付にアルミナを塗布。	F・G-13 TP14 ST4 I層	
	14	小碗	面取 口 底	8.5 4.6 3.9	透明釉。 全面、畳付と 内底釉剥ぎ。	鈍黄褐色で 細かい。	無文。畳付にアルミナを塗布。 両面に細かい貫入。外面に一部被熱。	L-15 II層 ドウ一括	
	15	小碗	面取 口 底	9.3 5.0 3.3	外面に暗褐色、 内面に透明釉。 全面、畳付釉剥ぎ。	灰色で細かい。	無文。畳付にアルミナを塗布。 内底に一部金属片が付着。内面に細かい貫入。	F・G-13 TP14 ST4 II層	
	16	小碗	面取 口 縁部	8.4 - -	透明釉。両面。	灰白色で緻密。	口唇部に緑釉を施釉。	F・G-13 TP14 ST4 I層	
	17	小碗	内湾 口 底	8.5 4.3 3.6	黒色。内底～外 面胴部。	浅黄色で 細かい。	外底に黒書で「京? (寄?)」の字。	F・G-13 TP14 ST4 I層	
	18	小碗	内湾 口 底	9.4 4.5 4.0	透明釉。全面、 畳付釉剥ぎ。	白色で緻密。	外面に線彫りと呉須で「戯」の略称。 畳付にアルミナを塗布。	K-14 II層	
	19	小碗	内湾 口 底	10.0 4.9 3.8	灰白色。全面、 畳付釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	外面に緑・黄・赤で野菜文。 両面に細かい貫入。	K-14 II層	
	20	小碗	蓋付 口 縁部	8.4 - -	透明釉。両面。	浅黄色で 細かい。	外面に線彫りで雲文。	G-13 LT I層	
	21	小碗	蓋付 口 縁部	8.2 - -	透明釉。両面、 口唇部釉剥ぎ。	浅黄褐色で 細かい。	外面に線彫りと呉須で野菜文か。 外面に細かい貫入。	E・F-13 TP12 I層	
	22	小碗	蓋付 底部	- - 4.0	透明釉。両面、 畳付釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	外面に朱で文様を描くが詳細不明。 畳付にアルミナを塗布。	F・G-13 TP14 ST4 II層	
	23	小杯	- 口 底	3.2 2.0 1.7	透明釉。 内面～外面胴部。	灰白色で緻密。	無文。	L-15 I層	
	24	灯明 具	- 底部	- - 5.0	黒褐色。両面、 畳付釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	無文。外底に砂及び器物片が付着。	L-15 TP4 I層	
	25	鍋	丸形 口 縁部	17.0 - -	黒褐色。両面、 口唇部釉剥ぎ。	灰色で細かい。	無文。	F-13 TP13 ST2 III層	
	26	鍋	行平 口 縁部	18.6 - -	黄緑黒色。両面、 口唇部釉剥ぎ。	灰黄緑色で 細かい。	無文。口唇部に一部砂が付着。	K-14 清掃	
	第57図 図版60	27	皿	直口 口 底	13.0 3.9 6.9	黄褐色。内面胴 部～外面胴部。	灰黄緑色で 粗い。	外面に篋掘りの圏線。内底に一部砂が付着。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
		28	皿	内湾 口 底	9.5 2.3 4.6	外面に褐色。内 面に灰黄緑色。全 面、畳付と内底 釉剥ぎ。	灰色で細かい。	無文。畳付にアルミナを塗布。 内底にアルミナが付着。内面に細かい貫入。	F-13 TP13 ST2 III層
		29	皿	内湾 口 底	13.6 4.3 9.0	灰白色。全面、 外底釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	口筋。線彫りと呉須で外面に唐草文、内面に 微塵唐草文+斜線文と菊花文、内底に巴文。 両面に細かい貫入。	K-15 I層
		30	皿	- 底部	- - 11.9	透明釉。両面、 畳付釉剥ぎ。	灰黄緑色で 細かい。	両面に線彫りと白土象嵌で圏線+菊花文+雲文か。 全体に白土が充れる。	L-16 TP8 I層
		31	皿	内湾 底部	- - 7.6	灰白色。両面、 畳付と内底 釉剥ぎ。	灰黄褐色で 細かい。	内底に青で「戯」の略称。畳付にアルミナを 塗布。全体に被熱。	J-14 TP3 I層
		32	大皿	内湾 口 底	34.6 7.1 19.5	灰白色。全面、 畳付釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	両面に青・緑で文様を描くが詳細不明。 全体に被熱。	K-15 I層
33		瓶	- 底部	- - 6.9	褐色。外面。	灰白色で粗い。	無文。	F・G-13 TP14 ST3 IV層 瓦タマリ下	
34		瓶	- 口 底	4.4 9.9 4.5	灰白色。全面、 畳付釉剥ぎ。	灰色で細かい。	外面頸部に五弁花文を1対貼付。畳付に アルミナを塗布し、その上に一部黒釉が付着。	E・F-13 TP12 I層	

第28表 沖縄産施釉陶器観察一覧3

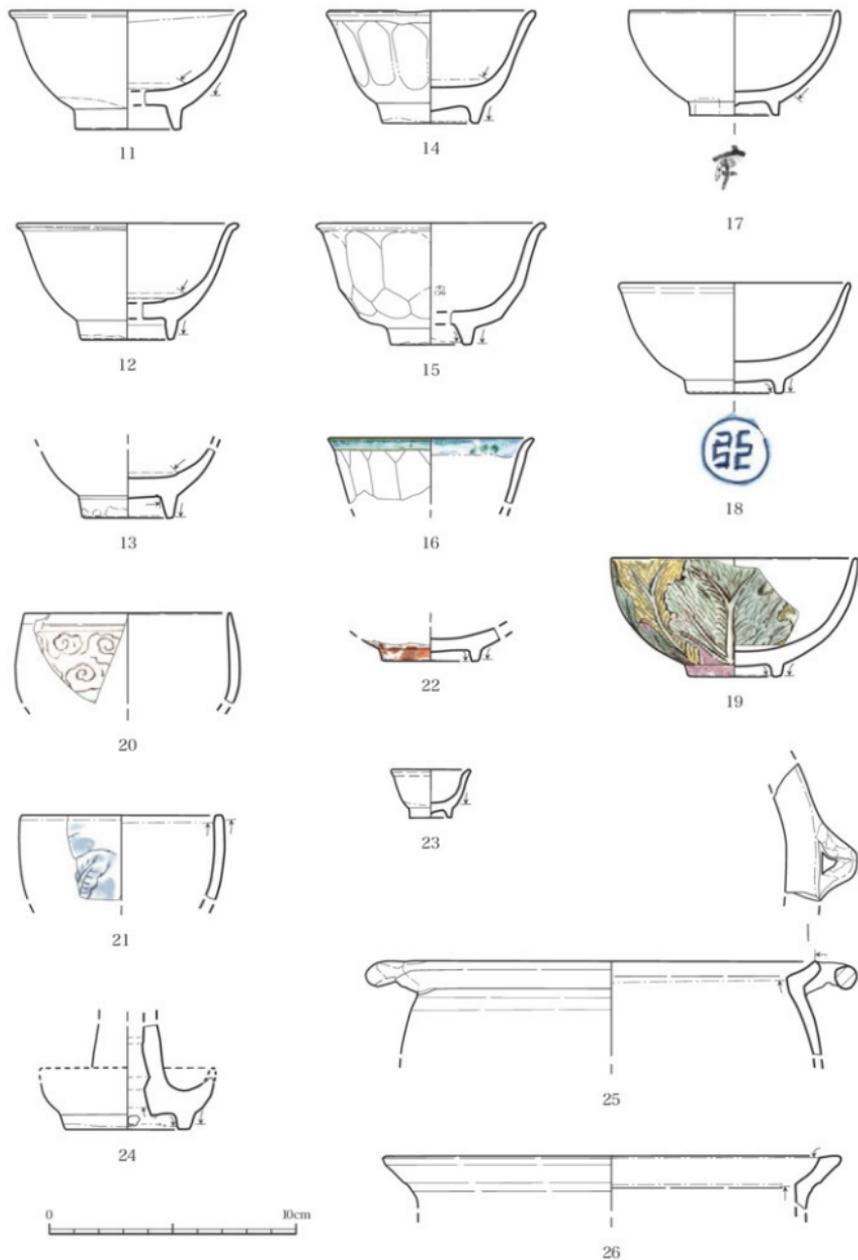
標図番号 図版番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項			グリッド・層	
					軸(色・範囲)	素地	文様等		
第578図 図版60	35	瓶	-	口縁部	3.4 -	暗黄緑色。 内面口縁部 ~外面。	灰白色で 細かい。	無文。	表採
	36	壺	-	口縁部	11.4 -	黒褐色。 内面口縁部~外面。	灰色で 細かい。	外面頸部に線彫りの圓線。 口唇部にアルミナを塗布。	G・H-19 表採
第588図 図版61	37	鉢	A	口縁部	28.8 -	暗黄緑褐色。 両面。	鈍橙色で 細かい。	内底に鉄軸が付着するが詳細不明。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
	38	鉢	B	口縁部	20.8 -	外面に黒色、内面 に灰黄緑色。両面。	灰色で 細かい。	無文。内面に石灰?が少量付着。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
	39	壺	-	底部	- 11.0	暗褐色。内底~ 外面腰部・外底。	鈍黄褐色 で粗い。	無文。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
	40	鉢	-	底部	- 8.4	施釉部分欠損(灰 軸または鉄軸か)。	鈍橙褐色 で細かい。	無文。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
	41	急須	A	口縁部	7.4 -	灰白色。 内面口縁部~外面、 口唇部軸刺ぎ。	鈍橙色で 粗い。	外面に線彫りと青・黒?で花卉文。	L-14 I層
	42	急須	A	口縁部	8.4 -	灰白色。 内面口縁部~外面、 口唇部軸刺ぎ。	灰白色で 緻密。	外面に青・緑で草花文か。全体に被熱。	K-14 II層
	43	急須	A	口縁部	6.4 -	灰黄緑色。 内面口縁部~外面。	灰色で 細かい。	外面に線彫りと緑・黄で草花文か。注口裏の 穿孔は5個まで確認。口唇部にアルミナを塗布。 内面には下地に黒褐色の軸を塗布。	I・J-13 I層
	44	急須	B	把手	- -	黒褐色。両面。	灰色で 細かい。	無文。	K-14 I層
	45	急須	B	注口	- -	黒褐色。外面。	灰白色で 細かい。	無文。注口裏の穿孔は1個。	F・G-13 TP14 ST2 I層
	第598図 図版62	46	蓋	A	握みく 庇	握み8.4 6.8 庇21.3	黒褐色。外面、 庇端部軸刺ぎ。	浅黄色で 粗い。	無文。庇端部にアルミナが付着。 軸下に白化斑を塗布。
47		蓋	A	握みく 庇	握み4.8 2.9 庇10.7	黒褐色。 内底~庇端部、 内底軸刺ぎ。	浅黄色で 粗い。	無文。握付にアルミナを塗布。 内底にアルミナが付着。外面に細かい貫入。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
48		蓋	B	握みく 袴	握み1.7 3.4 袴7.6、袴5.8	黒褐色。外面、 庇端部軸刺ぎ。	浅黄色で 粗い。	無文。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
49		蓋	B	握みく 袴	握み1.3 3.8 袴7.1	明黄緑灰色。 外面、庇端部 軸刺ぎ。	灰白色で 緻密。	外面に線彫りと貝須で山水文。	G~L-13 LT I層
50		蓋	B	庇く 袴	- 庇7.4、袴5.7	透明軸。外面、 庇端部軸刺ぎ。	灰黄色で 細かい。	外面に緑軸で弧線文。外面に細かい貫入。	F・G-13 TP14 ST2 III層
51		蓋	B	庇く 袴	- 庇6.8、袴5.1	無軸。 器面は灰褐色。	褐灰色で 緻密。	外面に青?で葡萄文か。	F・G-13 TP14 ST4 II層
52		火鉢	-	口縁部	- -	灰黄緑色。両面。	灰白色で 細かい。	無文。外面に把手の貼付跡がある。 両面に細かい貫入。	E・F-13 TP12 I層
53		火鉢	-	底部	- 11.5	暗赤褐色。 外面、握付軸刺ぎ。	灰黄色で 細かい。	外面に篋掘りの圓線。外底に一部緑軸?が 付着する。握付及び内底にアルミナ?が付着。	I-13 LT I層
54		火入	-	口く 底	10.1 7.9 7.0	黒褐色。 内面口縁部~外面 腰部、回所軸刺ぎ。	灰黄色で 細かい。	外面に篋彫りで波譜文か。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
55		火入	-	口縁部	10.0 -	灰白色。両面。	灰黄緑色 で細かい。	無文。	I-15 TP6 I層
56	香炉	-	底部	- -	灰黄緑色。外面。	灰色で 細かい。	獸面(獅子か)を象る。	K-15 I層	



第55図 沖縄産施釉陶器 1



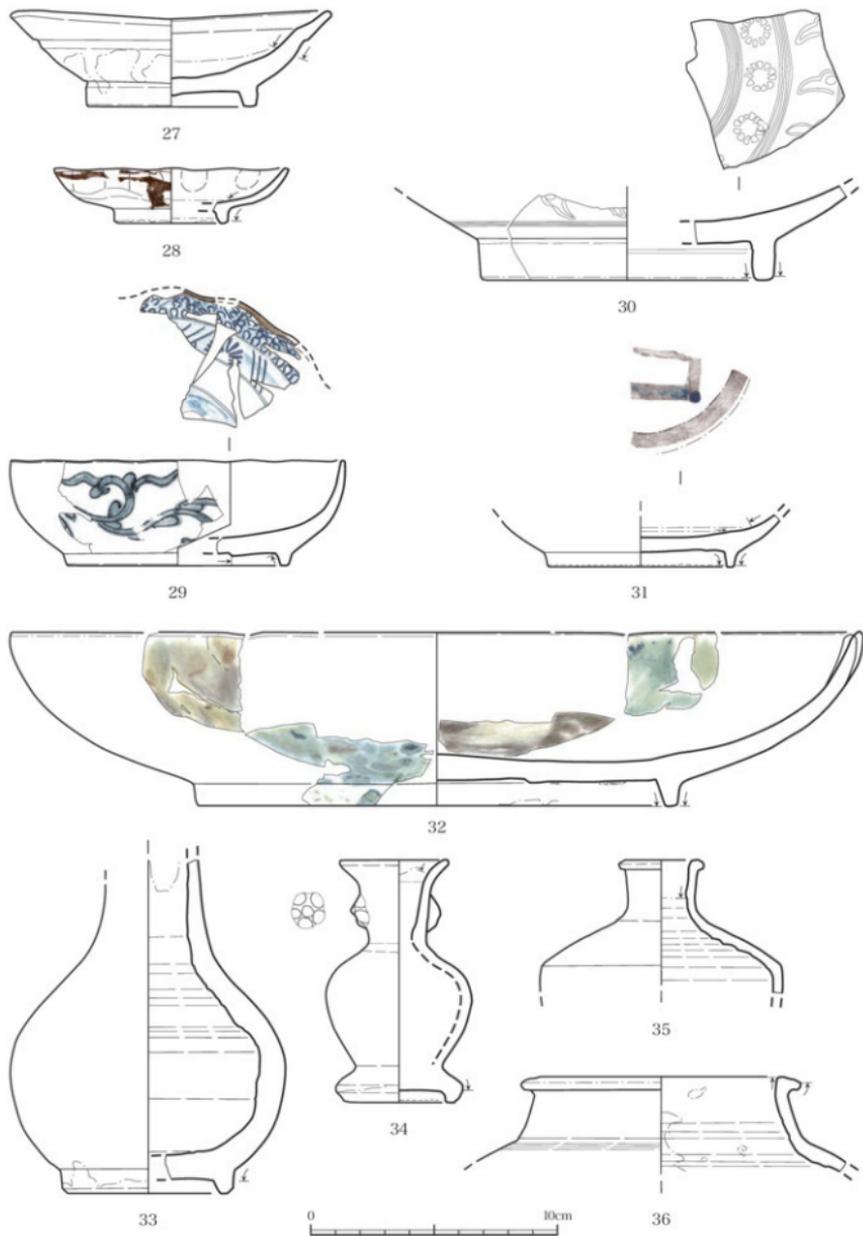
図版58 沖縄産施釉陶器 1



第56図 沖縄産施釉陶器 2



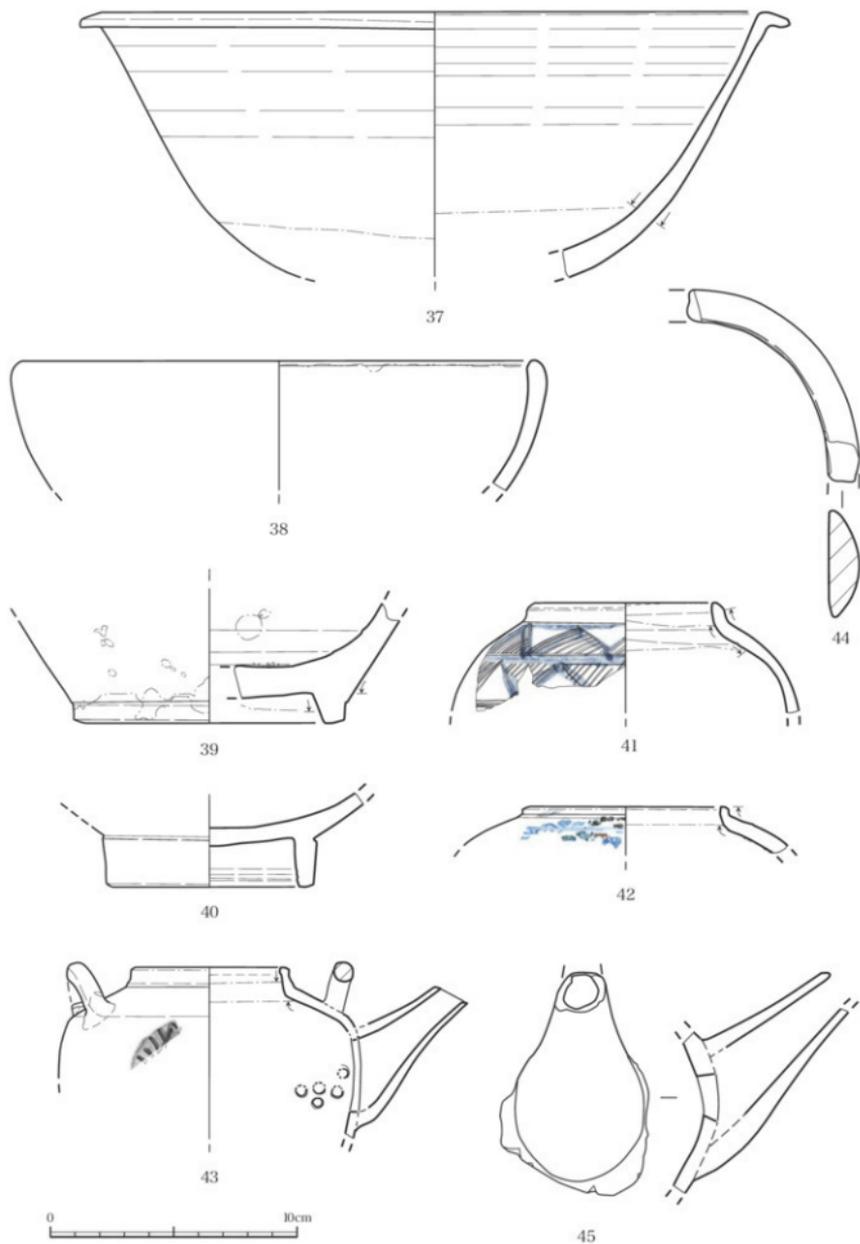
図版59 沖縄産施釉陶器 2



第57図 沖縄産施釉陶器 3



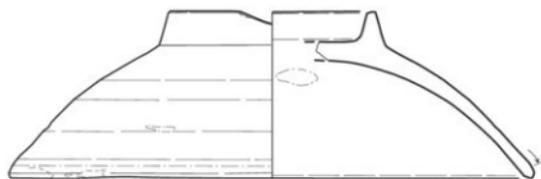
図版60 沖縄産施釉陶器 3



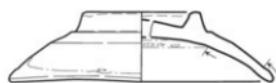
第58図 沖縄産施釉陶器 4



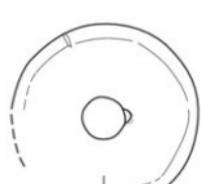
図版61 沖縄産施釉陶器 4



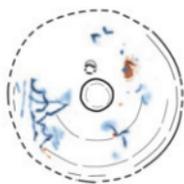
46



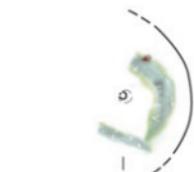
47



48



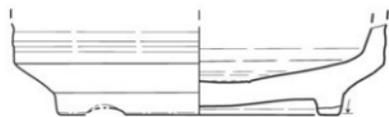
49



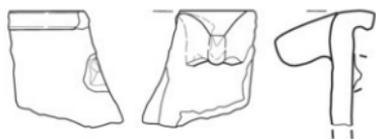
50



51



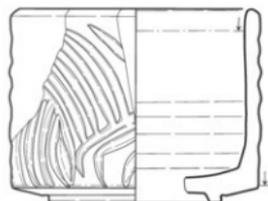
53



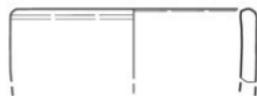
52



56



54



55

第59図 沖縄産施釉陶器 5



図版62 沖縄産施釉陶器 5

第10節 沖繩産無釉陶器 (第30・31表、第60～63図、図版63～66)

方言で「荒焼(アラヤチ)」と称する焼き締め陶器の一群である。

口縁・底部の破片数は576点を数える。器形ごとの割合は、鉢類(深鉢・搦鉢・浅鉢・植木鉢)60%と圧倒的に多く、次に壺・甕が24%、その他が皿・瓶・碗・蓋類・香炉・焔炉(火炉)・急須・厨子甕となる。首里城跡等の近世遺跡で見られるように一般的な資料が多いが、植木鉢が比較的に見られ、中でも直線的に胴部が伸びる植木鉢Bが特徴的である。個々の詳細は、観察表に委ね、器形ごとに特徴を記す。

1. 深鉢 (1～4・8・9)

深めの鉢をさし、口縁が逆L字状を呈し水平な面を持つのが圧倒的に多いが、8は外傾している。

2. 植木鉢 (5～7・10・18～21)

植木鉢は2つのタイプに分けられる。

植木鉢A (5～7・10)

口縁端部に縄目文(5・6)、刻み目(10)、胴部に草花文(7)を付す特徴から植木鉢とされるもので通例見られている。

植木鉢B (18～21)

口縁から底部までほぼ直立して伸び、底部には焼成前の穿孔が見られるタイプである。装飾・文様がなく、作りも非常に簡素化されているもので、本遺跡における特徴的な資料である。

3. 搦鉢 (11～17)

く字状に屈曲するタイプ(11～14)、L字状を呈するもの(15・16)がある。17は後者のタイプの底部である。

4. 浅鉢 (22～27)

口縁が内湾する平底の鉢で、方言で「水鉢(ミジクプサー)」と称されるものに相当する。口縁に波状文を付すものが多いが、22は無文である。口縁では緩く内湾するものが多いが、23は強く屈曲している。27は脚部である。

5. 甕 (28～32)

28は直線的なもの、29は逆L字状の口縁、32は短い頸部を持つもの、30は口径90cmにも及ぶ大甕など、様々なタイプがある。

6. 壺 (33～36)

33は小型で丸みのある口縁、34は方形口縁、35は玉縁口縁、36は小型のものの底部であり、甕と同様様々なものがある。

7. 瓶 (37～39)

37・38は徳利形のもの、39は高台をもつものである。

8. その他 (40～50)

少数の器形として、陶質土器の灯明皿に類する皿(40)、自然軸が掛かる碗(41)、蓋(42～44)、香炉(45～49)、厨子甕(51)、器形が不明なもの(50)がある。

第30表 沖縄産無釉陶器観察一覧1

採図番号 図版番号	番号	部位	法量 (cm)			色調			混入物	成形・調整・文様など	グリッド層
			口径	器高	底径	外面	断面	内面			
第60図 図版63	1	深鉢	30.6	18.5	12.0	明赤褐	鈍赤褐	赤褐	白色粒	口縁上面1条、胴部上位2条の沈線。 底部付近は板ナデ。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
	2	深鉢	31.3	-	-	鈍赤褐	橙	橙	白・黒色粒	口縁上面1条の沈線、線状の墨書痕。	L-16 TP10 I層
	3	深鉢	32.5	-	-	鈍～明赤褐	明赤褐	赤褐	白・黒色粒	口縁上面1条の沈線。 内面に灰白色の薄膜(漆喰?)が付着。	F・G-13 TP14 IV層
	4	深鉢	33.6	-	-	褐灰～明赤褐	鈍赤褐	明赤褐	白色粒	口縁上面1条の沈線。	F・G-13 TP14 ST4 III層
	5	植木鉢A	46.2	-	-	鈍橙	赤褐	明赤褐	白色粒	口縁外面凹線1条、貼付凸線に指オサエで成形した縄目文。	G-13 LT I層
	6	植木鉢A	-	-	-	暗赤褐	鈍赤褐	褐灰	白色粒	口縁上面沈線2条、やや離れて凹線1条。 口縁外面に凸線を貼付、その上下に指オサエで成形した縄目文。内面に不明の線刻あり。	E・F-13 TP12 I層
	7	植木鉢A	28.4	-	-	明赤褐	明赤褐	明赤褐	白・赤色粒	口縁外面2条の凹線。 外面は貼付による草花文。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
	8	深鉢	36.4	-	-	灰褐	鈍赤褐	褐灰	白色粒	胴部上位2条、内面上位1条の凹線。 口縁上面が外傾。	K-14 I層
	9	深鉢	-	-	-	鈍赤褐・赤褐	鈍赤褐	灰褐	白色粒	口縁外面に2条、内面上位に2条の凹線。	G-13 LT I層
	10	植木鉢A	47.9	-	-	褐灰	鈍赤褐	灰褐色	白色粒	口縁外面は棒状工具による刻目文。 口縁上面が外傾し2条の凹線、内面上位に1条の凹線。	K-15 ベルト I層
第61図 図版64	11	搦鉢	36.6	-	-	鈍褐	鈍赤褐	橙	白色粒	胴部上位で屈曲するタイプ。 搦目(6本/1cm)は隙間なく施す。 器面は褐色。	K-14 II層
	12	搦鉢	27.8	-	-	赤褐	赤褐	赤褐	白色粒	胴部はほぼ直線的に伸びるが、外面はロクロ目による凹凸が顕著。搦目(9本/2.3cm)は隙間なく施す。器面は明褐色。	I-15 TP6 IV層
	13	搦鉢	-	-	-	褐灰	暗赤褐	褐灰	白・赤色粒	胴部上位で屈曲するタイプ。 搦目(5本/1cm)。器面にはぶい赤褐色で、自然釉のためか光沢が見られる。	K-14 I層
	14	搦鉢	-	-	-	灰褐	鈍赤褐	灰褐	白色粒	胴部上位で屈曲するタイプ。片口。 搦目(6本/1.3cm)。器面にはぶい赤褐色。	L-14 I層
	15	搦鉢	33.0	-	-	橙	橙	橙	白色粒	胴部は直線的に伸びる。口縁上面には1条の沈線。搦目(12本/2.3cm)は隙間なく施す。器面は明褐色。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
	16	搦鉢	28.0	-	-	褐灰	暗赤褐	赤褐	白色粒	胴部は直線的に伸びる。片口。 搦目(12本/2cm)。器面にはぶい赤褐色。	F・G-13 TP14 I層
	17	搦鉢	-	-	9.8	明赤褐	明赤褐	明赤褐	白・赤色粒	外面底部付近は板ナデ。 搦目(8本/2.2cm)。器面は明褐色。	F・G-13 TP14 ST4 II層

第30表 沖縄産無釉陶器観察一覽2

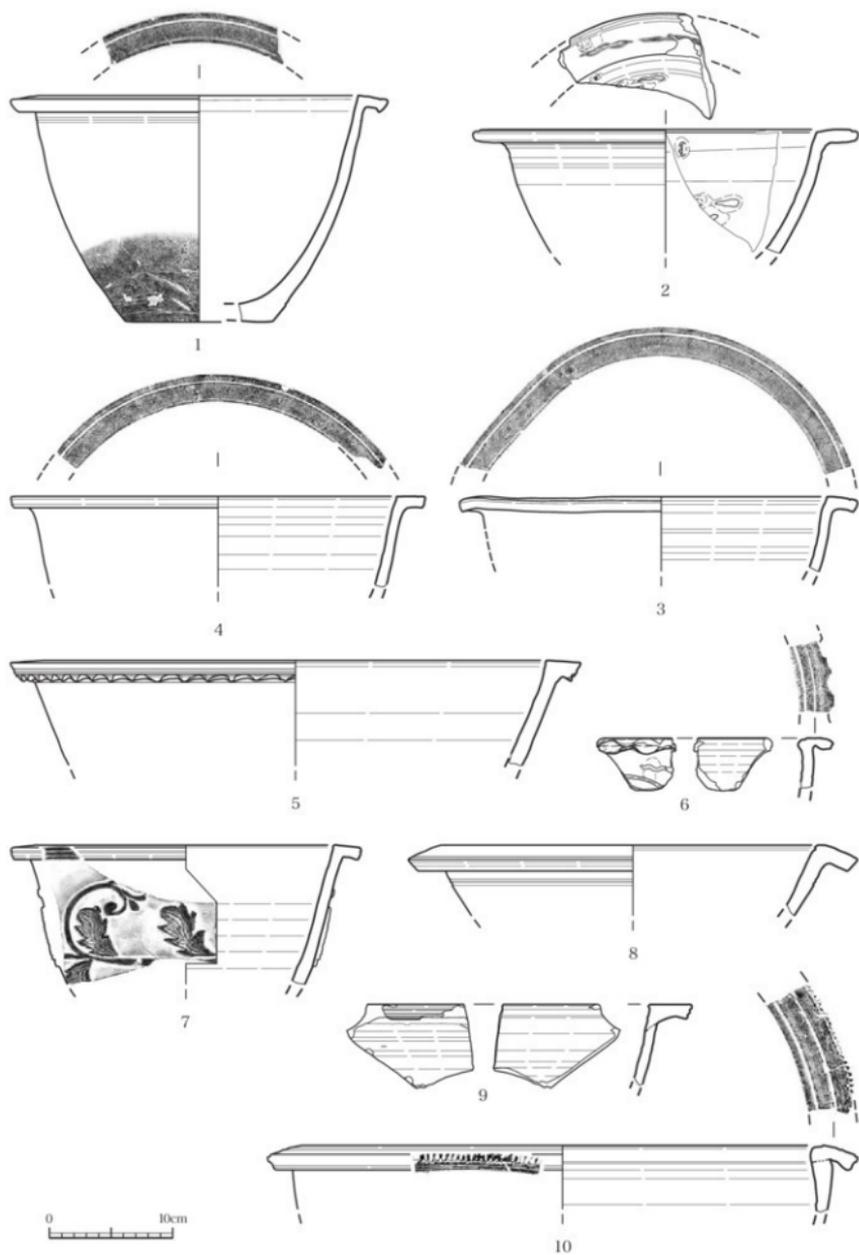
挿図番号 図版番号	番号	部位	法量 (cm)			色調			混入物	成形・調整・文様など	グリッド 層
			口径	器高	底径	外面	断面	内面			
第61図 図版64	18	植木鉢B	25.6	-	-	橙	橙	橙	赤色粒、雲母	口縁外面が幅2.8cmの肥厚帯となっている。胎土は軟質。黒斑が内面にあり。	L-16 TP8 I層
	19	植木鉢B	32.2	-	-	橙	橙	橙	赤色粒、雲母	口縁上端が内側に伸びるタイプ。胎土は軟質。黒斑が口縁上端から内面にかけて広範囲にあり。	L-16 TP10 I層
	20	植木鉢B	24.0	15.2	16.0	鈍橙	橙	黄橙	赤色粒、雲母	水抜き孔径3.4cm。胎土は軟質。黒斑が口縁上端、内面にあり。	L-16 TP8 I層
	21	植木鉢B	-	-	21.4	明赤褐	橙	橙	赤色粒、雲母	水抜き孔径3.4cm。胎土は軟質で黒斑が内面見込みにあり。また、同所に炭化した固形物が付着。	L-16 TP10 I層
第62図 図版65	22	浅鉢	15.0	-	-	鈍橙	鈍赤褐	灰褐	白色粒	胴径16.4cm。	K-14 I層
	23	浅鉢	30.8	-	-	鈍赤褐	鈍赤褐	赤褐	白色粒	口縁外面の上下に凹線各1条を配した間に6条の波状文、ストローク幅1.0cmと極端に狭い。また上端のみが凹線でナデ消される。	F・G-13 TP14 ST4 III層
	24	浅鉢	24.4	-	-	明赤褐	明赤褐	明赤褐	白・黒色粒	胴径24.0cm。口縁は外側に突出させ上端に面をもつ。外面は6条の波状文(ストローク幅3.3cm)、上下端はナデ消す。	K-16 TP9 I層
	25	浅鉢	24.8	-	-	鈍赤褐	赤褐	赤褐	白・黒色粒	胴径26.8cm。口縁外面は凹線1条、波状文(ストローク幅1.3cm)5条、上下端はナデ消す。	F・G-13 TP14 ST2 III層
	26	浅鉢	31.2	-	-	灰褐	明赤褐	明赤褐	白色・赤色粒	胴径33.4cm。口縁外面に凹線1条、波状文(ストローク幅2.2cm)5条、また上下端はナデ消す。	L-16 TP8 I層
	27	浅鉢	-	-	22.8	黒褐	鈍赤褐	灰	白色・赤色粒	脚部は全体的に厚い作りである。	表採
	28	甕	37.8	-	-	鈍赤褐	鈍赤褐	赤褐	白色粒	口縁外面に凹線2条、丸文の貼付の下に凸線1条。	J-15 TP7 I層
	29	甕	40.6	-	-	褐灰	赤褐	灰褐	白色粒	口縁外面2条の凹線、内面上端にロクロ目による凹み1条あり。	K-14・15 ベルト I層
	30	甕	-	-	-	鈍赤褐	鈍赤褐	灰褐	白色粒	口径80~90cmに及ぶと想定。口縁外面に翻状工具による7条の沈線を廻し、下に径約5cmの丸文を貼付。	L-16 TP8 I層
	31	甕	-	-	29.7	明赤褐	明赤褐	褐灰	白色粒	内底面横方向のナデでやや粗めに仕上げられる。	L-16 TP8 I層
	32	甕	22.6	-	-	鈍赤褐	鈍赤褐	鈍赤褐	白色粒	外面に沈線による文様(1条単位の波状文か)。	G-13 LT I層
	33	壺	13.4	-	-	灰褐	鈍赤褐	褐灰	白色粒	内面胴部は不定ナデ。口縁上面に粘土紐の痕跡と思われる凹みあり。	E・F-13 TP12 I層
	34	壺	16.2	-	-	鈍赤褐	赤褐	鈍赤褐	白色粒	残存部位である口縁はロクロナデが徹底されている。	J-15 TP7 I層 基壇外南

第30表 沖縄産無釉陶器観察一覧3

標図番号 図版番号	番号	部位	法量 (cm)			色調			混入物	成形・調整・文様など	グリッド層
			口径	器高	底径	外面	断面	内面			
第62図 図版65	35	壺	18.6	-	-	灰褐	明赤褐	鈍赤褐	白・赤色粒	口縁は粘土紐を巻き込んだ玉縁状。	F・G-13 TP14 ST4 III層
	36	壺	-	-	10.2	褐灰	暗赤褐	灰	白・赤色粒	小型の底部。器面及び器壁には空隙が多い。	K-14 I層
第63図 図版66	37	瓶	7.1	-	-	鈍赤褐	明赤褐	明赤褐	白・赤色粒	徳利形。	L-16 TP8 I層
	38	瓶	-	-	-	灰褐	赤褐	鈍赤褐	白色粒	胴径10.7cm。徳利形。内面紋が目残る。胴部上位に脚状工具による7条の沈線。	L-15 I層
	39	瓶	-	-	5.5	明赤褐	明赤褐	明赤褐	白・赤色粒	瓶子形。高台は貼付による。底部外面に石灰と思われる白色固形物が付着。	L-15 I層
	40	皿	10.0	3.1	4.0	灰褐	赤褐	鈍赤褐	白・赤色粒	外面下半はロクロズリ。口縁上端は光沢をもった黒色を呈し、灯明皿か。内面は器面がざらついており、二次被熱か。	L-15 I層
	41	碗	-	-	8.0	鈍赤褐	灰褐	赤褐	白色粒	見込みより上下に自然軸が掛かる。	F・G-13 TP14 ST4 II層
	42	蓋	-	-	推定 10	橙	橙	橙	黒・白色粒・雲母	上面径16.0cm。胎土は軟質。上面中央はナデが徹底しておらず、器面が粗い。	F・G-13 TP14 ST1 III層
	43	蓋	指定 4.6	指定 3.4	-	灰褐	褐灰	灰黄褐	黒 (ガラス質) ・白色粒	つまみ径1.8cm、上面径7.0cm。内面は不定ナデ。上面は自然軸が掛かるが、内面は露胎し、灰色を呈する。	L-15 I層
	44	蓋	9.4	-	-	明赤褐	鈍赤褐	明赤褐	白色粒	上面径11.0cm。上面のロクロナデが徹底し、器面は滑らかである。	表採
	45	香炉	11.0	2.7	9.9	鈍赤褐	暗赤褐	暗赤褐	白色粒	脚部は三足と思われる。内面は自然軸が掛けられ、器面がざらつくが二次被熱によるものかは不明。	J-13 LT ST II層
	46	香炉	-	-	8.0	鈍赤褐	赤褐	明赤褐	白色粒	胴部は八面体と推定。外面は板状工具によるナデか、内面は横ナデ。外面は縦位に滑らかに仕上げられる。	K-15 I層
	47	香炉	12.0	-	-	灰褐	鈍赤褐	褐灰	白色粒	口縁内面より外面に掛けて自然軸が掛けられる。	F・G-13 TP14 ST3 IV層
48	香炉	-	-	10.3	灰褐	暗赤褐	鈍赤褐	白色粒	脚部は三足と思われる。外面下端に1条の沈線。見込みは横位のやや粗いナデ。	I-15 TP4 I層	
49	香炉?	10.8	-	-	暗赤褐	暗赤褐	暗赤褐	白色粒	短い頸部を持ち胴部が膨らむ器形で、香炉の可能性。	J-13 LT ST II層	
50	不明	8.0	-	-	暗赤褐	褐灰	暗赤褐	白色粒	口縁及び頸部が歪んでおり、平面円形ではない可能性あり。外面には自然軸が掛かる。	E・F-13 TP12 I層	
51	厨子	-	-	-	褐灰	赤褐	褐灰	白・黒色粒	蓋の外縁部にあたり、屋根軒先が表現される。	表採	

第31表 沖繩産無軸器集計表2

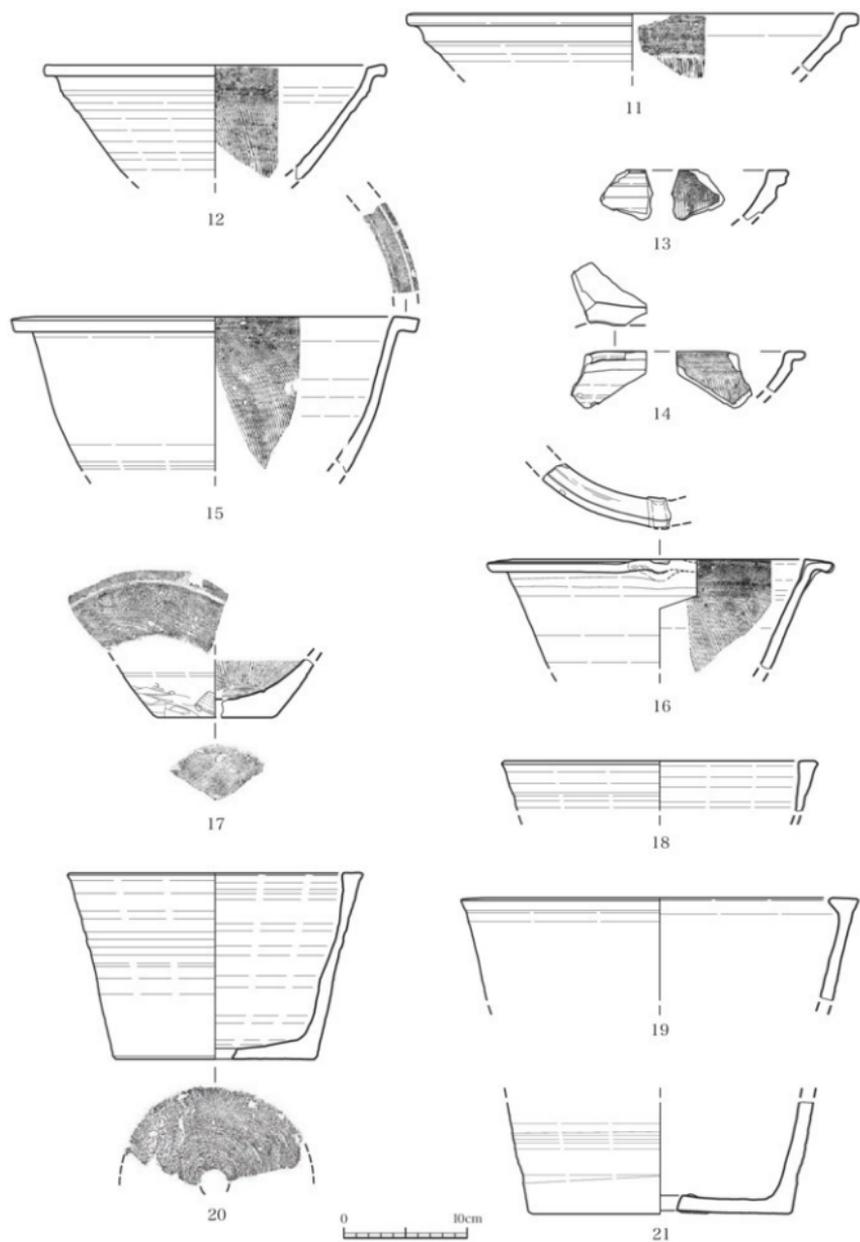
器種・部位	J-14		K-14		L-14		K14E		I-15		J-15			K-15		K-15		J-15・K-16		L-16		G-16		不明
	I層		II層		I層		II層		I層		I層		II層		I層		I層		I層		I層		計	
	II層 TP2・TP3 附薬2号	清鉢 TP1	清鉢 第2号	清鉢及探 I層	II層清鉢 I層	II層TP6 TP4	TP6 TP5	TP6 TP5	TP7 TP5															
碗	底	1	5	1	1	1	1	4															6	
皿	口																						25	
	口~底																						2	
深鉢	底																						1	
	口	1	2	16	1	2	1	4	1	1	15	1	14	2	4	2	1	2	1	1	4	153	1	
浅鉢	底																						24	
	口																						2	
植木鉢A	底																						48	
	口																						1	
植木鉢B	底																						7	
	口																						2	
蒲鉢	底																						1	
	口	1	3	6	2	4	1	2	2	4	1	8	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	7	
漱	底																						82	
	口																						19	
盥・脱	底																						39	
	口																						2	
瓶	底																						68	
	口																						1	
香炉	底																						15	
	口																						1	
提灯	底																						7	
	口																						4	
羹	底																						8	
	口																						8	
急須	底																						23	
	口																						1	
閉子蓋	底																						1	
	口																						10	
器種不明	底																						1	
	口																						1	
計	底	2	7	10	43	8	1	2	1	25	1	1	5	10	1	7	11	18	1	1	2	44	1	1
	口																						1	
合計																							576	



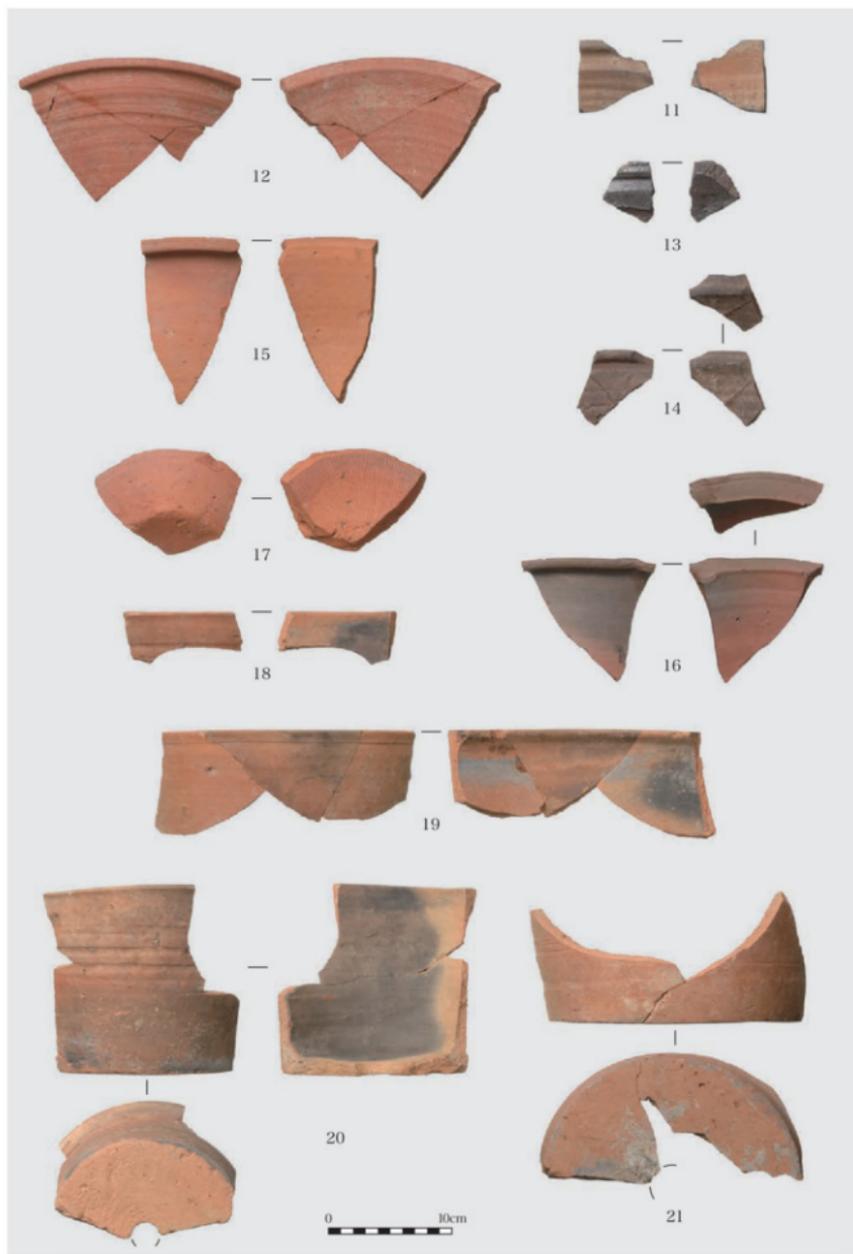
第60図 沖縄産無釉陶器 1



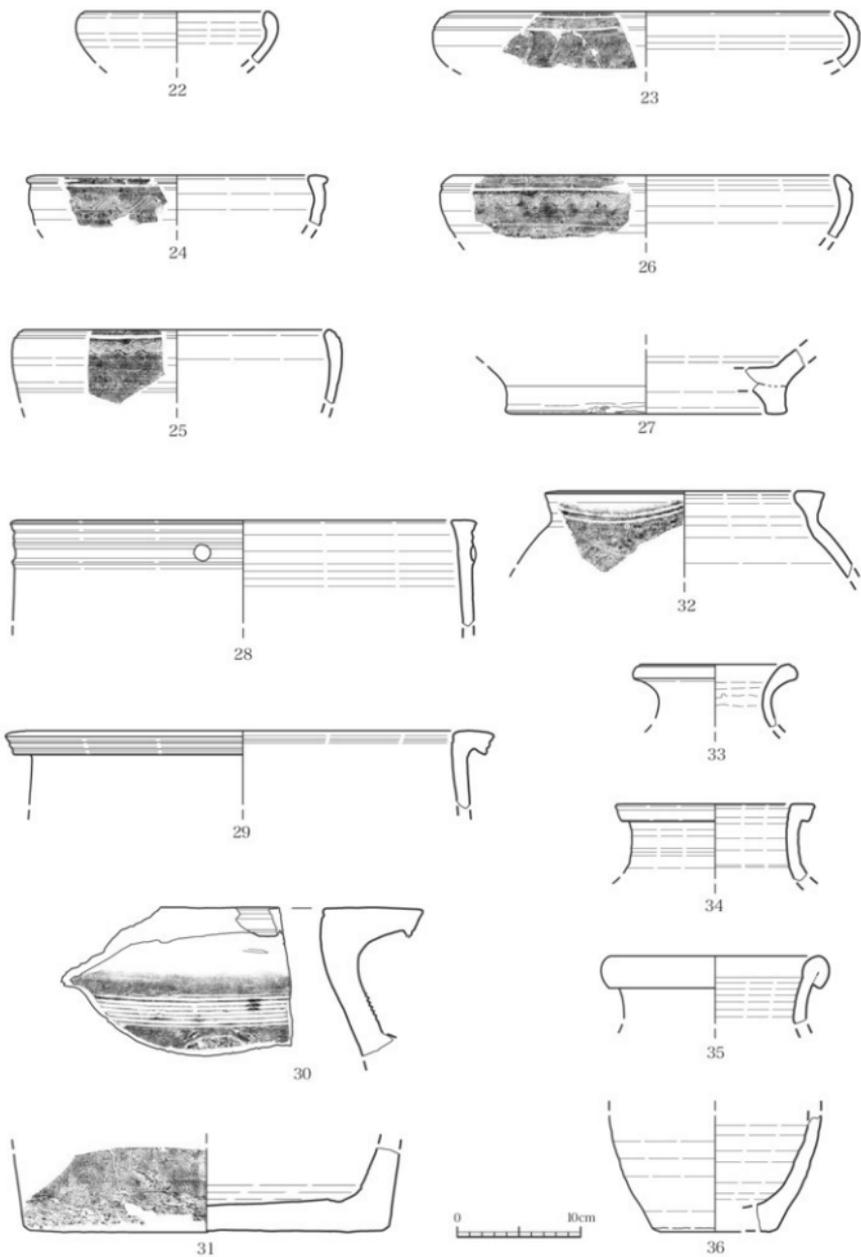
図版63 沖縄産無釉陶器 1



第61図 沖縄産無釉陶器2



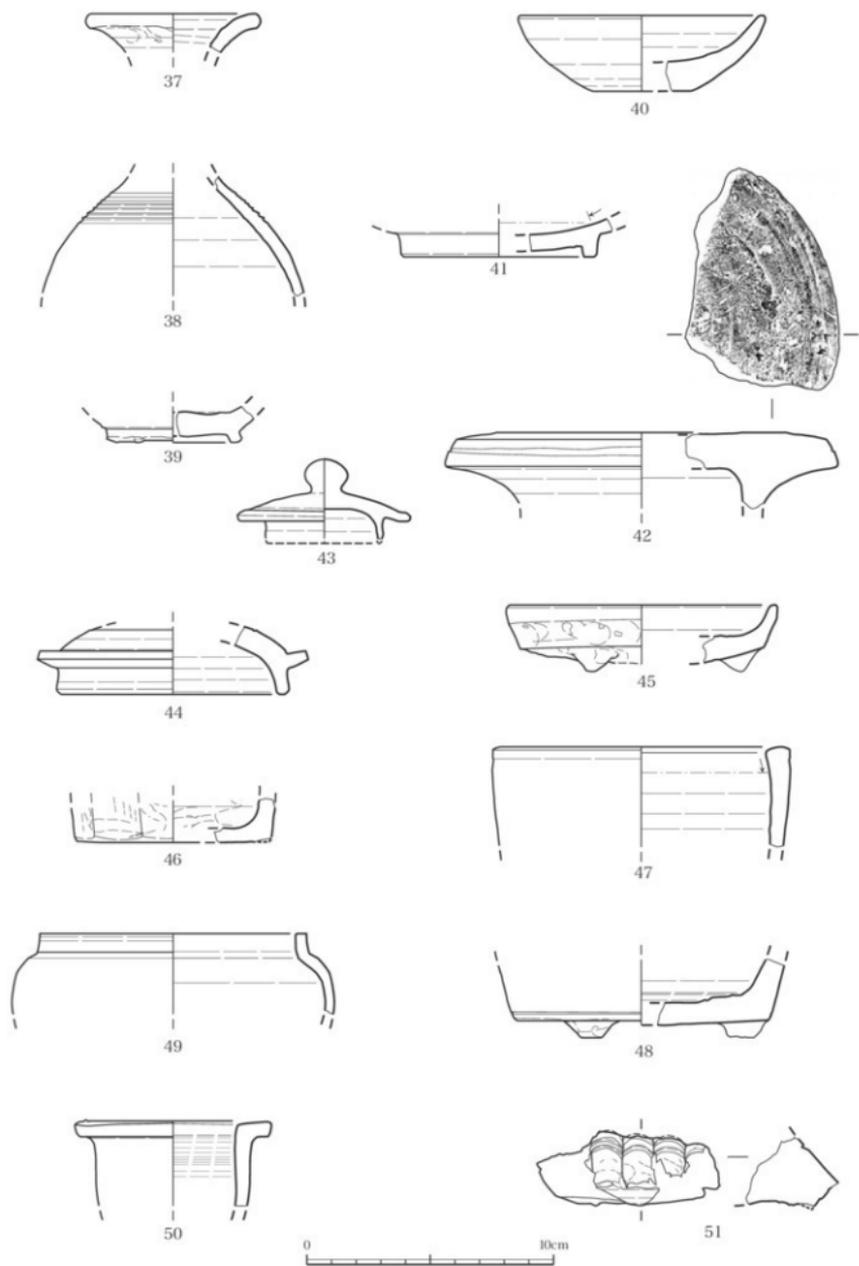
図版64 沖縄産無釉陶器2



第62図 沖縄産無釉陶器 3



図版65 沖縄産無釉陶器 3



第63図 沖縄産無釉陶器4



図版66 沖縄産無釉陶器4

第11節 陶質土器 (第32・33、第64・65図、図版67・68)

橙色を呈した軟質の土器で、胎土は精良でロクロにより成形されるもので、壺屋では「アカムヌー」もしくは「カマグワーヤチ」などと称される。口縁と底部・把手・つまみの破片数で597点を数える。

1. 皿 (1～6)

スガが口縁端部が見込みに付着するものが多く、灯明皿として使用されたものと思われる。底部外面で見ると、明確な切り離し痕が分からないもの(2・3)と、丁寧にナデ消しているもの(4)、糸切痕を残すもの(5・6)があり、調整に違いがある。

2. 鍋 (7～9)

方言で「サークー」と称する、輪状の把手を1対有する鍋で、器壁が2・3mmと非常に薄い。

3. 焜炉 (10～15)

方言で「火炉(ヒールー)」と称する、持ち運びが可能である焜炉である。胴部が緩やかなもの(10)、外面に方形の把手をもつもの(11)、胴部が球状を呈し白化粧土の掻き落しが見られるもの(12・13)などのタイプがある。14・15は底部である。

4. 浅鉢 (16～19)

方言で「水鉢(ミジクプサー)」と呼称される浅鉢で、無軸陶器にも同様の器形がある。無文(16)と、口縁に波状文(17・19)を施すものがある。

5. 急須 (20～21)

球状の胴部をもつものだが、20は底部まで接合できた貴重な資料である。

6. 蓋 (22～28)

鍋蓋(22～25)、急須の蓋の可能性のあるもの(26・27)、あまり見られない伏せ蓋(28)がある。

7. その他 (29・30)

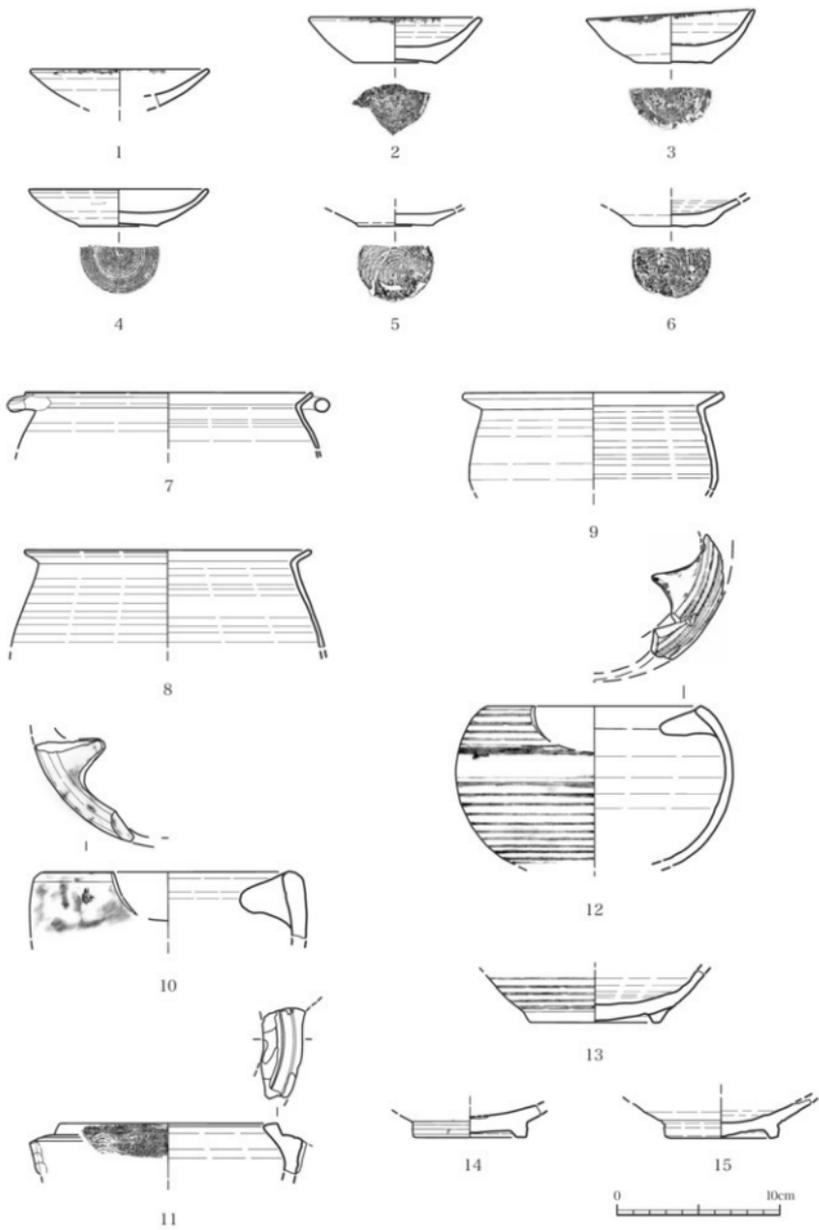
29は瓶の底部であろうか。30は何らかの脚部で、獸形を呈している。

第33表 陶質土器観察一覧1

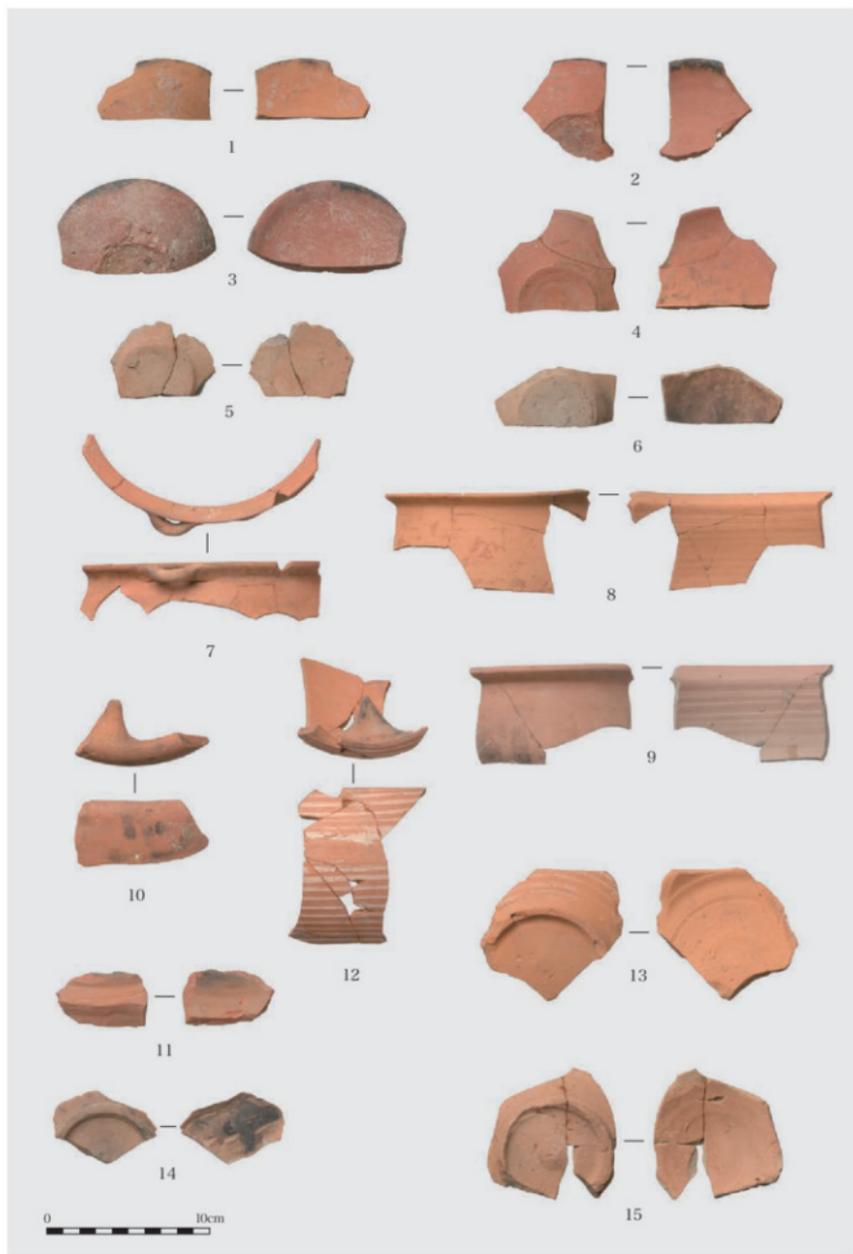
押図番号 図版番号	番号	器形	法量 (cm)			色調	成形・調整・文様など	グリッド・層
			口径	器高	底(つまみ)径			
第64図 図版67	1	皿	11.0	—	—	橙	外面上半・内面ロクロナデ。外面下半ロクロケズリ。口縁端部スス付着。	F・G-13 TP14 ST4 II層
	2	皿	10.6	2.8	5.0	赤褐	内外面ロクロナデ。外面のナデはやや粗い。外底は粗いつくり。口縁端部スス付着。硬質。	F・G-13 TP14 ST4 III層
	3	皿	10.3	3.0	4.6	赤褐	内外面ロクロナデ。外面のナデはやや粗い。外底は粗いつくり。口縁端部スス付着。硬質。	I-15 TP6 IV層
	4	皿	11.0	2.3	4.8	赤褐	内外面丁寧なロクロナデ。外面下半・外底はロクロケズリ。内外面胴部にわずかにスス付着。硬質。	F-13 TP13 ST2 III層
	5	皿	—	—	4.6	鈍黄橙	内外面ロクロナデ。外底糸切痕。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
	6	皿	—	—	4.8	鈍黄橙	内外面ロクロナデ。外底糸切痕。見込みスス多く付着。	K-15 I層
	7	鍋	17.6	—	—	橙	内外面密なロクロナデ。把手にスス付着。	F・G-13 TP14 ST3 IV層 瓦ダマリ
	8	鍋	17.6	—	—	橙	内外面密なロクロナデ。	F・G-13 TP14 ST4 II層
	9	鍋	16.0	—	—	橙	内外面密なロクロナデ、内面は波板状に凹凸をなす。外面中位スス付着。	F-13 TP13 ST1 III層
	10	甗	15.6	—	—	橙	内外面ロクロナデ。口縁端部は丸く仕上げる。受部、外面部分的にスス付着。	F・G-13 TP14 ST2 III層
	11	甗	13.4	—	—	橙	内外面ロクロナデ。外面に波状文。方形の把手の剥離痕あり。	K-15 I層
	12	甗	13.2	—	—	橙	内外面ロクロナデ。外面は白化粘土掻き落しによる圏線を配す。受部にはスス付着。	F・G-13 TP14 ST4 III層
	13	甗	—	—	8.0	橙	内外面ロクロナデ。高台は貼付により台形を呈す。外面は白化粘土掻き落しによる圏線を配す。	F・G-13 TP14 ST2 III層
	14	甗	—	—	7.0	鈍褐	内外面ロクロナデ。高台は貼付により角形を呈する。ススが見込みに厚く、外面にも部分的に付着。	K-15 I層
	15	甗	—	—	6.9	鈍橙	内外面ロクロナデ。高台は貼付によるが部分的にややいびつな部分あり。	F・G-13 TP14 III層 レキグン

第33表 陶質土器観察一覧2

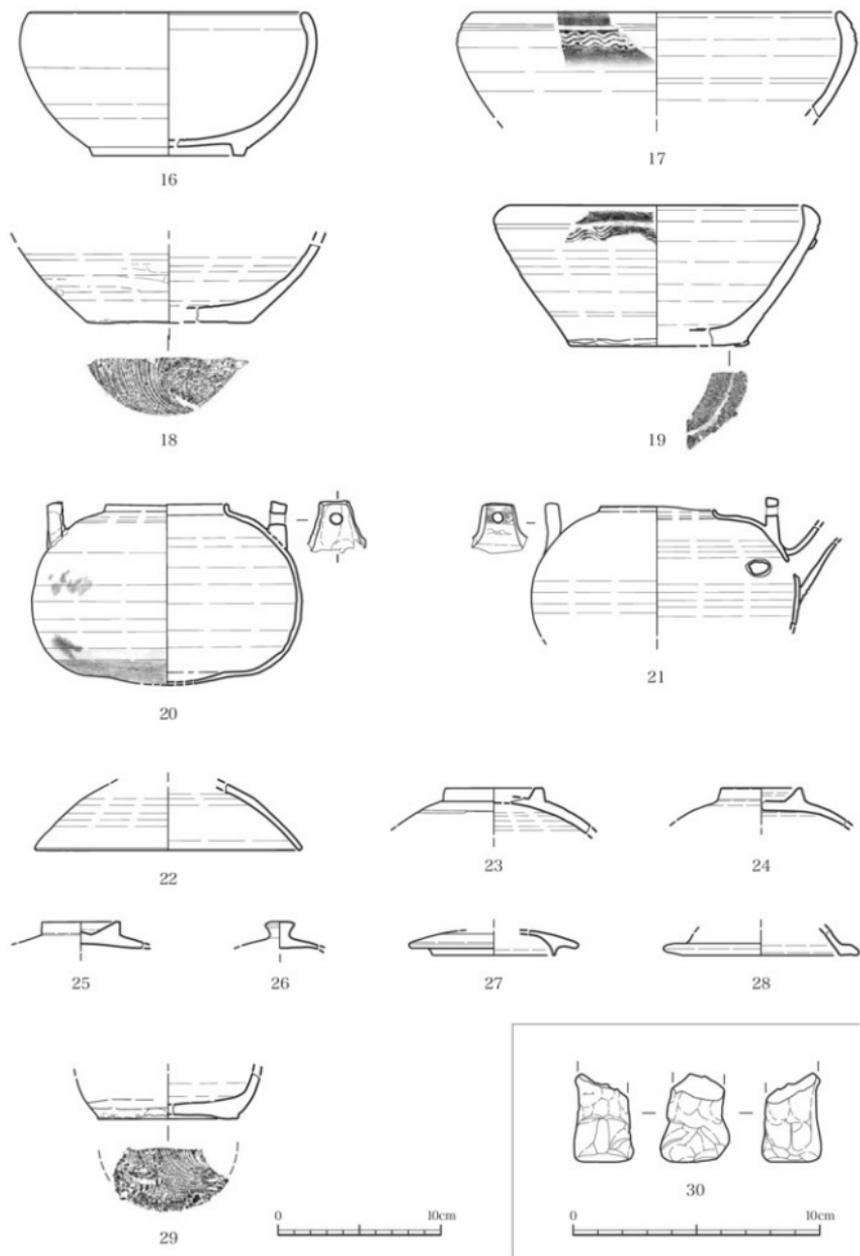
挿図番号 図版番号	番号	器形	法量 (cm)			色調	成形・調整・文様など	グリッド・層
			口径	器高	底(つまみ)径			
第65図 図版68	16	浅鉢	17.1	8.9	9.3	橙	内外面ロクロナデ非常に丁寧なつくり。 高台は貼付けにより台形を呈す。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
	17	浅鉢	22.7	—	—	橙	内外面ロクロナデ。外面3条の波状文（ストローク幅1.3cm）、 上端は凹線によるナデ消し	F-13 TP13 ST1 III層
	18	浅鉢	—	—	10.0	橙	内外面ロクロナデ。外底糸切痕。	L-16 TP8 I層
	19	浅鉢	17.9	8.7	11.0	橙	内外面ロクロナデ。外面ロクロ目顕著。外底端に粘土紐。 外面3条の波状文（ストローク幅2.0cm）、上下はナデ消し。	H-19 表採
	20	急須	7.6	11.2	11.0	橙	内外面非常に丁寧なロクロナデ。 外面中位から下半、特に底部にスス付着。内面下半灰白色を呈す。	F・G-13 TP14 ST3 IV層 瓦ダマリ
	21	急須	7.0	—	—	橙	内外面非常に丁寧なロクロナデ。 注口部黒変し、外面中位から下半にかけてスス付着。	F・G-13 TP14 ST3 IV層 瓦ダマリ下
	22	蓋	16.4	—	—	橙	内外面ロクロナデ。外面ロクロ目顕著。	表採
	23	蓋	—	—	6.0	橙	内外面ロクロナデ。つまみは貼付により台形を呈し、ナデは丁寧。	K-15 ベルト I層
	24	蓋	—	—	5.0	橙	内外面ロクロナデ。 つまみは貼付により三角形を呈し、ナデは丁寧。	F・G-13 TP14 ST4 III層
	25	蓋	—	—	4.8	橙	内外面ロクロナデ。 つまみは貼付により三角形を呈し、ナデは丁寧。	表採
	26	蓋	—	—	1.8	明褐	内外面ロクロナデ。外面のナデはやや粗い。外面一部黒斑あり。	F・G-13 TP14 清掃
	27	蓋	7.5	—	—	鈍黄橙	外径10.4cm。内外面ロクロナデ。外面一部黒斑あり。 内面端部わずかにスス付着。	F・G-13 TP14 ST2 IV層
	28	蓋	12.0	—	—	橙	内外面ロクロナデ。外面一部黒斑あり。	F-13 TP13 II層
	29	瓶	—	—	8.6	橙	内外面ロクロナデ。外底糸切痕。	F・G-13 TP14 ST4 II層
30	不明	—	—	—	橙	手づくねによる成形。獣足か？	F・G-13 TP14 ST4 II層	



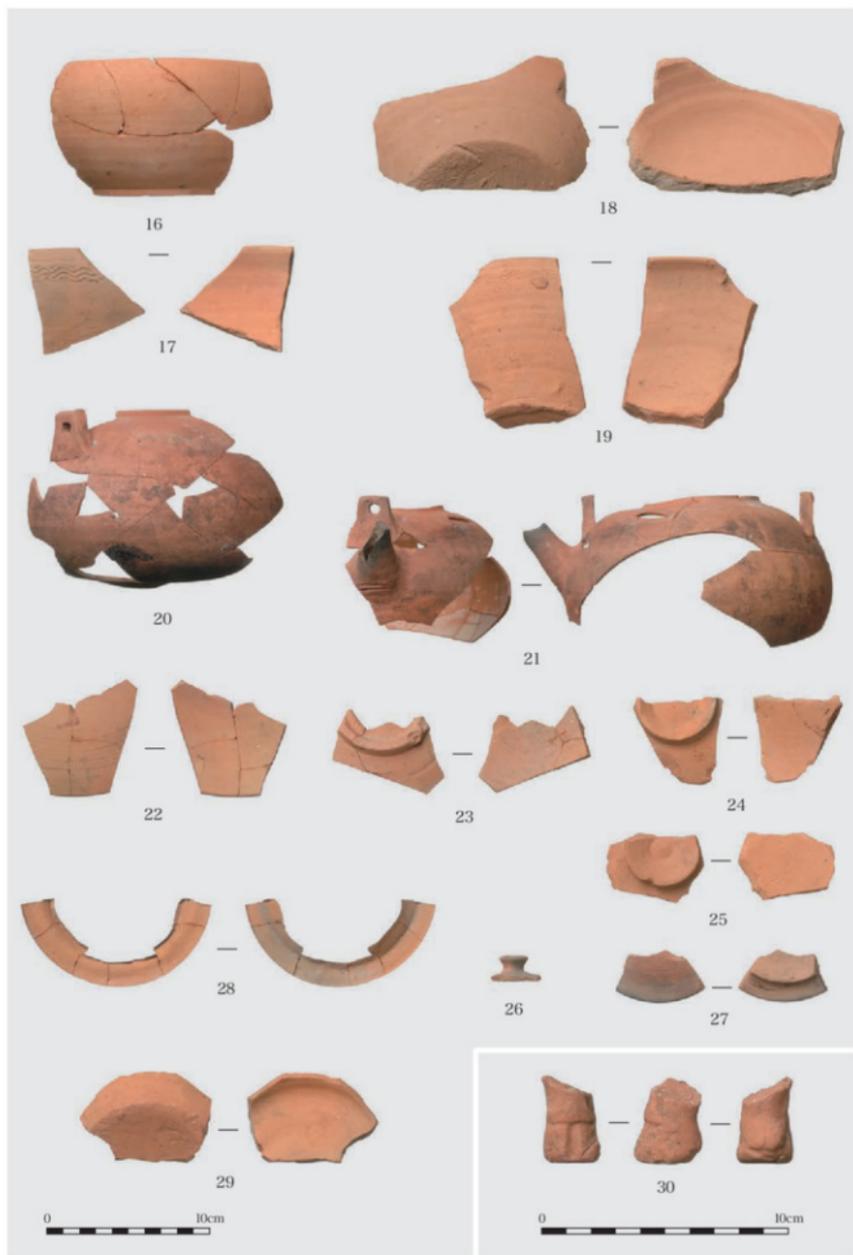
第64図 陶質土器 1



図版67 陶質土器 1



第65図 陶質土器2



図版68 陶質土器 2

第12節 土器・硬質土器 (第34～36表、第66図、図版69)

土器は近世に位置づけられる資料が殆どであり総数125点出土している。グスク土器が14点、宮古式土器が87点、バナリ焼が12点、硬質土器(本土産焙烙)が9点、その他分類不明な土器が3点得られている。数量的に先島地方の土器が多く認められる(第34表)。得られた資料はいずれも小破片であり、器形の全体を窺えるような資料は得られていない。

これらの中で、比較的残りが良く特徴的なもの10点を図化した。以下、種類ごとに概観し、個々の詳細は観察表に示す。

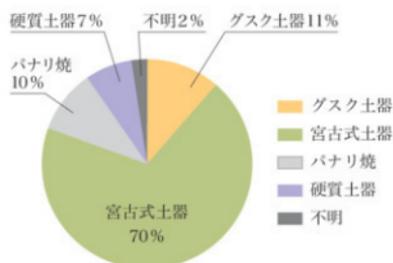
第66図1はグスク土器の口縁部である。混入物に石灰質砂粒を多く含む。内外器面には煤が付着している。

同図2・3は宮古式土器で多量の砂粒や赤色粒を含んでいる。2の口縁部は壺である。3の底部には内器面に指頭圧痕が残存している。

同図4は大粒の貝殻片が混入する胎土からバナリ焼(八重山式土器)に分類される資料であるが、小片のため器形は不明。

同図8～10は黒色粒や雲母を含む土師質な胎土から硬質土器(本土産焙烙)としたもので、首里城跡、天界寺跡、壺屋古窯跡で出土しているほか、鹿児島島の浜町遺跡でも類例がある(瀬戸2005)。

同図5～7は分類不明としたもので、5は内耳を有する口縁部に陶質土器の火がに類する可能性があるが詳細は不明である。この他に、6の横位に凸帯が貼り付けられた胴部片、7のほぼ垂直に立ち上がる底部片が得られている。



第34表 土器型式別出土割合

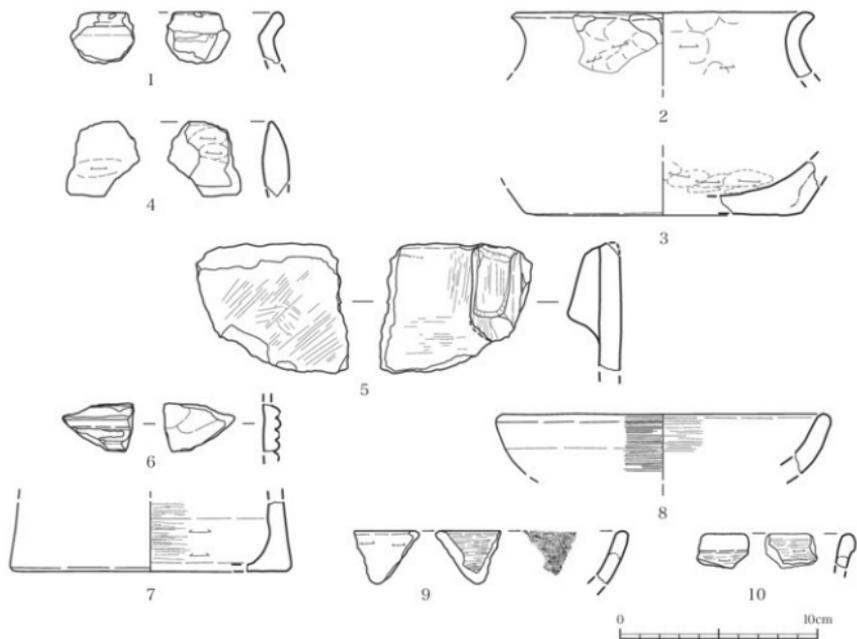
第35表 土器集計表

分類・器種・部位	グリッド層	E・F-13		F-13				F-G-13								I-13	K-13	I-14	I-14				
		1層	II層	III層	IV層	I層	II層		III層		IV層		清層	I層	I層	I層	II層	清層					
		TP12	TP12	TP13	TP13 (ST1)	TP13 (ST2)	TP13 (ST1)	TP14	TP14	TP14 (ST2)	TP14 (ST4)	TP14 (ST2)	TP14 (ST3)	TP14 (ST4)	TP14 (ST2)	TP14 (ST3)	TP14	LT	I層	TP2北	TP2	TP2	
グスク系 器種不明	口	2							1	1			2										
	胴	1																					
宮古式 器種不明	口	2	1	1	2		1	4	2						4	1	1	1	1	1	1	1	1
	底	1					1							1									
バナリ焼 器種不明	口																						1
	胴													1	1								
土師質 器種不明	口														1	1							
	胴									1													
その他 器種不明	口					1																	
	胴													1									
総計		5	2	1	3	1	1	5	2	1	1	2	1	6	7	2	1	1	1	1	1	1	1

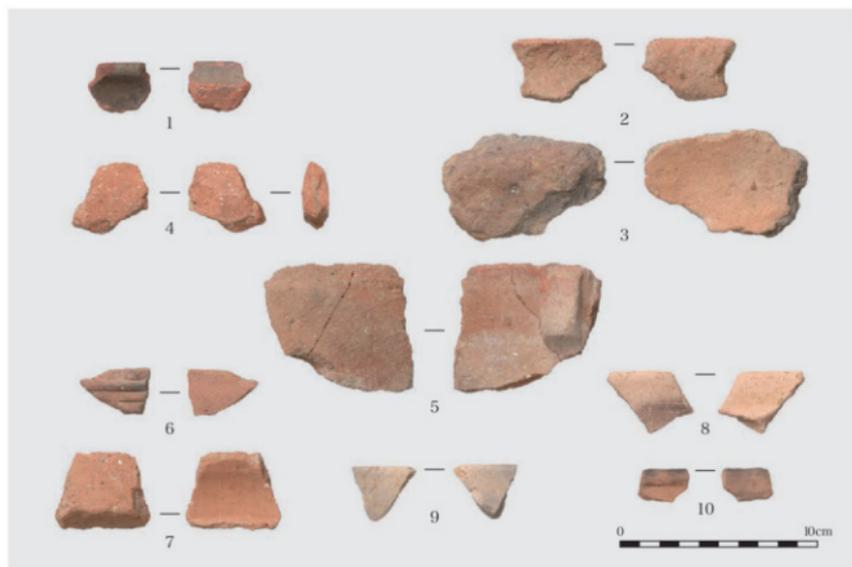
分類・器種・部位	グリッド層	上-14		K-14		L-14		I-15			J-15		K-15	L-15	J15-K16	L-16	G-19	不明	合計		
		1層	清層	1層	II層	I層	II層	I層	IV層	清層	I層	1層	1層	1層	1層	1層	II層	表層			
		TP3	TP1	1層	II層	I層	II層	TP4	TP6	TP6	TP4	TP7	1層	1層	1層	TP7	TP9	TP8		TP15	TP15
グスク系 器種不明	口									1										7	
	胴			1	1							1								7	
宮古式 器種不明	口														1					2	
	胴			4	1	9	4			2	2	4	7	4	1	2			14	1	1
バナリ焼 器種不明	口																				
	胴			1	3			1	1	1											9
土師質 器種不明	口																				
	胴			1								1		1		1					2
その他 器種不明	口																				
	胴															1					3
その他 器種不明	口																				
	胴																				1
総計		1	2	9	1	11	5	1	1	2	3	6	7	6	3	3	1	14	1	2	125

第36表 土器・硬質土器観察一覧

採掘番号 図版番号	番号	分類	器種	部位 口縁高 底径(cm)	観察事項				グリッド 層		
					文様構成	器色・素地	調整法	所見			
第66図 図版69	1	グスク 土器	-	口縁部	-	-	外器面：にぶい赤褐色(2.5YR4/4)、 内器面：赤褐色(2.5YR4/8)、 石灰質砂粒、微砂粒を多量に含む。	ナデ調整？	「く」の字状に 外反する。 内外器面に煤 が付着。	I-15 TP6 I層	
	2	宮古式 土器	壺	口縁部	15.3 -	-	内外器面ともに橙色(2.5YR7/6)、 石灰質砂粒、微砂粒、赤色土粒大へ 小粒を多量に含む。	内外器面ともナデ調整 または削り？(全体的 に剥落している)。 指頭痕残存。	-	F-13 TP13 ST1 III層	
	3	宮古式 土器	-	底部	- 14.0	-	外器面：にぶい褐色(7.5YR5/3)、 内器面：にぶい褐色(7.5YR7/4)、 石灰質砂粒、微砂粒、赤色土粒大へ 小粒を含む。内器面は混入物で ある微砂粒が剥落しポーラスな器 面を呈する。	外器面：残存部位が少 なく調整観察不可。 内底面：横方向のナデ 調整(連続的な指頭痕 残存)。	外器面及び外 底面の一部に 煤が付着(二 次のか)。	F・G-13 TP14 ST3 III層 レキゲン	
	4	バナリ焼 (八重山式)	-	口縁部？	-	-	内外器面ともに橙色(5YR6/6)、 石灰質砂粒、貝殻片(多量)、 灰色石片、赤色土粒を含む。 胎土がサンドイッチ状に変色 している。	内外器面ともに横ナデ 調整。指頭痕残存。	器形が不明な ため土製品の 可能性あり。	I-J-14 TP2 清掃	
	5	その他 (不明)	火鉢？	口縁部	-	-	内耳 貼付	外器面：にぶい褐色(7.5YR6/4)、 内器面：明赤褐色(5YR5/6)、 石灰質砂粒、微砂粒、石英、 黒色鉱物(角閃石?)、雲母(僅少)、 赤色土粒を含む。	外器面：斜め方向の工具 によるナデまたは削り。 内器面：刷毛目状工具 による横ナデ、内耳及 びその周辺には縦方向 のナデが施される。	陶質土器の火 鉢に類似。	F-13 TP13 ST2 III層
	6	その他 (不明)	-	胴部	-	-	横位の 凸帯 (?)を 4条貼 付	内外器面：にぶい褐色(5YR6/4)、 石灰質砂粒、微砂粒、石英、黒色粒、 赤色粒を含む。	内器面：ナデによる 擦痕(不明瞭)。 指頭痕残存。	-	F・G-13 TP14 ST2 III層
	7	その他 (不明)	-	底部	- 14.2	-	-	内外器面ともに褐色(5YR6/6)、 サンゴ粒、石灰質砂粒、微砂粒、 黒色粒、灰色粒、赤色粒、透明粒を 含む。	内器面：回転ナデ (ロクロ痕)により 調整。	底面から胴部 へかけて垂直 に立ち上がる 器形をなす。	F・G-13 TP14 ST4 III層
	8	硬質 土器	焙烙	口縁部	16.9 -	-	-	外器面：にぶい褐色(7.5YR7/3)、 内器面：浅黄褐色(7.5YR8/6)、 黒色鉱物、赤色粒を含む。	内外器面ともにロクロ 調整。 内器面はへら状工具 による線状痕が若干みら れる。	外器面下部に 煤の付着がみ られる。首里城 跡、天界寺跡、 鹿兒島県京町 遺跡等に類例。	L-16 TP8 I層
	9	硬質 土器	焙烙	口縁部	-	-	-	外器面：浅黄色(2.5Y7/3)、 内器面：浅黄褐色(10YR8/3)、 微砂粒、黒色鉱物、赤色粒を含む。	外器面：ロクロ成形。 内器面：へら状工具 による回転削り。 線状痕が明瞭に残存。	-	F・G-13 TP14 ST4 III層
	10	硬質 土器	焙烙	口縁部	-	-	外器面 肥厚部 下部に 洗線を 1条施 す。	外器面：にぶい褐色(7.5YR6/4)、 内器面：にぶい褐色(7.5YR6/3)、 微砂粒、雲母を含む。	内外器面ともに ロクロ成形。 内器面は線状痕がみら れる。	口縁端部を玉 縁状に肥厚さ せる。口唇部 に煤が付着し ている。	F・G-13 TP14 ST2 IV層



第66圖 土器・硬質土器



圖版69 土器・硬質土器

第13節 瓦質土器 (第37・38表、第67図、図版70)

瓦に類する胎土・質感をもった還元焰焼成の土器である。沖縄で出土するものには、本州産もしくはその影響が強い本州系、湧田窯で生産されたと考えられるタイプ、具体的な産地が不明なもの大きく3つがある(瀬戸2009)。今回の調査では全破片数で16点を数えた。

1は本州系のもので、大きく内湾する浅鉢である。

2～4は湧田窯のもので、揃鉢(2・3)、大型の植木鉢(4)である。

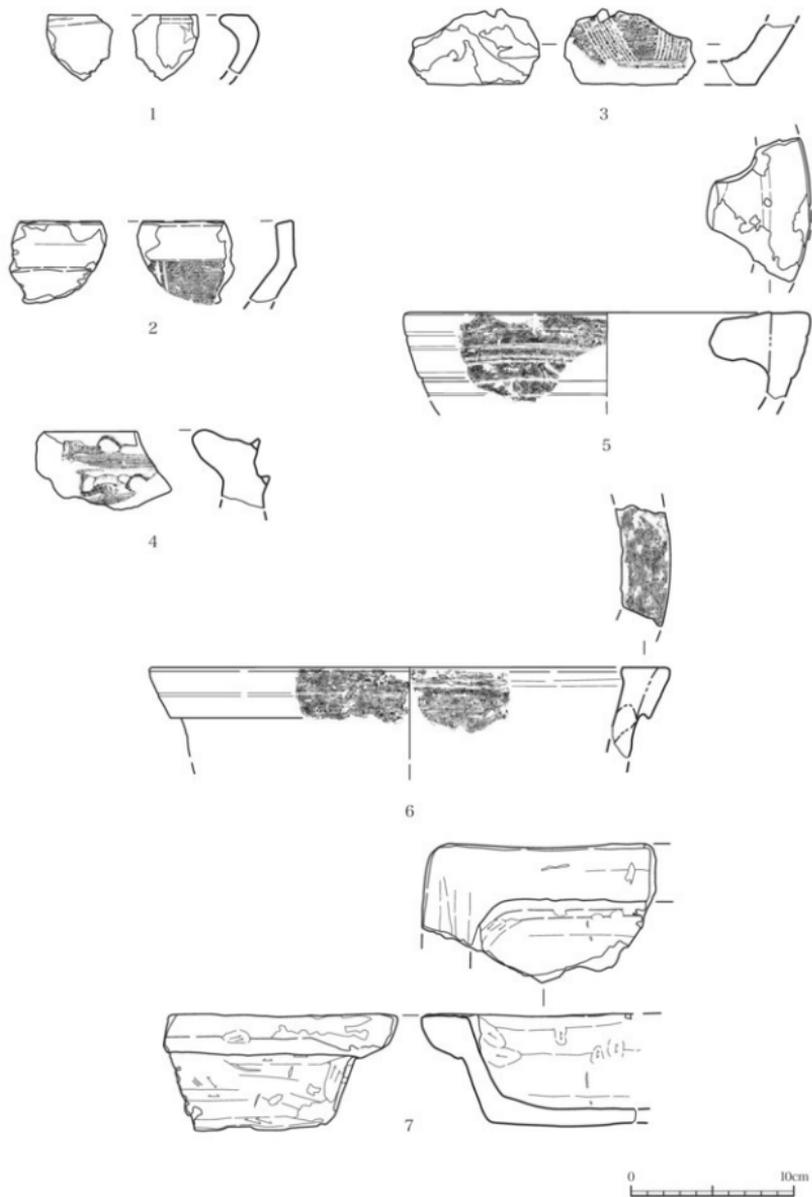
5～7は産地不明のもので、器形はカマドと考えられる。5・6は胎土に初殻を含むもので、7とは異なっている。

第37表 瓦質土器集計表

器種・部位	グリッド・層		E・F-13				F・G-13		I-14	L-14	I-15	J-15	K-15	L-16	不明	合計
	1層		1層	皿層	表探	1層	II層	IV層	1層	1層	1層					
	TP12	TP14	TP14 (ST2)	TP14 (ST4)		TP2北		TP6	TP7		TP8	表探				
植木鉢	口							1								1
	胴								2							2
揃鉢	口									1						1
	底													1		1
浅鉢	口						1									1
甕	口	1	1	2	2	1						1				8
	口～底										1					1
	底												1			1
総計	1	1	2	2	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	16	

第38表 瓦質土器観察一覧

採掘番号 図版番号	番号	器形	色調			混入物(種類・量)	成形・調整・文様など	グリッド・層
			外面	断面	内面			
第67図 図版70	1	浅鉢	黄灰	暗灰黄	灰黄	白色粒(微)	本州系 外面及び口縁上面はミガキ内面は丁寧なヨコナデ	I-14 TP2北 I層
	2	揃鉢	灰黄	灰白	灰	白色・黒色粒(微)	湧田窯 口縁内外面丁寧なヨコナデ	I-15 TP6 IV層
	3	揃鉢	灰	黄灰	黄灰	褐色粒(中)、雲母(微)	湧田窯 揃目9本/1.8cm	表探
	4	植木鉢	灰	灰白・灰	灰	褐色粒(中)、雲母(微)	湧田窯 口縁は広く外傾する面をもち、縄目文2条(残存)	L-14 II層
	5	カマド?	橙	黄灰	鈍黄橙	初殻・褐色粒(中)、雲母(微)	平面が円形ではなく弧状の可能性あり 口縁外面はロクロナデ 内面は突起状受け部 被熱のためか黒変	K-15 I層
	6	カマド?	橙	鈍橙	橙	初殻(多)、褐色粒・雲母(中)	平面が円形ではなく弧状の可能性あり 口縁内外面は丁寧なヨコナデ	F・G-13 TP14 ST2 I層
	7	カマド	橙	橙	橙	白・黒色粒、雲母(微)	外面はケズリ後ヨコナデ調整 底部は粗い器面を残す 口縁内面縁辺にスズ?付着	J-15 TP7 I層



第67図 瓦質土器



図版70 瓦質土器

第14節 土製品 (第39表、第68図、図版71)

今次調査では2点の土製品が出土している。遺物個々の詳細な所見は観察表に譲り、ここではより総合的な内容を述べたい。

1. 土人形

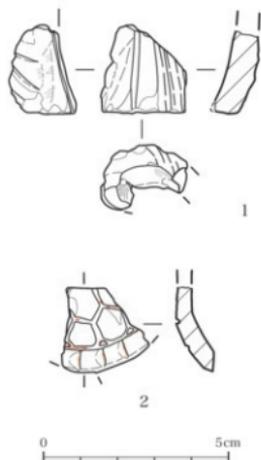
足の部分のみが残存しておりモチーフは不明である。粒子の非常に細かい泥質の胎土は首里城御内原跡北地区で出土した太夫人形に酷似しており(沖縄県立埋蔵文化財センター 2010)、本土の近世遺跡でしばしば出土する京焼の土人形の胎土とみられる。

2. 土製品

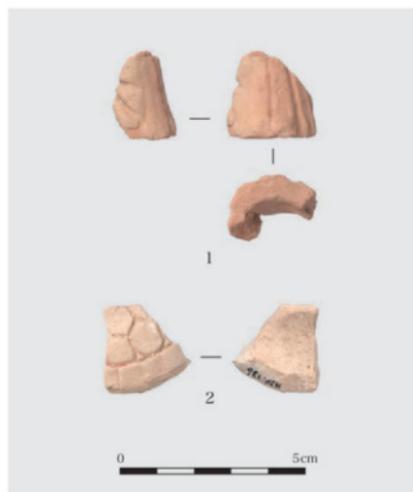
一見すると亀の甲羅のようにみえるが、赤色の塗装痕が残るためモチーフが判然としなない。これも胎土の特徴から泉外のものともみられる。

第39表 土製品観察一覧

掘削番号 図版番号	番号	種類	胎土	製作方法	法量(cm・g)				観察事項	グリッド・層
					縦	横	厚	重量		
第68図 図版71	1	土人形	内外：橙色泥質(黒外?)	型合わせ	(2.40)	(2.30)	0.80	(4.90)	内面に張り合わせ面が付き切らずに残る。内面に芯棒の痕が残る。表面・底面にミガキ痕。モチーフ不明。	E-F-13 TP12 III層
	2	土製品	外：浅黄橙色 内：灰白色泥質(黒外?)	型押し	(2.30)	(2.35)	0.40	(3.30)	内面に芯棒の痕が残る。表面ミガキ。本来は赤色に塗装。ミニチュア土製品?	L-15 I層



第68図 土製品



図版71 土製品

第15節 埴塼 (第40表、第69図、図版72)

埴塼は破片で総数7点が出土している。表土や攪乱層からの出土であることから詳細な状況は不明であるが、ここでは3点を報告する。

第69図1・2は埴塼の口縁から胴部にかけての破片である。1は3点を接合し、口径4.8cmの図上復元ができた。被熱により全体が炭化して変色し、脆く変質している。口唇部は丸く、砲弾状に底部へ至る。これまでの出土例から、丸底か尖底になるものと思われる。外面は部分的に発泡しているが、内面は褐色を呈し、指頭痕らしき痕跡がみられる。器厚は0.6cmである(F-13 TP13 ST1 III層)。

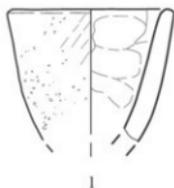
2は内外に厚いガラス質の付着物がみられる埴塼の口縁部である。高熱により胎土は脆く炭化している。口径は図上復元で5.0cm、器厚は0.8cmと厚手である(F-13 TP13 ST2 III層)。

3は埴塼の底部資料である。緩やかな丸底で、外面は黒色ガラス質の付着物が溶着している。器厚は底部で1.0cm、胴部で0.8cmを測る(F・G-13 TP14 ST2 IV層)。

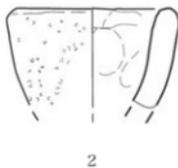
埴塼は、これまで首里城内での出土は一定量みられたが、本資料の出土により、城外においても類似する製品が出土していることがわかった。攪乱層出土のため、時期的判断は困難であるが、おそらく中城御殿築造以前の製品と思われる、当地において金属あるいはガラス製品を製作していたか、造成土中に混入して持ち込まれた可能性を示している。

第40表 埴塼集計表

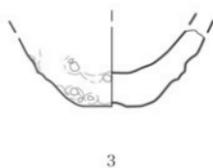
器種	グリッド・層		F・G-13		K-13		G-L-13		合計
	III層		I層	IV層	I層	I層			
	TP13 (ST1)	TP13 (ST2)	TP14 (ST1)	TP14 (ST2)	LT	LT			
埴塼	1	1	1	1	1	1	1	1	7
総計	1	1	1	1	1	1	1	1	7



1



2



3



第69図 埴塼



図版72 埴塼

第16節 陶管 (第41表、第70図、図版73)

陶管はすべて破片で出土している。接合を試みたところ、この内、破片が集中して出土した1点をほぼ完全に復元することができた。出土状況から埋設された状態をうかがい知ることはできないが、遺構直上の攪乱層や表土より出土する傾向にあることから、戦後の遺物になることも考えられる。

陶管は粘土輪積みにより造られ、成形は外面でナデにより輪積み境界は丁寧に消される。しかし、内面では櫛状工具を当て、横位に調整するうえ、指ナデにより輪積みの境界を粗くならざる状況が確認できる。しかし、その境界は明瞭に残る資料が多く、表面には薄い泥軸状の褐釉が全面に塗布される。埋設時には連結して使用することから、結合部は両端で直径が異なり、広端部分は細い管部分を置くようにラウンドした形状で、端部断面は撥状にやや厚く成形する。狭端部は外面結合部に数条の沈線を巡らすことにより、隙間を埋めるモルタルや漆喰の接着強度を高めている。陶管のサイズは大小の2種が認められるが、形状及び成形法は共通する。

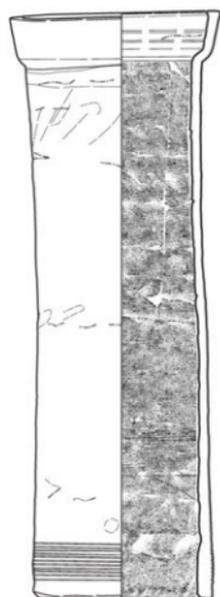
第41表に示したように、接合後、口径を復元した結果、広端部で18.1cm～23.6cm、狭端部は16.6cm～18.2cmであり、狭端部ではほぼ口径のサイズに開きがないものの、広端部では口径21cm以上が大半を占めている。これにより、陶管は大のサイズが多く、数個体が存在していたことがわかる。

復元した第70図1の陶管は大のサイズで、高さ61.3cm、広端部で直径21.9cm、器厚1.4mm、端部幅5.5cm、狭端部は直径18.25cm、器厚1.5mmである。小のサイズは、狭端部が復元できたのみで、全長は不明であるが、直径は16.7cm、器厚1.9cmである。

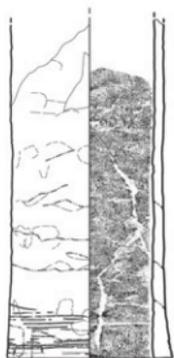
陶管の出土は、これまで那覇市（那覇市教育委員会1992）及び名護市（名護市教育委員会2004）で報告があり、ともに近代以降の製品と思われる。この内、那覇市出土品は壺屋で焼造された可能性がある。しかし、名護市出土資料と今回の出土資料は、細部の形状や施軸などの点で若干の違いが認められるものの、形態的に類似しており同系統と考えられるが、現時点ではこれらの資料以外に類例が見られず、産地についても判然としない。

第41表 陶管計測値

番号	部位	最大径 (cm)	最大厚 (cm)	グリッド・層	備考
1	広端部	20.70	1.7	K-14 II層 ミゾ2内	
2	広端部	22.80	1.3	J-14 TP3 II層 ミゾ2内 ベルト	
3	広端部	21.70	1.4	K-14 II層 ミゾ2内	
4	広端部	22.00	1.5	K-14 II層 ミゾ2内	
5	広端部	21.60	1.6	K-14 II層 ミゾ2内	
6	広端部	22.80	1.6	K-14 II層 ミゾ2内	
7	狭端部	17.20	2.1	L-14 I層	
8	狭端部	17.60	1.5	J-14 TP3 II層 ミゾ2内	
9	広端部	18.10	1.5	K-14 I層	
10	広端部	22.00	1.5	K-14 II層 ミゾ2内	
11	広端部	21.00	1.7	K-14 II層 ミゾ2内	
12	広端部	22.00	1.6	K-14 I層	
13	広端部	23.60	1.5	K-14 I層	
14	広端部	21.40	1.4	K-14 II層 ミゾ2内	
15	広端部	20.00	1.5	K-14 I層	
16	広端部	23.20	1.5	K-14 II層 ミゾ2内	
17	広端部	22.00	1.7	K-14 II層 ミゾ2内	
18	広端部	21.00	1.5	K-14 I層	
19	広端部	21.00	1.5	K-14 II層 ミゾ2内	
20	広端部	19.60	1.3	K-14 I層	
21	狭端部	16.60	2.1	K-14 I層	
22	狭端部	18.20	2.3	K-14 I層	
23	広端部	21.90	1.4	K-14 II層 ミゾ2内	高さ61.3cm・第70図1
	狭端部	18.25	1.5		
24	狭端部	16.70	1.9	K-14 II層 ミゾ2内	第70図2



1



2



第70图 陶管



1

2

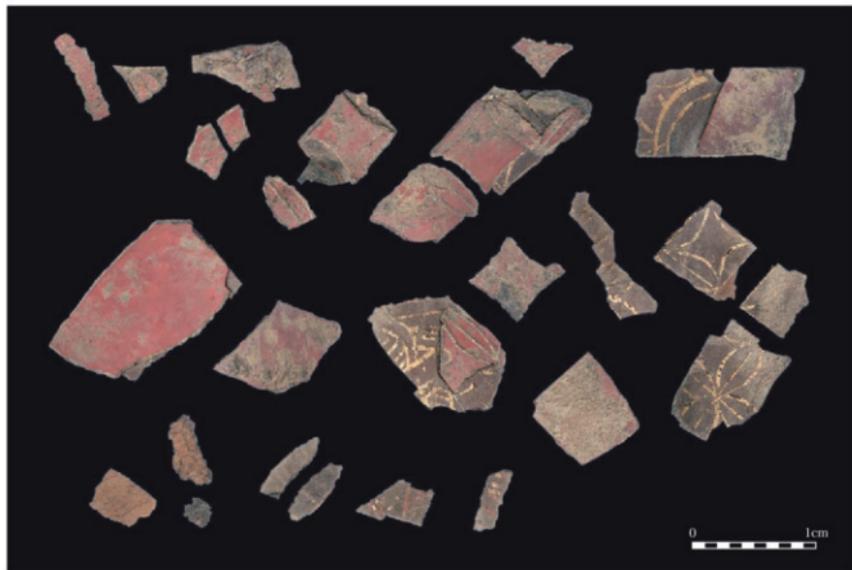


图版73 陶管

第17節 漆製品 (図版74)

平成20年度調査で漆器の破片が出土している(K-14Ⅱ層溝2内)。資料は細かく破砕しており、全形をうかがうことはできない。資料は漆の塗膜片面の状態のもと、薄い木胎部が腐食した隙間を残し、両面に塗膜が残る資料もみられる。破片の大半に文様がみられるが、明確なパターンが確認できるのは七宝繁文のみで、ほかは小破片のため意匠構成は不明である。この不明文様の施文については箔絵により描かれていると思われるが、その一方の七宝繁文は文様の境界がわずかにくぼみ、そこから破損する傾向が確認できることから、漆器表面を刃物で線刻し、金粉や金箔を象嵌する沈金の技法により施文されている可能性がある。

中城御殿には、特に廃藩置県から明治後半にかけ、首里城や数箇所の御殿から多くの宝物が持ち込まれたとされる。また、中城御殿の所蔵品を撮影した鎌倉芳太郎の写真資料中にも多くの漆器類が残ることから、出土したこれらの漆製品は、中城御殿で調度品や食器として使用された漆器類の破片であることが考えられる。



図版74 漆製品

第18節 銭貨 (第42・43表、第71図、図版75)

銭貨は69点出土しており、銭種が判明するものは洪武通寶、寛永通寶、1セントであった。出土点数では、寛永通寶、無文銭が多く、銭種不明も多い。

特徴としては、寛永通寶と無文銭が多く、首里城跡等で確認されている北宋銭、南宋銭、清朝銭が出土していないことを挙げることができる。明朝銭も洪武通寶の一部が出土しているのみであり、完形品はない。出土は沖繩戦中・戦後の時期と考えられるI層及びII層からが多いが、寛永通寶と無文銭の数が突出する銭種構成は現段階では首里城跡では見られない。

以下に出土状況及び特徴的な13点の法量等を記す。

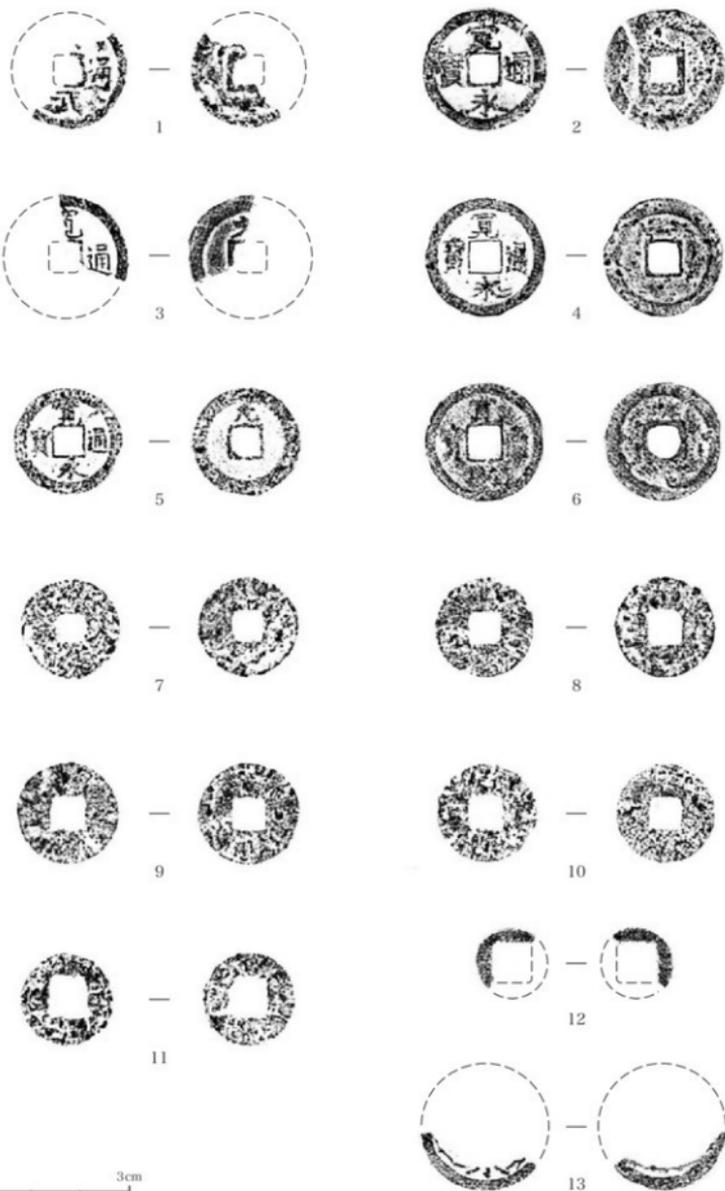
第42表 銭貨集計表

グリッド・層 銭種	F-13		F・G-13			I・J-14		J-14		K-14		L-14		I-15		K-15		L-15		K-16		L-16		G-19		不明		合計
	I層	II層	III層	IV層	I層	II層	I層	II層	I層	II層	I層	II層	I層	II層	I層	II層	I層	II層	I層	II層	I層	II層	III層	IV層	表採	不明	表採	
寛永通寶(古)	2			1									1	2	2												1	9
寛永通寶(文)							1																					1
寛永通寶(新)	2	1	1									3			1	2		1		1					1	1	14	
無文銭					1				1	1	1												5	16				28
洪武通寶								1																				1
1セント												1			1											1	3	
不明			1	1	1	1					2	2						2	1	1						1	13	
合計	4	1	2	1	2	1	1	1	1	3	7	1	1	5	8	1	1	1	1	1	5	16	1	2	2	2	69	

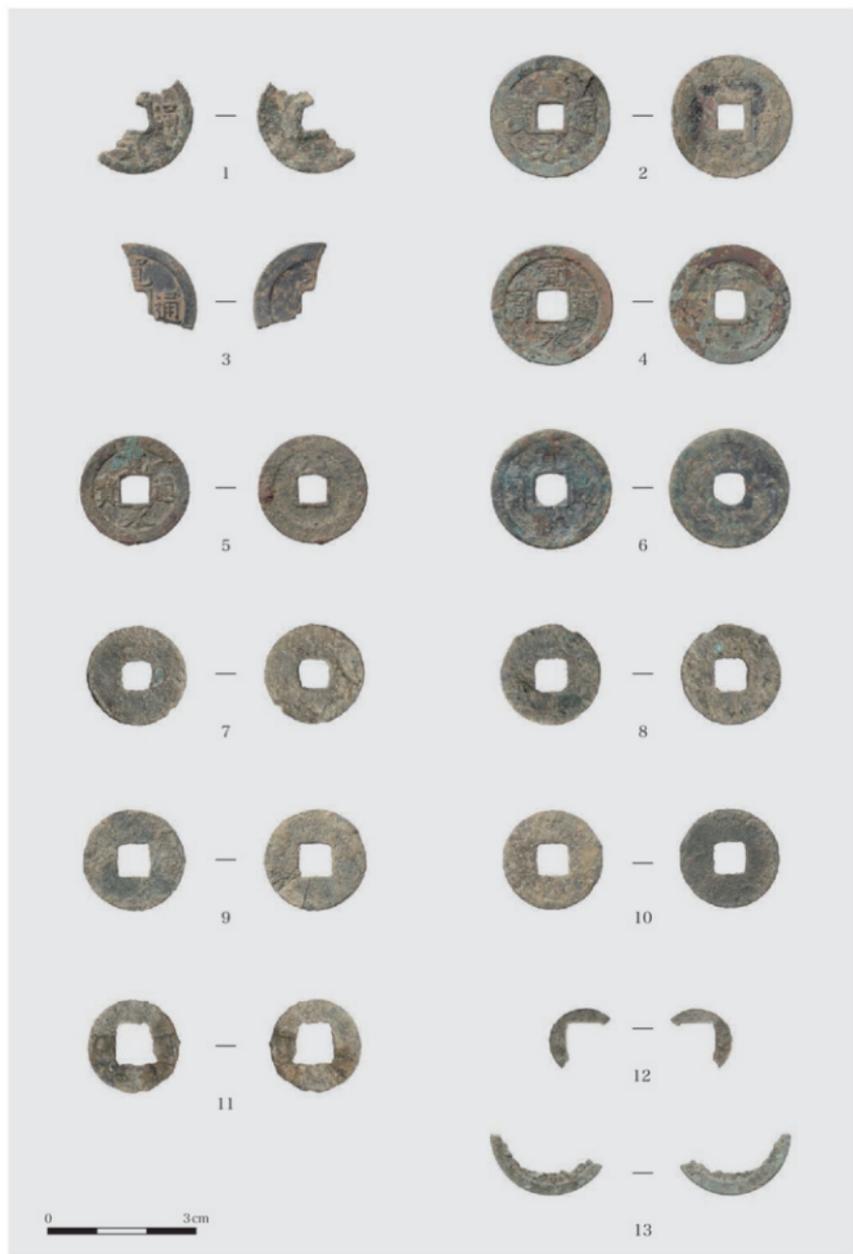
第43表 銭貨観察一覧

挿入番号 図版番号	番号	銭文	銭種	国・王朝	初鋳年	法量 (cm・g)				備考	グリッド・層
						外径	孔径	厚さ	重量		
第71図 図版75	1	○武通○	洪武通寶	明	1368	-	-	0.17	1.6		K-14 I層
	2	寛永通寶	寛永通寶	江戸幕府	1636	2.4	0.6	0.14	4.1		表採
	3	寛○通○	寛永通寶	江戸幕府	1668	-	-	0.12	1.2	背に「文」	J-14 TP1 I層
	4	寛永通寶	寛永通寶	江戸幕府	1739	2.4	0.6	0.12	3.0		F-13 TP13 ST1 I層
	5	寛永通寶	寛永通寶	江戸幕府	1739	2.15	0.6	0.13	2.5	背に「元」	J-15 TP7 I層
	6	寛□□寶	寛永通寶	江戸幕府	1739	2.3	0.7	0.13	3.3	「永」・「通」が潰れている。	L-15 I層
	7	-	無文銭	-	-	2.0	0.6	0.10	1.4		G-19 TP15 III層
	8	-	無文銭	-	-	1.95	0.7	0.11	1.3		G-19 TP15 III層
	9	-	無文銭	-	-	2.05	0.7	0.10	1.5		G-19 TP15 III層
	10	-	無文銭	-	-	2.0	0.65	0.09	1.4		G-19 TP15 III層
	11	-	無文銭	-	-	1.85	0.8	0.08	0.6		G-19 TP15 III層
	12	-	無文銭	-	-	-	-	0.07	0.2		I-15 TP6 I層
	13	-	-	-	-	-	-	0.07	0.5	輪が切り取られている。 寛永通寶?	F・G-13 TP14 ST2 III層

※ 破損している部分の銭文は○で示し、判読不明なものは□で示した。



第71図 銭貨



図版75 錢貨

第19節 煙管 (第44・45表、第72~74図、図版76)

平成20・21年度調査では25点の煙管が出土したが、石井龍太の分類(石井2010)や以前検討した分類(沖縄県立埋蔵文化財センター 2010)を参考に、新たに分類基準を設けた(第74図)。それを踏まえて各種類から良好な10点を詳報する。なお煙管の部位名称については第72図、遺物個々の特徴については第45表を参照されたい。

1. 陶製羅字煙管

雁首 第73図1~5のような、陶器製の雁首で多角形状に面取りされるものをⅡ類とした。作られる面は7角のもの(1)から12角にも及んでいるもの(2)など多様である。火皿部は僅かに立ち上がる程度の反しの低いものが主体であった。いずれも沖縄産陶器製で、施軸(1・3・5)と無軸(2・4)の両方がみられる。

第73図6~10のような、陶器製で丸形の雁首をⅢ類とした。およそ一定の形状をしているが、Ⅱ類と同じく火皿の高さに高低差が認められる。出土資料はいずれも乳白色の素地で、透明軸(6)や緑軸(7~10)が施軸される。小口には平坦なもの(2~4・6~8)と凹みを作るもの(9)との2種がみられる。また首部上下の軸を削り取り、商標とみられる「山一」と印が押されている資料が得られている(8)。

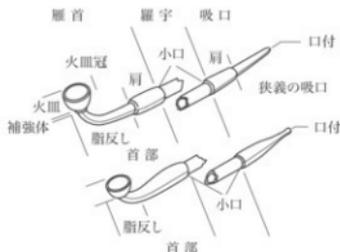
なお柱状ないし釣鐘型の雁首をⅠ類としているが、今次調査では得られなかった。Ⅰ類は比較的年代の古い遺跡に多く出土する傾向にあり、近代を中心とする中城御殿跡で出土例がないこともその裏づけといえよう。

吸口 第73図11のような直線のなものを吸口Ⅰ類とした。今回は1点のみで、乳白色の素地で瑠璃軸が施される。陶製雁首Ⅲ類と同様に小口には平坦なものと同凹みを作るものと2種がみられるが(沖縄県立埋蔵文化財センター2010)、この資料は平坦なものである。対して第73図12のような、陶製で首部が大きく肥大するものを吸口Ⅱ類とした。今回は1点のみで、乳白色の素地で白軸が施される。

2. 金属製羅字煙管

雁首 羅字煙管の雁首のうち金属製で首部が短く肩がないものを金首Ⅳ類としている。全1点が出土しており、第73図13のように板材を筒状に曲げて作られている。江戸遺跡での多くの出土事例から、Ⅳ類のような短首の雁首は比較的新しいタイプであることが知られる(江戸遺跡研究会 2001)。首部が長く小口に肩が付くものをⅠ類、首部が長いが肩が付かないものをⅡ類、首部は短いが肩が付くものをⅢ類としているが、いずれも今次調査では得られなかった。

吸口 金属製で首部を大きく肥大するものを金口Ⅱ類としている。今回は1点が出土している。また首部から口付までが直線のなものを金口Ⅲ類とし、1点を得られている。前者は第73図14、後者は第73図15で、ともに雁首と同じく板材を筒状に曲げて作られている。



第72図 煙管の部位名称
(江戸遺跡研究会 2001)

3. 延べ煙管

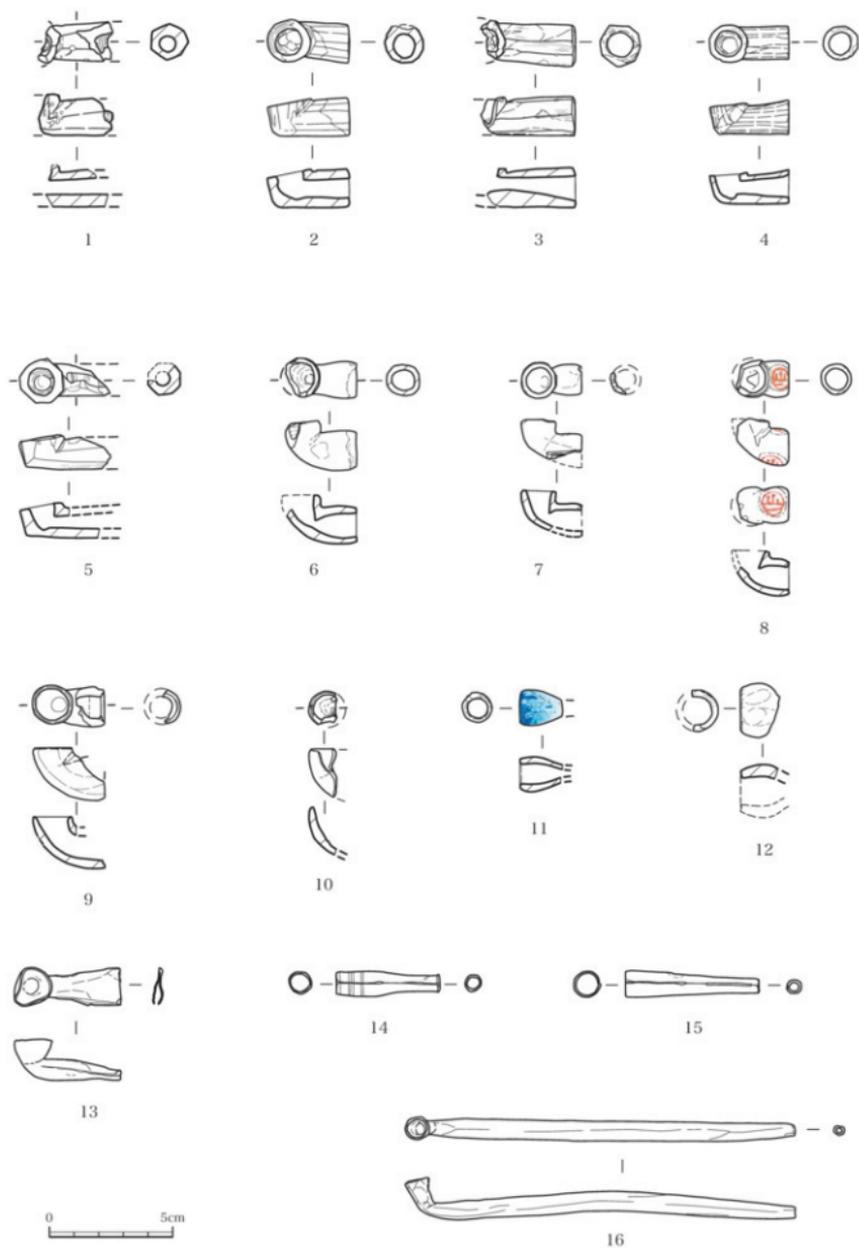
延べ煙管は火皿から口付までが一体となっているもので、県内では出土事例の少ないタイプである。今次調査でも第73図16の1点のみが得られている。やや首が高いが、小さな火皿などの特徴はこれまで県内で出土する延べ煙管とほぼ同様である。

第44表 煙管集計表

材質・器種・部位・分類			グリッド・層												不明	合計										
			E-F43		F-G-13		G-13		K-13		J-14		K-14				L-15		J-15		K-15		L-15		J45-16	
			1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層			1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層
沖繩産施軸陶器			TP12	TP14	TP14 (ST4)	LT	1層	TP1	1層	溝2内	TP6	溝5内	溝5外	溝5外	溝5外	溝5外	溝5外	溝5外	溝5外	溝5外	溝5外	溝5外	溝5外			
沖繩産施軸陶器	羅字煙管	煙首	II類	1			1			1											1		3			
		煙口	II類						1			1										1		5		
	器種不明	煙首	II類			1																1		1		
		煙口	II類																					1		
沖繩産無軸陶器			羅字煙管	煙首	II類												1	1					2			
			器種不明			1				1	1	1	1				2						7			
真鍮?	羅字煙管	金首	IV類						1														1			
		煙口	III類																			1		1		
	延べ煙管	完形																	1				1			
		完形																						1		
総計			3	1	1	1	1	1	1	2	1	2	1	1	4	4	1	1	1	1	1	1	25			

第45表 煙管観察一覧

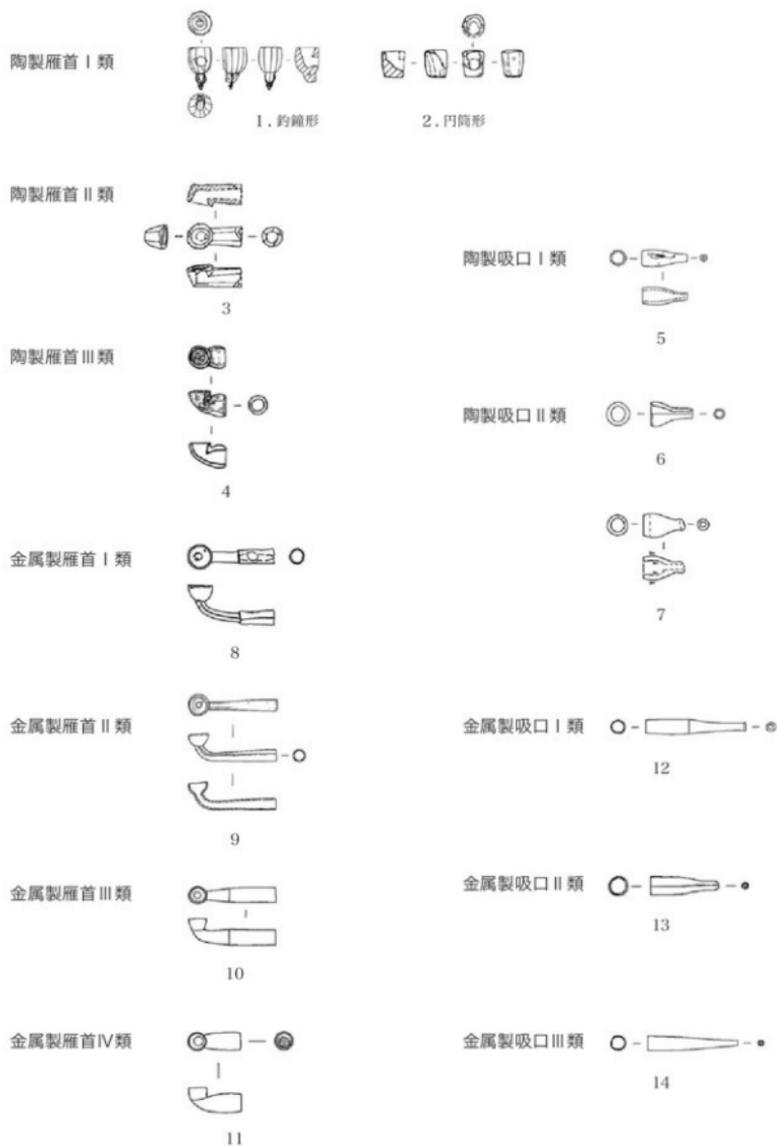
挿入番号 図版番号	番号	部位	材質	素地/釉	法量 (cm・g)					観察事項				グリッド・層	
					火皿 外径 内径	小口 外径 内径	口付 内径	長さ 高さ	重量	首の 高さ	形状	煤の 付着	小口 形状		その他特徴
第73図 図版76	1	陶首II類	沖繩産陶器製	赤褐色/黒釉	-	-	-	(3.0) 1.7	(6.8)	やや 高	7面	×	-	内面に線条痕	L-15 1層
	2	陶首II類	沖繩産陶器製	暗褐色/無釉	1.7 1.1	1.55 1.0	-	3.3 1.55	9.0	短	12面	○	平坦	一部自然軸	K-15 1層
	3	陶首II類	沖繩産陶器製	赤褐色/黒釉	-	1.7 1.0	-	(3.8) (1.6)	(10.5)	短	8面	×	平坦	内面に線条痕	K-14 1層
	4	陶首II類	沖繩産陶器製	茶褐色/無釉	1.55 0.9	1.35 0.95	-	3.2 1.3	5.8	短	10面	○	平坦	内面に線条痕	J-15 溝掃
	5	陶首II類	沖繩産陶器製	暗褐色/褐釉	1.8 1.1	-	-	(3.7) (1.4)	(6.1)	短	-	×	-	内面に線条痕	G-13 LT 1層
	6	陶首III類	沖繩産陶器製	白色透/明釉	-	1.3 0.9	-	(2.9) 2.05	(6.8)	高	丸	×	平坦		L-15 1層
	7	陶首III類	沖繩産陶器製	赤褐色/緑釉	1.45 1.05	-	-	2.45 -	(2.8)	高	丸	×	平坦		L-15 TP6 IV層
	8	陶首III類	沖繩産陶器製	灰色/緑釉	-	1.3 0.9	-	(2.1) (1.9)	(3.7)	短	丸	×	平坦	首部上下に 「山」?	J-14 TP1 1層
	9	陶首III類	沖繩産陶器製	灰色/緑釉	1.7 1.3	-	-	2.9 2.2	(5.8)	短	丸	×	凹形	小口が赤く変色	J-15-16 TP7 1層
	10	陶首III類	沖繩産陶器製	灰色/緑釉	-	-	-	(1.1) -	(1.7)	やや 高	丸	×	-		E-F43 TP12 1層
	11	陶口I類	沖繩産陶器製	白色/硝子釉	-	1.2 0.8	-	(1.75) 1.45	(2.5)	-	丸	×	平坦		L-15 1層
	12	陶口II類	沖繩産陶器製	黄褐色/白釉	-	1.7 1.1	-	(1.6) 2.2	(3.2)	-	丸	×	平坦 肥大		F-G-13 TP14 ST4 II層
	13	金首IV類	真鍮?	-	-	-	-	(4.3) (1.7)	7.3	-	丸	×	平坦	鍛造	表探
	14	金口II類	真鍮?	-	-	0.85 0.75	0.7 0.5	4.2 1.0	5.9	-	丸	×	平坦	鍛造	K-13 1層
	15	金口III類	真鍮?	-	-	1.05 0.9	0.55 0.35	5.4 1.1	5.0	-	丸	×	平坦	鍛造	L-15 1層
	16	延べ煙管	真鍮?	-	-	0.9 0.75	-	0.4 0.2	15.8 1.75	40.4	やや 高	火皿 小	×	-	鍛造



第73圖 煙管



图版76 烟管



第74図 雁首煙管の分類

1:古我知原内古墓 2・4:渡地村跡 3:ナカンダカリヤマ古墓群 5・9:ヤッチのガマ
 6・10・12~14:ナーチュー毛古墓群 7:天界寺I 8:東大本郷構内工学部14号館地点
 11:内間西原近世墓群27号墓

第20節 遊具 (第46~49表、第75図、図版77)

基石や円盤状製品といった遊具と想定される遺物をまとめて本節で報告する。なおここでは概括的な報告を行い、遺物個々については第48表を参照されたい。

1. 円盤状製品

円盤状製品は平成20・21年度で計230点が出土した。御藏などが立地していたI-14からL-16より132点、ロングレンチ内から17点、中城御殿の本殿が位置していたE・F-13TP12・13・14で77点・不明4点の合計230点の円盤状製品が出土している。中城御殿跡の調査では、沖縄県立博物館による3度の調査で369点、沖縄県立埋蔵文化財センターによる平成19年度調査では7点の円盤状製品が出土しており(沖縄県立博物館1995、沖縄県立埋蔵文化財センター2010a)、中城御殿跡は県内でも屈指の出土量を誇る。

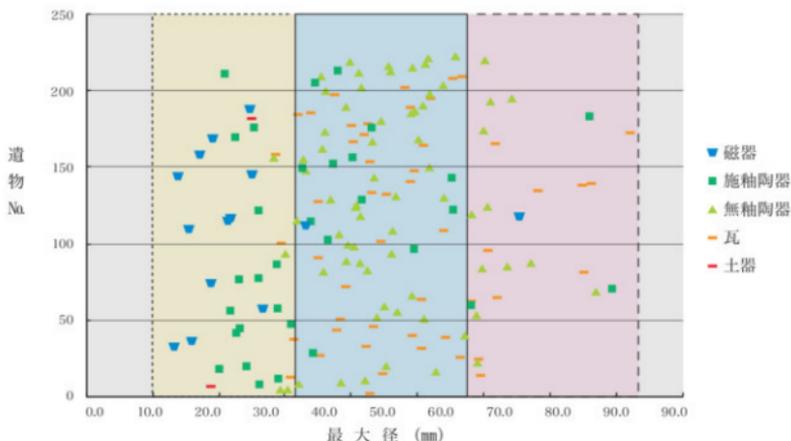
円盤状製品は加工方法より周縁を剥離加工するものと研磨するものに大別することができる(沖縄県立埋蔵文化財センター2010b)。この製作上の違いと出土層位を踏まえ、10点を精選して詳述する。

周縁を剥離加工する製品 平成20・21年度調査によって225点の資料が得られており、主体を占めるタイプである。剥離方法には器の内外両面から剥離して製作されるもの(第75図1~4、6・7)と、片面を中心に剥離して製作されるもの(第75図5・8)がある。この違いに何ら特徴は見出されないことから、剥離面の選択は応変になされていたとみられる。

また全出土資料の最大長を集計すると、32mm以下の小形グループ、32~56mmの中形グループ、56mm以上の大形グループの3群が認められる(第46表)。そのうち中形グループが最も多く、大形グループが最も少ない傾向が認められる。また素材に目を移すと、小形グループは磁器や施釉陶器を素材とするものが多く、中・大形グループは無釉陶器や瓦が素材となっている傾向が認められる。大小の作り分けに際して素材の材質を考慮していた可能性を窺わせる。

周縁を研磨する製品 5点の資料が得られている。第75図9・10のように、最大長で2.0~5.0cmと大きさは周縁を剥離加工する製品と変わらないが、全体的に丸みを帯びており、平坦な形状の周縁を剥離加工する製品と違いがみられる。素材はいずれも明朝系瓦が用いられている。

このタイプの資料は決して主体を占めることはないが、多くの中近世の遺跡で出土例をみることができる。用途には盤上遊具の駒が想定されているが(上原2004)、本土では破損した陶磁器を砥石に再利用する事例もみられる(熊野ほか(編)2006)。



第46表 円盤状製品の最大径

第48表 円盤状製品観察一覧

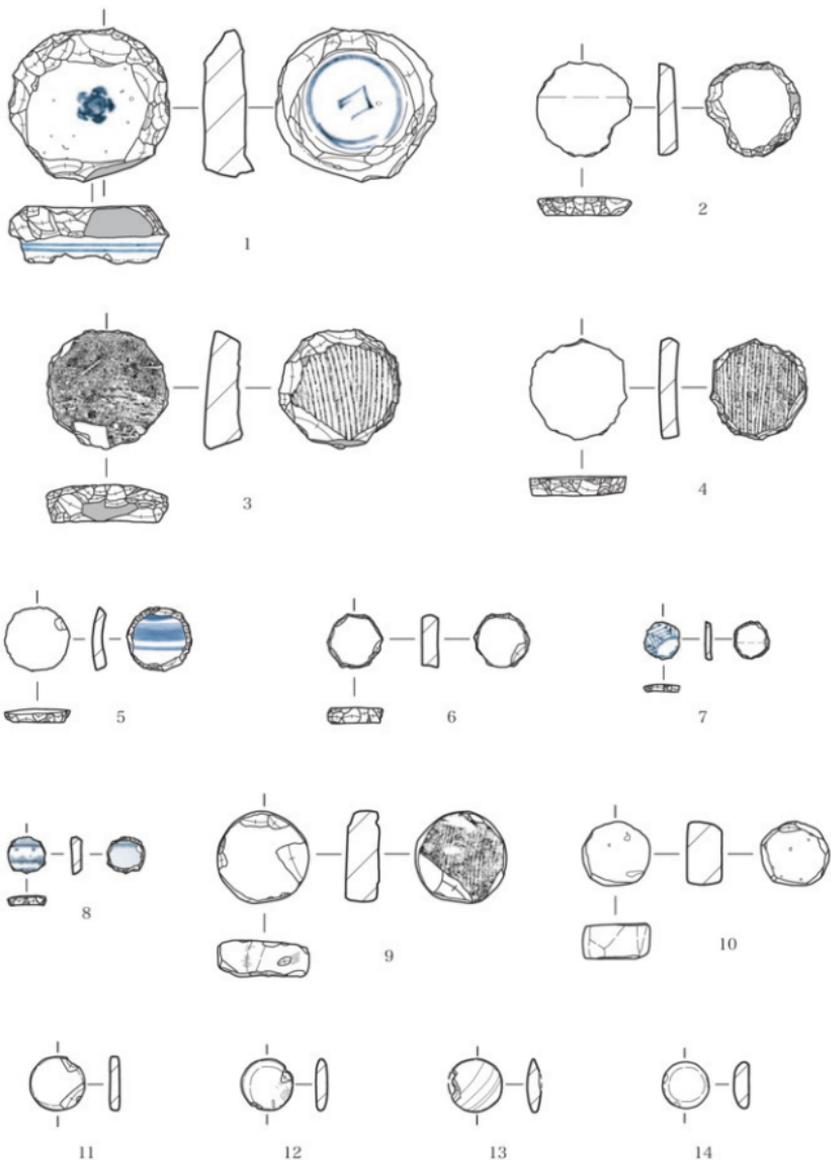
挿図番号 図版番号	番号	製作 方法	素材	使用部位	法量 (mm・g)				観察事項			グリッド・層
					縦	横	厚	重量	打面	加工順序	その他特徴	
第75図 図版77	1	剥離	肥前産染付	碗底部	60.0	65.0	17.0	96.5	両面	右側を除いて外面 →内面に微細調整	素材は内底面の五弁花 から19世紀頃の肥前。	H-13 LT I層
	2	剥離	沖崎産施釉	胴部	39.0	38.0	8.0	13.2	両面	規則的な剥離順序 みられず	-	F・G-13 TP14 ST4 III層
	3	剥離	沖崎産無釉	播鉢胴部	49.0	49.0	16.0	42.4	両面	外面 → 内面	-	F・G-13 TP14 ST4 III層
	4	剥離	木土産施釉	播鉢胴部	41.0	39.0	7.0	16.5	両面	規則的な剥離順序 みられず	-	I-15 TP6 IV層
	5	剥離	木土産染付	胴部	26.0	27.0	5.0	4.0	外面	外面から	-	L-16 TP8 I層
	6	剥離	中国産 褐釉陶器	胴部	22.0	23.0	7.0	4.4	両面	規則的な剥離順序 みられず	-	K-14 I層
	7	剥離	肥前産染付	胴部	16.0	15.0	2.0	0.8	両面	規則的な剥離順序 みられず	-	F・G-13 TP14 ST4 III層
	8	剥離	中国産染付	胴部	15.0	15.0	4.0	1.2	内面	内面から	-	K-15 I層
	9	研磨	明割系赤瓦	筒部	38.0	37.0	14.0	22.0	-	-	-	K-14 I層
	10	研磨	明割系赤瓦	筒部	26.0	28.0	14.0	9.8	-	-	-	J-15 TP7 I層

2. 碁石

今次調査では4点の碁石が得られている。上原静の分類におけるコイン型・鏡餅型が各1点あり、残り2点はレンズ型である(上原2004)。黒の碁石は黒色の頁岩ないし粘板岩を研磨して製作される(第75図11・12)。一方で白の碁石には貝を素材とするレンズ型碁石(同図13)とガラス素材の鏡餅型碁石(同図14)であり、素材・形状とも多種多様である。

第49表 碁石観察一覧

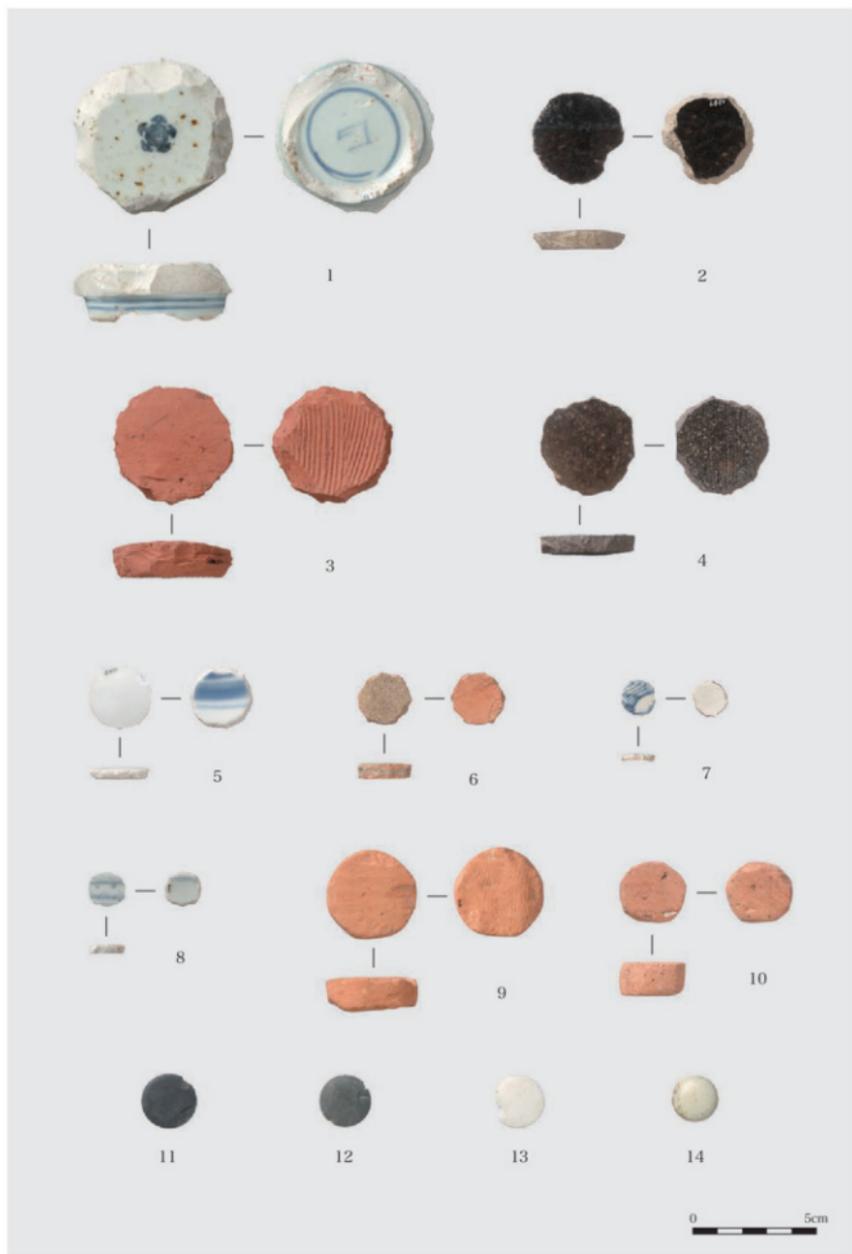
挿図番号 図版番号	番号	名称	色	素材	法量 (cm・g)				観察事項			グリッド・層
					縦	横	厚	重量	製作痕跡	破損状態	その他特徴	
第75図 図版77	11	碁石	黒	粘板岩	2.20	2.25	0.40	(3.7)	側面に線条痕	縁辺剥落	コイン形	K-15 I層
	12	碁石	黒	粘板岩	2.10	2.10	0.45	(3.1)	表裏に線条痕	側縁剥落	レンズ形	L-14 I層
	13	碁石	白	貝	2.15	(2.05)	0.60	(3.1)	なし	側縁欠損	レンズ形	J-15 TP5 I層
	14	碁石	白	ガラス	1.90	1.90	0.60	3.6	なし	なし	鏡餅形	E・F-13 TP12 I層



凡例：■ 製作時以前の破損面

0 5cm

第75図 遊具 (1~10. 円盤状製品 11~14. 基石)



図版77 遊具 (1~10. 円盤状製品 11~14. 碁石)

第21節 ガラス玉 (第50～53表、第76・77図、図版78～80)

本遺跡において、ガラス玉は計5,476点が出土している。その内特徴的な資料79点を図示した。

形状は円形のもの、楕円形のもの、二次的な被熱により変形しているものなどいくつかのバリエーションがみられるため、I類～V類まで分類を行った。個々の詳細については観察表に譲る。

- I類：ほぼ円形を呈するもの
- II類：扁平形を呈するもの
- III類：2つ以上の玉がコイル状に連なっているもの
- IV類：被熱により複数の玉が溶着しているもの
- V類：被熱により変形しているもの

第51表にI類～V類までの形式別出土状況を示した。もっとも出土数が多いのはII類で4,533点、ついでI類が631点、V類が215点、IV類が81点、III類が4点となっている。なお欠損の為、形状が不明のものが12点出土している。

IV類及びV類は戦時中の火災により変形及び溶着したものである可能性が高い。III類に関しては、巻きつけ技法により玉を製作する際、個々に切り離されず複数の玉が連なった状態になっている。その他の玉類も表面に螺旋状の筋がみられることから、おなじく巻きつけ技法により製作されたものであろう。

色調別出土状況は第50表に示した。最も多いのは黄色で43%、次いで黒色19%、緑色17%、青色6%、赤色5%、白色・金色・半透明が各3%、紺色・茶色・紫色が合わせて1%となっている。

質量は最小のものが約1.5mm、最大のものが約8.0mmと、1cm以下にとどまっており、2mm～5mmの幅に収まるものが大半である。

なお、集計Na3645(緑色)、Na3654(黄色・濃青色)、Na3662(緑色)の資料を用いてその化学組成を測定し、鉛同位体比分析によって材料となっている鉛の産地を推定した(平尾ほか 2001)。

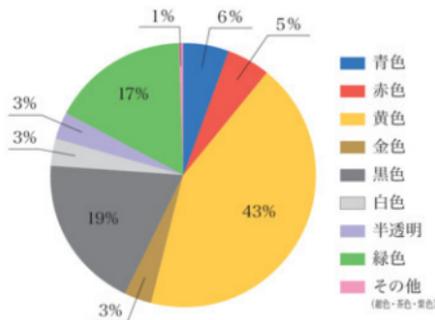
出土地は3点ともK-14溝2内II層である。

また、蛍光X線分析による科学組成の測定から、3点ともカリウム鉛ガラスであることが分かった。着色元素はNa3645が酸化鉄(FeO)、酸化銅(CuO)を含有していることから鉄による着色と、銅による着色が考えられる。Na3654は黄色部分の測定を行った。酸化スズ(SnO₂)を含有しており、スズによる着色が考えられる。Na3662は酸化銅(CuO)を含有していることから、銅による着色が考えられる。

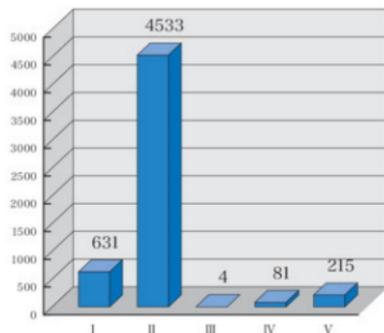
鉛同位体比による分析結果としては、Na3654が華南産材料の領域に分布しており、他の2点も中国華南産材料の領域に含まれる可能性が考えられる。



図版78 分析資料



第50表 色調別出土状況



第51表 形式別出土状況

第52表 ガラス玉集計表

グリッド・層 分類	E-F-13		F-13		I-13		J-13		I-J-14		J-14						K-14		
	1層	1層	1層	1層	II層	1層	II層	1層		II層	IV層	清掃		1層	II層	清掃			
	TP12	TP13	LT	LT	LT (ST)	TP2	TP2	TP1	TP2南	TP3	TP2南	TP1 P6	TP1				TP3	満2内	
I					1	1											95	77	357
II	2		1				1	2	1	1	1	1	1	1	9	333	324	3,446	1
III																		2	
IV											1						6	3	63
V			1	1													18	17	145
不明																	4	1	3
総計	2	1	2	1	1	1	1	2	1	1	2	2	1	1	9	456	422	4,016	1

グリッド・層 分類	L-14		K14-15		I-15		J-15		K-15		L-15		J-15-16		L-16		不明		総計
	1層	II層		1層	清掃		1層		1層	1層	II層		清掃		1層	1層	表探		
		溝内	TP4		TP4	TP5	TP7	ドウ老			TP7	TP7	TP8						
I	27	19	2	2					12	29		3		2	2	1		631	
II	117	74	2	7	4	2	2	6	64	88	4	10	1	11	6	10		4,533	
III		2																4	
IV	3	4							1									81	
V	9	1					2	1	2	4		11	1	1	1			215	
不明		2								2								12	
総計	156	102	4	9	4	2	4	7	79	123	4	24	2	14	9	11		5,476	

※ドウ老 (金属製品部より)

第53表 ガラス玉観察一覧1

種図番号 図版番号	番号	分類	番号	状態	法量(mm・g)				観察事項	グリッド層
					高さ	最大径	孔径	重量		
第76図 図版79	1	I	完形	緑色	4.4	4.5	1.2	0.14	螺旋状の筋が観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	2	I	完形	青色	3.8	4.6	1.3	0.12	螺旋状の筋が明瞭に観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	3	I	完形	黒色	4.1	4.6	1.1	0.1	形状はややびつ。螺旋状の筋が観察できる。	K-14 II層 満2内
	4	I	完形	半透明	3.2	4.0	0.8	0.12	螺旋状の筋が観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	5	I	完形	白色	3.4	4.1	0.9	0.12	螺旋状の筋が観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	6	I	完形	黄色	3.3	4.1	1.3	0.12	螺旋状の筋が観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	7	I	完形	赤色	3.8	4.8	1.7	0.18	螺旋状の筋が観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	8	I	完形	緑色	4.0	4.3	0.7	0.15	螺旋状の筋が明瞭に観察できる。表面を金色に塗布したと思われるあとがわずかに残っている。	K-14 II層 満2内
	9	I	完形	青色	4.2	4.6	1.3	0.14	螺旋状の筋が観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	10	I	完形	半透明	3.3	3.8	0.4	0.11	螺旋状の筋が観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	11	I	完形	白色	3.2	3.7	0.8	0.1	螺旋状の筋が観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	12	I	完形	黄色	3.7	4.2	1.1	0.14	螺旋状の筋が観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	13	I	完形	赤色	4.7	4.9	-	0.17	形状はいびつ。部分的に黒ずんでいるため二次的に火を受けた可能性もある。	K-14 II層 満2内
	14	I	完形	黒色	4.1	4.5	0.8	0.16	螺旋状の筋が観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	15	I	完形	緑色	4.2	4.9	-	0.18	風化により、全体的に白色化が進んでいる。螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	L-16 TP8 1層
	16	I	完形	黄色	4.5	4.5	1.0	0.12	風化により、一部が白色化している。螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	L-16 TP8 1層

第53表 ガラス玉観察一覧2

押込番号 図版番号	番号	分類	番号	状態	法量(mm・g)				観察事項	グリッド層
					高さ	最大径	孔径	重量		
第76図 図版79	17	I	完形	金色	3.5	3.9	0.8	0.08	一部で金色の塗膜がはがれ、地の緑色が露出している。保存状態は良好。	K-14 II層 溝2内
	18	I	欠損	青色	(7.0)	(8.5)	(2.0)	(0.37)	1/2を欠損している。螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	J-14 TP2南 II層
	19	I	完形	紺色	4.0	4.5	0.5	0.13	保存状態は良好。表面に金色を塗付したと思われる痕がわずかに残る。螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	K-14 I層
	20	I	完形	青色	3.6	4.3	0.9	0.10	螺旋状の筋が明瞭に観察できる。表面を金色に塗付したと思われる痕がわずかに残る。	K-14 II層 溝2内
	21	I	完形	緑色	2.9	3.7	1.0	0.07	螺旋状の筋が観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 溝2内
	22	I	完形	半透明	3.0	3.6	1.3	0.05	螺旋状の筋が観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 溝2内
	23	I	完形	白色	3.3	4.1	1.2	0.11	螺旋状の筋が明瞭に観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 溝2内
	24	I	完形	黄色	3.1	4.1	1.7	0.11	螺旋状の筋が明瞭に観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 溝2内
	25	I	完形	赤色	3.2	3.7	1.2	0.08	螺旋状の筋が明瞭に観察できる。表面を黒もしくは銀色に塗付したと思われる痕がわずかに残る。	K-14 II層 溝2内
	26	I	完形	黒色	3.2	4.1	0.7	0.08	螺旋状の筋が観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 溝2内
	27	I	完形	青色	4.5	4.8	1.2	0.15	螺旋状の筋が観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 溝2内
	28	I	完形	緑色	4.0	4.3	1.0	0.12	螺旋状の筋が明瞭に観察できる。表面を金色に塗付したと思われる痕がわずかに残っている。	K-14 II層 溝2内
	29	I	完形	紺色	3.3	3.3	0.9	0.05	保存状態は良好。	K-14・15 I層
	30	I	完形	半透明	3.5	3.8	0.2	0.10	螺旋状の筋が観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 溝2内
	31	I	完形	白色	3.4	3.9	0.8	0.13	螺旋状の筋が観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 溝2内
	32	I	完形	黄色	4.0	4.5	1.3	0.16	螺旋状の筋が明瞭に観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 溝2内
	33	I	完形	黒色	3.3	3.6	1.0	0.06	螺旋状の筋が観察できる。保存状態は良好。	K-14 II層 溝2内
	34	II	完形	緑色	2.9	4.4	1.1	0.13	保存状態は良好。螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	K-14 II層 溝2内
	35	II	完形	青色	3.6	4.3	1.1	0.09	保存状態は良好。	K-14 II層 溝2内
	36	II	完形	白色	2.8	4.2	1.1	0.12	保存状態は良好。	K-14 II層 溝2内
	37	II	完形	半透明	3.3	5.4	1.7	0.13	保存状態は良好。螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	K-14 II層 溝2内
	38	II	完形	黄色	3.6	4.5	1.1	0.12	保存状態は良好。螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	K-14 II層 溝2内
	39	II	完形	赤色	3.6	4.5	1.0	0.15	保存状態は良好。螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	K-14 II層 溝2内
	40	II	完形	黒色	3.5	4.9	1.4	0.13	形状はややいびつ。螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	K-14 II層 溝2内
	41	II	完形	緑色	3.2	4.1	1.4	0.10	保存状態は良好。螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	K-14 II層 溝2内
	42	II	完形	青色	3.3	4.6	1.2	0.09	保存状態は良好。	K-14 II層 溝2内
	43	II	完形	半透明	3.0	5.2	0.9	0.11	保存状態は良好。螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	K-14 II層 溝2内
第77図 図版80	44	II	完形	白色	2.8	4.6	1.4	0.06	表面は風化が進んでいる。螺旋状の筋が明瞭に残る。	K-14 II層 溝2内
	45	II	完形	黄色	2.8	4.2	1.4	0.09	保存状態は良好。	K-14 II層 溝2内
	46	II	完形	赤色	3.6	4.7	0.9	0.15	形状はややいびつ。一部が黒く変色している。螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	K-14 II層 溝2内

第53表 ガラス玉観察一覧3

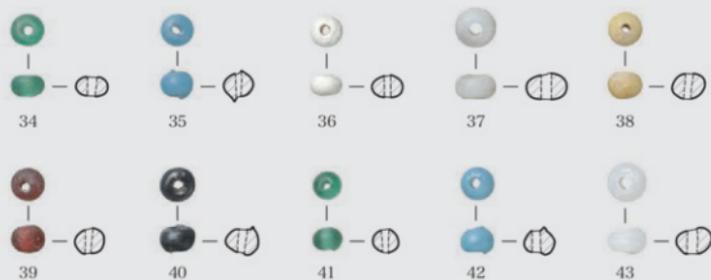
挿入番号 図版番号	番号	分類	番号	状態	法量(mm・g)				観察事項	グリッド層
					高さ	最大径	孔径	重量		
第77図 図版80	47	II	完形	黒色	3.7	5.1	1.5	0.21	保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	48	II	完形	紺色	2.3	4.8	0.5	0.05	形状はややいびつ。螺旋状の筋が観察できる。	K-14 I層
	49	II	完形	紫色	2.8	4.7	1.3	0.10	保存状態は良好。螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	L-14 I層
	50	II	完形	半透明	3.5	5.1	1.3	0.15	保存状態は良好。螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	L-16 TP8 I層
	51	II	完形	赤色	3.8	4.8	1.0	0.14	保存状態は良好。螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	I-J-14 TP2 II層
	52	II	完形	黄色	4.0	5.2	0.8	0.20	保存状態は良好。螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	L-16 TP8 I層
	53	II	一部欠け	緑色	5.3	8.6	-	0.52	二次的な被熱により、変形していると思われる。螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	E-F-13 TP12 I層
	54	II	完形	青色	2.9	4.2	1.4	0.06	保存状態は良好。螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	K-14 II層 満2内
	55	II	完形	緑色	2.3	3.8	1.1	0.06	形状はややいびつ。螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	K-14 II層 満2内
	56	II	完形	紺色	2.0	3.2	1.0	0.03	螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	J-14 TP3 清掃
	57	II	完形	紺色	3.2	4.4	0.8	0.08	螺旋状の筋が観察できる。保存状態は良好。	L-14 II層
	58	II	完形	白色	2.7	3.9	1.2	0.09	保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	59	II	完形	半透明	3.0	3.6	1.3	0.05	保存状態は良好。螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	K-14 II層 満2内
	60	II	完形	黄色	2.6	4.4	1.1	0.10	形はややいびつ。	K-14 II層 満2内
	61	II	完形	赤色	2.5	3.9	1.0	0.07	保存状態は良好で、螺旋状の筋が観察できる。	K-14 II層 満2内
	62	II	完形	黒色	3.0	3.8	1.0	0.10	保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	63	II	完形	青色	3.3	4.8	1.3	0.10	保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	64	II	完形	緑色	3.3	4.3	1.1	0.10	保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	65	II	完形	半透明	2.8	4.6	0.7	0.10	保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	66	II	完形	白色	2.7	4.3	0.8	0.11	保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	67	II	完形	黄色	3.5	4.5	1.2	0.16	保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	68	II	完形	赤色	3.2	4.2	0.5	0.12	保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	69	II	完形	黒色	3.3	4.6	1.5	0.11	保存状態は良好。	K-14 II層 満2内
	70	II	完形	金色	2.9	3.8	0.8	0.05	大部分は金色の塗膜がはがれて、緑色の地色が露出している。保存状態は良好で、螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	K-14 II層 満2内
	71	III	-	緑色	-	-	0.12	0.08	コイル状を呈する。巻きつけ技法でガラス玉を製作する際、3つの玉が切り離されなかった為、このような形状になったと思われる。	L-14 II層
	72	IV	-	黄色	-	-	-	0.45	二次的な被熱により、3個のガラス玉が溶着している。	K-14 II層 満2内
	73	IV	-	黄色 赤色 緑色	-	-	-	1.04	二次的な被熱により、9個のガラス玉が溶着している。	K-14 II層 満2内
	74	IV	-	青色 黒色	-	-	-	0.50	二次的な被熱により、8個のガラス玉が溶着している。	K-14 II層 満2内
	75	IV	-	青色 黄色	-	-	-	0.34	二次的な被熱により、3個のガラス玉が溶着している。	K-14 II層 満2内
76	V	-	黒色	-	-	-	0.23	二次的な被熱による変形と変色が著しい。	K-14 II層 満2内	
77	V	-	黒色	-	-	-	0.17	二次的な被熱による変形が著しい。	K-14 II層 満2内	
78	V	-	緑色	-	-	-	0.19	被熱による変形と変色が著しい。	K-14 II層 満2内	
79	V	-	赤色	-	-	-	0.18	被熱による変形と変色が著しい。	K-14 II層 満2内	

※ 欠損資料の法量は()内 で表した

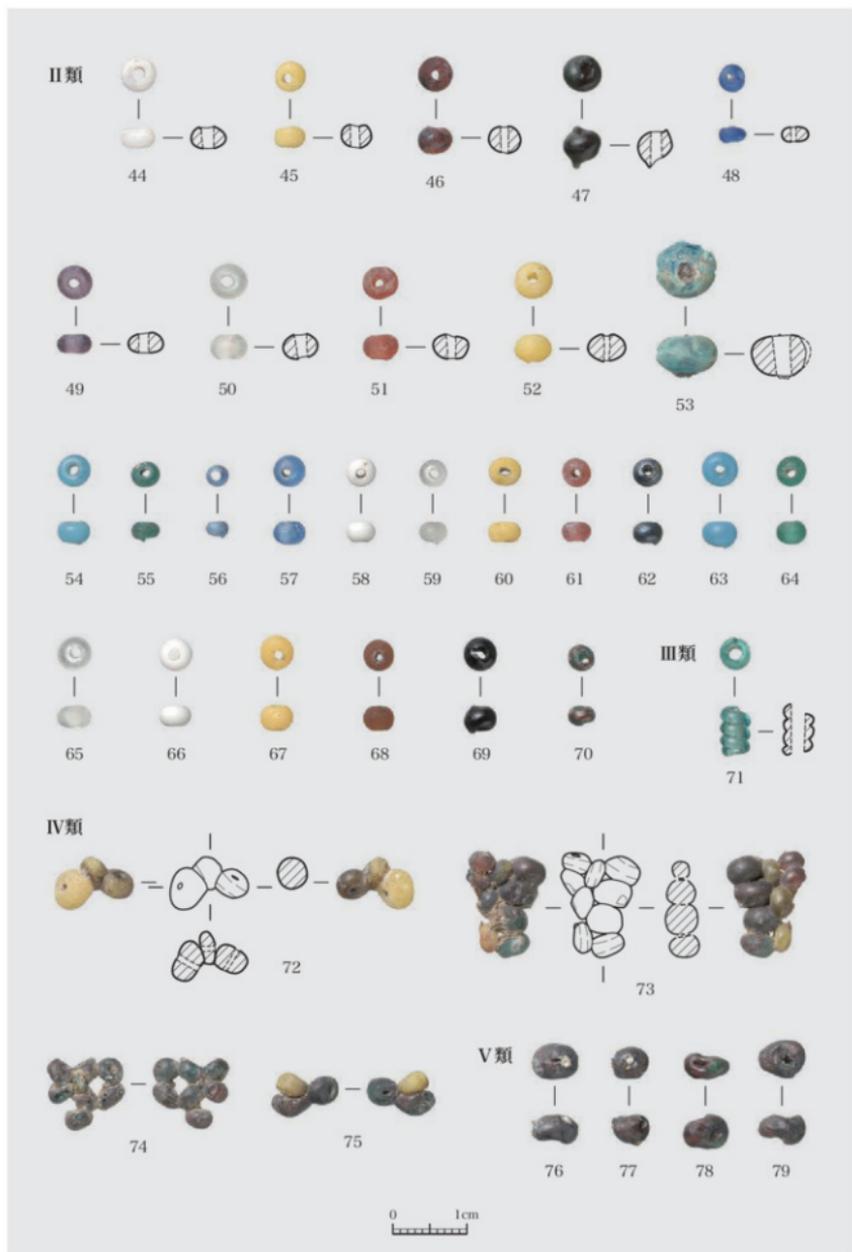
I類



II類



第76図 図版79 ガラス玉 1



第77図 図版80 ガラス玉2

第22節 石製品・石造物 (第54・55表、第78図、図版81)

先史時代の石の道具は生活用具の中心であった。しかし現代生活とはかけ離れたものであり、その用途もまた同様である。従って先史時代の石の道具は我々が形状や想定される用途から名称を付けられたものである。対して歴史時代の石の道具は概ね現代生活でみることのできるものと同じで、それが何と呼ばれた道具であるかを現代の我々は知っている。従って両者は同じ石の道具であっても、その名称や語られる機能には大きな開きがある。それを踏まえて、先史時代の石の道具を「石器」、歴史時代の場合は「石製品」として分けておく。また建物や庭園などを飾る大形の石製品を「石造物」と定義したい。

その定義を踏まえると、今次調査では7点の石製品と37点の石造物が得られている。その中で特徴的な5点を図示した。造物個々の特徴については第55表に譲り、ここでは概括的な内容を述べたい。

1. 石製品

別に論じている石製容器を除くと、砥石とみられる板状の製品(第78図1)や硯(同図2・3)、不明石製品(同図4)が得られている。首里城跡で出土する実用的石製品はほぼ砥石と硯に限定され、そこに磨製石斧や敲石・磨石類といった先史時代の可能性のある「石器」が混入する傾向にあるが、中城御殿跡ではこれまでの調査を通じて「石器」は出土していない。

3は赤色頁岩製の硯の墨池部片である。石材サンプルとの照合の結果、この硯は赤間硯と同様の石材である紫金石とみられる(註2)。同様の紫金石製の硯は首里城跡やその周辺遺跡でよく出土するが、その特徴的な赤色頁岩中にみられる輝緑凝灰岩の斑点や、硯背に片切彫される「赤間関」の刻字がしばしば認められることから(沖縄県立埋蔵文化財センター2010)、幕末頃の赤間硯の可能性が高い(岩崎2005)。従って3も同じく赤間硯であるとみられる。また首里城跡と同様に4にみられるような実用品か判別のつかない、精緻な装飾の施された石製品も出土している。

2. 石造物

石造物には礎石のみが得られている。第78図5の礎石は細粒砂岩(ニービ)製で、高さの異なる脚をもつ。これは礎石が動かないようにする工夫とみられる。他にも礎石とみられる細粒砂岩(ニービ)製や県外の石である石英安山岩質溶結凝灰岩製で、加工痕の残る石造物片が大量に得られている(註3)。

註1：石材鑑定は神谷厚昭氏の指導の元、沖縄県立埋蔵文化財センターの大堀皓平が行った。

註2：赤間硯の石材サンプルは、山口県埋蔵文化財センター岩崎仁志氏よりご提供頂いた。

註3：沖縄県立博物館・美術館に置かれる中城御殿の石灯笼と同じ石材とみられる。なおこの石灯笼は神谷厚昭も石英安山岩質溶結凝灰岩製と同定し、また鹿児島産の石材に酷似しているとの見解を示している(神谷1999)。

第54表 石製品・石造物集計表

種類・遺物名・石材	グリッド層		F-G-13		H-13		I-14		J-14		K-14		L-14		M-15		N-15		O-16		P-16		合計		
	TP2	LT	TP4	TP4	LT	LT	TP2	TP2	TP1	TP3	TP2	前	1層	II層	溝縁	1層	II層	1層	II層	TP7	TP9	TP8		TP1	
石製品	砥石	黒沢岩																						1	
		粘板岩																							1
	砥石?	粘板岩									1													1	
	硯	赤色頁岩																						1	
	円硯?	頁岩									1													1	
	不明	結晶質 石灰岩																							1
石造物	礎石	細粒砂岩 (ニエビ)			2	1	1	2																10	
		細粒砂岩 (ニエビ)									1														1
	飛石?	河原山山頂 西結核灰岩																						2	
	石灯籠?	細粒砂岩 (ニエビ)																						1	
	不明	花園門柱岩			1																				1
		細粒砂岩 (ニエビ)	1	2		1	1		1	1	1					2	1								17
石材	不明	河原山山頂 西結核灰岩																						3	
		不明																						1	
総計			1	2	1	2	1	1	1	1	2	1	3	1	5	1	1	2	2	1	1	1	1	44	

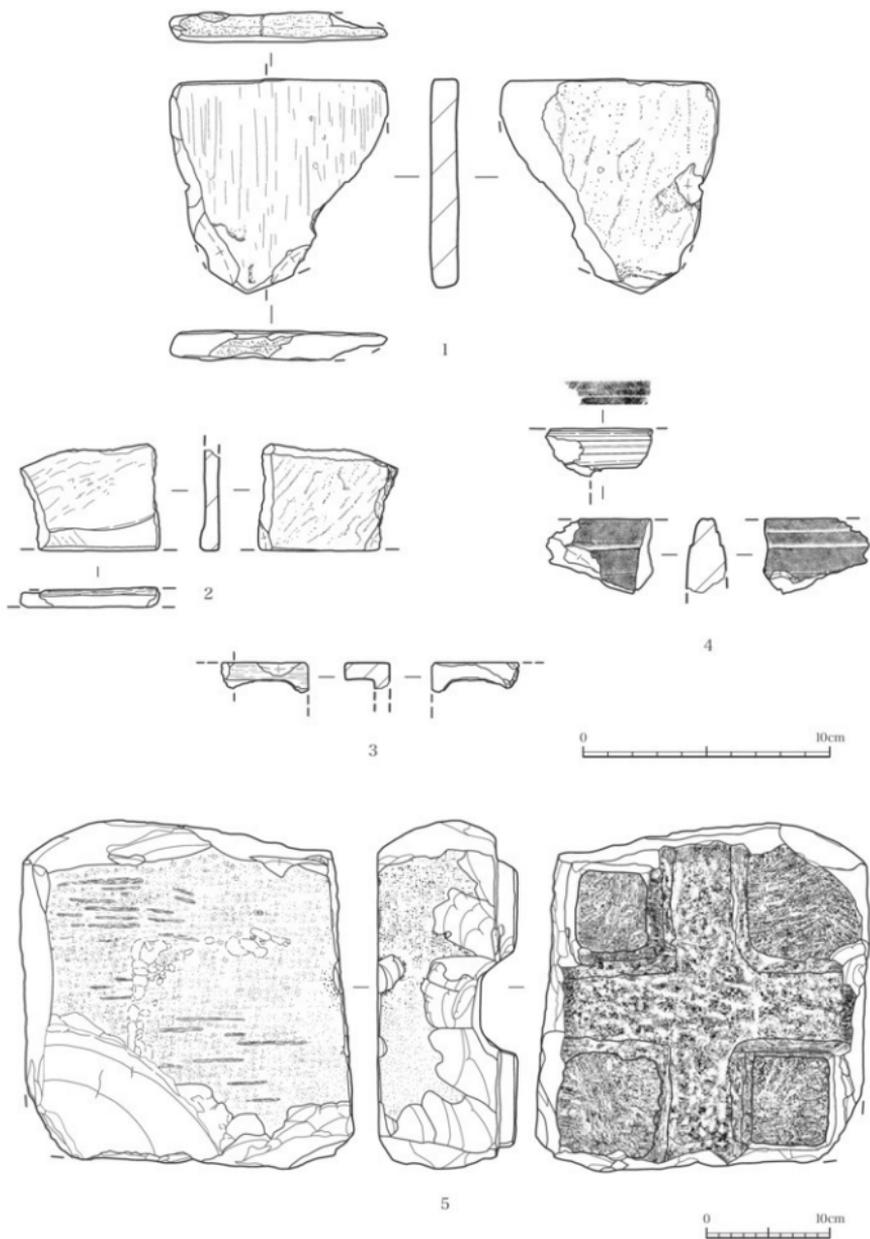
※ドウ一括(金属製品限り)

第55表 石製品・石造物観察一覧

押図番号 図版番号	番号	器種	部位	石材	法量 (cm・g)		観察事項				グリッド層
					縦横高 (厚)	重量	整形	製作痕跡	使用痕	装飾	
第78回 図版81	1	砥石?	—	粘板岩	8.75	(120.4)	側面研磨	なし	表面に線条痕	なし	K-14 II層
					8.8						
					1.1						
	2	円硯?	—	頁岩	(4.4)	(27.0)	研磨	線条痕	なし	なし	K-14 I層
					(5.6)						
					—						
	3	硯	黒池部	赤色頁岩	(1.2)	(9.8)	研磨	線条痕	なし	なし	I-15 TP4 I層
					(3.5)						
					1.8						
	4	不明 石製品	?	流紋岩系	0.7	(26.0)	研磨	なし	なし	あり (鳥の羽?)	L-14 II層
					(3.05)						
					(4.3)						
	5	礎石	完形	細粒砂岩 (ニエビ)	28.5	(1500)	敲打・研磨	敲打痕・鑿痕	なし	なし	K-15 I層
					27.1						
					1.6						
					11.4						

※1 破損部の計測値は ()

※2 礎石の高さは脚の高さを計測



第78図 石製品・石造物



図版81 石製品・石造物

第23節 石製容器 (第56・57表、第79・80図、図版82・83)

今回の調査では、石を容器に加工した製品が全29点得られている。県内はもとより国内においても類例のみられない資料であることから、石製品とは別に、特徴的な11点を挙げながら詳述する。なお遺物個々の観察所見は第57表に挙げていく。

1. 各器種の概要

角皿(1~4) 全14点が得られている。外反した口縁部と高い方形の皿付を特徴とする。白色の流紋岩質の石材を素材とし、これを丹念に研磨整形して作られる。内外面・口唇部に梅花唐草が線刻されるが、中には線刻部に塗装された痕跡が認められるものがある。

丸皿(5~10) 全14点が得られている。これも白色の流紋岩質の石材を素材としているが、丸皿はその特徴から2種類に分けられる。5・6は口縁部が内湾し、梅花唐草が線刻される。一方で同図7・8は口縁が外反し、内外面ともに梅花唐草が線刻される。底部は2点得られているが、接合資料が得られなかったため、この2種類のどちらのものか不明である。内底面には牡丹唐草が施される。

小杯?(11) 胴部資料の1点のみが得られている。小破片のため形状は判然としなが、この資料のみ軟質で陶器の可能性も考えられる。陽刻で梅花唐草が施される。

2. 石製容器の特徴

整形技術 これらの石製容器は、器種の違いに関わらず同一の石材が用いられている。加工技術についても同様で、極めて均整のとれた形状をもつ。一見するのみでは研磨の痕跡を認められないほど丁寧に仕上げられているが、注意深く観察すると研磨によって生じた線条痕が確認できる(図版82・83 拡大写真参照)。

装飾 器種に関わらず、線刻によって梅花唐草・花唐草・牡丹唐草が描かれている。文様の共通性から、石製容器は同一の様式であることが理解されるが、文様の描き方や彫り具・彫り方もほぼ共通していることから同一人物による作の可能性も考えられる(図版82・83 拡大写真参照)。これらの文様は17世紀初頭頃の青花に類似している。

まとめ 白色の石材である点や唐草文様の描き方から、17世紀初頭の青花をモデルとした可能性が挙げられる。県内で石製の容器は、首里城跡では木曳門跡地区・用物座跡地区より翡翠製のボウル状製品が3点、石掖門地区から外面に唐草文が印刻される蝸石製のシャーレ状容器と皿状製品、御内原北地区より玉髓の小杯、城の下地区客土より蝸石製容器などの玉器が出土している。当資料はこれら玉器とやや趣を異にするが、石材からみて上記首里城跡出土資料と同様に中国からの搬入品と考えられる。豪華な金属製品と共に中城御殿跡ならではの資料である。

第56表 石製容器集計表

器種・部位	グリッド・層	K-14	K-14	K-14	L-14	K-15	L-15	不明	合計	
		1層 TP2 上	1層 TP3	1層	1層	1層	1層			表探
角皿	口	1		4		2	1	3	11	
	口~底							1	1	
	底			1				1	2	
丸皿	口		1	4		2		1	8	
	胴			1	2				3	
	底	1				2			3	
不明(小杯?)	胴						1	1		
総計		2	1	10	2	6	1	6	1	29

第57表 石製容器観察一覧

神宮番号 図版番号	番号	器種名	部位	石材	法量(mm・g)		整形技法 施文方法	裝飾 口唇/内面/外面/ 内底部	備考	グリッド・層
					口径 器厚 底部厚 底径	重量				
第79図 図版82	1	石製角皿	口縁～胴部	流紋岩系	—	20.7	研磨	花唐草、区画線	※塗装の 痕跡有り	L-15 I層
					4.5			梅花唐草		
					—		梅花唐草			
					—		梅花唐草、区画線			
	2	石製角皿	口縁～胴部	流紋岩系	—	21.4	研磨	花唐草、区画線	※塗装の 痕跡有り	I-14 TP2 北 I層
					5.5			梅花唐草		
					—		梅花唐草			
					—		梅花唐草、区画線			
	3	石製角皿	口縁～胴部	流紋岩系	—	17.8	研磨	花唐草、区画線	※塗装の 痕跡有り	K-14 I層
					5.0			梅花唐草		
					—		梅花唐草			
					—		梅花唐草、区画線			
4	石製角皿	口縁～底部	流紋岩系	—	23.9	研磨	花唐草、区画線	※塗装の 痕跡有り	L-15 I層	
				5.5			梅花唐草			
				—		梅花唐草				
				—		梅花唐草、区画線				
第80図 図版83	5	石製丸皿	口縁～胴部	流紋岩系	158.0	13.6	研磨	なし		L-14 II層
					4.0			梅花唐草		
					—		なし			
					—		—			
	6	石製丸皿	口縁部	流紋岩系	—	6.4	研磨	なし		J-14 TP3 I層
					5.0			梅花唐草		
					—		梅花唐草			
					—		—			
	7	石製丸皿	口縁部	流紋岩系	—	3.3	研磨	なし		K-14 I層
					4.0			梅花唐草		
					—		梅花唐草			
					—		—			
8	石製丸皿	口縁部	流紋岩系	—	1.9	研磨	なし		K-14 I層	
				2.5			梅花唐草			
				—		梅花唐草				
				—		—				
9	石製丸皿	底部	流紋岩系	—	35.0	研磨	—	※塗装の 痕跡有り	L-14 II層	
				2.5			梅花唐草			
				6.0		梅花唐草				
				86.0		牡丹唐草				
10	石製丸皿	底部	流紋岩系	—	24.0	研磨	—	※塗装の 痕跡有り	I-14 TP2北 I層	
				4.0			梅花文			
				7.5		梅花唐草				
				82.0		牡丹唐草				
11	石製小杯?	胴部	流紋岩系	—	7.9	研磨	—		L-15 I層	
				2.5			—			
				—		梅花唐草				
				—		—				



第79図 石製容器 1



1



2



口縁



内面



3 部分接写 外面



3



4



口縁

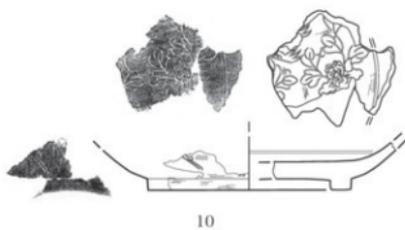
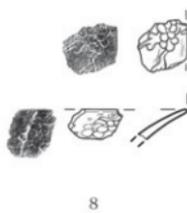
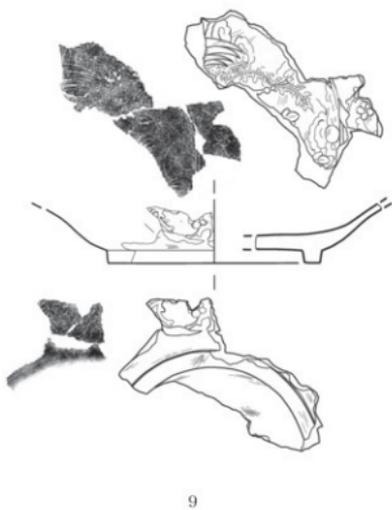
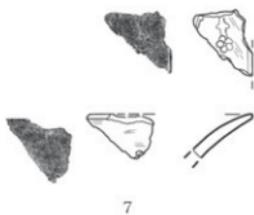
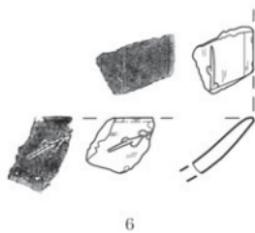
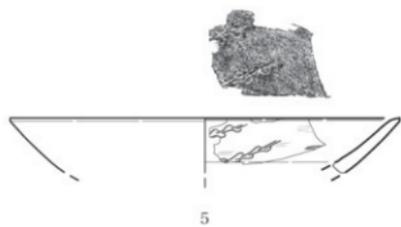


内面

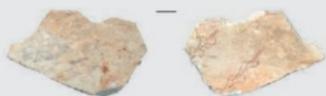


4 部分接写 外面

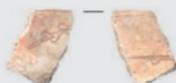




第80図 石製容器2



5



6



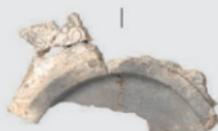
7



9 部分接写 内面 1



8



9



内面 2



内面 3



10 部分接写 内面



10



11



11 部分接写



第24節 瓦・塼（第58～65表、第81～84図、図版84～87）

瓦

瓦は造瓦技術別に大別すると、グスク時代の高麗系瓦が1点、近世以降の明朝系瓦が1,951点、小片のため重量のみ計測したものが110.15kg、近世大和瓦が79点得られた。以下、種類別に記述する。なお、個々の特徴については観察表に記載する。

1. 高麗系瓦

高麗系瓦は羽状打捺痕が残る資料が1点得られた（第81図1）。

2. 明朝系瓦

明朝系瓦は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦に分けられ、それぞれ灰色系と赤色系（褐色を含む）がある。以下、種類別に記述する。尚、本報告書では上原静氏の分類（上原2008）を参考にした。

（1）軒丸瓦

軒丸瓦は97点得られた。瓦当文様は、花を横からみた文様構図の草花文の側視1型、葉や茎が簡略化された花部のみを大きく描く側視2型が得られた。色調別には灰色、褐色、赤色が得られ、赤色が多い。

（2）軒平瓦

軒平瓦は77点得られた。瓦当文様は、草花文の側視1型、側視2型が得られた。色調別には灰色、褐色、赤色が得られ、赤色が多く、褐色は僅かに1点である。

（3）丸瓦

丸瓦は601点、小片のため重量のみ計測したものが41.5kg得られた。そのうち、第82図11、第83図12の様に線刻のあるものを印有りとして集計し、計34点得られた。

（4）平瓦

平瓦は1,176点、小片のため重量のみ計測したものが68.65kgである。そのうち、桶組綴り痕があるものが692点得られている。

3. 近世大和瓦

近世大和系瓦は79点得られた。棧瓦、平瓦が得られたが丸瓦は見られず、棧瓦の曲面部が一定量見られる点から、近世大和瓦は棧瓦のみで構成されていた可能性があるが、平面部が出土しているため平瓦の存在も考慮し、ここでは近世大和系の棧瓦・平瓦とした。

平面部の裏面には、櫛目が斜位に交差させるように施され、漆喰の痕跡が残り、瓦間は漆喰により固定されていたことを記す。

第60表 明朝系平瓦遺存状況

色調・部位			合計
灰色	狭端部	角1	130
		角2	1
		角無	176
	広端部	角1	124
		角2	1
		角無	268
	広端部～狭端部	広端(角1) 狭端(角1)	4
	小計		704
完形品		2	
赤色	狭端部	角1	65
		角2	1
		角無	67
	広端部	角1	97
		角2	6
		角無	117
	広端部～狭端部	広端(角1) 狭端(角1)	2
		広端(角2) 狭端(角1)	4
	小計		361
	褐色 (生焼色)	狭端部	角1
角無			10
広端部		角1	18
		角無	19
小計		56	
赤色 (陶器質)	狭端部	角1	7
		角無	18
	広端部	角1	6
		角無	23
	広端部～狭端部	広端(角1) 狭端(角2)	1
小計		55	
合計			1176

第62表 近世大和瓦遺存状況

種類・器種・色調・部位・柳目など				合計	
近世大和瓦	棧瓦	側面部、曲面	角無し	柳目無し	2
		端部、曲面	角無し	柳目無し	6
		端部・側面、曲面	角無し	柳目無し	1
			角有り	柳目無し	2
		端部・側面、曲面・平面	角有り	柳目有り	1
			角無し	柳目無し	4
	筒部、曲面	角無し	柳目有り	1	
	計				17
	棧瓦・平瓦	側面部、平面	角無し	柳目無し	10
			角無し	柳目有り	1
端部、平面		角無し	柳目無し	5	
		角無し	柳目有り	8	
端部・側面、平面		角無し	柳目無し	1	
		角有り	柳目無し	3	
筒部、平面	角無し	柳目無し	18		
		柳目有り	16		
計				62	
合計				79	

第61表 明朝系平瓦広端部における桶板留紐圧痕状況

深さ・間隔	色調・分類		広端部								広端部～狭端部				合計
	赤色	灰色	赤色			褐色	赤褐色		灰色	赤色	赤褐色	赤褐色			
			Aタイプ	Bタイプ	不明		Aタイプ	不明				Aタイプ	Aタイプ	Bタイプ	
浅い	2.0～2.5cm未満				6										6
	2.5～3.0cm未満				3						1				4
	3.5～4.0cm未満				2										2
深い	2.0～2.5cm未満		7		1	1				1					10
	2.5～3.0cm未満		3		3	1			1		1				9
	3.0～3.5cm未満		7		4				1		1	1	1		14
	3.5～4.0cm未満	1									1	1			3
	4.0～4.5cm未満		1						1		1				4
4.5cm以上		1			2				1					4	
計測不可			375				197	37		27					636
合計	1	1	18	375	19	4	197	37	2	27	4	3	3	1	692

① Aタイプ: ○ (2.0cm以下) Bタイプ: ○ (2.0cm以上)

埴

埴は総数17点出土した。灰色系が11点、赤色系が5点、石製が1点得られた。その平面形態から3タイプ得られている。分類は上原静氏の分類（上原2010）を参考にした。なお、個々の特徴については観察表に記載する。

1. 端部噛み合わせタイプ

平面形が一般的に長方形で、長軸の側面か短軸の両側面に段を形成し、それぞれを噛み合わせて使用される。用途として地下に埋設される暗渠などとして使用するものが見られる。今回の調査では、上原分類によりAタイプ「長方形を呈し、蓋としての機能が窺われる。」とされた資料が得られている（第84図18・19）。

2. 平面敷きタイプ

平面形が正方形と三角形を呈するのが基本形態である。今回得られた資料は小片のあるため全体を窺うことができない（第84図20）。

3. 下駄状タイプ

平面形が長方形をなし、厚手はみられない。最大の特徴は下駄状に歯がつくもので、その端部にかかりを作るものとそうでないものがある。下駄状のかかりを成形している点から、傾斜部分や蓋の様な用途が推察される（第84図21）。

第63表 埴集計表

グリッド・層 色	F・G-13					I-J-14	K-14	L-14	J-15		K-15	J-15-16		L-16	表採	合計
	I層		III層	IV層		I層	I層	I層	I層		I層	I層	I層			
	TP14 (ST2)	TP14	TP14 (ST4)	TP14 (ST2)	TP14 (ST3) 瓦蓋まり	TP2			TP7	基壇内		TP7	TP8			
灰色系	1			2	1	1	1	2	1				1	1		11
赤色系		1	1							1			1		1	5
石製											1					1
総計	1	1	1	2	1	1	1	2	1	1	1	1	1	2		17

第64表 瓦観察一覧1

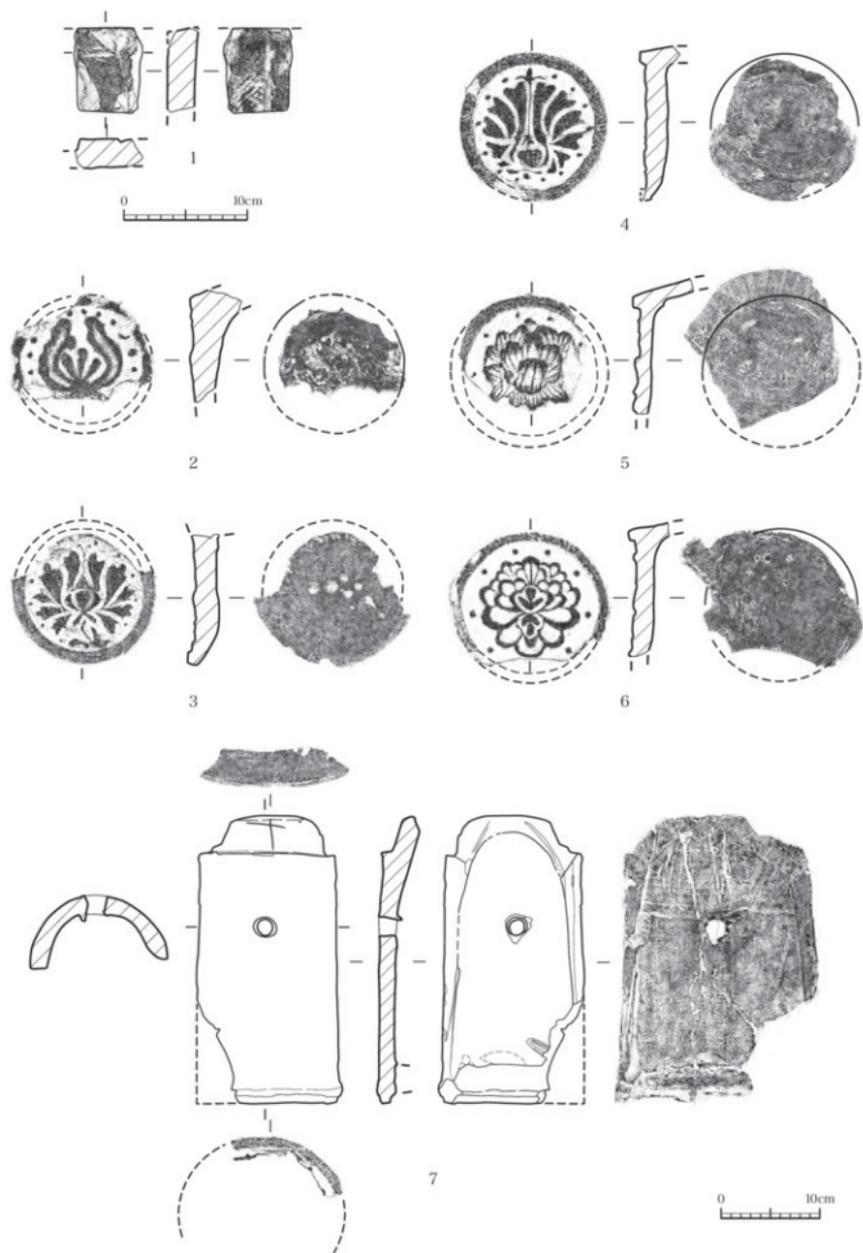
採図番号 図版番号	番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態の特徴、文様、法量	グリッド・層
第81回国版84	1	高麗系	平瓦	側面部	灰色系	端部は平らに整形される。 凹面には布目痕が見られ、挟り部分に斜位に線状痕が見られる。 また、挟りの反対側端部が段になり丁寧に調整され滑面になる。 凸面は太い羽状打捺文様が見られる。 残存長7cm×5.5cm、厚さ2.3cm。	L-14 I層
	2	明朝系	軒丸瓦	瓦当	褐色	縁辺上部と下端を欠く資料。 文様はやや不鮮明であり、全体的に風化している。 瓦当裏は指ナデの痕が見られる。 厚さ約3cm。	L-14 I層
	3	明朝系	軒丸瓦	瓦当	褐色	瓦当上部の縁が丸瓦からそのまま剥れた形を残す。 文様はやや不鮮明である。 瓦当裏中心から上寄りに縦位の指痕が3本見られるが、下半分は丁寧にナデ消されている。 瓦当径約14cm、厚さ2.5cm。断面は凸レンズ状を呈する。	L-14 I層
	4	明朝系	軒丸瓦	瓦当	赤色	瓦当の縁部下を一部欠くが、残りの良い資料。 文様は鮮明である。 横位に筋目が残る、木版と見られる。 瓦当裏は中心付近を縦位に、外周を同円心的にナデ調整を行う。 推定瓦当径約15cm、厚さ約2cm。	L-16 TP8 I層
	5	明朝系	軒丸瓦	瓦当	赤色	瓦当下部を欠く。 文様は鮮明である。縦位に筋目が残るため、木版と見られる。 瓦当裏は中心付近を縦位に、外周を同円心的にナデ調整を行う。 厚さ1.6cm。	J-14 TP3 II層 溝2内
	6	明朝系	軒丸瓦	瓦当	赤色	瓦当外縁の下部を欠くが、丸瓦部まで残る資料である。 文様は鮮明である。 瓦当裏はやや丁寧なナデ調整が縦位に見られ、丸瓦凸面はやや深めの面取りを行う、漆喰が僅かに付着する。 厚さ約2cm。	K-14 II層 溝2内
	7	明朝系	軒丸瓦	筒部～ 丸瓦	灰色	瓦当部分はほとんどが剥離するが、上部の珠文が僅かに残る。 丸瓦部分はほぼ全体がうかがえる。 全長約29.3cm、玉縁の長さは約3.8cmで中央に十字に近い形状の印が有る。 筒部中央、玉縁段部から6.5cmの所に直径約2cmの孔が穿たれる。 玉縁裏は1回の面取りが行われ、1条の布糸綴りの痕が見られる。	L-14 I層
第82回国版85	8	明朝系	軒平瓦	瓦当	赤色	瓦当左側上部の破片。 僅かだが平瓦部を残す。 文様は鮮明である。 瓦当裏は横位のナデ調整がみられ、平瓦凹面では、粗いナデ調整がみられる。	J-15 TP5 I層
	9	明朝系	軒平瓦	瓦当	赤色	瓦当上縁と左側の縁を一部欠くが、平瓦までの一部を残す資料、文様は鮮明で、上縁はナデ整形の痕がみられる。 平瓦部は両面とも粗い横位のナデ調整がみられる。 弦幅約23.2cm、垂れ約11.5cm。	J-15-16 TP7 I層
	10	明朝系	軒平瓦	瓦当	褐色	瓦当上部の両端を欠失するが、平瓦部を一部残し、全体の様子がうかがえる資料。文様はやや鮮明である。縁は丁寧にナデ調整が見られる。 瓦当裏は平瓦凸面はやや粗く横位のナデ調整がみられ、平瓦部凹面は縦位のナデ調整と、瓦当と接する部位は3.5cmほどの横位のナデ調整が見られる。 垂れ約10.2cm。	L-16 TP11 I層
	11	明朝系	丸瓦・ 印あり	玉縁部	赤色	玉縁の長さ4.2cm、残存長23cm×13.1cm、厚さ約1.5cm。 玉縁段部に漆喰がわずかに付着する。玉縁中央部の中心よりやや右よりに交差線のへこみ印がみられる。 凸部の整形は段部近くに横位のナデが見られ、縦位にもナデが浅くみられる。 玉縁裏は1回の面取りが行われ、一条の布糸綴り痕がみられる。	F・G-13 TP14 ST3 IV層 瓦溜り

第64表 互観察一覧2

挿図番号 図版番号	番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量	グリッド・層
第83図 図版86	12	明朝系	丸瓦・ 印あり	玉縁部	赤色	玉縁の長さ約5.5cm、残存長27.2cm×14.1cm、厚さ約1.5cm。 漆喰が付着する玉縁部の残る資料。 へう描き印が玉縁中央に描かれ、中心から左よりに縦線1本、右端よりに横位に線が1本見られる。表面は4～5cmのナデが浅くされている。 玉縁裏面は1回の面取りが行われ、二条の布糸綴り痕がみられる。	F・G-13 TP14 ST3 IV層 瓦割り
	13	明朝系	平瓦	広端～ 狭端部	赤褐色	広端部を一部欠くが、残りが良く平面形は台形になるとみられる。 陶質でマンガン釉が施され、凸面の左端が被熱により溶解する。 凹面広端側に桶紐綴り圧痕がみられる。 長軸21.2cm、狭端長約17cm、厚さ1.3cmをはかる。	L-14 I層
	14	明朝系	平瓦	広端～ 狭端部	赤色	狭端部を欠くが残りの良い資料である。 平面形は台形と見られる。 凸面に幅広いナデが縦位にみられ、両端側に横位のナデの痕が残る。 凹面広端部に桶紐綴り圧痕が5個見られ、狭端部に糸綴り圧痕がみられる。 長軸26.3cm、広端長22.5cm、厚さ約1.5cm。	F・G-13 TP14 ST3 IV層 瓦割り
	15	明朝系	平瓦	広端～ 狭端部	赤色	全体の二分の一が残存する資料。 凸面に約2.5cm幅の縦位のナデ調整とその上から曲線的なナデの痕がみられ、 両端には横位のナデ調整がみられる。凹面は広端側に桶紐綴り圧痕、狭端に 糸綴り圧痕がみられる。広端部はナデ調整がみられず、粗い削りの痕がみられる。 長軸26.3cm、残存短軸11.4cm、厚さ1.4cm。瓦割に使用された可能性がある。	F・G-13 TP14 ST3 IV層 瓦割り
第84図 図版87	16	大和系	平瓦	端部	灰色	凹面は一部剥離が見られるが、横位に丁寧な調整が見られ、滑面になる。 凸面は13条1組の柳描文が斜位にひかれる。 残存長13.0cm×11.5cm、厚さ2.1cm。	L-16 TP10 I層
	17	近世 大和系	棧瓦	広端～ 狭端部	灰色	凸面や断面形がゆるやかなへ字状を呈する。 頂部に多く漆喰が付着し、側面や下部にも漆喰が付着する。 器面は丁寧な調整が施され滑面になる。 凹面は凸面に比べ粗面になるが、端部近くに指圧痕や粘土を後から貼り付けて 調整した痕が見られる。残存長22.4cm×16cm、厚さ1.8cmである。	J-13 LT ST II層

第65表 塙観察一覧

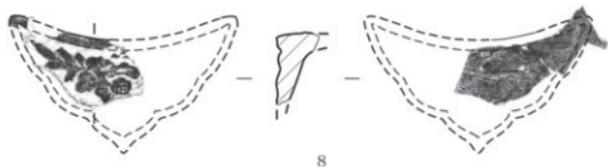
挿図番号 図版番号	番号	種類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量	グリッド・層
第84図 図版87	18	端部 噛み合わせ式	破片	灰色	残存長11.6cm×10.1cm、厚さ3.3cm、突出部は1.6cmである。 表裏面ともに調整は良好で光沢があるが、段部の整形は粗い。 表面に帯状の剥離痕が見られるため、下駄状式の可能性もある。	K-14 I層
	19	端部 噛み合わせ式	角1 有り	灰色	残存長15.1cm×11.3cm、厚さ3.3cm、突出部は1.5cmである。 表裏面ともに調整は良好である。光沢があるが段部の調整は粗い。	F・G-13 TP14 ST3 IV層 瓦割り
	20	平敷式	角1 有り	灰色	残存長11.2cm×7.9cm、厚さ約5cm。 全体が風化しており、表面はわずかだが中央部に向かって凹面になる。	I・J-14 TP2 I層
	21	下駄状式	破片	灰色	下駄状の突起がつけられるとみられるが、欠失する。 全体的に風化が進むが、光沢が出る程の丁寧なナデ調整がされていた事が 残った側面からうかがえる。 残存長10.2cm×横6.6cm、厚さは3.1cm、突起は幅約3cm。	L-16 TP8 ベルト I層



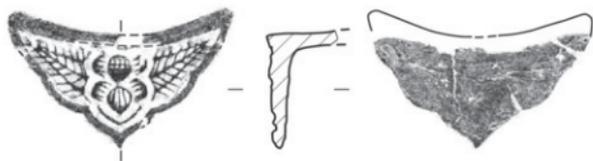
第81图 瓦1 (1.高麗系平瓦 2~7.明朝系軒丸瓦)



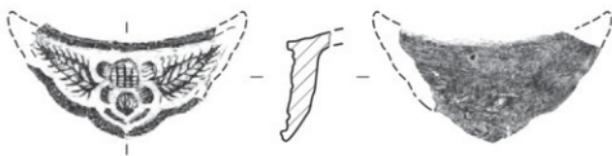
图版84 瓦1 (1.高麗系平瓦 2~7.明朝系軒丸瓦)



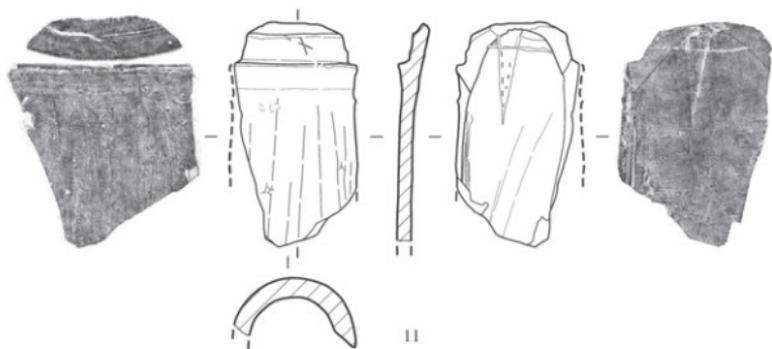
8



9



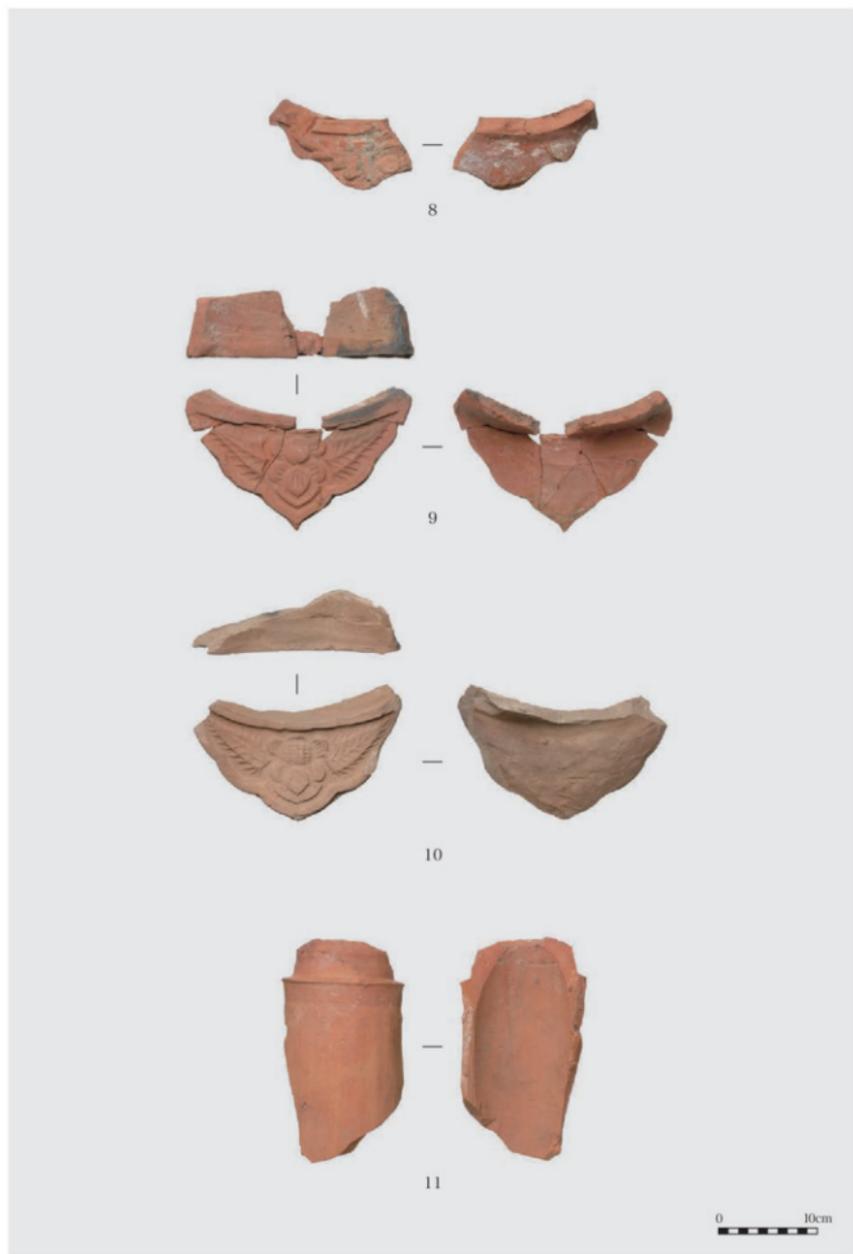
10



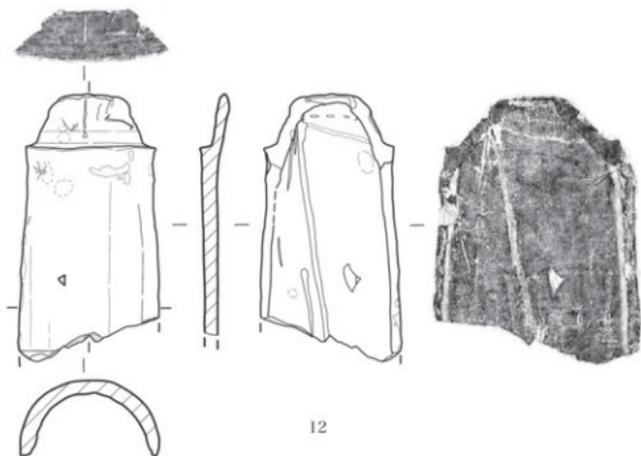
11



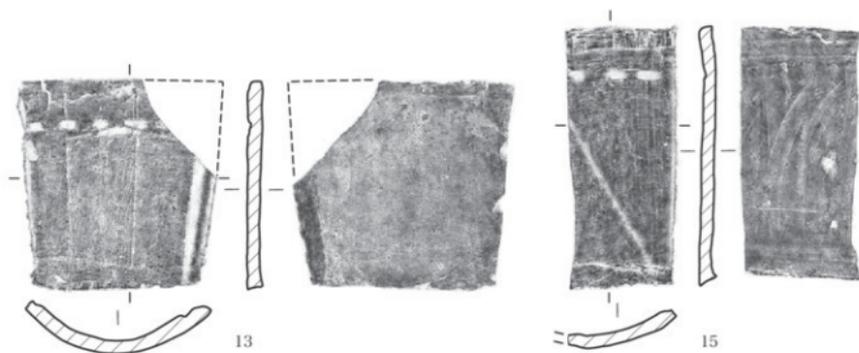
第82図 瓦2 (8~10.明朝系軒平瓦 11.明朝系丸瓦)



图版85 瓦2 (8~10.明朝系軒平瓦 11.明朝系丸瓦)

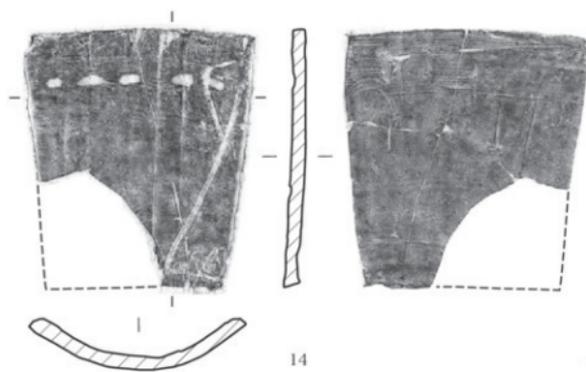


12



13

15



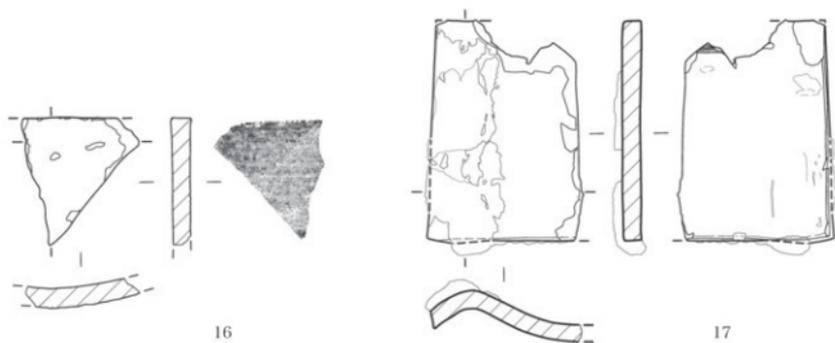
14



第83图 瓦3 (12.明朝系丸瓦 13~15.明朝系平瓦)



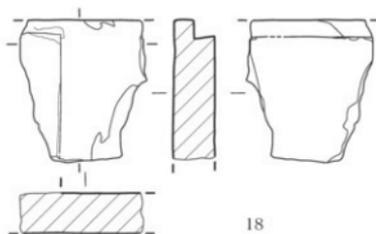
图版86 瓦3 (12.明朝系丸瓦 13~15.明朝系平瓦)



16

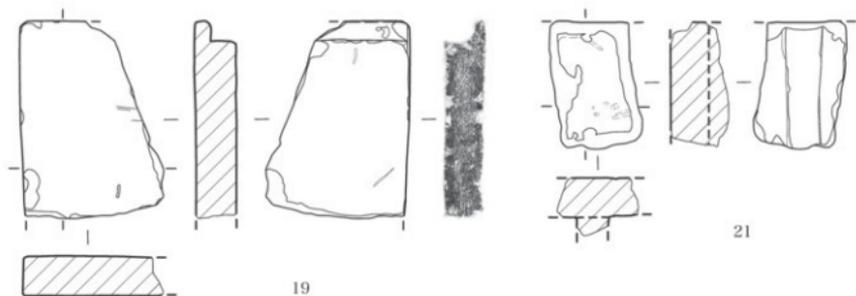
17

0 10cm



18

20



19

21

0 10cm

第84図 瓦・埴4 (16. 近世大和系平瓦 17. 近世大和棧瓦 18~21. 埴)



図版87 瓦・埴4 (16. 近世大和系平瓦 17. 近世大和棧瓦 18~21. 埴)

第25節 その他の遺物（第85図、図版88）

ここでは、中城御殿やその周辺における戦中・戦後の変遷を物語る遺物の報告を行う。

1・2は陶磁製のボタンである。いずれも太平洋戦争時の陶製代用品として製作されたものと思われるが、生産地は不明である。2は型造りにより表に陽刻の桜文様が施され、裏面につまみ糸通しが残るボタンの半欠品である。直径2.0cm、厚さ1.1cmで、糸通し孔の復元径は0.2cmである。胎土はつ明白灰色を呈し、全面に薄く透明釉がかかる。意匠や形状から戦時中の学生服か軍服のボタンと思われる（J-15 TP5 1層）。

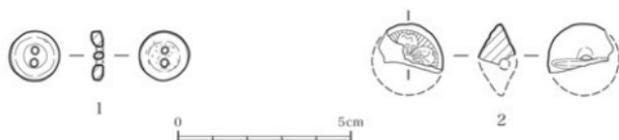
1も磁器製のボタンで、全面にやや厚手に暗緑色の透明釉がかかる。釉薬が全面に施されることから胎土の状態は確認できない。直径1.48cm、厚さ0.25～0.3cmで、縁辺が玉縁状に厚くなる。中央付近には径0.2cmの糸通し孔が2点あけられる。軍服か国民服のボタンになろうか（J-15 TP5 1層）。

戦時中の中城御殿に関する記録は少ないが、昭和20（1945）年4月10日頃には、日本軍が上之御殿等の施設を機関銃陣地にしており（海洋博記念公園管理財団2010）、本資料はその軍関係者と関連する可能性がある。

4は学生帽に取り付ける帽章である。薄いアルミ板を型で打ち出し、桜の花を輪郭として中央に太ゴシック体の「中」の字を配する。通常は裏面に学生帽の腰部前面を貫通させて装着するためのボルトが溶接されるが、本資料はボルトの接合部が破損したのか、本体下部にボルトを貫通させ、粗く切断した台形のアルミ板をはさみ、円形のナットで表裏面とも留めて補修している。本資料は「中」の字以外文字が確認できないことから、学校名の特定に至らない（G・H-19 表採）。

続いて、3は城西幼稚園の真鍮製バッジである。形状は円形で直径2.2cm、厚さ0.16cm、表面は七宝により周縁には上端から白色で藤の花様の連続した花卉が配され、中央には水色地に真鍮の地金色でゴシック体の「城西」、その下部には朱色で楷書体による「幼」の字が施される。裏面は中央やや上部にピンが溶接されていた痕跡が残るため、破損したことが考えられる（J-15・16 TP7 1層）。なお、城西幼稚園は中城御殿跡の南側に現在も存在する。

終戦後、敷地内は一時引揚者の滞在地、首里市役所、首里市営バス営業所を経て、沖縄県立博物館が移転し新館が建設される。この変遷から後者の2点は、博物館の見学等で訪れた学生・園児の所有物と思われ、いずれも衣服や帽子に装着するためのピンやボルトが破損し落下したことが考えられる。



第85図 陶磁製ボタン



図版88 その他の遺物（1・2、陶磁製ボタン 3、校章バッジ 4、帽章）

第26節 貝類遺体 (第66～68表、第86～89図、図版89～93)

平成20・21年度の中城御殿跡より出土した貝類遺存体は、腹足綱(巻貝)33科140種、斧足綱(二枚貝)18科52種、ウニ綱1科1種の計52科193種が確認されている(第67・68表)。

最小個体数の特定は以下の方法で行った。

1. 巻貝

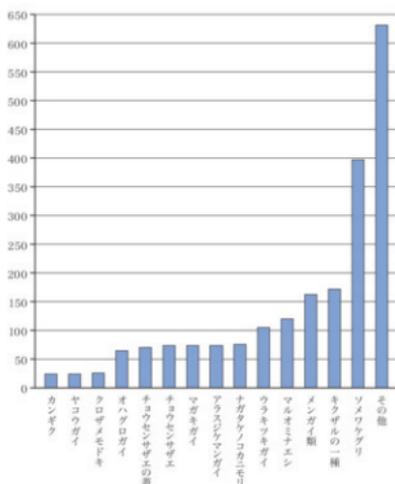
完形(全体の様相が確認でき、かつ僅かな欠けであれば完形とする)と殻頂部の確認されるものとを合計した点数を最小個体数として扱う。なお、検出が破片のみである場合にはすべて1個体として扱うこととする。

2. 二枚貝

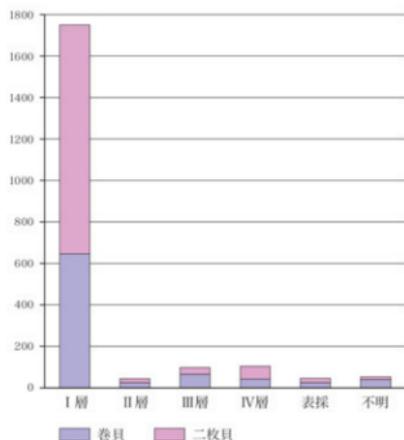
左右に分類し、それぞれの完形・殻頂を合計した点数の多い方を最小個体数として扱う。また、巻貝と同様に、破片のみの場合には1個体として扱っている。

今回行われた調査では、上記のように200近くの種が確認されているが、そのほとんどが微量検出であることから、20個体以上確認されているものを第86図に示した。内訳は巻貝8種、二枚貝6種の計14種で、最多検出のソメワケグリは400個体近くにも上っており、全体の約20%を占める。生息地別で比較すると、I-2-cが約40%、次いでI-2-aが約15%、II-2-cが約10%となっており、外洋・サンゴ礁域に生息する種が70%以上を占める結果となった。(第89図)

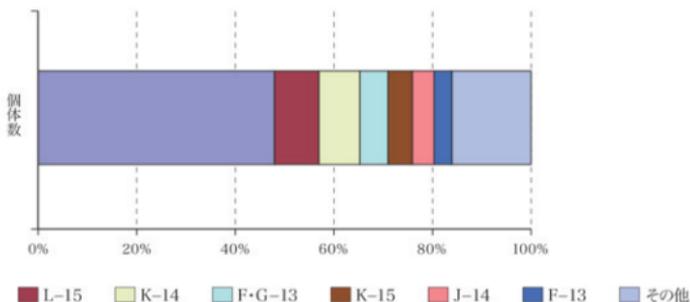
グリッド別では、L-14、L-15、K-14の地点から特に集中的に出土しているのがわかる(第88図)。また、中城御殿当時とみられるII層からの検出が微量であるのに対して、I層(表採含む)で確認された貝は135種以上であり、全体の90%以上を占めるものである。これらはI層の性格から鑑みて、戦後行われた度重なる開発時の客土に混入していた可能性が示唆される。



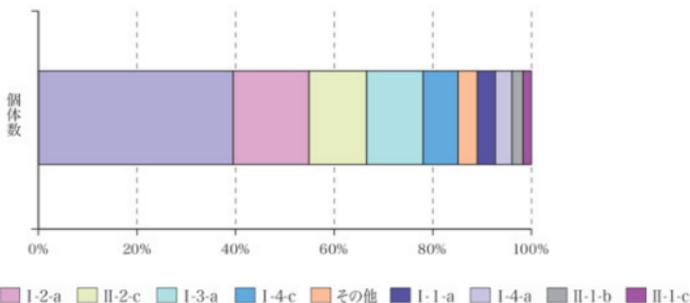
第86図 種別検出状況



第87図 層別検出状況



第88図 グリッド組成表



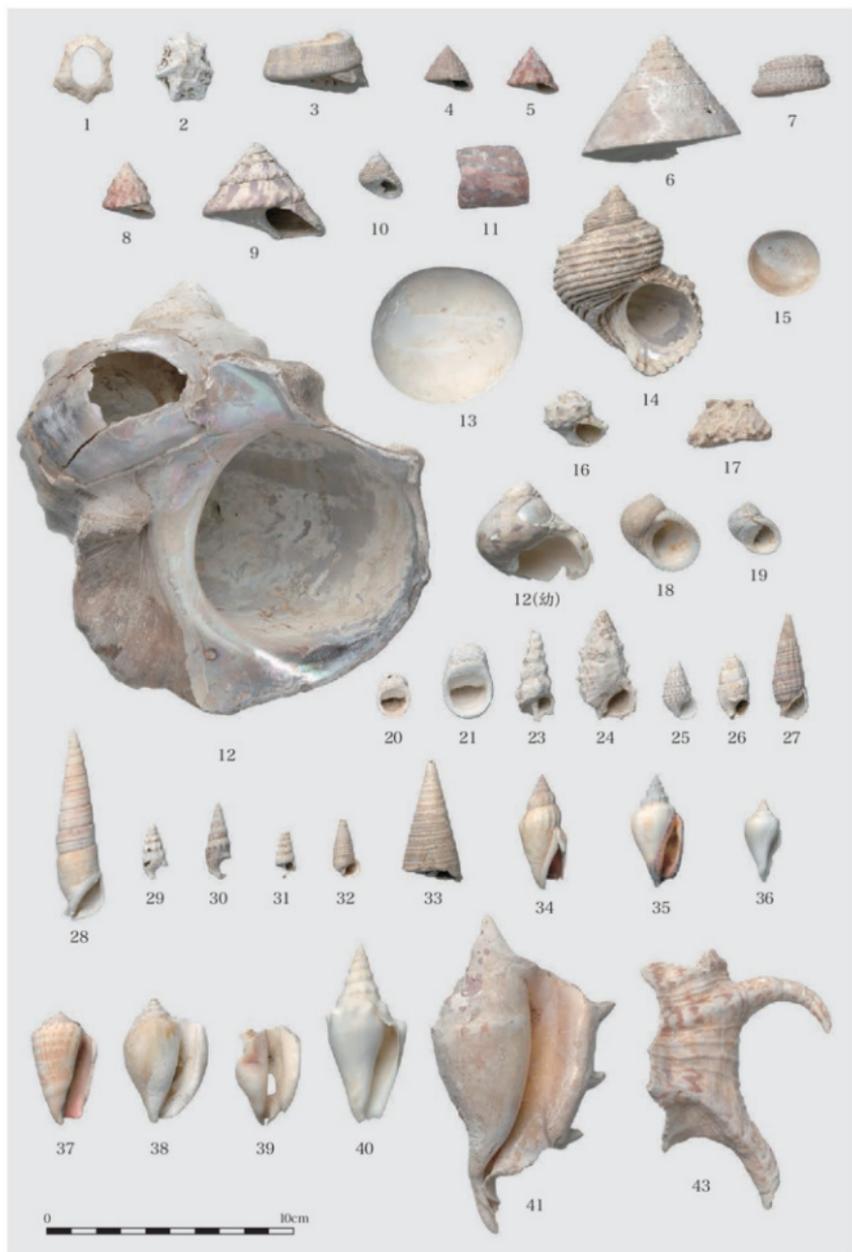
第89図 生息場所組成表

第66表 貝類生息場所類型 (habitat) 表

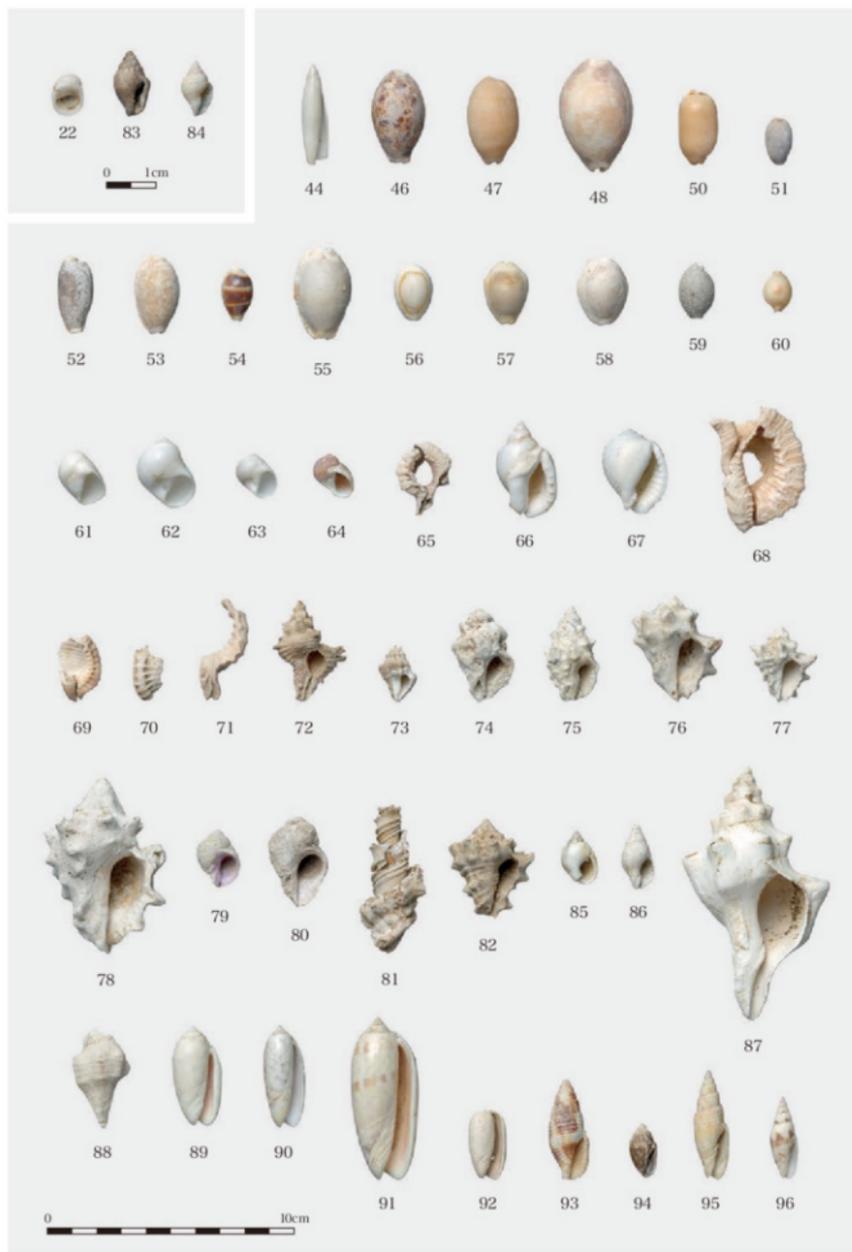
外洋～内湾	水深	底質
I 外洋 - サンゴ礁域 II 内湾 - 転石域 III 河口干潟 - マングローブ域	0 潮間帯上部 (Iではノッチ、IIではマングローブ)	a 岩礁/岩盤 b 転石
	1 潮間帯中・下部	
	2 亜潮間帯上部 (Iではイノー)	
	3 干 瀬 (Iにのみ適用)	
IV 淡水域	4 礫斜面およびその下部	c 礫/砂/泥底
	5 止水	
	6 流水	
V 陸域	7 林内	d 植物上 e 淡水の流入する礫底
	8 林内・林縁部	
	9 林縁部	
	10 海浜域	
VI その他	11 打ち上げ物	
	12 化石	

第67表 貝類遺体集計表(巻貝) 2

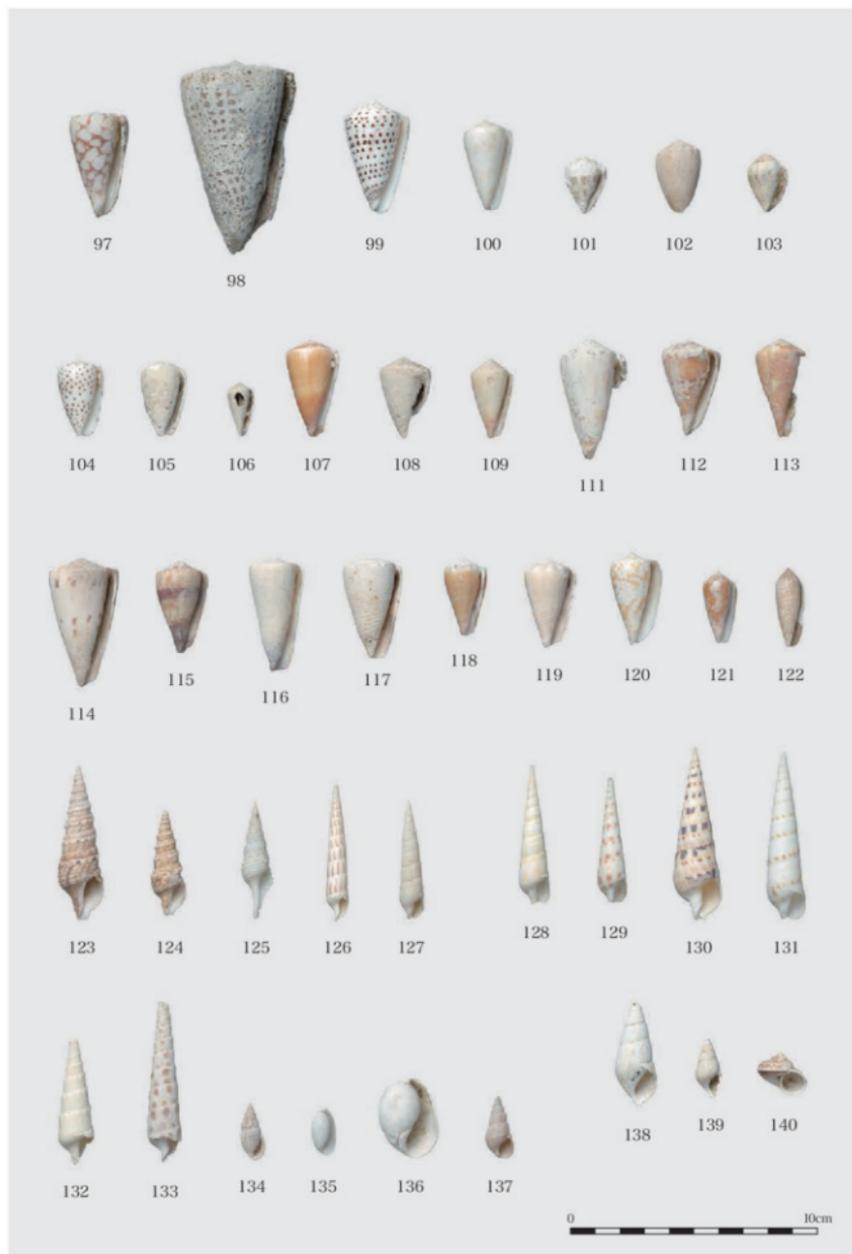
種名	種名	K13		K14		K15		K16		K17		K18		K19		K20		K21		K22		K23		K24		K25		K26		K27		K28		K29		K30		K31		K32		K33		K34		K35		K36		K37		K38		K39		K40		K41		K42		K43		K44		K45		K46		K47		K48		K49		K50		K51		K52		K53		K54		K55		K56		K57		K58		K59		K60		K61		K62		K63		K64		K65		K66		K67		K68		K69		K70		K71		K72		K73		K74		K75		K76		K77		K78		K79		K80		K81		K82		K83		K84		K85		K86		K87		K88		K89		K90		K91		K92		K93		K94		K95		K96		K97		K98		K99		K100		K101		K102		K103		K104		K105		K106		K107		K108		K109		K110		K111		K112		K113		K114		K115		K116		K117		K118		K119		K120		K121		K122		K123		K124		K125		K126		K127		K128		K129		K130		K131		K132		K133		K134		K135		K136		K137		K138		K139		K140		K141		K142		K143		K144		K145		K146		K147		K148		K149		K150		K151		K152		K153		K154		K155		K156		K157		K158		K159		K160		K161		K162		K163		K164		K165		K166		K167		K168		K169		K170		K171		K172		K173		K174		K175		K176		K177		K178		K179		K180		K181		K182		K183		K184		K185		K186		K187		K188		K189		K190		K191		K192		K193		K194		K195		K196		K197		K198		K199		K200		K201		K202		K203		K204		K205		K206		K207		K208		K209		K210		K211		K212		K213		K214		K215		K216		K217		K218		K219		K220		K221		K222		K223		K224		K225		K226		K227		K228		K229		K230		K231		K232		K233		K234		K235		K236		K237		K238		K239		K240		K241		K242		K243		K244		K245		K246		K247		K248		K249		K250		K251		K252		K253		K254		K255		K256		K257		K258		K259		K260		K261		K262		K263		K264		K265		K266		K267		K268		K269		K270		K271		K272		K273		K274		K275		K276		K277		K278		K279		K280		K281		K282		K283		K284		K285		K286		K287		K288		K289		K290		K291		K292		K293		K294		K295		K296		K297		K298		K299		K300		K301		K302		K303		K304		K305		K306		K307		K308		K309		K310		K311		K312		K313		K314		K315		K316		K317		K318		K319		K320		K321		K322		K323		K324		K325		K326		K327		K328		K329		K330		K331		K332		K333		K334		K335		K336		K337		K338		K339		K340		K341		K342		K343		K344		K345		K346		K347		K348		K349		K350		K351		K352		K353		K354		K355		K356		K357		K358		K359		K360		K361		K362		K363		K364		K365		K366		K367		K368		K369		K370		K371		K372		K373		K374		K375		K376		K377		K378		K379		K380		K381		K382		K383		K384		K385		K386		K387		K388		K389		K390		K391		K392		K393		K394		K395		K396		K397		K398		K399		K400		K401		K402		K403		K404		K405		K406		K407		K408		K409		K410		K411		K412		K413		K414		K415		K416		K417		K418		K419		K420		K421		K422		K423		K424		K425		K426		K427		K428		K429		K430		K431		K432		K433		K434		K435		K436		K437		K438		K439		K440		K441		K442		K443		K444		K445		K446		K447		K448		K449		K450		K451		K452		K453		K454		K455		K456		K457		K458		K459		K460		K461		K462		K463		K464		K465		K466		K467		K468		K469		K470		K471		K472		K473		K474		K475		K476		K477		K478		K479		K480		K481		K482		K483		K484		K485		K486		K487		K488		K489		K490		K491		K492		K493		K494		K495		K496		K497		K498		K499		K500		K501		K502		K503		K504		K505		K506		K507		K508		K509		K510		K511		K512		K513		K514		K515		K516		K517		K518		K519		K520		K521		K522		K523		K524		K525		K526		K527		K528		K529		K530		K531		K532		K533		K534		K535		K536		K537		K538		K539		K540		K541		K542		K543		K544		K545		K546		K547		K548		K549		K550		K551		K552		K553		K554		K555		K556		K557		K558		K559		K560		K561		K562		K563		K564		K565		K566		K567		K568		K569		K570		K571		K572		K573		K574		K575		K576		K577		K578		K579		K580		K581		K582		K583		K584		K585		K586		K587		K588		K589		K590		K591		K592		K593		K594		K595		K596		K597		K598		K599		K600		K601		K602		K603		K604		K605		K606		K607		K608		K609		K610		K611		K612		K613		K614		K615		K616		K617		K618		K619		K620		K621		K622		K623		K624		K625		K626		K627		K628		K629		K630		K631		K632		K633		K634		K635		K636		K637		K638		K639		K640		K641		K642		K643		K644		K645		K646		K647		K648		K649		K650		K651		K652		K653		K654		K655		K656		K657		K658		K659		K660		K661		K662		K663		K664		K665		K666		K667		K668		K669		K670		K671		K672		K673		K674		K675		K676		K677		K678		K679		K680		K681		K682		K683		K684		K685		K686		K687		K688		K689		K690		K691		K692		K693		K694		K695		K696		K697		K698		K699		K700		K701		K702		K703		K704		K705		K706		K707		K708		K709		K710		K711		K712		K713		K714		K715		K716		K717		K718		K719		K720		K721		K722		K723		K724		K725		K726		K727		K728		K729		K730		K731		K732		K733		K734		K735		K736		K737		K738		K739		K740		K741		K742		K743		K744		K745		K746		K747		K748		K749		K750		K751		K752		K753		K754		K755		K756		K757		K758		K759		K760		K761		K762		K763		K764		K765		K766		K767		K768		K769		K770		K771		K772		K773		K774		K775		K776		K777		K778		K779		K780		K781		K782		K783		K784		K785		K786		K787		K788		K789		K790		K791		K792		K793		K794		K795		K796		K797		K798		K799		K800		K801		K802		K803		K804		K805		K806		K807		K808		K809		K810		K811		K812		K813		K814		K815		K816		K817		K818		K819		K820		K821		K822		K823		K824		K825		K826		K827		K828		K829		K830		K831		K832		K833		K834		K835		K836		K837		K838		K839		K840		K841		K842		K843		K844		K845		K846		K847		K848		K849		K850		K851		K852		K853		K854		K855		K856		K857		K858		K859		K860		K861		K862		K863		K864		K865		K866		K867		K868		K869		K870		K871		K872		K873		K874		K875		K876		K877		K878		K879		K880		K881		K882		K883		K884		K885		K886		K887		K888		K889		K890		K891		K892		K893		K894		K895		K896		K897		K898		K899		K900		K901		K902		K903		K904		K905		K906		K907		K908		K909		K910		K911		K912		K913		K914		K915		K916		K917		K918		K919		K920		K921		K922		K923		K924		K925		K926		K927		K928		K929		K930		K931		K932		K933		K934		K935		K936		K937		K938		K939		K940		K941		K942		K943		K944		K945		K946		K947		K948		K949		K950		K951		K952		K953		K954		K955		K956		K957		K958		K959		K960		K961		K962		K	
----	----	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	---	--



図版89 貝類遺体 1 巻貝 (番号は第65表と一致)



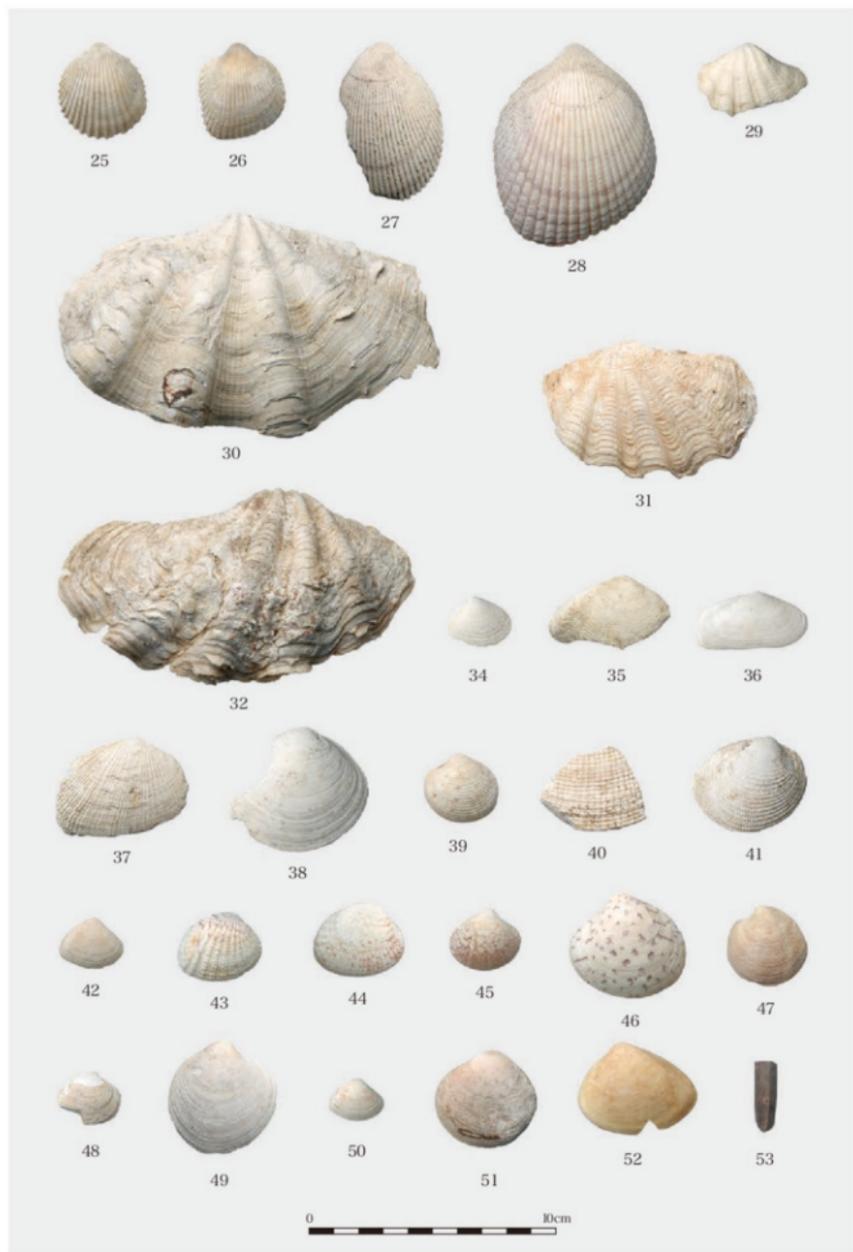
図版90 貝類遺体2 巻貝 (番号は第67表と一致)



図版91 貝類遺体3 巻貝（番号は第65表と一致）



図版92 貝類遺体4 二枚貝（番号は第68表と一致）



図版93 貝類遺体5 二枚貝（番号は第68表と一致）

第27節 人骨 (第90図、図版94～96)

徳嶺里江

土肥直美 (琉球大学医学部)

1. はじめに

那覇市首里に所在する中城御殿跡において、1体の乳児骨が出土した。人骨はTP14のⅢ層から出土し、時期は近世末～近代初頭と考えられる。以下、概要を報告する。

2. 調査方法

人骨鑑定の際に用いた年齢区分は、Knussman (1988) を参考にし、乳児 (出生-1歳)、幼児 (1-約6歳)、小児 (約6-約14歳)、若年 (約14-約20歳)、成年 (約20-約40歳)、熟年 (約40-約60歳)、老年 (約60歳以上) とした。年齢推定に関しては、歯の萌出状態からUbelaker (1989) を参考にした。

3. 人骨の所見

出土状況：解剖学的な位置関係は保っていないが、1体分がまとまって出土した。

出土部位：出土部位のうち主要なものを第90図に示す。その他には、頭骨片、歯 (上顎乳切歯、上顎乳白歯、下顎乳犬歯、下顎乳白歯)、椎骨、肋骨、指骨などが出土した。

所見：性別不明。歯冠・歯根の形成状況 (図版95) から、出生後まもなく亡くなったと考えられる。

4. まとめ

那覇市首里の中城御殿跡から、1体の乳児骨が出土した。人骨はTP14のⅢ層から出土し、時期は近世末～近代初頭と考えられている。中城御殿跡の造成土から出土したため、埋葬形態等は不明である。乳児骨は1体分がまとまって出土しているが、解剖学的に正しい位置関係は保っていない。歯の萌出状態から、出生後まもなく亡くなったと考えられる。



図版94 人骨出土状況



第90図 出土部位



図版95 出土人骨（乳歯）



図版96 出土人骨

1. はじめに

本節は出土した動物骨について、種同定を中心とした分析作業の結果について報告するものである。コンテナ約2箱分とそれほど出土量は多くないものの、調査で確認された近世～近代にかかる各時期の層から出土しており、中城御殿に居住した人々あるいはそれ以前に、この場に生活を営んだ人々の食性の一端を推定しうる資料が得られた。ここでは、基礎データの報告を中心に若干の考察を記載する。

2. 資料の概要と分析方法

両年度の調査において出土した脊椎動物遺体は基本的に調査現場において目視により取り上げられた資料である。脊椎動物遺体は調査を行ったグリッドの大半から出土が確認されており、層位についてもⅠ～Ⅳの各層から出土している。なお、TP1で円形石組遺構が検出されており、この遺構については覆土を篩にかけ遺物を採集している。

本報告に際しては、まず資料を一通り概観した上で魚類・爬虫類・鳥類・哺乳類の骨がそれぞれ含まれていることを確認した。脊椎動物遺体資料は以下の基準を設定した上で資料を選定し種同定を実施した。魚類は主に顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・上下咽頭骨と比較的明確に分類可能な部位を基本的な対象とし、分類群によって椎骨などその他の部位を適宜加えた。爬虫類・鳥類・哺乳類については長管骨のうち管状に残存しているもの、部位名称が明確になるものを対象とした。種同定は現生標本との比較を基本とし、筆者が所有する標本に加え沖縄県立埋蔵文化財センターが所蔵する資料を参照した。ただし、鳥類については筆者の不勉強に加え、比較標本を参照することができたものがニワトリのみであったため、明確にニワトリへ比定できるもののみ分類群を示し、それ以外は全て鳥類として一括している。同定対象とした資料については魚類とそれ以外のウミガメ類・鳥類・哺乳類に分け、全て一覧表に記載している(第71表、第72表)。なお、最小個体数の算出については層位の別は考慮せず、全資料を一括して集計した上で算定した。

種同定の後、魚骨及び哺乳類骨の一部で骨長計測を行い、一覧表に追記した。魚骨では前上顎骨長/柄状突起長・歯骨長/高・椎骨直径を計測の対象とし、哺乳類の計測位置はDriecksh (1976) に従った。

3. 出土脊椎動物遺体の同定と記載

(1) 脊椎動物遺体の出土様相

同定の結果、本資料からは魚類13群・爬虫類1群・鳥類2群・哺乳類8群の合計24分類群が検出され(第69表)、同定標本数(NISP) 379点・最小個体数(MNI) 42が得られている(第70表)。

層位別の出土傾向(第91図)をNISPでみるとⅠ層が最多出土数を示しており、次いでⅣ層・Ⅲ層・Ⅱ層と続いでいく。その他、表採及び層位不明資料が存在する。Ⅰ層は戦後の攪乱・造成層であるため、それ以前の時期の資料が一括されている可能性が想定できる。Ⅱ～Ⅳ層において徐々に出土数が減少する要素の一つには、上層ほど(特にⅡ層)攪乱の影響を強く受けているのではないかと推測される。

出土位置別にみるとTP14の出土数が最多を示しており、次いでTP1あるいはTP13から比較的まとまった数の同定数が得られている。TP14からは遺構が検出されていないものの各層からの動物骨の出土が見られる。TP13は主にⅢ層から、TP1は主にⅣ層からの出土が中心となっており、特にTP1においてはⅣ層から石組遺構が検出されており、動物遺体もこの遺構中より出土したものが主体を占めている。

以下には、同定された分類群ごとにその内容を記載していく。

①魚類 (第71表、図版97)

魚骨は8科13分類群が同定され、NISP147点、MNIでは24という値が算出された。以下にその主な分類群について記載する。

- ・サメ類 椎骨が2つのタイプで分類され、その内の1つはメジロザメ科に類する椎体形状である。18点検出され、椎体径は16.8~23.1mm・平均16.8mm (n=14) である。
- ・ハタ科 主上顎骨・前上顎骨・歯骨・方骨・前鰓蓋骨・擬鎖骨が確認できた。前上顎骨・歯骨は歯列形状からマハタに類するタイプ、前鰓蓋骨は縁線が棘状の形態を有する点からスジアラの標本に近似するタイプに同定される。また、椎骨でハタ科に類する資料は「ハタ型」として表記している。
- ・フエキダイト科 魚骨の中で最多を数える分類群はフエキダイト科に比定される一群で、NISPにして魚骨全体の約1/4を占める。その中でも前上顎骨がフエキダイト科ハマフエキダイト科に分類されるものが目立つ。他の部位では口蓋骨をフエキダイト科まで同定していることを除き、フエキダイト科の分類に留めているが、フエキダイト科に含まれる可能性が高いと言えよう。なお、メイチダイト科の前上顎骨が1点のみ同定された。
- ・ペラ科 前上顎骨・方骨・椎骨に加え、下咽頭骨が僅かに1点のみ検出されている。ペラ科の咽頭骨は非常に頑強で、通常ペラ科の最多数を占める場合が多いが、本資料においては異なる状況を示すことが窺える。なお、下咽頭骨は歯列形状などから「シロクラペラ型」に細分されるものである。
- ・ブダイ科 主に前上顎骨・歯骨と上下の咽頭骨の部位により出土構成される分類群である。特に咽頭骨の歯列・形状からイロブダイ属・アオブダイ属の2分類群が同定されており、NISP/MNIでみると前者が2/2、後者が9/3と算出される。なお、咽頭骨以外の部位については両者いずれかに属すると思われるが、ブダイ科として一括表記している。
- ・その他 上記以外の魚類分類群ではウツボ科・アジ科・クロダイ属・フエダイト科・ニザダイト科が同定されているほか、「同定不可」である資料および、明確な分類群への比定を見送った「保留」資料を集計表に記載している。

②爬虫類

ウミガメ類の腹甲もしくは背甲の破片の一部が見られるのみである。

③鳥類 (第72表、図版98)

鳥類は前述のとおりニワトリと明確に同定できるもの以外は「鳥類」として一括しているが、そのうち部位を記載している資料についてはニワトリとは異なる分類群にあたると思われる。一方、「鳥類」の大半を占める骨幹のみを残し骨端を欠損している長管骨は両者いずれかの判断を保留しているものである。結果、ニワトリに分類できた資料は大腿骨・脛足根骨などが数点でMNIは2と数えられる。なお、「鳥類」はMNIを別途算出し、ニワトリと合わせて鳥類全体のMNIは4である (NISP=48)。

④哺乳類 (第72表)

哺乳類は8分類群が同定され、NISPで181点を得ている。

- ・イヌ (図版98) 下顎骨・中手骨・踵骨・距骨・中足骨などが同定された。なかでも中足骨は同一個体のものと思われる。NISPでは哺乳類中第2位の17点を数えるが、大半は1層からの出土である。最小個体数は1で、1点にカットマークが認められる。
- ・ネコ (図版98) 下顎骨・上腕骨及び尺骨が1点ずつ確認された。両者とも1層からの出土であるため、遺構との関連性は不詳である。
- ・ウマ (図版98) 遊離歯・肩甲骨・基節骨が出土しており、MNIは1である。基節骨のうち1点がIII層から出土しているほかは、I層ないしは表土・層位不明での取り上げである。
- ・イノシシ類 (図版99) 哺乳類の中で最多の同定数が確認できたのが本群である。上下顎骨・四肢骨を中心に出土しており、最小個体数は4と算出される。ほぼ全身の部位が確認されたものの、頭蓋骨や椎骨があまり見られない点が注視される。グスク時代以降の出土資料におけるイノシシ類の同定に際しては、その分類群がイノシシであるかブタであるかが一つの焦点であるが、形態からのみの判別は困難である場合が多い。その中において、本資料

の同定にはリュウキュウイノシシの現生標本を用いているが、それとの比較により一部の資料についてブタと判定しうる形状が観察されている。

その内の一つである左右が吻合した下顎骨(図版99-2)は、残存する歯列は左がI₁~P₄・右がI₁~M₁までであるが、残存部の形状観察からは欠損している後端側の形状を、イノシシに比べ歯列が頬側にゆがんだ形状を呈するであろうと推測される。また、下顎体の骨質が粗い点やM₁の咬耗から比較的若齢の個体である、などの要素も含めたうえで考えると、この資料についてはブタであると判断できよう。また下顎骨のほかに橈骨・尺骨・中手骨・基節骨などで、標本に比べ全長に対する骨幹幅の比率が高い(幅が厚い)形態や、骨表面の質感が粗いなどの観察結果が得られたことから、下顎骨同様ブタの一群として分類することが可能であろう。

ただし、上記に分類できる資料はイノシシ類とした分類群中でも少数であり、多くはイノシシの標本に類する形状を示すものである。家畜化の進行した形態を持つ資料が見られることで、残りのイノシシ類についても人為的な管理下にあった個体である可能性は当然考えられるものの、狩猟により捕獲されたイノシシであった可能性も否定できない。ここではイノシシ/ブタとして記載しどちらかに属するものであるとして判断を保留した。

- ・ヤギ 遊離歯・下顎骨・中手骨・中足骨・基節骨が同定され、最小個体数は1である。
 - ・ウシ(図版98) 遊離歯・下顎骨・手根骨・大腿骨・中足骨・踵骨・中節骨・末節骨が同定されており、NISPで16点、最小個体数は2と、哺乳類中ではイヌとほぼ同程度の出土を数える。ウシの出土もその多くがI層からの出土である。
- また、大腿骨及び中足骨にスパイラルフラクチャーが認められるほかは目立った解体痕はみられない。

(2) 解体痕について

サメ類・タイ型椎骨・鳥類・イヌ・イノシシ・ウシの各分類群の一部の資料にカットマーク(CM)あるいはスパイラルフラクチャー(SF)が観察されている。ただし、全資料中に占める出現率は低いため、一定の傾向を見出すことは難しい。各々の分類群が刃物を用いた解体や骨の打割の対象に挙げられるものであったことを示唆するのみである。

4. 脊椎動物遺体の分析

(1) 脊椎動物遺体分類群の組成

上記の同定作業などによって得られた結果に基づき、動物遺体の出土傾向について述べていきたい。

まず、分析対象とした全資料の分類群の組成を俯瞰すると、MNIにおいては魚類が約6割を満す最優占群となり、哺乳類が約3割とそれに次ぐ。一方、NISPでは哺乳類が約5割を占め第1優占群に、魚類が約4割を占めそれに次ぐ傾向を示している。両者で傾向が異なる点については、哺乳類群の資料が比較的多岐にわたる部位を出土していることから、最小個体数に換算する際の幅が他の群に比べ広いためであろうと考えられる。総じてみると、魚類及び哺乳類を2大要素とする近世以降の一般的な組成であると言える。もう一つ踏み込んで言えば、ここでいう魚類及び哺乳類は、フエキダイ科及びイノシシ/ブタを中心とする動物利用が展開されていたと言い換えることができるであろう。

次に層位別のNISPによる組成傾向を見てみると(第92図)、IV層では魚類が約5割に対して、哺乳類が約3割を占める状況に対し、I層では哺乳類が約6割を、魚類が約3割を占める傾向を示し、優占順位が逆転している。さらに、II層・III層の状況を含め勘案してみるとIV層からI層へ向かう時期の変遷に伴い、魚類から哺乳類へと組成の主体が漸次的に変移してゆく様子がみとれる。なお、鳥類については各層で1~2割を占める組成を示すが、増減などについて明確な傾向を捉えることは難しい。なお、MNIは母数が少なく本資料のみで層位別傾向の考察を行うには十分でないと考え、省略した。

分類群別のNISP組成を見てみると、魚類は基本的にフエキダイ科が組成の最優占群である(第93図)。いずれの層位においても概ね2~4割を占めており、MNI組成でも3割を占める。ただし、優占群として上位にあるとはいえ、圧倒的多数を占めるとも言い難い。III層あるいはIV層で、やや他を上回る程度で、サメ類やハク科・ブダイ科なども近い組成比率を示す場合も窺うことができる。

一方、鳥類・哺乳類についてはNISP組成全体で約5割をイノシシ類が占め、MNI組成においても同様に約4割を占めるイノシシ類が第1の優占群であると言える(第94図)。いずれの層位でもイノシシ類の優占傾向に大きな

変化はない。上層に行くほどに鳥類の組成比率が下がり、イヌの比率が増加する点に、時期変遷に伴う漸次的変化を指摘することができよう。その他ウシ・ウマなどの分類群について本資料による組成からは特段の傾向は見出せない。

以上、本資料の同定に基づく脊椎動物遺体の分類群組成について言及したが、途中に述べたとおり基本的にはNISPによる比率を中心に分析している。MNIとNISPとで全資料合計の魚類・哺乳類比率において優占群が異なることから、本来であれば両者が示す数値の妥当性についても検討を要するところであるが、MNI値が小さいことから本論における傾向分析にはNISP値を主に使用することとした。

(2) 動物利用の様相についての小考

沖縄諸島の脊椎動物遺体の出土はグスク時代以降、哺乳類の組成比率が高まる傾向にある。これより、ウシあるいはウマやニワトリなどの家畜の導入と浸透を見て取ることが基本的な認識である。しかし、哺乳類の出土傾向においてイノシシ類とウシのいずれの分類群が組成主体を占めるかという点で遺跡ごとに異なる様相が窺える。その中において中城御殿の出土資料は、1層～4層の各時期共にイノシシ類が主たる利用対象であったことを示すものである。出土しているイノシシ類の部位構成からは、頭を含めたほぼ全身が遺跡内に運び込まれたことが窺える。加えて、幼獣と考えられる個体が含まれていることから、敷地内での飼育の可能性も指摘できよう。イノシシあるいはブタを中心とする組成は、概ね首里城の調査成果に見られるものである。首里王府はその政策としてブタの普及を図っていることなどが指摘される(金城1997)ことから、当然ながら城内においてイノシシ類が頻りに利用されたことが想定される。中城御殿においても同様の利用相が反映されているものと考えられる。

魚類は、特定の分類群が圧倒的多数を占める組成傾向を示すわけではなく、フエキダイ科やブダイ科・ハタ科などが他の分類群に比べてやや抜け出す程度で、多様な魚類をそれ程偏り無く利用していたあるいは利用しなければならなかった状況が推測される。フエキダイ科を筆頭にブダイ科やハタ科などが、その中でも目立つ組成はやはり首里城の出土傾向と類似するものである。

また、TP1において検出された円形石組遺構からはハタ科・鳥類・イノシシ類が集中して出土している。推定される遺構の機能を、他の遺物などから併せて考察することで、動物利用相の考察へも反映できる可能性がある。これについては他の事例などを含め改めて検討すべき課題であると考えている。

5. おわりに

ここまで出土した脊椎動物遺体の分析とその結果を用い、中城御殿に居住した人々の動物利用相についての考察を行ってきた。琉球王国の世子邸宅として構築された御殿であることから、出土する遺物には当時の最上級階層が残したと思われるものがみられる。動物遺体も同様の人々の生活の痕跡を示していると想定できることから、本資料の持つ意義は重要である。しかし、本論中で述べたとおり、本資料数のみでは十分な傾向を読みとくことができるとは言い難い。今後、周辺遺跡や同時代遺跡などとの事例の比較を課題に挙げ、同時に中城御殿跡からの更なる追加資料などを期待したい。

謝辞

本稿の執筆において、同定における比較標本の一部を沖縄県立埋蔵文化財センターにて閲覧させていただいた。また分析に際しては同センター仲座久宜氏・大堀皓平氏に様々な御便宜を図っていただいた。末筆ながら記して御礼申し上げます。

第69表 脊椎動物遺体種名一覧表

軟骨魚綱	Chondrichthyes	
メジロザメ科		Carcharhinidae
サメ類		Lamniformes
硬骨魚綱	Osteichthyes	
ウツボ科		Muraenidae
ハタ科		Serranidae
アジ科		Carangidae
クロダイ属		<i>Acanthopagrus</i>
メイチダイ属		<i>Gymnocranius</i>
フエフキダイ属ハマフエフキ型		<i>Lethrinus cf. L.nebulosus</i>
フエフキダイ属		<i>Lethrinus</i>
ベラ科シロクラベラ型		<i>Labridae cf. Choerodon shoentini</i>
ベラ科		<i>Labridae</i>
イロブダイ属		<i>Bolbometopon</i>
アオブダイ属		<i>Scarus</i>
ニザダイ科		<i>Acanthuridae</i>
爬虫綱	Reptilia	
ウミガメ類		Cheloniidae
鳥綱	Aves	
ニワトリ		<i>Gallus gallus</i>
哺乳綱	Mammalia	
ネズミ科		Muridae
ネコ		<i>Felis catus</i>
イヌ		<i>Canis familiaris</i>
ウマ		<i>Equus ferus</i>
イノシシ/ブタ		<i>Sus scrofa / S.scrofa ver. domesticus</i>
ヤギ		<i>Capra hircus</i>
ウシ		<i>Bos taurus</i>

第70表 同定標本数 (NISP) 及び最小個体数 (MNI) 一覧表

※ 不明・遺留含む

分類群	NISP							MNI
	表採	I	II	III	IV	不明	合計	
メジロザメ科	1	7		2	6	2	18	1
エイ・サメ類	1				1		2	1
ウツボ科				1			1	1
ハタ科	1	5	2		7		15	2
ハタ型	2	2		4			8	-
アジ科				1	1		2	1
フエダイ科			1				1	1
クロダイ属		1		1	3		5	2
フエフキダイ属	2	4	2	5	5		18	
フエフキダイ科	5	3	1	6	7	2	24	8
タイ型		5	3	3	1	1	13	-
ベラ科シロクラベラ型			1				1	
ベラ科	1	4		1	1	2	9	1
イロブダイ属					1	1	2	2
アオブダイ属	1	3	2	1	1	1	9	3
ブダイ科		2	1		1		4	-
ニザダイ科		1			1		2	1
同定不可	2	4	1	1	2	2	11	-
保留				1		1	2	-
ウミガメ類	1			1	1		3	1
ニワトリ		3	2	4	4		14	2
ニワトリ?				1			1	-
鳥類	2	6	5	6	11	3	33	2
ネズミ科					1		1	1
ネコ		2				1	3	1
イヌ		15	1	1			17	1
ウマ	1		5		1		7	1
イノシシ	13	24	13	25	18	6	99	4
イノシシ?		2				1	3	-
イノシシ/ブタ	1	7	2	4	3	2	19	2
ヤギ		5	2		2	1	10	1
ウシ	1	12		1	1	1	16	2
ウシ/ウマ					1		1	-
哺乳類		3			1	1	5	-

第71表 出土魚骨一覧表1

分類群	部位	LR	数	計測位置	計測値 (mm)	出土位置			所見	
						グリッド	TP・TR	層位		遺構等
メジロザメ科	椎骨	-	1	縦径	17.3	K-15	-	I層	-	-
		-	1	不可	-	L-15	-	I層	-	-
		-	1	縦径	21.6	J-14	TP3	I層	-	-
		-	1	縦径	19.5	J-15・16	TP7	I層	-	CM
		-	1	不可	-	E・F-13	TP12	I層	-	-
		-	1	縦径	23.1	G~L-13	LT	I層	-	-
		-	1	縦径	22.6	F・G-13	TP14 (ST4)	III層	-	-
		-	1	縦径	22.5	F-13	TP13 (ST1)	III層	-	-
		-	1	縦径	20.8	I-15	TP6	IV層	-	-
		-	1	縦径	21.3	I-15	TP6	IV層	-	-
		-	1	縦径	16.8	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
		-	1	縦径	19	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
		-	1	縦径	21.1	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	CM
		-	1	不可	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
		-	1	縦径	18.5	F・G-13	TP14	清掃	-	-
		-	1	不可	-	I-13	LT	清掃	-	-
		-	1	縦径	19.7	F・G-13	-	表採	-	-
-	1	縦径	21.3	K-14	-	I層	-	-		
エイ・サメ類	椎骨	-	1	縦径	14.9	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
		-	1	縦径	8.4	F・G-13	-	表採	-	-
ウツボ科	腹椎	-	1	縦径	4.8	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	-
		-	1	不可	-	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	-
アジ科	角骨	R	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	-
		R	1	縦径	32.6	F-13	TP13 (ST1)	IV層	-	-
ハタ科	主上顎骨	L	1	-	-	J-14	TP1	IV層	円石	-
		R	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
	前上顎骨	L	1	不可	-	J-14	TP1	IV層	円石	マハタ型
		L	1	不可	-	I-15	TP6	I層	0	マハタ型
	歯骨	R	1	歯骨高	9.7	G~L-13	LT	I層	0	-
		R	1	歯骨長	59.9	-	-	-	-	-
	方骨	R	1	歯骨高	6.2	G-13	LT	I層	0	マハタ型
		L	1	-	-	G-13	LT	I層	0	-
	前鰓蓋骨	R	1	-	-	J-14	-	表採	-	-
		R	1	-	-	J-14	-	IV層	-	スジアラ型
擬頭骨	L	1	-	-	G-19	TP15	I層	-	スジアラ型	
	L	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST4)	II層	-	-	
第1椎骨	R	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST4)	II層	-	-	
	R	1	-	-	F-13	TP13 (ST1)	IV層	-	-	
ハタ型	腹椎	-	1	-	-	K-13	-	I層	-	-
		-	1	-	-	L-14	-	I層	-	-
		-	1	-	-	F-13	TP13 (ST2)	III層	-	-
		-	1	-	-	F-13	TP13 (ST2)	III層	-	-
		-	1	-	-	F・G-13	-	表採	-	-
	尾椎	-	1	-	-	F-13	TP13 (ST2)	III層	-	-
		-	1	-	-	F-13	TP13 (ST2)	III層	-	-
		-	1	-	-	G・H-19	-	表採	-	-
		-	1	-	-	F・G-13	-	表採	-	-
		-	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
クロダイ属	主上顎骨	L	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	-
		L	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
	前上顎骨	L	1	-	-	K-13	-	I層	-	-
		R	1	前上顎骨長	28.9	J-14	TP1	IV層	円石	-
フエダイ科	歯骨	L	1	柄状突起長	29.4	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
		R	1	柄状突起長	61.7	F・G-13	TP14 (ST4)	II層	-	-
フエフキダイ属	前上顎骨	L	1	柄状突起長	61.7	L-14	-	I層	-	型不明
		L	1	不可	-	I-15	TP6	I層	-	ハマフエフキ型
		L	1	不可	-	G-13	LT	I層	-	ハマフエフキ型
		L	1	前上顎骨長	40.7	G-19	TP15	II層	-	ハマフエフキ型
		L	1	柄状突起長	52.2	-	-	-	-	-
		L	1	不可	-	E・F-13	TP12	III層	-	ハマフエフキ型
		L	1	不可	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	型不明
		L	1	不可	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
		R	1	不可	-	F・G-13	TP14 (ST4)	II層	-	-
		R	1	不可	-	F-13	TP13 (ST2)	III層	-	ハマフエフキ型
		R	1	不可	-	F-13	TP13 (ST2)	III層	-	ハマフエフキ型
		R	1	前上顎骨長	41.9	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	ハマフエフキ型
		R	1	不可	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	ハマフエフキ型
口蓋骨	口蓋骨	R	1	前上顎骨長	40.1	F・G-13	-	表採	-	ハマフエフキ型
		R	1	柄状突起長	52.2	-	-	-	-	-
		L	1	-	-	L-14	-	I層	-	-
		R	1	-	-	F-13	TP13 (ST1)	III層	-	-
		R	1	-	-	F-13	TP13 (ST2)	III層	-	-
		R	1	-	-	F-13	TP13 (ST1)	IV層	-	-

第71表 出土魚骨一覧表2

分類群	部位	LR	数	計測位置	計測値 (mm)	出土位置				所見
						グリッド	TP・TR	層位	遺構等	
フエキダイ科	主上顎骨	L	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	I層	-	-
		L	1	-	-	F・G-13	-	表採	-	-
		R	1	-	-	F-13	TP13 (ST2)	II層	-	-
	前上顎骨	R	1	-	-	F・G-13	-	表採	-	-
		L	1	不可	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	型不明
		L	1	歯骨長 10.5	47.7	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	-
	歯骨	L	1	歯骨高 8.2	10.5	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
		L	1	歯骨高 9.4	8.2	F-13	TP13 (ST1)	IV層	-	-
		R	1	歯骨長 26.8 歯骨高 7.8	10.5	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	-
	角骨	R	1	歯骨高 10.4	10.4	F・G-13	-	表採	-	-
		L	1	-	-	F-13	TP13 (ST1)	IV層	-	-
		R	1	-	-	F-13	TP13 (ST1)	III層	-	-
R		1	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	I層	-	-	
R		1	-	-	I-15	TP6	IV層	-	-	
方骨		L	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST4)	II層	-	-
		L	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	-
		L	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
第1椎骨		R	1	-	-	不明	-	表採	-	-
		R	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST4)	III層	-	-
		R	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
腹椎		-	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
	-	1	-	-	K-14・15	-	I層	-	-	
	-	1	縦径 15.0	15.0	J-14	TP1	清埧	-	-	
タイ型	尾椎	-	1	縦径 6.9	6.9	J-14	TP1	清埧	-	-
		-	1	-	-	不明	-	表採	-	-
		-	1	-	-	L-14	-	I層	-	CM
		-	1	-	-	L-14	-	I層	-	-
		-	1	-	-	L-14	-	I層	-	-
		-	1	-	-	L-14	-	I層	-	-
		-	1	-	-	L-14	-	I層	-	-
		-	1	-	-	J-14	TP1	I層	-	-
		-	1	-	-	-	-	II層	-	-
		-	1	-	-	L-14	0	II層	-	-
		-	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST4)	II層	-	-
		-	1	-	-	F-13	TP13 (ST1)	III層	-	-
-	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	-		
-	1	-	-	F-13	TP13 (ST2)	III層	-	-		
-	1	-	-	J-14	TP1	IV層	門石	-		
-	1	-	-	J-15	-	清埧	-	-		
ベラ科シロクラベラ型	下咽頭骨	-	1	側列面幅 全幅	38.6 57.6	K-15	-	II層	溝1内	-
		R	1	-	-	L-14	-	清埧	-	-
		R	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
ベラ科	方骨	R	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
		R	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
	尾椎	腹椎	-	1	縦径 11.7	11.7	K-13	-	I層	-
		腹椎	-	1	縦径 11.5	11.5	K-14	-	I層	-
		腹椎	-	1	縦径 13.3	13.3	K-13	-	I層	-
		腹椎	-	1	縦径 13.7	13.7	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-
-	1	-	-	K-15	-	I層	-	-		
-	1	縦径 10.8	10.8	J-14	TP1	清埧	-	-		
-	1	-	-	F・G-13	-	表採	-	-		
イロブダイ属	上咽頭骨	R	1	不可	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
		R	1	不可	-	J-15	TP5	清埧	-	-
	前上顎骨	R	1	不可	-	F・G-13	TP14 (ST4)	II層	-	-
アオブダイ属	歯骨	L	1	不可	-	I-14	TP2北	I層	-	-
		L	1	不可	-	F・G-13	TP14 (ST4)	III層	-	-
	L	1	不可	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-	
	上咽頭骨	L	1	不可	-	E・F-13	TP12	I層	-	-
		R	1	不可	-	J-14	TP1	清埧	-	-
	下咽頭骨	-	1	側列面幅 全幅	13.1 29.4	F・G-13	TP14 (ST4)	II層	-	-
-	1	不可	-	K-14	-	I層	-	-		
-	1	側列面幅 17.5	17.5	F・G-13	-	表採	-	-		
ブダイ科	主上顎骨	L	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST4)	II層	-	-
		R	1	-	-	J-14	TP1	IV層	門石	-
	尾椎	-	1	-	-	K-14	-	I層	-	-
ニギダイ科	尾椎	-	1	-	-	L-14	-	I層	-	-
		-	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	I層	-	テングハギ型
		-	1	-	-	J-14	TP1	IV層	門石	-
同定不可	尾椎	-	1	-	-	I・J-14	TP2	I層	-	-
		-	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	I層	-	-
		-	1	-	-	F・G-13	TP14	I層	-	-
		-	1	-	-	K-13	LT	I層	-	-
		-	1	-	-	K-14	-	II層	-	他
		-	1	-	-	F-13	TP13 (ST2)	III層	-	-
		-	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
		-	1	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
		-	1	-	-	H-13	LT	清埧	-	-
		-	1	-	-	不明	-	表採	-	-
保留	腹椎	-	1	-	-	G・H-19	-	表採	-	-
		-	1	-	-	F-13	TP13 (ST2)	III層	-	-
		-	1	-	-	J-14	TP1	清埧	-	-

第72表 脊椎動物遺体出土一覧表 1

分類群	部位	LR	残存状況	計測位置	計測値 (mm)	出土位置				所見
						グリッド	TP・ST	層位	遺構等	
ウミガメ類	腹甲/背甲	不	破片	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅲ層	-	-
		不	破片	-	-	J-14	TP1	Ⅳ層	門石	-
		不	破片	-	-	J-13	LT (ST)	Ⅰ層	-	-
ニワトリ	鳥口骨	L	遠	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅳ層	-	-
		R	近	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅰ層	-	-
	肩甲骨	L	近	-	-	F-13	TP13 (ST1)	Ⅲ層	-	-
		R	近	-	-	F-13	TP14 (ST2)	Ⅲ層	-	-
	尺骨	L	遠	-	-	F・G-13	TP14 (ST4)	Ⅱ層	-	-
		R	近	-	-	F・G-13	-	表採	-	-
	大腿骨	L	遠	-	-	E・F-13	TP12	Ⅲ層	-	-
		R	遠	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅳ層	-	-
	脛足根骨	L	近	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅳ層	-	-
		L	幹	-	-	F・G-13	TP14	Ⅱ層	-	-
		L	遠	-	-	J-14	TP1	Ⅳ層	門石	-
		L	遠	-	-	J-14	TP1	Ⅳ層	門石	-
R		近	-	-	K-15	-	Ⅰ層	-	-	
R		遠	-	-	G-19	TP15	Ⅰ層	-	-	
ニワトリ?	大腿骨	L	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST4)	Ⅲ層	-	-
		R	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅳ層	-	-
	鳥口骨	L	近	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅰ層	-	-
		R	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅳ層	-	-
	腕骨	L	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST4)	Ⅱ層	-	-
		R	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST4)	Ⅱ層	-	-
	脛足根骨	L	幹	-	-	J-14	TP1	Ⅳ層	門石	-
		R	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅲ層	-	-
	足根/中足骨	不	幹	-	-	F-13	TP13 (ST1)	Ⅲ層	-	-
		不	幹	-	-	L-14	-	Ⅰ層	-	-
		不	幹	-	-	K-15	-	Ⅰ層	-	-
		不	幹	-	-	K-14	-	Ⅰ層	-	-
		不	幹	-	-	E・F-13	TP12	Ⅰ層	-	-
		不	幹	-	-	E・F-13	TP12	Ⅰ層	-	-
		不	幹	-	-	J-13	LT (ST)	Ⅱ層	-	-
		不	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST4)	Ⅱ層	-	-
		不	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST4)	Ⅱ層	-	-
		不	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST4)	Ⅱ層	-	-
不		幹	-	-	F-13	TP13 (ST1)	Ⅲ層	-	-	
不		幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅲ層	-	CM	
不		幹	-	-	F-13	TP13 (ST1)	Ⅲ層	-	-	
不		幹	-	-	F-13	TP13 (ST1)	Ⅲ層	-	-	
鳥類	長管骨	不	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅳ層	-	-
		不	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅳ層	-	-
		不	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅳ層	-	-
		不	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅳ層	-	-
		不	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅳ層	-	-
		不	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅳ層	-	-
		不	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅳ層	-	-
		不	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅳ層	-	-
		不	幹	-	-	J-14	TP1	Ⅳ層	門石	-
		不	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅳ層	-	-
		不	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅳ層	-	-
		不	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅳ層	-	-
	不	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅳ層	-	-	
	不	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅳ層	-	-	
	不	幹	-	-	K-13	LT	清掃	-	-	
	不	幹	-	-	K-13	LT	清掃	-	-	
	不	幹	-	-	J-14	TP1	清掃	-	-	
	不	幹	-	-	F・G-13	-	表採	-	-	
不	幹	-	-	F・G-13	-	表採	-	-		
ネズミ科	脛骨	R	(近)～遠	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	Ⅳ層	-	-
	下顎骨	R	関節突起+筋突起	-	-	K-14	-	Ⅰ層	-	-
ネコ	上顎骨	L	幹～遠	Bd	17.6	J-14	TP3	Ⅰ層	-	-
	尺骨	R	滑車切痕	-	-	I-13	LT	清掃	-	-
イヌ	下顎骨	R	[CP1/P2]	-	-	F・G-13	TP14 (ST4)	Ⅲ層	-	-
		不	[M1]	-	-	I-15	TP4	Ⅰ層	-	-
	第3中手骨	R	近	-	-	G-19	TP15	Ⅰ層	-	-
		R	近	-	-	G-19	TP15	Ⅰ層	-	-
	大腿骨	R	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST4)	Ⅱ層	-	-
		L	遠	Bd	20.8	G-19	TP15	Ⅰ層	-	CM
	脛骨	R	幹～遠	SD Bd	9.1 18.1	G-13	LT	Ⅰ層	-	-
		L	完存	-	-	G-19	TP15	Ⅰ層	-	-
	踵骨	L	完存	GL GB	39.5 16.3	G-19	TP15	Ⅰ層	-	-
		L	近	-	-	G-19	TP15	Ⅰ層	-	-
	第2中足骨	R	完	GL Bd	46.6 5.5	K-16	TP9	Ⅰ層	-	-
		L	近	-	-	G-19	TP15	Ⅰ層	-	-
	第3中足骨	R	完	GL Bd	50.9 6.1	K-16	TP9	Ⅰ層	-	-
		L	近	-	-	G-19	TP15	Ⅰ層	-	-
	第4中足骨	L	近	-	-	G-19	TP15	Ⅰ層	-	-
第5中足骨	L	近	-	-	G-19	TP15	Ⅰ層	-	-	

第72表 脊椎動物遺体出土一覧表2

分類群	部位	LR	残存状況	計測位置	計測値 (mm)	出土位置			所見		
						グリッド	TP・TR	層位・遺構等			
イヌ	基節骨	不	完存	GL	24.7	G-19	TP15	1層	-	-	
		不	完存	GL	23.8	G-19	TP15	1層	-	-	
		L	歯冠	-	-	-	不明	-	表採	-	-
P/M下顎	肩甲骨	不	破片	-	-	I-J-13	-	1層	-	-	
		R	関節周辺	-	-	J-15	TP7	1層	-	-	
ウマ	基節骨	不	近～遠	SD	30.3	I-15	TP6	1層	-	CM	
		不	近～遠	Bd	42.5	-	L-14	-	1層	-	-
		不	近～遠	GL Bp SD Bd	71.4 47.2 28.1 40.7	F-13	TP13 (ST2)	III層	-	-	
		不	遠	Bd	39.1	F・G-13	TP14	1層	-	-	
イノシシ類	I上顎	R	歯冠	-	-	E・F-13	TP12	1層	-	-	
		L	破片	-	-	K-15	-	1層	-	-	
		R	-	-	-	-	J-14	TP1	IV層	円石	-
		L	歯冠	-	-	J-15	TP7	1層	-	-	
	I'	L	ほぼ完存	-	-	J-14	TP1	IV層	円石	-	
		L	完存	-	-	K-13	LT	清掃	-	歯根未形成	
	I ₁	R	完存	-	-	K-13	LT	清掃	-	歯根未形成	
		L	破片	-	-	不明	-	表採	-	オス	
	C下顎	L	破片	-	-	-	-	-	-	-	
		R	歯冠	-	-	F・G-13	TP14 (ST3)	III層	-	-	
	I ₂	L	完存	-	-	J-14	TP1	IV層	円石	-	
		R	完存	-	-	J-14	TP1	IV層	円石	-	
	M1	R	完存	歯冠長 歯冠幅	13.8 10.6	K-L-15	-	1層	-	-	
		L	ほぼ完存	歯冠長 歯冠幅	18.6 12.1	L-15	-	1層	-	-	
	M ₀₂	L	歯冠	歯冠長 歯冠幅	16.9 11.2	K-14	-	1層	-	-	
		L	歯冠	歯冠長 歯冠幅	17.8 11.5	K-15	-	1層	-	-	
	M ₁	L	歯冠	-	-	J-14	TP1	IV層	円石	-	
	M ₂	L	ほぼ完存	歯冠長 歯冠幅	17.9 12.7	F・G-13	TP14 (ST4)	II層	-	-	
		L	歯冠	歯冠長 歯冠幅	17.7 10.9	J-13	LT	1層	-	萌出中	
	M ₃	R	歯冠	歯冠長 歯冠幅	17.7 10.9	J-13	LT (ST)	II層	-	-	
R		歯冠	歯冠長 歯冠幅	17.7 10.9	F-13	TP13 (ST2)	III層	-	-		
m ₃	R	歯冠	-	-	J-13	LT (ST)	II層	-	未萌出		
	R	完存	-	-	K-14	-	清掃	-	-		
側頭骨	R	関節結節	-	-	J-14	TP1	IV層	円石	-		
	R	関節結節	-	-	J-14	TP1	IV層	円石	-		
上顎骨	L	[I1I2I3CP2]	-	-	I-15	TP6	1層	-	-		
	L	[CP2CP3P4]	-	-	J-14	TP1	IV層	円石	-		
	R	[I1I2I3CP2]	-	-	I-15	TP6	1層	-	-		
下顎骨	L	[M1M2]	M1長 M1幅 M2長 M2幅	13.6 10.5 17.6 13.2	K-14	-	1層	-	-		
	L	関節突起	-	-	J-14	TP1	IV層	円石	-		
	R	[P2P3P4]	-	-	J-13	LT (ST)	II層	-	-		
	R	破片	-	-	E・F-13	TP12	III層	-	-		
頸椎	R	[m1m2m3M1]	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-		
	-	椎体	-	-	J-13	LT (ST)	II層	円石	関節面未癒合脱落		
胸椎	-	椎体	-	-	F・G-13	TP14 (ST4)	-	-	-		
	-	ほぼ完存	-	-	J-14	TP1	IV層	-	関節面未癒合脱落		
肩甲骨	L	関節周辺	GLP SLC	27.3 17.6	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	-		
	L	肩甲骨棘	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-		
	R	関節周辺	SLC	17.4	不明	-	表採	-	CM		
	L	幹	-	-	F・G-13	TP14 (ST4)	II層	-	SF		
上腕骨	R	幹	SD	9.6	L-15	-	1層	-	小型		
	R	幹	-	-	K-15	-	1層	-	-		
	R	(遠)	-	-	F-13	TP13 (ST2)	III層	-	-		
	L	(近)	-	-	F・G-13	-	表採	-	-		
腕骨	L	近	Bp	18.5	F-13	TP13 (ST2)	-	-	-		
	L	幹	SD	12.9	不明	-	表採	-	-		
	L	(近)	-	-	不明	-	表採	-	-		
	R	幹	-	-	K-13	LT	清掃	-	-		
	R	(遠)	-	-	不明	-	表採	-	-		
	R	(遠)	-	-	不明	-	表採	-	-		
尺骨	L	滑車切痕	DPA	34.3	F・G-13	TP14 (ST4)	II層	-	-		
	L	滑車切痕	-	-	不明	-	表採	-	-		
	R	滑車切痕	DPA	37.6	F・G-13	TP14 (ST4)	II層	-	-		
第3中手骨	L	近～(遠)	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-		
	L	近～(遠)	Bp B	11.1 8.8	不明	-	表採	-	-		
第4中手骨	R	近～(遠)	Bp B	11.7 8.7	L-14	-	1層	-	-		
	R	近	Bp	12.9	K-14・15	-	1層	-	-		
	R	近～幹	Bp B	11.9 8.1	K-14・15	-	1層	-	-		

第72表 脊椎動物遺体出土一覽表 3

分類群	部位	LR	残存状況	計測位置	計測値 (mm)	出土位置				所見
						グリッド	TP・TR	層位	遺構等	
イノシシ類	寛骨	L	腸骨+坐骨	-	-	F・G-13	TP14 (ST4)	II層	-	-
		L	腸骨	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	幼獣
		R	腸骨	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	幼獣
	大観骨	不	腸骨	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	-
		L	骨	-	-	K-14	-	I層	-	小型
		L	骨～(遠)	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	幼獣
	脛骨	R	骨～(遠)	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	幼獣
		L	骨	-	-	L-15	-	I層	-	-
		L	(近)～(遠)	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	幼獣
		L	骨	SD	13.3	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
		L	骨～(遠)	-	-	J-14	TP1	IV層	-	-
		R	(近)～骨	-	-	G～L-13	LT	I層	-	CM
		R	遠	-	-	G～L-13	LT	I層	-	-
		R	(遠)	-	-	F・G-13	TP14 (ST4)	II層	-	-
		R	骨	-	-	F-13	TP13 (ST2)	III層	-	-
	距骨	R	骨～(遠)	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	幼獣
		L	山字完存	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	幼獣
		L	近位側半存	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	幼獣
	踵骨	R	完存	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	幼獣
		L	完存	GL	64.1	F-13	TP13 (ST1)	III層	-	-
		BG	19.1	-	-	-	-	-	-	-
		L	(踵骨隆起)～遠	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	幼獣
		L	(踵骨隆起)～遠	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
		L	(踵骨隆起)～遠	-	-	K-13	LT	清掃	-	-
		R	(踵骨隆起)～遠	-	-	F・G-13	TP14	III層	-	-
		R	(踵骨隆起)～遠	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	幼獣
		R	(踵骨隆起)～遠	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	幼獣
		R	(踵骨隆起)～関節	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
	第2中足骨	R	近～遠	-	-	K-13	LT	清掃	-	-
		R	近～骨	-	-	G-13	LT	I層	-	-
	第3中足骨	R	近	-	-	L-14	-	I層	-	-
		R	(近)～(遠)	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	幼獣
	第4中足骨	L	近～骨	Bp	14.8	F-13	TP13 (ST2)	III層	-	-
		R	(近)～(遠)	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	幼獣
	第2/5中手/中足骨	不	近～(遠)	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	I層	-	近位端破損
		不	(近)～(遠)	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	幼獣
	第3/4中手/中足骨	不	(遠)	-	-	L-15	-	II層	-	-
	基節骨	不	骨～遠	SD	10.5	K-14	-	I層	-	-
		Bd	12.5	-	-	-	-	-	-	-
		不	(近)～遠	SD	10.9	K-15	-	I層	-	-
		Bd	11.8	-	-	-	-	-	-	-
	中節骨	不	(近)～遠	SD	10.0	F-13	TP13 (ST2)	III層	-	-
		Bd	11.8	-	-	-	-	-	-	-
	末節骨	不	完存	GL	20.6	G-19	TP15	I層	-	-
		Bp	12.0	-	-	-	-	-	-	-
	上顎骨	不	完存	SD	10.6	-	-	-	-	-
		Bd	10.4	-	-	-	-	-	-	-
	下顎骨	不	完存	GL	19.8	K-14	-	I層	-	-
		Bp	12.7	-	-	-	-	-	-	-
	上腕骨	不	完存	SD	10.5	-	-	-	-	-
		Bd	10.5	-	-	-	-	-	-	-
腕骨	不	完存	GL	19.8	K-14	-	I層	-	-	
	Bp	12.7	-	-	-	-	-	-	-	
尺骨	不	完存	SD	10.5	-	-	-	-	-	
	Bd	10.5	-	-	-	-	-	-	-	
第3中足骨	不	完存	GL	20.6	G-19	TP15	I層	-	-	
	Bp	12.0	-	-	-	-	-	-	-	
第4中手骨	不	完存	SD	10.6	-	-	-	-	-	
	Bd	10.4	-	-	-	-	-	-	-	
第5中手骨	不	完存	GL	19.8	K-14	-	I層	-	-	
	Bp	12.7	-	-	-	-	-	-	-	
脛骨	不	完存	SD	10.5	-	-	-	-	-	
	Bd	10.5	-	-	-	-	-	-	-	
距骨	不	完存	GL	19.8	K-14	-	I層	-	-	
	Bp	12.7	-	-	-	-	-	-	-	
踵骨	不	完存	SD	10.5	-	-	-	-	-	
	Bd	10.5	-	-	-	-	-	-	-	
基節骨	不	完存	GL	19.8	K-14	-	I層	-	-	
	Bp	12.7	-	-	-	-	-	-	-	
第3中足骨	不	完存	SD	10.5	-	-	-	-	-	
	Bd	10.5	-	-	-	-	-	-	-	
第4中手骨	不	完存	GL	19.8	K-14	-	I層	-	-	
	Bp	12.7	-	-	-	-	-	-	-	
第5中手骨	不	完存	SD	10.5	-	-	-	-	-	
	Bd	10.5	-	-	-	-	-	-	-	
脛骨	不	完存	GL	19.8	K-14	-	I層	-	-	
	Bp	12.7	-	-	-	-	-	-	-	
距骨	不	完存	SD	10.5	-	-	-	-	-	
	Bd	10.5	-	-	-	-	-	-	-	
踵骨	不	完存	GL	19.8	K-14	-	I層	-	-	
	Bp	12.7	-	-	-	-	-	-	-	
基節骨	不	完存	SD	10.5	-	-	-	-	-	
	Bd	10.5	-	-	-	-	-	-	-	
第3中足骨	不	完存	GL	19.8	K-14	-	I層	-	-	
	Bp	12.7	-	-	-	-	-	-	-	
第4中手骨	不	完存	SD	10.5	-	-	-	-	-	
	Bd	10.5	-	-	-	-	-	-	-	
第5中手骨	不	完存	GL	19.8	K-14	-	I層	-	-	
	Bp	12.7	-	-	-	-	-	-	-	
脛骨	不	完存	SD	10.5	-	-	-	-	-	
	Bd	10.5	-	-	-	-	-	-	-	
距骨	不	完存	GL	19.8	K-14	-	I層	-	-	
	Bp	12.7	-	-	-	-	-	-	-	
踵骨	不	完存	SD	10.5	-	-	-	-	-	
	Bd	10.5	-	-	-	-	-	-	-	
基節骨	不	完存	GL	19.8	K-14	-	I層	-	-	
	Bp	12.7	-	-	-	-	-	-	-	
第3中足骨	不	完存	SD	10.5	-	-	-	-	-	
	Bd	10.5	-	-	-	-	-	-	-	
第4中手骨	不	完存	GL	19.8	K-14	-	I層	-	-	
	Bp	12.7	-	-	-	-	-	-	-	
第5中手骨	不	完存	SD	10.5	-	-	-	-	-	
	Bd	10.5	-	-	-	-	-	-	-	
脛骨	不	完存	GL	19.8	K-14	-	I層	-	-	
	Bp	12.7	-	-	-	-	-	-	-	
距骨	不	完存	SD	10.5	-	-	-	-	-	
	Bd	10.5	-	-	-	-	-	-	-	
踵骨	不	完存	GL	19.8	K-14	-	I層	-	-	
	Bp	12.7	-	-	-	-	-	-	-	
基節骨	不	完存	SD	10.5	-	-	-	-	-	
	Bd	10.5	-	-	-	-	-	-	-	

第72表 脊椎動物遺体出土一覧表4

分類群	部位	LR	残存状況	計測位置	計測値 (mm)	出土位置				所見
						グリッド	TP・TR	層位	遺構等	
イノシシ/ブタ	中肋骨	不	完存	GL Bp SD Bd	25.0 17.0 14.9 14.3	J-14	TP3	I層	-	-
		不	完存	GL Bp SD Bd	25.3 17.4 15.0 14.6	F・G-13	TP14 (ST2)	III層	-	-
イノシシ?	寛骨	不	腸骨	-	-	J-14	TP1	清掃	-	寛骨臼未癒合
	脛骨	R	骨	-	-	L-15	-	I層	-	-
ヤギ	M _{1/2}	L	骨	-	-	L-15	-	I層	-	-
		L	曲冠	不可	-	F・G-13	TP14 (ST4)	II層	-	-
	M ₂	L	曲冠	-	-	G-13	LT	I層	-	-
		R	曲冠	曲冠長	14.4	F-13	TP13	I層	-	-
		R	曲冠	曲冠長	14.1	I-15	TP6	I層	-	-
	M上顎	R	曲冠	曲冠長	12.8	I-15	TP6	IV層	-	-
		R	曲冠	曲冠高	19.5	-	-	-	-	-
	下顎骨	L	[P2P3P4M1M2]	-	-	F・G-13	TP14 (ST4)	II層	-	-
		R	近～骨	Gp	119.3	J-14	TP1	清掃	-	-
	中足骨	L	近～骨	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
基節骨	不	完存	GL Bp SD Bd	28.2 10.4 8.5 10.0	G-13	LT	I層	-	-	
	不	完存	-	-	I-13	LT	I層	-	-	
ウシ	P上顎	不	破片	-	-	K-14	-	I層	-	-
		不	破片	-	-	L-14	-	I層	-	-
	下顎骨	L	関節突起	-	-	L-14	-	I層	-	-
		R	[M1M2M3]	-	-	L-14	-	I層	-	-
	I下顎	R	歯根未形成	-	-	不明	-	表採	-	-
	M _{1/2}	R	歯根欠損	歯冠長 歯冠高	25.7 26.3	K-15	-	I層	-	-
		M ₃	R	ほぼ完存	歯冠長 歯冠高	40.4 30.4	I-14	TP2北	I層	-
	橈手根骨	R	完存	-	-	F・G-13	TP14	清掃	-	-
	尺手根骨	R	完存	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
	大腸骨	R	骨	-	-	L-14	-	I層	-	SF
中足骨	不	骨幹	-	-	J-15	TP7	I層	-	SF	
	R	(踵骨隆起)～関節面	-	-	K-14	-	I層	-	-	
踵骨	R	(踵骨隆起)～関節面	-	-	F-13	TP13 (ST2)	III層	-	-	
	中肋骨	不	近～遠	GL SD	44.2 22.9	I-15	TP4	I層	-	-
末肋骨	不	近	-	-	I・J-14	TP2	I層	-	-	
	不	近	-	-	L-14	-	I層	-	-	
ウシ/ウマ	椎骨	-	椎体	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
哺乳類	四肢骨	不	骨	-	-	E・F-13	TP12	I層	-	-
		不	骨	-	-	G～L-13	LT	I層	-	-
		不	骨	-	-	H-13	LT	清掃	-	-
		不	骨	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	IV層	-	-
	不明	不	骨	-	-	F・G-13	TP14 (ST2)	I層	-	-

※ 残存状況において () は骨端が未癒合で脱落している、

< > は未癒合の骨端であることを示す。

※ 近→近位端、遠→遠位端、幹→骨幹を示す

※ 上・下顎骨の残存状況において下線部は残存歯、() は萌出中を示す

第73表 動物遺体集計表1

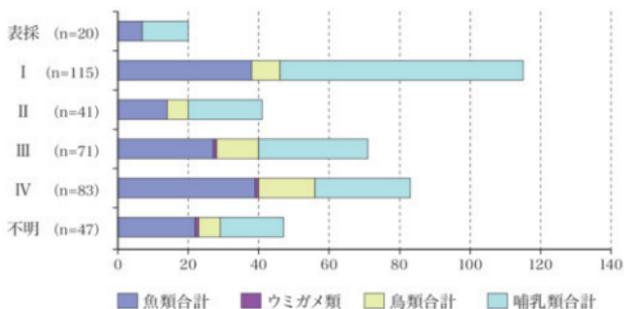
※ 不明・連絡含む

分類群	部位	出土解位								合計 L/R	NISP	MNI
		表採 L/R	I L/R	II L/R	III L/R	IV L/R	不明 L/R					
メジロザメ科	椎骨	1	7			2	6	2	18	18	1	
エイ・サメ類	椎骨	1				1			2	2	1	
ウツボ科	腕椎					1			1	1	1	
アジ科	角骨					1			0	1	1	
	尾椎						1		1	0	1	
ハタ科	主上顎骨						1	2	1	2	3	
	前上顎骨					1			1	0	1	
	歯骨		1	2					1	2	3	
	方骨	1	1						1	2	3	
	前鰓蓋骨			1			1		0	2	2	
	鰓蓋骨			1	1				1	1	2	
	第1椎骨					1			1	1	1	
ハタ型	腕椎	1	2			2			5	5	-	
	尾椎	1				2			3	3		
クロダイ属	主上顎骨				1		1		2	0	2	
	前上顎骨		1					1	1	1	2	
	歯骨						1	1	1	0	1	
フエダイ科	主上顎骨				1			0	1	1		
フエフキダイ属	前上顎骨	1	3	1	1	1	2	2	7	6	13	
	口蓋骨	1	1				2	1	1	4	5	
フエフキダイ科	主上顎骨	1	1						2	2	4	
	前上顎骨					1			1	0	1	
	歯骨		1			1	1	2	3	2	5	
	角骨			1			1		1	3	4	
	方骨	1		1		1	1		3	2	5	
	第1椎骨		1				1		2	2	2	
	腕椎	1						2	3	3		
タイ型	尾椎		5	3	3	1	1		13	13	-	
ベラ科シロクラベラ型	下顎頭骨			1					1	1	1	
ベラ科	前上顎骨							1	0	1	1	
	方骨							1	0	1	1	
	腕椎		1						1	1	1	
	尾椎	1	3		1			1	6	6		
	イロブダイ属	上顎頭骨						1	1	0	2	2
アオブダイ属	前上顎骨			1					1	0	1	
	歯骨		1		1	1			3	0	3	
	上顎頭骨	1	1					1	1	1	2	
	下顎頭骨	1	1	1	1				3	3	3	
ブダイ科	主上顎骨			1					1	0	1	
	方骨						1		0	1	-	
	尾椎		2						2	2		
ニザダイ科	尾椎		1				1		2	2	1	
同定不可	尾椎	2	4	1	1	2	1		11	11	-	
保留	腕椎				1			1	2	2	-	
ウミガメ類	腹甲/背甲			1	1	1	1		3	3	1	
ニワトリ	鳥口骨		1			1	1		1	2	3	
	肩甲骨					1			1	0	1	
	尺骨			1					1	0	1	
	大腿骨	1				1			1	1	2	
	距足脛骨		2	1		1	3		4	3	7	
ニワトリ?	大腿骨				1			1	0	1		
鳥類	鳥口骨		1						1	0	1	
	上腕骨						1		0	1	1	
	腕骨			1					1	0	1	
	距足脛骨					1			1	0	1	
	足根中足骨					2			0	2	2	
ネズミ科	長骨	2	5	4	4	9	3		27	27		
ネコ	脛骨						1		0	1	1	
	下顎骨		1						0	1	1	
	上腕骨	1							1	0	1	
イヌ	尺骨								1	0	1	
	下顎骨		1			1			0	1	2	
	第3中手骨			1					0	1	1	
	第4中手骨			1					0	1	1	
	大腿骨				1				0	1	1	
	脛骨		1	1					1	1	2	
	距骨	1							1	0	1	
	踵骨	1							1	0	1	
	第2中足骨	1	1						1	1	2	
	第3中足骨	1	1						1	1	2	
	第4中足骨	1							1	0	1	
第5中足骨	1							1	0	1		
基礎骨		2						2	2	2		

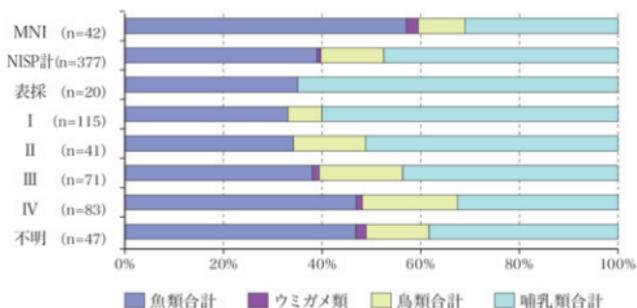
第73表 動物遺体集計表2

※ 不明・消滅含む

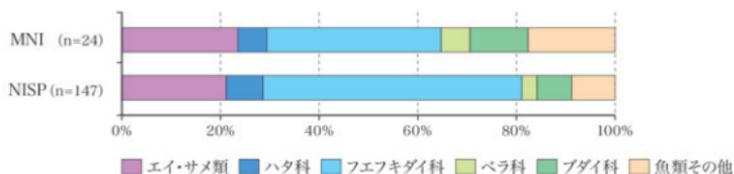
分類群	部位	出土層位							合計 L/R	NISP	MNI
		表採 L/R	I L/R	II L/R	III L/R	IV L/R	不明 L/R				
ウマ	I下顎	1							1	0	1
	P/M下顎		1						0	1	0
	肩甲骨			1					0	1	1
	基礎骨		3			1			0	4	4
イノシシ類	C下顎	1							1	0	1
	I							1	1	1	2
	Li		1				1		2	0	2
	Ls					1			0	1	1
	P						1		1	0	1
	I上顎		1	1				1	1	2	3
	Pa			1					0	1	1
	M1		3						3	0	3
	Mo2		1			1	1		2	2	4
	M ²				1				1	0	1
	M ²					1			0	1	1
	Ms								1	0	1
	ms								1	0	1
	側頭骨								2	0	2
	上顎骨		1	1					1	2	3
	下顎骨		1		1		1	1	2	3	5
	頸椎				2					2	2
	胸椎								2	2	2
	肩甲骨	1	1					1	2	1	3
	上腕骨		1	2	1	1			1	4	5
	桡骨		1						1	4	2
	尺骨	3	1						2	1	3
	寛骨			1	1				2	1	3
	大腸骨		1			1	1		2	1	4
	脛骨		1	2		1	2	2	4	5	9
	距骨		1			1	1		2	1	3
	踵骨					2	2	1	4	3	7
	基礎骨			2				1	3	3	3
	第2/5中手/中足骨			1			1		2	2	2
	第2中足骨								1	0	1
	第3/4中手/中足骨				1				1	1	1
	第3中手骨	1					1		2	0	2
	第3中足骨			2			1		0	3	3
第4中手骨		3						0	3	3	
第4中足骨					1	1		1	1	2	
中節骨			2					2	1	2	
末節骨				1				1	1	1	
イノシシ?	寛骨							1	0	1	0
	脛骨		1	1				1	1	1	2
イノシシ/ブタ	上顎骨		1				1	1	0	1	1
	下顎骨							0	1	0	1
	上腕骨		1			1			2	0	2
	桡骨					1		1	0	1	2
	尺骨					1		0	1	1	1
	第4中手骨						1	1	0	0	1
	第5中手骨						1	1	0	1	1
	脛骨	1	1					2	0	2	2
	距骨				1			0	1	1	1
	踵骨			1				0	1	1	1
第3中足骨					1		0	1	1	1	
基礎骨			2					3	3	3	
中節骨			1			1		2	2	2	
ヤギ	M ²		1					1	0	1	1
	M上顎			2				0	3	3	3
	Mo2				1			1	0	1	1
	下顎骨				1			1	0	1	1
	中手骨							1	0	1	1
	中足骨						1	1	0	1	1
基礎骨			2					2	2	2	
ウシ	P上顎			2				0	2	0	2
	下顎骨		1		1			1	1	1	2
	I下顎	1						0	1	1	1
	Mo2			1				0	1	1	1
	Ms			1				0	1	1	1
	腕節手根骨							0	1	1	1
	尺腕手根骨							0	1	1	1
	大腸骨			1				0	1	1	1
	中足骨						1	0	1	0	1
	踵骨			1			1	0	2	2	2
中節骨			1				1	1	1	1	
末節骨			2				2	2	2	2	
ウシ/ウマ							1	1	1	1	
哺乳類	四肢骨		2					1	4	4	4
	不明		1					1	1	1	1



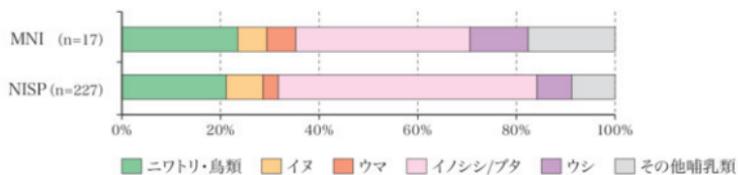
第91図 脊椎動物遺体の層別別NISP



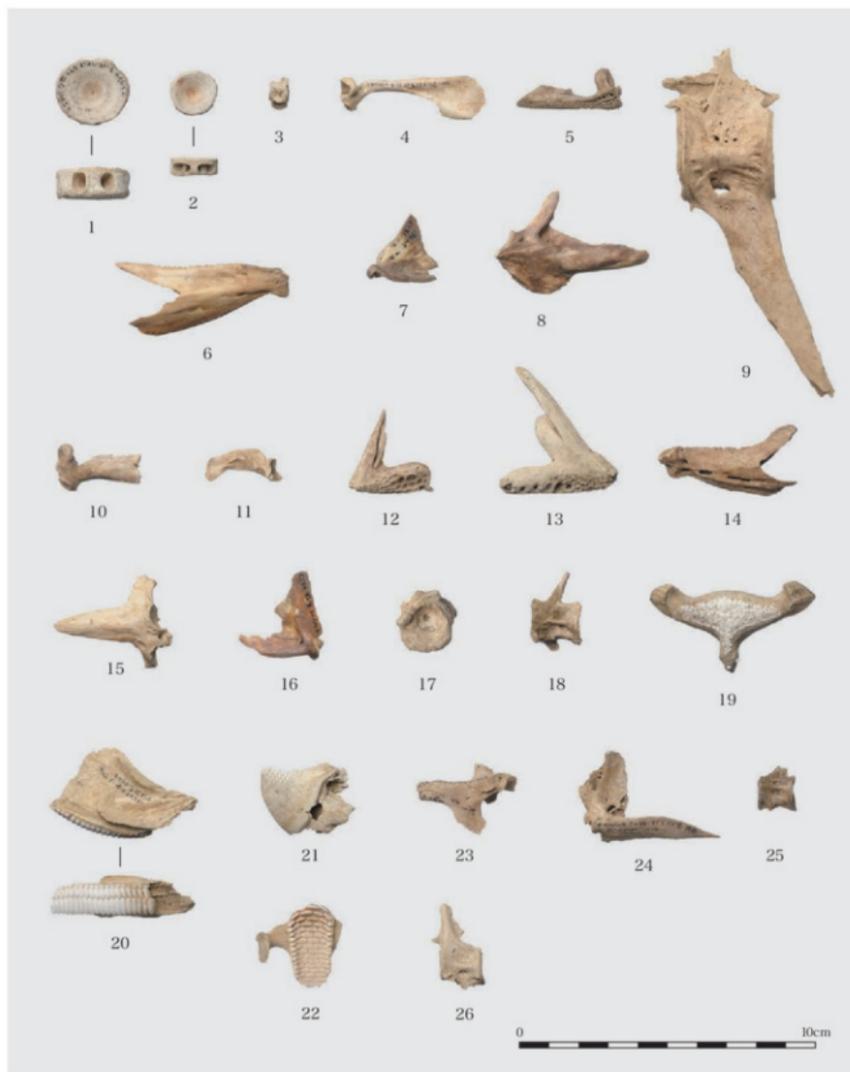
第92図 層別別NISP組成比及びMNI組成比



第93図 魚類組成図



第94図 鳥類・哺乳類組成図



図版97 脊椎動物遺体1 魚

- メジロザメ科 1. 椎骨 エイ・サメ類① 2. 椎骨 ウツボ科 3. 腹椎
ハタ科 4. 右上上顎骨 5. 左上上顎骨 6. 右歯骨 7. 左方骨
アジ科 8. 右角骨 9. 尾椎 フェタイ科 10. 右上上顎骨
クロダイ属 11. 左上上顎骨 12. 右上上顎骨 フェエキダイ属ハマフェエキ型 13. 左上上顎骨
フェエキダイ科 14. 左歯骨 15. 左角骨 16. 右方骨 17. 第1椎骨 タイ型 18. 尾椎
ペラ科シロクラペラ型 19. 下咽頭骨 イロブダイ属 20. 右上咽頭骨 アオブダイ属 21. 左歯骨 22. 下咽頭骨
ブダイ科 23. 右上上顎骨 24. 右方骨 25. 尾椎 ニザダイ科 26. 尾椎



図版98 脊椎動物遺体 2

ニワトリ 1. 右鳥口骨 2. 左肩甲骨 3. 左大腿骨 4. 右大腿骨 5. 左脛足根骨 6. 左脛足根骨

ネズミ科 7. 右脛骨

ネコ 8. 右下顎骨 9. 左上腕骨 10. 右尺骨

イヌ 11. 右下顎骨 12. 右脛骨 13. 左距骨 14. 左踵骨 15. 右第2中足骨、第3中足骨 16. 基節骨

ウマ 17. 左I下顎 18. 基節骨

ウシ 19. 右下顎骨 20. 右Ms下顎 21. 右尺側手根骨 22. 右大腿骨 23. 右踵骨 24. 中節骨 25. 末節骨



図版99 脊椎動物遺体3

- イノシシ/ブタ 1. 左上顎骨 2. 下顎骨 5. 右 腕骨 9. 左 脛骨 12. 右 距骨 14. 基節骨
 イノシシ類 3. 右下顎骨 4. 左 肩甲骨 6. 左 尺骨 7. 右 尺骨 8. 左 寛骨 10. 右 第4中手骨
 11. 左 第4中足骨 13. 左 踵骨 15. 中節骨 16. 左 寛骨 17. 左 大腿骨 18. 左 脛骨
 19. 右 距骨 20. 左 踵骨 21. 右 第3中足骨 22. 右 第4中足骨
 ヤギ 23. 右 M上顎 24. 左 下顎骨 25. 右 中手骨 26. 左 中足骨 27. 基節骨

第6章 総括

以上、平成20・21年度の中城御殿跡発掘調査の報告を行った。ここでは遺構・遺物に大別し、総括としたい。

1. 遺構

本報告の対象となる調査区は、敷地の南側一帯の蔵が数棟存在したとされる区域（J～L-14・15）と、中門や玄関の西端に位置する、敷地のほぼ中央を南北に縦断して設けたロングトレンチ（F～L-13）が中心となる。調査の結果、蔵が存在したエリアには、その床下や周辺に広がっていたと思われる石畳や側溝・暗渠などの遺構が良好な状態で残されていることが判明した。これらの遺構は、焼土や焼けて破砕した瓦などに覆われた状態で検出されており、戦災による破壊時の状況を物語っていた。これに対し、ロングトレンチにおいては、一部で側溝や基壇と思われる遺構が断片的に検出されたものの、多くは沖縄戦により被弾したと思われる痕跡や、配管及びコンクリート建物基礎が確認されており、戦中・戦後に改変されたことを窺わせている。

特に石畳や側溝などの遺構が集中して確認されたI-14～K-16グリッドにおいては、第4章第3節第10図（33頁）のように屋根伏せを行うと、建物内外の遺構に明確な違いをみることができる。石畳については、床下部においてほとんど敷設されていないが、建物の輪郭に沿って外側部分、特に通路や出入口と思われる箇所にて密に敷かれる状況が確認できる。

また、石造による側溝遺構に関しても、建物内外で特徴的な違いが確認できた。側溝は、基本的に建物の外周を巡る形で敷設されるが、場所によっては床下部分にも敷設されている。相対的に南北方向に走る側溝が多く、その傾斜から主に北から南及び東から西方向への排水を目的に築造されたことが考えられる。その築造にあたっては、石材加工に際し、石の表面に規則的な線条痕を残す工法により丁寧に行われるとともに、角を明瞭に残す。続いてその施工は、床下部分の側溝には蓋がみられないのに対し、通路や建物外周に位置する側溝は、石畳に接する形で蓋を有している。また、蓋が存在する溝に関しては、内部に土砂の堆積がわずかであることから、常に土砂のかき出しなどのメンテナンスが行われていたことを示している。この証拠として、溝のコーナー部分の蓋石の一辺には、これを外す際に用いる金具などを差し込む目的で、わずかに抉りをつけている（第18・21図）。これにより、側溝の角部から順に外し、堆積物の除去を定期的に行っていたことが想定できる。さらに、この蓋が緑石とうまく噛み合うように、緑石内面を斜位に加工、あるいは段を設けて落ちないように工夫した状況も確認された（第7・21・25図、図版17・18）。このような造りの側溝は、現時点で首里城跡の中世～近世にかけての遺構には確認されておらず、近代以降に採用された築造法の可能性があり、石造及び築造技法に関して首里城と異なる点が散見できる。今後の調査においても、この観点で遺構の記録を行うことにより、時代ごとの築造変遷を読み解くことが可能になるものと思われる。

2. 遺物

本報告の対象となった平成20・21年度両調査区からは、遺物収納コンテナで総計91箱、約2万点の遺物が出土している。遺物の種別は多岐にわたるが、中城御殿が1870年に建てられたこともあり、近世～近現代にかけての遺物が大半を占める。

特に遺構中及び遺構覆土から得られた遺物は、第1～8表に示したとおり、18～19世紀・近代に位置づけられる遺物が多く、これらは御殿が当地に移転してから新調したものであると考えられる。しかし、中には15世紀前後の輸入陶磁器も含まれており、これらは中城御殿建造以前において、土族らの生活が営まれていたことを示すとともに、中城御殿建造に際して、事前に大規模な盛土造成が行われていることから、ほかに廃棄された遺物が造成土中に混入していた可能性も考えられる。この状況から当地の長きにわたる変遷をみることができる。

この中で特筆できる遺物は多数あるが、ここでは中城御殿特有といえるいくつかの遺物に焦点を絞りまとめたい。

陶磁器類は第5章で報告したように、国外では中国・タイ・ミャンマー産、国内では肥前産を中心として、瀬戸・美濃産、

砥部産、沖繩産等、産地・年代ともに幅広い。これらの一部は二次的に被熱を受けている上に、細かく破砕した状態で出土していることから、震災により多くの建造物とともに激しく破壊を受けたことが理解できる。その中でも19世紀を中心とする中国産色絵の碗、肥前産色絵や染付の長皿・大皿の出土が多く、その量から複数枚が揃いとして存在していたことがわかる。その他特異な陶磁器として、西洋陶器が得られている。第5章第6節でも示したように、製品底部に残るスタンプから、イギリスにおいて1883年～1913年に製作されたことが判明しており、皿のサイズや鉢・瓶等の組成から、ディナーセットとしての食器の存在が想定できるといえる。

この洋食器にまつわる戦前の逸話が残されている。尚泰子息の松山王子尚順は戦前、首里桃原町の松山御殿において洋食マナーを身につけるため、子どもたちとともにコース料理を食べる恒例行事を執り行っていたとされる。食事は那覇の名店から取り寄せたが、食器類は一式が常備されており、会食の際は畳に座り、カツレツやリゾット等を食したとされる(首里城公園管理センター2010)。この中で使用された食器類の詳細は見あたらないが、美食家で名のおも尚順が、常時交流があったと思われる中城御殿に洋食器一式を持ち込んだとしても違和感はない。

この陶磁器の壮麗さは輸入品に限らず、沖繩産の陶器にもみられる(第5章第9節)。特に施軸陶器において、王家の別注品と思われる製品が一定量出土している。これらの資料はこれまで首里城跡においても出土しており、原料となる陶土から厳選し、製作から絵付け、焼成に至るまで丁寧に行われている様子が窺える。この中には、器面に王家の家紋や吉祥文を描くもの、肥前・中国産磁器を忠実にコピーしたものも含まれ、そこから模倣の対象となった陶磁器への憤れと、それを陶工らに造らせた王家の威厳を感じさせる。

次に、最も多く集中的に出土した遺物として、ガラス玉をあげることができる(第5章第21節)。玉の色は9色に分けることができ、多彩な色の玉を用いていたことがわかる。製作にあたっては型を用いず、巻き付け技法により行われている。この原材料の成分・産地を特定する目的で、別府大学の平尾良光教授の協力により蛍光X線分析を行ったところ、カリウム鉛ガラスであることと、着色元素となる鉱物が判明した(平尾良光ほか2011)。また、鉛同位体分析によりアジア各地のガラスと比較した結果、華南産材料の領域に含まれることがわかった。今後も分析数を増やすことにより、詳細なガラスの産地が判明してくるものと思われる。

なお、このガラス玉の使用法であるが、現時点で最も可能性が高いものとして御玉貫があげられる。御玉貫は銅や錫製の瓶・水注を置くようにガラス玉を連結させた製品で、尚家資料として現存している。戦前に中城御殿で撮影された鎌倉芳太郎氏の写真資料中にもこの御玉貫が写されており(鎌倉芳太郎1982)、当地にこの製品が存在したことは明らかである。現存する御玉貫は黄色や青、緑などカラフルな玉で覆い尽くされており、出土品の玉にみえる色調と類似する。中城御殿では季節ごとに様々な祭祀・行事が執り行われ、各種神々や位牌を祀った祭壇も存在したことから、御玉貫は御殿内の祭祀に用いられていたことが考えられる。

続いて特筆できる遺物として、石製の容器がある(第5章第23節)。これに類する遺物も、断片的に首里城跡から報告があるが稀少であり、中城御殿からはある程度まとまって出土している点で特異といえる。この類例を現存する各種工芸品から探したところ、一部の角皿や丸皿に関しては、木製朱塗りの円形または角形東道盆の中に取りめる中皿であることが考えられる。東道盆は婚礼などの祝事に宮廷料理を盛る器として使用され、鎌倉芳太郎氏の写真資料中にも、数多くの各種漆器類の写真が残ることから、その中に出土した石製容器が収められていたとしてもおかしくない。

これまで特徴的な遺物を抜粋してみたが、当時の状況を知る真栄平房歌氏によると、廃藩置県(特に明治後期)以降の中城御殿には、首里城や数箇所の御殿から宝物を含む物品が大量に持ち込まれ、空き部屋のひとつを取蔵庫にしたとされる。また、戦時中はこれらの一部を敷地内の数箇所に避難させたという証言も残ることから(沖繩タイムス1975)、今回報告した多くの遺物は、その一部であることが考えられ、そこから往事の中城御殿における格式高い生活を想像することができる。

最後に、発掘調査・資料整理作業にあたっては、多くの方々に指導助言・協力を賜った。記して感謝申し上げたい。

引用・参考文献

第1章 第1節

- 沖縄県土木建築部 1994『首里城公園基本設計』沖縄県土木建築部
首里城公園基本計画調査委員会 1993『首里城公園基本計画調査報告書』首里城公園基本計画調査委員会

第2章 第1節

- 平凡社地方資料センター 2002『沖縄県の地名 日本歴史地名体系48巻』平凡社
真栄平房敬 2009「中城御殿の思い出と復元促進にむけて」『蘇る首里城 首里城復元期成会35年の歩み』p210-218
首里城復元期成会

第2節

- 井伊文子 1972『仏桑花燃ゆ』燈影舎
井伊文子 1978『仏桑華の花ひらく』柏樹社
沖縄県立博物館 1993『旧中城御殿—石積工事地域にかかる第1次発掘調査—』沖縄県立博物館
沖縄県立博物館 1994『旧中城御殿—旧中城御殿石垣工事にかかる第2次発掘調査—』沖縄県立博物館
沖縄県立博物館 1995『旧中城御殿—旧中城御殿石垣工事にかかる第3次発掘調査—』沖縄県立博物館
沖縄県立博物館 1996『沖縄県立博物館50年史』沖縄県立博物館

第3節

- 井伊文子 1972『仏桑花燃ゆ』燈影舎
井伊文子 1978『仏桑華の花ひらく』柏樹社
沖縄県立博物館 1992『旧中城御殿関係資料集』沖縄県立博物館
海洋博記念公園管理財団 2010『首里城高家関係者ヒアリング調査業務報告書』海洋博記念公園管理財団
鎌倉芳太郎 1982『沖縄文化の遺宝』岩波書店
津軽照子 1942『うら紙草紙』河北書房
仲宗根源和(編) 1933『沖縄縣人物風景写真帳』沖縄縣人物風景写真帳刊行會

第4章 沖縄県立博物館 1992『旧中城御殿関係資料集』沖縄県立博物館

- 沖縄県立博物館 1993「第2節 遺構」『旧中城御殿—石積工事地域にかかる第1次発掘調査—』p15-24
沖縄県立博物館
沖縄県立博物館 1994「第2節 遺構」『旧中城御殿—旧中城御殿石垣工事にかかる第2次発掘調査—』p10-16
沖縄県立博物館
沖縄県立博物館 1995「第2節 遺構の状態」『旧中城御殿—旧中城御殿石垣工事にかかる第3次発掘調査—』p8-12
沖縄県立博物館
沖縄県立埋蔵文化財センター 2010「第2節 遺構」『中城御殿跡—泉宮首里城公園 中城御殿発掘調査報告書(1)—』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第53集 p29-33 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄風土記刊行会1970『首里古地図』

第5章 第1節 中国産青磁

- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2007「沖縄における貿易陶磁研究」『沖縄学文研究』
第5号 p55-76 沖縄県立埋蔵文化財センター
永田泰弘(監修) 2002『新版色の手帖』小学館

第5章 第2節 中国産白磁

- 新垣力 2009 「古窯出土資料からみた近世陶磁器の流通」『沖縄埋文研究』第6号 p1-12 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 新垣力・瀬戸哲也 2005 「沖縄における14～16世紀の中国産白磁の再整理 付.14～16世紀の青磁の様相整理メモ」『沖縄埋文研究』第3号 p79-98 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001a 「第2節 白磁」『首里城跡—管理用道路地区発掘調査報告書—』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第1集 p40-46 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001b 「第3節 白磁」『ヤッチのガマ・カンジン原古窯群』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第6集 p91-98 沖縄県立埋蔵文化財センター

第3節 中国産染付

- 新垣力 2010 「沖縄から出土する17～19世紀の貿易陶磁器」『海の道と考古学—インドシナ半島から日本へ—』
p203-217 高志書院
- 上田秀夫 1991 「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」
『関西近世考古学研究 1』p56-74 関西近世考古学研究会
- 曾凡 2001 『福建陶器考古概論』福建省地圖出版社
- 陳建中 1999 『徳化民窯青花』文物出版社
- 福建省博物館 1997 『漳州窯 福建漳州地区明清窯址調査発掘報告之一』福建人民出版社

第5節 中国・タイ・ミャンマー産褐釉陶器

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 「第7節 タイ産褐釉陶器」『首里城跡—下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第3集 p62-65 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2004 「第5節 褐釉陶器」『首里城跡—東のアザナ地区発掘調査報告書—』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第20集 p64-71 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 向井互 2003 「タイ黒褐釉四耳壺の分類と年代」『貿易陶磁研究』p90-123 日本貿易陶磁研究会
- 沖縄県教育委員会 2001 「首里城跡」『下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書 第7節 タイ産褐釉陶器』第42図1 (p62-65)

第6節 西洋陶器

- 大平雅巳 2008 「西洋陶磁入門」岩波書店 (p114-115)
- 岡 泰正 2002 「第1節 出島・食卓の情景—平成9・10年度の発掘におけるヨーロッパ陶器・ガラス器をめぐって—」
『出島 和蘭商館跡』「道路及びカピタン別荘跡発掘調査報告書」長崎市教育委員会 (p151-186)
- 岡 泰正 2009 「ウィロウバターン・ストーリー」『神戸市立博物館研究紀要』第25号 p78-59 神戸市立博物館
- 沖縄県教育委員会 1988 「首里城跡」『飲食門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査 第7節 近代の磁器』第44図7 (p63-69)
- 東京都埋蔵文化財センター 2003a 「旧汐留貨物駅跡地内の調査」『汐留遺跡Ⅲ (第6分冊) —旧汐留貨物駅跡地内の調査—』第85図7 (p135) 東京都埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第125集 東京都埋蔵文化財センター
- 東京都埋蔵文化財センター 2003b 「旧汐留貨物駅跡地内の調査」『汐留遺跡Ⅲ (第6分冊) —旧汐留貨物駅跡地内の調査—』第86図18 (p136) 東京都埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第125集 東京都埋蔵文化財センター
- 長崎市教育委員会 2002 「出島和蘭商館跡」『道路及びカピタン別荘跡発掘調査報告書』E-① (p166, 178)
- 成美堂出版 1997 『洋食器の事典』成美堂出版
- GEOFFREY A.GODDEN 1964 『ENCYCLOPAEDIA OB BRITISH POTTERY AND PORCELAIN MARKS』LONDON p355-357

第7節 その他の輸入陶磁器

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001a 「第7節 中国産無釉陶器」『首里城跡—管理用道路地区発掘調査報告書—』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第1集 p78-79 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001b 「第10節 彩輪陶」『首里城跡—下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第3集 p70-78 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 根津美術館 1998 『華南のやきもの—黄瀬戸・織部・青手古九谷の源流を求めて—』根津美術館

第5章 第8節 本土産陶磁器

- 愛媛県歴史文化博物館 2006『平成18年度テーマ展 近代えひめのやきもの 印判手のわん・さら・はち』
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』九州近世陶磁学会
財団法人 瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2007『平成19年度(財)瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター
企画展図録 窯跡出土の“近代陶磁”—瀬戸・美濃窯の近代1—』瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター
栗岡実 2005『備前』『全国シンポジウム 中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年— 資料集』p121-142
全国シンポジウム「中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—」実行委員会

第12節 土器・硬質土器

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001a『第23節 硬質土器』『天界寺跡(1)』沖縄県立埋蔵文化財センター調査
報告書 第2集 p151 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2001b『第25節 土器』『首里城跡—下之御庭跡・物用座跡・瑞鳳門跡・漏刻門跡・廣福門跡・
木曳門跡発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第3集 p125-127 沖縄県立埋蔵文化財センター
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2000『浜町遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(25) 鹿児島県立埋蔵文化財センター
瀬戸哲也 2005『首里城木曳門地区出土の土器器と思われる土師皿』『紀要沖縄埋文研究3』p71-78 沖縄県立埋蔵文化財センター
那覇市教育委員会 1992『第1節 C 陶質土器』『壺屋古窯群1』那覇市文化財調査報告書 第23集 p117-135 那覇市教育委員会

第13節 瓦質土器

- 瀬戸哲也 2009『南の境界・琉球の瓦質土器』『中近世土器の基礎研究』22 p157-172 日本中世土器研究会

第14節 土製品

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『第13節 土製品・埴壇』『首里城跡—御原北地区発掘調査報告書(1)—』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 p292-295 沖縄県立埋蔵文化財センター

第18節 銭貨

- 永井久美男 2002『新版中世出土銭の分類図版』p134-136 高志書院

第19節 煙管

- 石井龍太 2009『第三章 琉球の喫煙文化』『琉球近世物質文化の多角的研究』東京大学大学院提出博士論文 p181-254
江戸遺跡研究会 2001『江戸遺跡入門事典』柏書房
沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『第16節 煙管』『首里城跡—御原北地区発掘調査報告書(1)—』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 p324-329 沖縄県立埋蔵文化財センター

第20節 道具

- 上原静 2004『考古学からみた沖縄諸島の遊戯史』『グスク文化を考える』p371-400 今帰仁村教育委員会
沖縄県立博物館 1995『第3節 遺物について』『旧中城御殿—旧中城御殿石垣工事から第3次発掘調査—』p13-36 沖縄県立博物館
沖縄県立埋蔵文化財センター 2010a『第13節 円盤状製品』『中城御殿跡—泉宮首里城公園 中城御殿発掘調査報告書(1)—』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第53集 p113-115 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2010b『第17節 円盤状製品』『首里城跡—御原北地区発掘調査報告書(1)—』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 p330-333 沖縄県立埋蔵文化財センター
熊野正也・川上元・谷口榮・古泉弘(編) 2006『歴史考古学を知る事典』東京堂出版

第21節 ガラス玉

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2009『第2節3 ガラス玉』『首里城跡—京の内跡発掘調査報告書(II)—』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集 p87-88 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2009『第3節19 ガラス玉』『首里城跡—京の内跡発掘調査報告書(II)—』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集 p149-168 沖縄県立埋蔵文化財センター
キャロライン・クラブトゥリー&パム・スタルプラス 2003『世界のビーズ文化図鑑 民族が織り成す模様と色の魔術』東洋書林
平尾良光 2011『琉球王国のガラスの科学的調査』『沖縄のガラス・玉等製品関係資料調査報告書』沖縄県文化財調査
報告書 第149集 沖縄県教育委員会

第5章 第22節 石製品・石造物

- 五十嵐俊雄 2007『考古資料の岩石学』バリオ・サーヴェイ株式会社
- 岩崎仁志 2005「近世赤間硯の銘について」『山口考古』第25号 41-56 山口考古学会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010「第21節 石製品・石造製品」『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)—』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 p346-353 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 加藤祐三 1985『奄美沖縄岩石・鉱物図鑑』新星図書出版
- 神谷厚昭 1999「石材と人間の民俗的・歴史的関わり」『沖縄県立博物館紀要』第25号 p53-67 沖縄県立博物館

第24節 瓦・埴

- 上原静 2008「沖縄諸島における琉球瓦の再編年」『沖縄国際大学総合学術研究紀要』第11巻第2号(通巻14号)p1-62 沖縄国際大学
- 上原静 2010「埴」『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 p422-439
沖縄県立埋蔵文化財センター

第26節 貝類遺体

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010「第20節 貝類遺存体」『中城御殿跡(1)』沖縄県立埋蔵文化財センター 調査報告書 第53集 p145-147 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県教育庁文化課 1987「第6節 軟体動物遺存体」『石川市古我地原貝塚』沖縄県文化財調査報告書 第84集 p359-362 沖縄県教育委員会
- 本部町教育委員会 2005「第6節 動物遺存体」『瀬底島・アンチの上貝塚発掘調査報告書』本部町文化財調査報告書 第8集 p150-169 本部町教育委員会

第27節 人骨

- Knussman R. 1988 Anthropologie. Band I Gustav Fischer Verlag.
- Ubelaker, D.H. 1989 Human Skeletal Remains. Taaraxacum Press

第28節 脊椎動物遺体

- 大堀皓平 2010「中城御殿跡」『第38回文化講座 発掘調査速報2010その1』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 金城須美子 1997「琉球王国時代の食生活の変遷と文化的背景」『食生活文化に関する研究助成研究紀要』
第9巻 財団法人アサヒビール生活文化研究振興財団
- 樋泉岳二 2007「第4節 今帰仁城跡周辺遺跡出土の脊椎動物遺体群—Ⅲ区b・東7区・シニグンニ—」『今帰仁城跡
周辺遺跡—村内遺跡発掘調査報告—』今帰仁村文化財調査報告書 第24集 今帰仁村教育委員会
- 名島弥生・樋泉岳二 2007「南島考古学におけるフェエキダ科の魚類の属レベルでの同定とその意義」
『第11回動物考古学研究会発表資料』動物考古学研究会
- Angela Von Den Driesch 1976 "A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites"
Peabody Museum Bulletin 1. Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University

第6章

- 海洋博記念公園管理財団 2010『首里城高家関係者ヒアリング調査業務報告書』海洋博記念公園管理財団
- 平尾良光 2011「琉球王国時代のガラスの科学的調査」『沖縄のガラス・玉等製品関係資料調査報告書』沖縄県文化財
調査報告書 第149集 沖縄県教育委員会
- 真栄平房敬 1975「戦争と王家の宝物」『沖縄タイムス』11月25・26日 沖縄タイムス社

報告書抄録

ふりがな	なかぐすくうどうんあと
書名	中城御殿跡
副書名	県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)
巻次	2
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第58集
編著者名	仲座久宜、新垣 力、伊藤由希、大堀皓平、岸本竹美、金城貴子、具志堅清大、菅原広史、瀬戸哲也、知念隆博、土肥直美、徳嶺里江、宮城明恵
発行機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 TEL:098-835-8751・8752
発行年月日	平成23(2011)年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "			
なかぐすくうどうんあと 中城御殿跡	おきなわけん なほし 沖縄県那覇市 しゅり おおなかつちう 首里大中町 ちようめ ばん 1丁目1～3番	47201 那覇市	—	26° 13' 15"	127° 43' 05"	2008.12.01 } 2009.02.27	平成20年度 :約400㎡	県営 首里城公園 整備事業
						2009.06.02 } 2009.10.30	平成21年度 :約250㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中城御殿跡	屋敷跡	近世 と 現代	基壇 溝・暗渠 石組み 石畳 ピット	青磁、白磁、染付、色絵 その他輸入陶磁器 褐釉陶器 西洋陶器 本土産陶磁器 沖縄産施釉陶器 沖縄産無釉陶器 陶質土器 瓦質土器、土器 土製品、陶管、埴塼 瓦、埴 金属製品 銭貨、ガラス玉 煙管 円盤状製品・碁石 石製容器 石製品、石造製品 漆塗膜 貝類・動物遺体	中城御殿の倉庫跡周辺から、 石畳や側溝などの多数の遺構を 検出し、そこから本土産陶磁器や 青銅製品、ガラス玉などの遺物 が数多く出土している。

要約	中城御殿は国王の世子が暮らした邸宅跡で、1870年から1945年まで存在していた。戦後は県立博物館などが建てられるが、老朽化により撤去される。調査は遺構の遺存状況を確認する目的で行われ、石畳や側溝、暗渠などの遺構が良好な状態で検出されている。出土遺物としては、肥前産を中心とする陶磁器や、儀式・祭祀に用いる御玉貫を覆っていたと考えられるガラス玉など、中城御殿の生活を偲ぼせるものが多数出土している。
----	---

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集

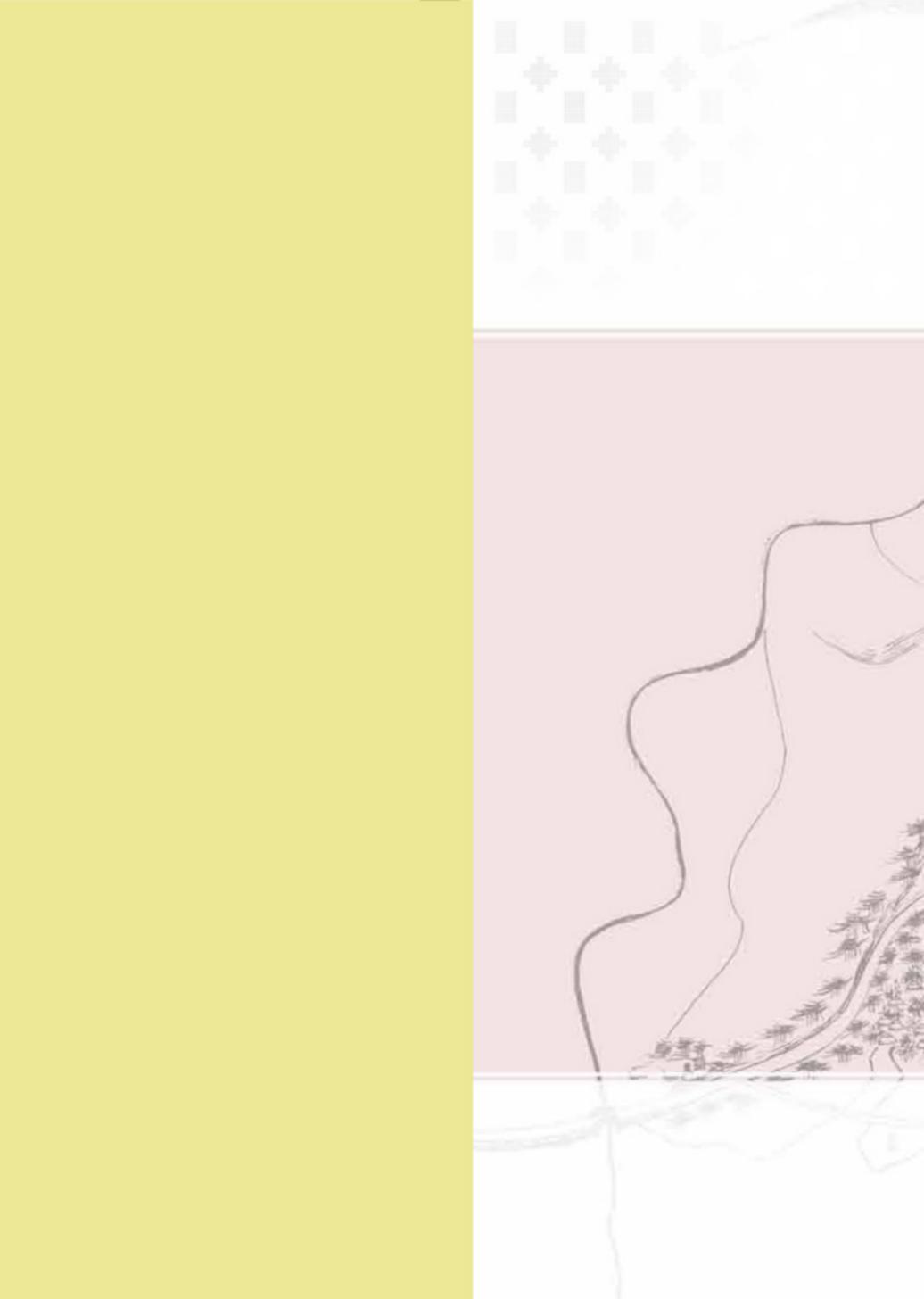
中城御殿跡

— 県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2) —

発行日 平成23(2011)年3月31日

発行・編集 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7
TEL: 098-835-8751・8752

印刷 株式会社 近代美術
〒901-1111 沖縄県南風原町字兼城206



中城御殿跡



県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)

平成二十三年(二〇一一年)三月 沖縄県立埋蔵文化財センター



沖縄県立埋蔵文化財センター

本図は1700年に作成されたものである。これより30年前に江戸幕府から全図を賜へりて、
 地籍を再調査するより数分が定むる。この地籍もその一である。
 ところが、この地籍の時代が明の1700年で、沖縄にはおらず、琉球はじめての地籍と云ふ事
 になる。またこの地籍は北の中心に置かれていた。琉球の地籍は、大抵東洋（日本）の地
 籍と同様にして、この地籍を再調査したこともない。従つて、明の地籍を再調査して、
 琉球の地籍、山形地籍を参照し、各町界を定めて、この地籍を完成し、地籍を定めて、
 1700年当時の地籍と云ふ事になる。2000年の地籍調査も、北の中心に置かれていたが、
 この地籍の時代は明の1700年当時の地籍を定めたものから、
 1700年当時の地籍、あるいは1700年当時の地籍を定めたものから、
 この地籍の調査は非常に大規模なもので、地籍の調査は、
 北の中心に置かれていたものである。（資料提供）

中城御殿跡

一 東宮首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2) -

